

日本における大正・昭和前期の住宅にみる
フランク・ロイド・ライトの影響に関する研究

井 上 祐 一

目 次

はじめに

1. 研究の目的	1
2. 研究方法	1
3. 先行研究	2

第1章 遠藤新設計による大正・昭和初期の住宅平面からみた生活空間の変容について

はじめに	5
1. 帝国ホテル設計・建設に従事した, ライトの日本人スタッフ	5
1-1 ライトの日本人スタッフ	5
1-2 河野傳と藤倉憲二郎の作品	6
2. 遠藤新の大正期の雑誌に見る住宅の間取りについて	7~9
3. 昭和初期の雑誌に見る住宅の間取りについて	9~11
4. 居間, 食堂及び座敷の関係について	12~14
5. 主要室の家具について	14
まとめ	14~16

第2章 建築家・南信の経歴と住宅作品にみられる特徴について

はじめに	29
1. 南信の経歴	29~31
2. 南信の作品	32~34
3. 住宅作品の特徴	34~37
終わりに	37~38

第3章 建築家・柴田太郎の経歴と作品の概観および住宅作品の特徴について

はじめに	65
1. 柴田太郎の経歴	65~67
2. 柴田太郎の作品	67~71
3. 住宅作品の特徴	71~73
終わりに	73~74

第4章 建築家・岡見健彦の昭和前期の作品について

はじめに	93
1. 岡見健彦の略歴	93
2. 住宅作品	93~94
3. 昭和前期の住宅の特徴	94~97
終わりに	98

第5章 大正・昭和初期における、いわゆる「ライト式」の用語の使用について

はじめに	119
1. 「ライト式」の用語の出現	119~121
2. 「ライト式」および関連する用語	121~122
3. 「ライト式」および関連する用語の使用例	122~126
4. 「ライト式」という用語の使用方法の変遷と意味	126~127
終わりに	127

第6章 雑誌『住宅』にみるライト風住宅について

はじめに	135
1. 雑誌『住宅』に掲載のライト風住宅	135
2. いわゆる「ライト式」の用語の使用	135~136
3. 設計者について	137
4. 住宅の特徴	137~141
終わりに	141

終章

はじめに	167
1. 遠藤の住宅作品	167~168
2. 南信の住宅作品	168~169
3. 柴田太郎の住宅作品	169
4. 岡見健彦の住宅作品	169~170
5. 遠藤新・南信・柴田太郎・岡見健彦設計の住宅の特徴	170~173
6. 「ライト式」の用語	173~174
7. 雑誌『住宅』に掲載のライト風住宅	174~175
まとめ	175~176

注記	187~196
----	---------

関連既発表論文	197~198
---------	---------

あとがき	199~200
------	---------

は じ め に

はじめに

1. 研究の目的

東京の日比谷にあった旧帝国ホテルは、アメリカ人建築家フランク・ロイド・ライトの設計によって大正12年に竣工したことは周知のことである。また、日比谷に帝国ホテルが出現したことに伴い、ライトの作風が触媒となって多数の建物のデザインにライトの影響が見られるようになり、一時期の流行となったこともよく知られている。

本論は、帝国ホテルの建設に従事したライトの弟子および孫弟子にあたる建築家の作品について、あるいは、その他のライトの影響が見られる作品について、その特徴について考察する。

研究対象とする建築家は、ライトの愛弟子として知られる遠藤新および南信、遠藤の事務所の所員であった柴田太郎と岡見健彦の4人とし、住宅作品の特徴についての共通性と特徴の変化について、設計活動時期との関連とともに考察する。

また、ライトの影響の見える建物の出現に伴い「ライト式」「ライトの流れを汲んだ建築」「ライト屋」「立体建築」「立体的有機体」などの用語の使用が頻繁に見られるようになるが、このことは、帝国ホテルの出現が日本の建築界に少なからず影響を及ぼしたことを示唆していると推測できる。これまであまり明らかでなかった大正・昭和前期（戦前期）のライトの影響を受けた住宅の系譜を見ることで、当時の、ライトの建築に関する捉え方および建物の特徴について、あるいは「ライト式」「立体建築」などの用語の意味の変遷について明らかにする。また、現代の建築のあり方などに、ライトの建築に対する考え方を結び付けて考えたい。

2. 研究方法

研究方法は、1) 当時の雑誌および書籍を研究資料とする、2) 聞き取り調査による資料を研究資料とする という2つの方法を用い、主に建築平面の構成や外観意匠の分析を行った。

- 1) 当時の雑誌あるいは書籍に掲載の見える建築家の作品に関しては、雑誌および書籍を調査研究の対象とした。
- 2) 当時の雑誌あるいは書籍に掲載の見られない建築家の作品については、遺族関係者からの聞き取りおよび資料調査による研究を行った。

なお、主に1) は遠藤新と南信に対して、2) は南信、柴田太郎および岡見健彦に対して用いた。また、その他のライトの影響を受けた建物に対しては1) を用いた。

主な雑誌資料は、当時の建築雑誌である、『建築雑誌』『建築画報』『建築世界』『建築と社会』『建築新報』『新建築』『住宅』など、あるいは婦人雑誌の『婦人之友』を用い、書籍については当時の『近代建築画譜近畿篇』『アルス建築大講座』のほか『帝国ホテル百年史』

などを用いた。

3. 先行研究

フランク・ロイド・ライトに関する一連の研究については、『日本の建築明治大正昭和 9 ライトの遺産』の著者である谷川正己（谷川正己フランク・ロイド・ライト研究室）によるものが最もよく知られている。また、田上義也については、角幸博（北海道大学大学院教授）の『マックス・ヒンデルと田上義也 - 大正・昭和前期の北海道建築界と建築開館する研究』（1995）や「田上義也—雪国的造型を求めた北の建築家」（『住宅建築』1998.12月号）などがある。そして、土浦亀城に関しては、「昭和初期モダニズム建築家土浦亀城と彼をめぐる人々」（『SD』1988.7月号）や「再考 建築家土浦亀城」（『SD』1996.7月号）、あるいは『F.L.ライトと弟子たち 日本人によるライトの受容と実践』（1995 ギャラリー・タイセイ）など、西澤泰彦（名古屋大学助教授）他の著述があり、土浦信子に関しては、小川信子・田中厚子著の『ビッグ・リトル・ノブ ライトの弟子・女性建築家土浦信子』（2001 ドメス出版）が知られている。ほかにも、近年の研究としては南迫哲也（工学院大学名誉教授）の『遠藤新の作品にみるフランク・ロイド・ライトの影響—有機的建築の伝承—』（2000）がある。また、既出の田上・土浦・遠藤について、藤森照信著『昭和住宅物語』（1990 新建築社）にもインタビュー記事などの掲載が見られる。

しかし、本論の目的である、大正・昭和前期の日本におけるライトの影響について、ことにライトの弟子ならびに孫弟子についての個別研究および比較研究、あるいは「ライト式」の用語の使用と変遷に関する研究は、現在までほとんど行われていない。

第 1 章

遠藤新設計による大正・昭和初期の住宅平面からみた

生活空間の変容について

はじめに

本章は、建築家遠藤新設計の大正・昭和初期の住宅について、その生活空間の変容を明らかにするものである。

遠藤は、帝国ホテルの設計者であるアメリカの建築家フランク・ロイド・ライトの愛弟子として知られており、遠藤新建築創作所を開設（大正11年）¹する以前の大正9年（1920年）²から昭和26年（1951年）に没するまでの間に、国内をはじめ、中国および韓国で設計活動を行った³。

設計活動は、住宅のほか自由学園校舎群や甲子園ホテルなど多岐にわたるが、中でも住宅の棟数は、判明しているものだけでも120棟を越えている⁴。このことは、遠藤が住宅作家とされる所以を表している。本章では、遠藤新によって設計された120棟を超える住宅のうち、計画案、増改築あるいは日本国外で建設された建物、ならびに建設年代および内容が明らかでないものを除いた戸建住宅作品を対象とし、図面を通して生活空間について考察しようとするものであり、当時の雑誌に掲載されている24軒の住宅の、平面図および解説文を主な資料としている。なお、掲載が確認できた雑誌名は『婦人之友』『国際建築』『建築世界』『建築知識』である。また、室名については、掲載図面の記載を基本にしているが、図面に室名の記載されていないものについては、解説文等の記載も参考にしている⁵。

1. 帝国ホテル設計・建設に従事した、ライトの日本人スタッフ

1-1 ライトの日本人スタッフ

周知のように『帝国ホテル百年史』には、支配人であった林愛作が書いた給料支払い名簿の記述とされる日本人スタッフの名前が掲載されている。名簿はローマ字書きであるとされるが『帝国ホテル百年史』にはカタカナで表記されている。掲載されている日本人スタッフの名前は、次の通り。（高額給料順）⁶

エンドウ、ナガオ、ナガハマ、ヤマサキ、ウオタニ、ムイアイ、アリヤ、マキグチ、ミヤチ、ウチヤマ、フジタ、トノウエ、イシズカ、タカハシ、ワタナベ、ツネマツ、マツモト、ケンモツ、ハヤノ、イイムラ、ツチウラ、ドバシ

あるいは、『自伝アントニン・レーモンド』には、「未完成作品ライト一家の肖像スケッチから」として、内山隈三、渡辺己午蔵、林愛作、遠藤新、河野傳、田上義也、山崎、藤倉健の日本人名が見られる。スケッチには人物名がアルファベットで記入されており、既

出の名前のほか「Ito」と読み取れる文字が記入された人物も描かれている。⁷【図1】

また、既出の『帝国ホテル百年史』に「ライト館建設関係者の集まり」と題した写真が掲載されているが⁸、遠藤楽建築創作所所蔵の同複製写真には遠藤新の夫人みやこが後年に記入した人物名が写真裏面に残っている。記入されている日本人の人物名は、剣持、藤（東？）、林、高橋、南、パ、河野、となっている。【写真1】【写真2】

以上3点の資料にある記述について纏めると、エンドウは遠藤新、ウチャマは内山隈三、トノウエは田上義也、ワタナベは渡辺己午蔵、ケンモツは剣持、ツチウラは土浦亀城であり、ほかに河野傳、南、藤倉健、山崎、高橋、である。

中でも、筆者の調査の結果として、藤倉健と表記された人物は、藤倉憲二郎⁹であることが判明したほか、「Ito」については、伊藤文四郎あるいは伊藤清造と考えられることが分かった¹⁰。なお、南の表記については南信であることが確認できる。¹¹

1・2 河野傳と藤倉憲二郎の作品

ここでは、資料は少ないものの、河野傳、藤倉憲二郎について見てみる。

1) 河野傳について

河野傳の経歴については明らかでない。しかし、建物については住宅が1軒確認できている。建物名称は上野陽一郎で¹²、図面と写真により外観および平面、あるいは室内の特徴について見てみる。¹³

(1) 外観の特徴

写真に見るように、緩勾配で、スレート葺きの寄せ棟屋根は、深い軒の出を有している。また、屋根から突出した塔状の煙突、水平線を強調した外観デザイン、および石造の太柱¹⁴が見られる。開口形式については開き窓と突き出し窓の使用が確認でき、窓には均等割りでない棧のある建具が使用されている。外構には建物と統一された門塀デザインが見られ、外観全体がライトの住宅を彷彿とさせる。【写真3】【写真4】

(2) 平面の特徴

2階建ての1階部分は、東西の軸線に対して書生室、階段室、便所、女中室、浴室、台所、食堂が配置され、東西の中央部分に南に張り出したパーラー（応接室）がある。平面型は一文字変形型¹⁵と考えられ、南に張り出したパーラーは、東・南・西に面した三面の開口部を有している。また、パーラーの北側壁面中央には暖炉が確認できた。【図2】

(3) 室内の特徴

天井についてみると、たとえばパーラーの天井は、北側の暖炉前は低く、南側は高くなっている。つまり、一室内に複数の天井高を用いている。また、家具および照明器具については、建物と統一されたデザインが施されている。そして、暖炉壁面には帝国ホテルに見られるようなレリーフが施されている。【写真5】

2) 藤倉憲二郎について

藤倉の経歴については、藤倉の長男にあたる憲明氏からの聞き取り及び提供資料より次のことが判明した。

藤倉は、材木商である父五郎兵衛と母小多喜の次男として明治22年（1889年）3月10日に、東京市赤坂区新坂町で生まれた。明治35年（1902年）3月に学習院初

等科を卒業し、明治41年（1908年）3月には同中等科を卒業した。その後、明治43年（1910年）に渡米し、1917年（大正6年）6月27日付けでコーネル大学建築学部（Faculty of Architecture）を卒業した¹⁶。また、大正18年には、ライトのタリアセンに帝国ホテルの図面を仕上げるために渡米していた遠藤新に会い、共にシカゴやニューヨークなどを旅行した後に帰国している。¹⁷【写真6】【写真7】帰国後は帝国ホテルの建設に従事したが、その後、設計の仕事には殆ど携わることがなかった。

唯一、自邸の設計が確認できたが、詳細については明らかでない。【写真8】¹⁸

2. 遠藤新の大正期の雑誌に見る住宅の間取りについて

遠藤新の設計した大正期の住宅は、『婦人之友』誌に掲載記事が見られる。ここでは『婦人之友』誌に掲載されている12軒の住宅について、主に平面の構成をみてゆく。

1) 大正13年（1924年）5月号掲載の「住宅小品十五種」について

大正13年5月号に「住宅小品十五種」と題した遠藤の住宅作品が、纏まった形で発表されている。この発表以後、遠藤は多くの作品および著述を『婦人之友』に寄せている。専門誌ではなく婦人誌に掲載していることから、生活の器としての住宅のあり方を啓蒙しようとする遠藤の姿勢をうかがうことができる¹⁹。

誌面には、表題どおり15の事例の掲載が確認できる。そのうち戸建住宅は12軒が掲載され、各建物について、平面図および立面図と家の簡単な解説文が添えられている。また、幾枚かの写真も付されている。なお、12軒のうち1軒については、図版が不明瞭のため²⁰、ここでは11軒の平面の構成について見るものとする。

解説は、敷地に対する²¹平面の型について特徴を類別して「一文字の家」「一文字より丁字に」「一文字の家の変化」「三間巾の家」「三間巾の家の変化」というように、数種の類型に分類している。各型の特徴は次のようになる。なお、本章では「一文字の家」を一文字型と称する。

①「一文字の家」

一文字型は、「各室を一直線上」に配置したもので、平家の安成邸（大正13年、図8）を「基本的な例」としている。建物中央にある「広間」は、居間兼食堂の機能をもつと考えられる。開口部は、南側に採っている。また、建物の東側に台所・水廻り・女中室を、西側に寝室・書斎を配置し、北側に便所・玄関・納戸を設けている。納戸は、2階増築時には階段室とし、2階は「玄関まわりの天井の低い部分」上部にのせるものとしている。

②「一文字の家の変化」

この型については、大久保邸（図1）と劔持邸（図2）の平家の2例が紹介されている。

大久保邸（大正12年）は、建物中央の広間（居間兼食堂）の北側には室は無く、南北両面に外部に面した開口が設けられている。広間の南側には造り付けの長椅子、北側には造り付けの戸棚を設けている。北側の戸棚の上は横長窓で、「裏の家を隠して梢と空」を望むことができるように設計されている。

劔持邸（大正12年）は、建物中央の広間（居間兼食堂）の北側の位置に東から西へ玄関・書斎・女中室を配置している。①の安成邸（図8）の広間と玄関の間にある廊下をな

くした形式で、東側に台所を、西側に寝室および座敷を配置している。

③「一文字より丁字に」

丁字型の平面形をした平家の萩原邸（大正13年、図12）は、一文字型の中央にある居間の北側に玄関を設け、その北側に書斎を連結したもので、玄関上部には、露台を設けている²²。居間の東側は、食堂、台所、洗面、浴室、および女中室が配置され、西側は、子供室ならびに寝室（座敷）となっている。

④「三間巾の家」

敷地の形状に伴い、南北に長い上代邸（大正13年、図6）は、建物の中が三間を超えないように計画したもので、北側から順に水廻り関連室・広間（居間）・書斎（書院付座敷）の配置が見られる。北側の三間角の平面の1階は茶の間、台所、女中室、風呂洗面、階段、便所をまとめて配置している²³。2階は、座敷およびサンルームを三間角の1階上部に載せている。中央の広間は、東西に開口を採り、東側には開口部を背に造り付けの長椅子が設けられ、西側には両側に造り付けの棚を配した暖炉が設置されている。また、暖炉両脇の棚の上部には開口が採られている。広間（居間）の南側には書院付座敷があり、広間とは、片開きドアの出入り口および引き違い窓により繋がっている。なお、書院付座敷について解説文に「離れ」という記載があり、この室が離れの性格を持つものと位置づけされていたらしいことがわかる。

⑤「三間巾の家の変化」

「三間巾の家の変化」については、3例掲載されているが、図版が明瞭でない田原邸を除いた川島邸（図3）と相原邸（図9）について見てみる。

川島邸（大正12年）は、上代邸（図6）の「類型」に属しており、ここでは、建物全体の西側に「勝手元」（水廻り関連室）を一箇所にまとめ、その上部に2階を載せている。建物中央には広間（居間）兼応接があり、東側に上代邸同様の「離れ」と考えられる書院付寝室（座敷）が、片開きドアと窓により広間（居間）兼応接と繋がっている。広間兼応接には、南側の開口を背に造り付の長椅子があり、北側には正面に暖炉が設置されている。暖炉の両側は造り付の棚があり、その上部には開口が設けられている。

相原邸（大正13年）は、「上代邸を基本とする」家とされている。ここでは、茶の間、女中室、台所、風呂、洗面、階段、便所等を「住宅の五臓六腑」と表現し、設備を中心とする、関連室を一団として位置づけたものと考えられる。この建物では「五臓六腑」を二間半角の中に一纏めに納め、その上部に寝室（弟子の室）およびポーチ（サンルームと考えられる）のある2階を載せている。

⑥「型」の記載がない住宅

11軒のうち、星島氏子供の家（図5）、稲田男爵邸（図11）、大沢邸（図10）、および有川邸の4軒については「型」の記載がない。

平家の星島氏子供の家（大正13年）は、東西に長い建物の中央部に、食堂（兼居間）があり、東側に女子の室および水廻り等を配置し、西側に男子の寝室および座敷を配置している。また、食堂は、南北に開口を持つが、北側の開口部下には棚が据えられており、大久保邸（図1）と同様の開口形式と考えられる。なお、この住宅は一文字型に属すると考えられる。

稲田男爵邸（大正13年）は、一文字型からの発展型と考えられる。つまり、一文字型

の母屋部分に対してL字形に、南側に玄関兼応接を設け、更に、その南側に書斎を連続させている。また、2階は、1階よりも短く巾の狭いL字形で、寝室、座敷（子供室）およびサンルーム等が、ほぼ「五臓六腑」の上部に納まっていることがわかる。

大沢邸（大正13年）は、建物中央を居間兼食堂とし、北側に「五臓六腑」、南側に座敷および応接室を設けたH形の平面で、一文字型の発展型と見ることもできよう。2階は、寝室、書斎およびサンルームがあり、ほぼ「五臓六腑」上部に載る平面形である。

有川邸（大正12年）は、座敷を主とした設計で、建物中央の九帖の座敷とその北側の四帖（茶の間）ならびに南側の広縁が建具を開け放つと一体になる平面の構成を持っており、西側の寝室についても座敷としている。2階は、書斎兼客間（座敷）の1室を設けているが、玄関および浴室の上部に載せて「二階が低く」納まるように設計したことが示されている。同様の計画は、既出の安成邸（図8）に見ることができる。

2) 大正14年1月号掲載の筒井邸

「小住宅十五種」以外にも『婦人之友』に、筒井邸（大正13年、図7）が掲載されている。ここでは、類型についての記載は見られない。1階はL字形の平面で、広間（居間）を中央に配置し、南側に「書斎」、北側に日常の場としての「住居、勝手」を設けている²⁴。2階は、主に「五臓六腑」の一部（洗面、便所及び廊下）の上部にのっている。

ここで、大正期に建設された12軒の住宅の特徴についてまとめると次の点が指摘できる。

- (1) 明快な軸線を取り、その上に、各室を配置している。つまり、平面の配置には軸線があり、各室が、軸線上に納まるように配置されている。軸線の通った平面構成は、12軒に共通して見られる。
- (2) 居間あるいは居間兼食堂を中央に据え、敷地条件により、東西あるいは南北の何れかに水廻り関係室あるいは座敷等を配置している。
- (3) 茶の間、女中室、台所、風呂、洗面、階段、便所等を一纏めとして「住宅の五臓六腑」と呼んでいる。
- (4) 居間あるいは居間兼食堂に隣接する書院付座敷を「離れ」と呼んでいる。
- (5) 居間あるいは居間兼食堂と書院付座敷は、片開きドアおよび腰壁付きの引き違い窓で繋がっている。
- (6) 2階建については、「五臓六腑」と呼ぶ水廻り関係室等を一纏めにした上部あるいは、ほぼ上部に2階を載せている。
- (7) 2階建について、家族の個室（寝室、子供室、老人室）は1階のみ、あるいは1階および2階の両方にあり、1階と2階が、パブリックスペースとプライベートスペースとに明確には分かれてはいない。

3. 昭和初期の雑誌に見る住宅の間取りについて

昭和期に入ると、「型」による分類は見られなくなるとともに、婦人雑誌である『婦人之友』だけではなく、『国際建築』『建築世界』『建築知識』といった建築の専門誌にも住宅作品の掲載が見られるようになる。各誌には、合計12軒の住宅が掲載されている。

1)『婦人之友』誌掲載の8軒について

各建物の有する特徴により類別して内容を見てみる。共通したものを分類すると、次の、長方形の家、個室が2階にある家、正方形の家、および雁行形の家に分けて考えることができる。

①長方形の家

黒崎邸（昭和2年、図14）は平家で、長方形の中に座敷、食堂、広縁（サンルーム）、玄関および浴室等を配置し、北東側に台所、東南側に座敷（書斎）、および西側に寝室を付した平面形をしている。建物中央にある食堂と座敷は東西に隣接し、4枚の引き違い戸で仕切られている。食堂と座敷の南側は、広縁（サンルーム）に繋がっており、各室間には引き違い戸が入っている。つまり、3室は、連続した生活空間として使用できるように設計されている。²⁵

高橋邸（昭和2年、図15）も平家で、黒崎邸（図14）とほぼ同様の平面形をしており、茶の間（座敷）と居間（座敷）が東西に隣接し、その2室の南側が広縁（サンルーム）となっている。西側に寝室、北東側に水廻りを、および南東側に書斎を設けている。各室は、広縁および書斎のほか、茶の間を含め4室が座敷である。茶の間、居間、および広縁の各室間は引き違い戸が入っており、3室は連続して繋がる生活空間となる。²⁶

②個室が2階にある家

石原邸（昭和2年、図13）は、1階に、居間兼食堂、茶の間（板敷き）、水廻り、および女中室等がほぼ長方形に近い平面形に納まっている。2階は、寝室、書斎および座敷がほぼ正方形の平面形に納まり、居間兼食堂を主とした部分の上部に設けられている。1階には家族のための個室は無く、2階に寝室および書斎ならびに座敷が配置されている。このような室配置は、石原邸で初めて現れることが確認できる。²⁷

続いて、羽仁邸（昭和4年、図16）では、正方形の平面に納まる居間、食堂、応接室、玄関、階段、女中室、便所の上部に3室の座敷が配置された2階が載っている。1階は、パブリックスペースのみで、プライベートスペースは2階に纏めて配置している。

③正方形の家

千葉邸（昭和6年、図18）は、平家で、ほぼ正方形平面の中に居間兼食堂、座敷（寝室）、サンルーム、書斎、玄関および予備室が納められている。水廻りは、西北の位置にまとめて付してあるが、台所はハッチを介して食堂と繋がる平面となっている。つまり、この建物は、生活空間を一塊にまとめた四角い平面形と水廻りを連結して、連続した生活空間を構成している事が分かる。いいかえれば、座敷を中心と考えるならば、建具の開放により、北側の書斎、南側のサンルームならびに西側の居間兼食堂が連続した空間となり、視覚的には、台所とも一体化した生活空間が表出する室構成となっている。

また、遠藤新自邸（昭和6年、図19）では、居間兼食堂、寝室、台所、化粧室、浴室、主人室およびテラスを正方形平面に納め、そこからテラスを除いた形の室内空間に、女中室および便所を加えたと考えられる全体の構成がみられる。居間兼食堂は、建具を介して、寝室、化粧室、台所および玄関に接しており、建具の開放により寝室とは連続した空間となることがわかる。²⁸

田中邸（昭和7年、図20）は、ポーチを含め、玄関、居間、書斎、寝室、便所および

浴室が四角い平面形に納まり、食堂、台所、女中室およびボイラー室が北寄りの東側に付されて全体が構成されている。

④雁行形の家

池口邸（昭和11年、図23）は、居間および食堂を中央に配し、北西側に水廻りを、東南側に座敷を加え、更に、南西側にサンルームと考えられる廊下を介して研究室（書斎）、を設けている。1階の平面形状は、雁行形をしていることが分かる。2階は、四角い平面形で、居間および食堂を中心とする部分の上部に載せている。²⁹

2)『国際建築』『建築世界』『建築知識』掲載の各住宅について

建築雑誌に掲載が確認できる住宅は5軒あるが、そのうちの1軒である池口邸（図23）については『婦人之友』に掲載されたものと同じであり、ここでは加地邸（図17）、今泉邸（図21）、白井邸（図22）、および児島邸の4件について述べる。

加地邸（昭和6年）は、1階に居間、食堂、応接室、玄関、書斎、サンルーム、水廻りおよびテラスをほぼ正方形に納め、「離れ」と考えられる座敷を北西側に設けている。2階は、居間および書斎ならびに食堂の上部にあり、寝室群および浴室、洗面ならびに便所の各室が、ほぼ正方形の平面に納められている。³⁰

今泉邸（昭和7年）は、1階全体の平面形が雁行形をしている。居間、玄関、書斎およびテラス等をほぼ正方形の平面内に納め、食堂、台所および浴室等を北東側に設けている。家族のための個室は、1階には設けられていない。2階は、正方形の平面に座敷および寝室等が配置されている。³¹

白井邸（昭和8年）は、1階中央部分に、居間、食堂、茶の間、台所および女中室等をまとめて四角い平面形に納め、東側に玄関、応接室および書生室を付し、西側に渡り廊下を介して書斎を設けている。2階は、ほぼ正方形の中に客室、子供室およびベランダ等を配置し、西側の中2階に便所等を付している。³²

児島邸（昭和12年）は、アトリエ付きの住宅で、母屋の応接室から廊下を介して南側にアトリエがある。母屋の1階の主要室は、暖炉のある応接室を除く居間、茶の間および婦人室等が座敷で、台所および女中室とともに長方形の平面に納まっている。2階は、1階に比してひとまわり小さい長方形の平面に3室の座敷および板の間（サンルーム）が配置され、1階中央部北寄りに載っている。なお、浴室および便所等は母屋1階北側に廊下を介して設けられている。³³

以上の昭和初期に建てられた各住宅の特徴を纏めると次のようになる。

- (1) 居間および食堂等を四角形（ほぼ正方形）の平面に納め、周辺部に寝室等の他室を配置している。
- (2) 大正期にみられたような軸線に沿った各室の配置は、見られない。
- (3) 居間および食堂の上部に2階が載っている。
- (4) 2階建て7例のうち、1階に家族の個室を設けず、2階にまとめた平面が4例見られる。
- (5) 平屋の住宅では、座敷を含む複数室が、引き違い戸の開放により連続した生活空間となる。

4. 居間、食堂及び座敷の関係について

24軒の住宅について、資料に基づき、主要室として居間、食堂および座敷の各々の関係を〔表1〕に示した。ここでは、居間と食堂の関係、居間と座敷の関係および食堂と座敷の関係についての特徴をみる。

1) 居間と食堂について

居間および食堂については、図面資料により居間兼食堂（LD）タイプ、および居間・食堂隣接（L・D）タイプあるいは居間と食堂が離れている（L-D）3タイプが確認できる。〔表1〕から分かるように、L-Dタイプは4例と少なく、次いでL・Dタイプが9例、ならびにLDタイプは11例見られる。また、年代については、LDタイプは大正期に8例見られるが、昭和期に入ると3例しか見られない。逆にL・Dタイプは、大正期には1例しか見られず、昭和期に入り数を増し、8例がこのタイプで占められている。

しかしながら、昭和初期のL・Dタイプについては、片開きドア（1例）、両開きドア（1例）、引き違い戸（3例）、あるいは両引き戸（1例）で仕切られているか、または、建具がない（2例）状態であることがわかる。

このことは、2室間の間仕切りである建具を開放することにより、2室が一体化し、連続した生活空間として使用できるように設計されたものと考えられる。

また、2室の床の段差については、L・Dタイプに2例見られる。

2) 居間と座敷の関係について

居間兼食堂（6例）を含め、隣接した居間と座敷は12例見られる。そのうち2つの室の床に段差が認められるものが8例あり、いずれも座敷の床が高いことが図面等により確認できる。年代については、大正期および昭和初期とも同様に見られる。

また、大正期は、2室の間にある片開きドアと引き違い窓による繋がりが2例見られるが、以後見られず、昭和初期には、引き違い戸により連絡しており、両引き戸も1例見られる。つまり、2つの室は、建具の開閉により、各室が独立した室あるいは連続して一体化した室になることがわかる。

3) 食堂と座敷の関係について

居間兼食堂（11例）を除く、食堂について、隣接する座敷との関係は5例あるが、そのうちの2例がいす式の食堂で、他の3例が茶の間（座敷）である。食堂（いす式）と座敷について確認できた1例は2つの室の間に引き違い戸があり、座敷の方が食堂より床が高くなっている。また、茶の間については、座敷との間に引き違いの建具があり、床の段差はみとめられない。

以上の居間、食堂および座敷の関係についてまとめると次のようになる。

- (1) 大正期は、12例中の8例が居間兼食堂（LD）タイプであるのに対して、昭和初期には、居間と食堂が隣接したL・Dタイプ（12例中8例）に移行している。
- (2) 昭和初期のL・Dタイプについては、8例のうち6例が建具により2室間が仕切ら

〔表1〕雑誌に掲載された、遠藤新設計の住宅の主要室について

＜凡例＞ ○印：有
 ー印：無あるいは該当しない
 ?印：確認できていない

[illegible]

※床段差については、掲載平面図および写真ならびに記事による

れている。建具の種類は引き違い戸が3例、両開きドアおよび片開き戸が各1例あり、両引き戸も1例見られる。なお、他の2例については建具の使用はされていない。

- (3) 居間および居間兼食堂と座敷の隣接関係は、大正期および昭和初期の両期に見られるが、2つの室の連絡については、大正期に片開きドアおよび引き違い窓に寄るものが2例および引き違い戸が1例見られるのに対して、昭和初期には、引き違い戸（4例）あるいは、両引き戸（1例）で繋がっており、各室の連続性を強めることによる生活空間の一体化が見られる。
- (4) 居間および居間兼食堂と座敷の2室間の床の段差については、大正期および昭和初期の両方に見られ、座敷の床が居間および居間兼食堂よりも高い。このことは、座姿勢の違いによる視線の高さの差を解消するためと考えられる。
- (5) 食堂と座敷が隣接する例は全期を通して4例と少なく、その内の2例は、広縁を除く主要室がすべて座敷で、茶の間（座敷）が食事室として造られている。

5. 主要室の家具について

家具については、居間、食堂、座敷、書斎、寝室および子供室の平面図中に記入されたものに限り、造り付け家具および置き家具に分けて採取し、有無を〔表1〕に示した。

なお、造り付け家具の項目中に暖炉を含めている。

1) 造り付け家具について

暖炉と長椅子との関係を見ると、暖炉は全期を通して見られ、室の中央の配置と中央ではない配置についても全期に見られる。また、長椅子は、大正期の10件に見られるが、昭和初期には、2軒にしか見られない。暖炉に対する長椅子の位置については、対面型が大正期全般に見られるが、大正期後半から昭和初期にかけては、直角型に移行しており、対面型は見られない。次に、傾向が明らかな机については、大正期に見られるのみで、昭和初期には全く見られない。

2) 置き家具について

移動可能な置き家具についての傾向は、長椅子について顕著に見られ、大正期には1例があるのみだが、昭和初期には5例が確認できる。また、暖炉との関係については、対面型のものはなく、直角型が3例あることが分かる。

以上のことから、大正期に多数見られた造り付けの長椅子および机が昭和初期には見られなくなり、長椅子については、昭和初期に置き家具へと移行したことが明らかになった。また、長椅子と暖炉との関係は、大正期から昭和初期に掛けて、対面型から直角型へと移行したことが確認できる。

まとめ

遠藤新の設計した24軒の住宅について、生活空間の時代的变化を見てきたが、間取りの構成、個室と家族の空間の構成、および家具の扱いの3点に顕著な変化が見られた。

（１）間取りの変容について

大正期の間取りについては、遠藤新自身が、敷地に対する建築のつくり方³⁴として建物を「類型」として分類し、雑誌に発表している。居間および居間兼食堂を中央に据え、軸線に沿って配置された各室が、１列に並んでいる。建物としては、巾が狭く、細長い平面形状をしている。また、居間兼食堂と座敷に見られるように、室同士の連絡は、間接的である。

これに対して、昭和初期の間取りは、正方形および辺の比が小さい長方形の平面形に居間および食堂等を納め、周囲に他室を付した形態をしている。それゆえ、明確な軸線は見られないが、隣り合う室の建具の開けたてにより短い距離での行き来ができる各室の配置となっている。このことは、居間および食堂等の主要室を四角い平面内にまとめることにより、大正期の間取りに比較して、動線距離の短縮を図るとともに、各室同士が床からの広い開口で直接繋がることにより、連続性と一体感を強めた生活空間の構成へと移行したものと考えられる。

２階建については、大正期は、設備関係室を主にした「住宅の五臓六腑」と呼ばれる各室を一団にまとめた１階の上部に、さほど面積の広くない２階を載せている。ところが、昭和初期には、１階の平面形の変化とともに、居間および食堂を含むほぼ正方形の１階上部に２階を載せている。また、１階および２階に家族の個室（寝室）が配置された大正期とは異なり、昭和初期には、２階のみに個室のある住宅が見られるようになる。

（２）個室と家族空間の構成の変容について

平家の建物については、大正期には細長い平面形の建物中央に居間および食堂を置き、個室（寝室）と水廻りをその両側に配置する平面形が基本となっている。これに対して、昭和初期の早い時期（昭和２年）には、座敷（居間兼寝室）を含む四角い平面形の一部に個室を付した例が現れる。同時に、居間兼食堂と引き違いの建具により隣接した個室が、四角い平面形内に配置された間取りが見られる。つまり大正期には、個室に「離れ」という言葉が用いられている例があるように、細長い建物の末端部に配置されることでプライバシーの確保をなしたと考えられる。引き続き昭和期に入った後にも発展型と見られる、広縁が、座敷と食堂（または茶の間）に接した平面が現れた。さらに、個室と居間兼食堂が引き戸で仕切られた形式を持ち、各室同士の連続性を高めて１室空間として使用できる平面形に発展したものと考えられる。

２階建てについては、大正期には、２階に個室（寝室）を配置した平面も見られるが、１階部分にも寝室あるいは寝室に使用すると考えられる座敷が設けられており、つまり、パブリックスペースとプライベートスペースを１階と２階とで明確に分離してはいない。

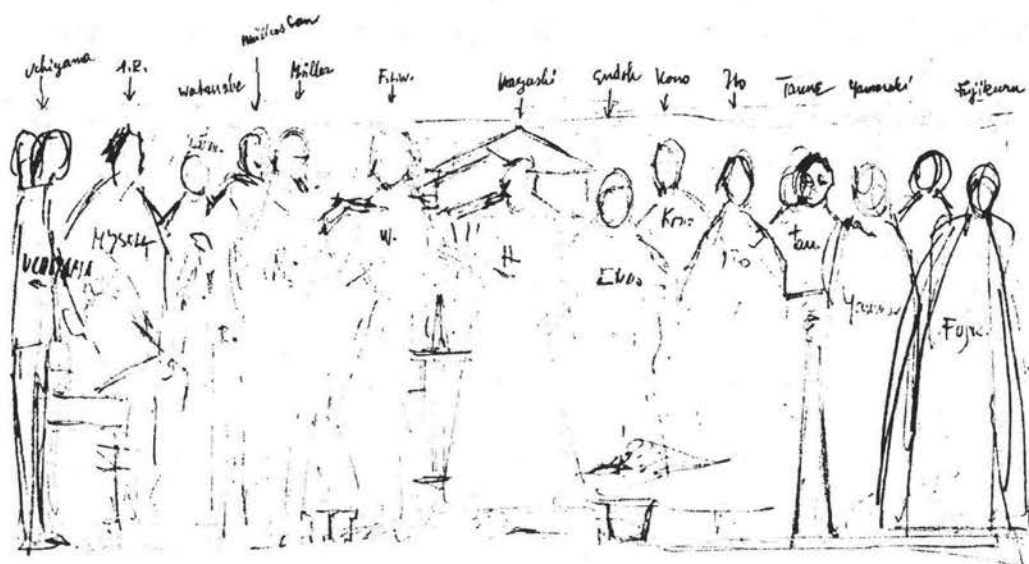
これに対して昭和初期には、個室（寝室）が２階に配置された平面の建物が４軒あり、個室の１階から２階への分離が進んでいったものと考えられる。

（３）家具の扱いの変容について

造り付け家具については、台および棚、あるいは暖炉が全期にわたって見られるが、長椅子および机は、大正期に夫々１０例および１１例見られる。ところが、昭和期に入ると長椅子については２例しか見られなくなり、机にいたっては全く見られなくなる。また、

置き家具については、机は全期にわたって見られるが、長椅子は、大正期には殆ど見られず、昭和期に増加している。また、長椅子の、暖炉との配置関係は、大正期は、対面型が多数であるのに対して、昭和初期には、直角型へ移行している。このことは、大正期における、造り付けの長椅子および机による固定された位置関係の生活空間を、昭和初期に入り、置き家具の使用に切りかえることにより、自由に家具配置ができる生活空間へと変化させていった遠藤新の生活空間に対する作法の移行がうかがえるものと考えられる。

ライトの弟子である遠藤新が設計した作品について、ライトの影響が指摘されているのは周知のことである。しかしながら、遠藤は、日本独特の座敷の生活と、新しい生活形式である椅子の生活を融合するという、新時代に相応しい日本の生活空間の創造を、住宅設計に対する重要なテーマと考えていたのではなかろうか。大正期に見られる、間接的な連絡による居間兼食堂と座敷の関係から、昭和初期の、床からの広い開口により連続し一体化した居間兼食堂等と座敷の関係への移行は、続き間という日本の空間の構成方法による、新しい生活様式の考案を示したものとも考えられよう。このことは、遠藤新が恩師ライトの影響下から、独自の作風へと変容したことを物語るものと考えたい。



【図1】右から5人目に「Ito」の文字の記載がある



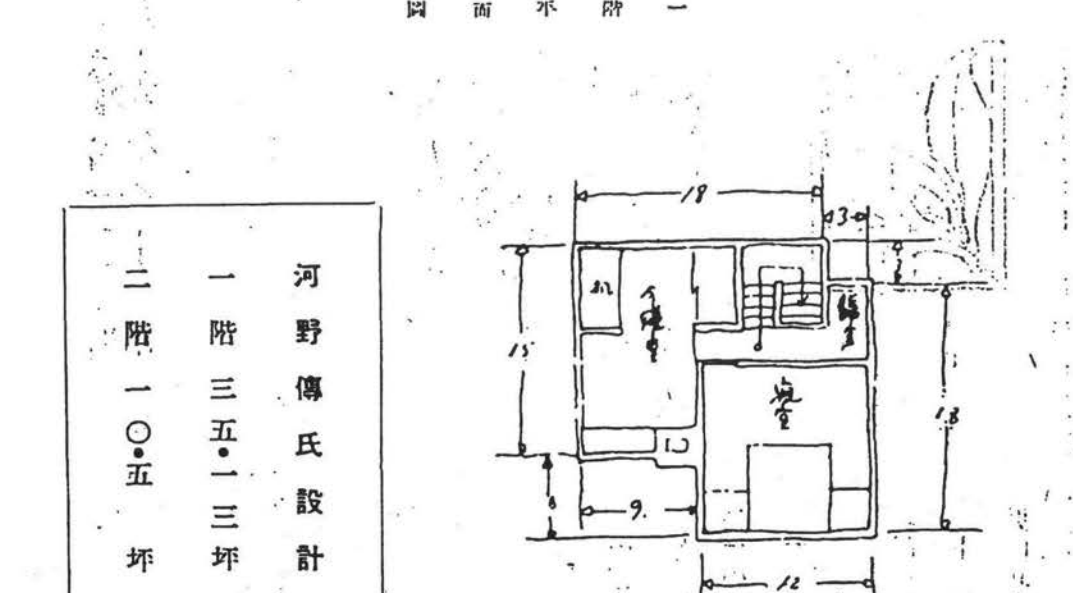
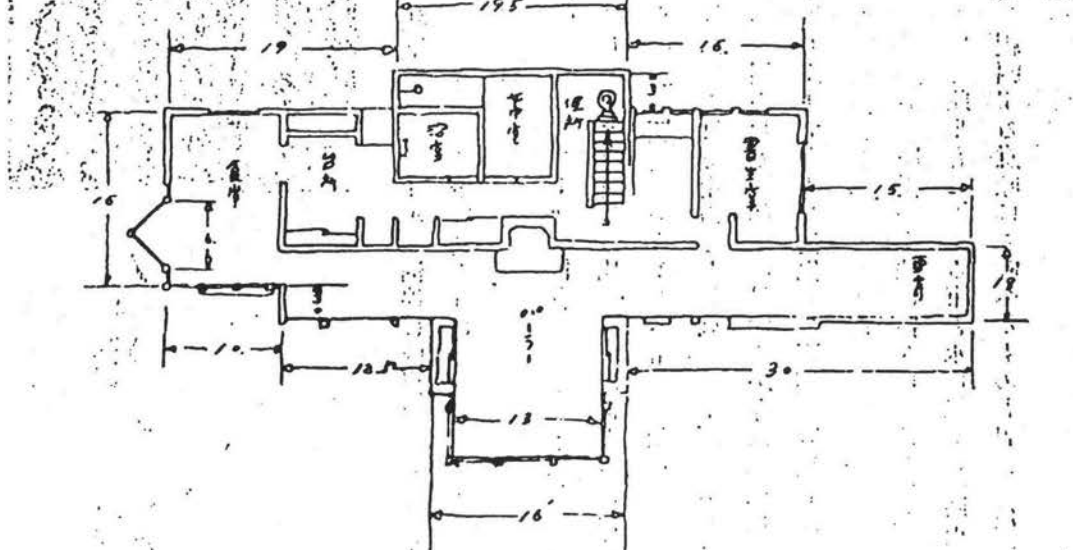
【写真1】後列右から2番目藤（東），5番目南，前列左から2番目河野，4番目パ、



【写真2】【写真1】の裏側

學問與

圖 計 設 邸 氏 一 陽 野 上



1991 2000 2005 2010 2015 2020

河野傳氏設計

一階三五・一三坪

二階一〇・五坪

上野陽一郎



【写真3】大正13年頃撮影



【写真4】



【写真5】パーラー室内：暖炉壁面にレリーフがみられる

藤倉憲二郎



【写真6】サインと日付がある（1918）



【写真7】遠藤新とタリアセンにて



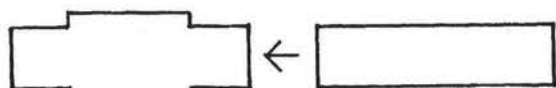
【写真8】晩年の藤倉（後列右） 背景は自邸

平面型の変遷

<平 屋>

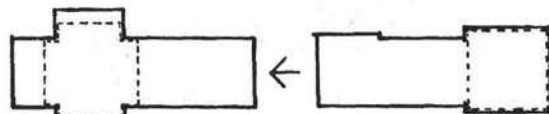
<2階建て>

大 正 期



一文字の家の変化

一文字の家

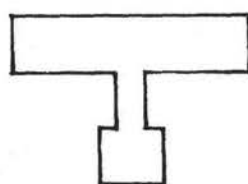


三軒幅の家の変化

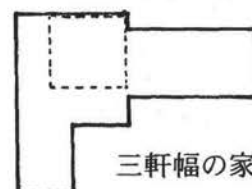
三軒幅の家



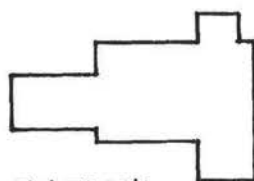
一文字の家の変化



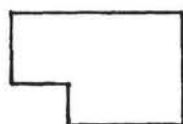
一文字より丁字に



三軒幅の家の変化

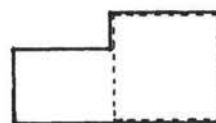


長方形の家

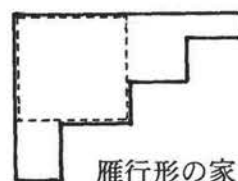


正方形の家

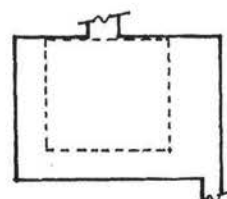
昭 和 初 期



個室が2階にある家

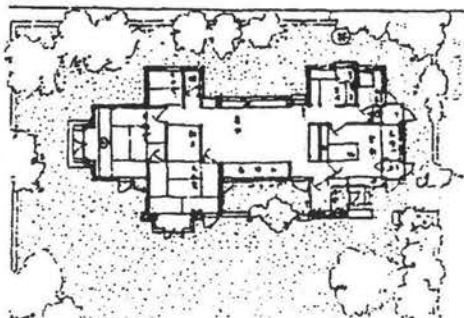


雁行形の家

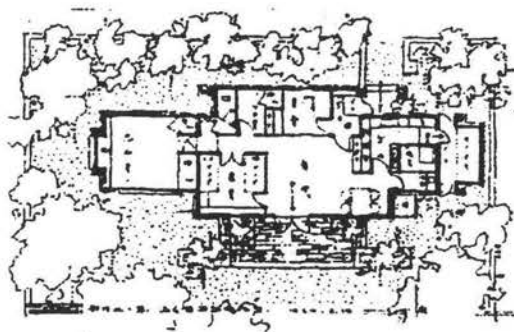


※----- 2階位置

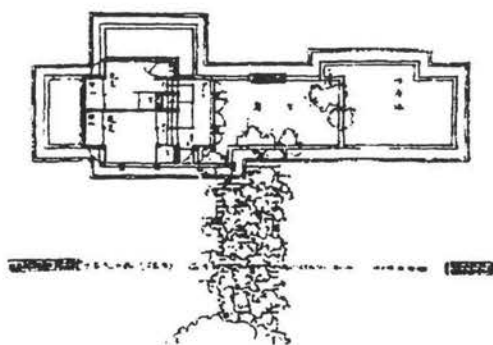
(図1) 大久保邸 大正12年



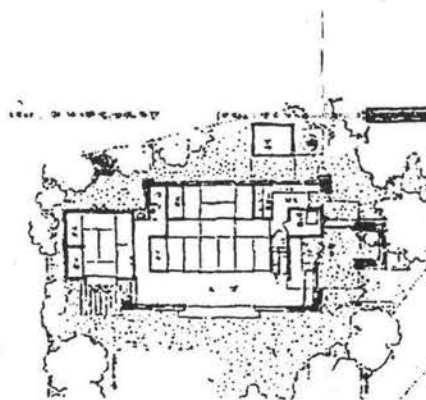
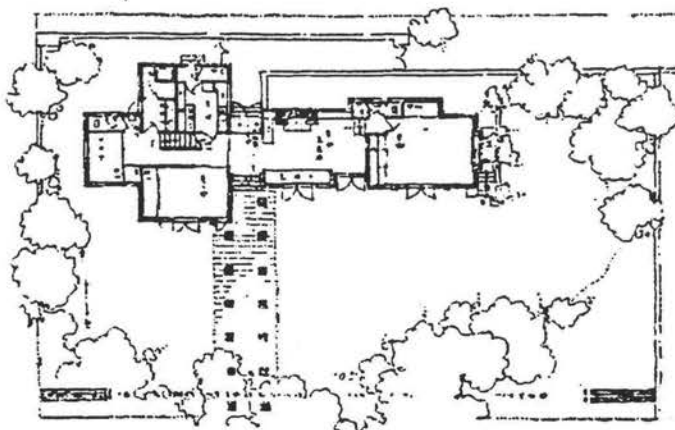
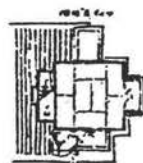
(図2) 剣持邸 大正12年



(図3) 川島理一郎邸 大正12年

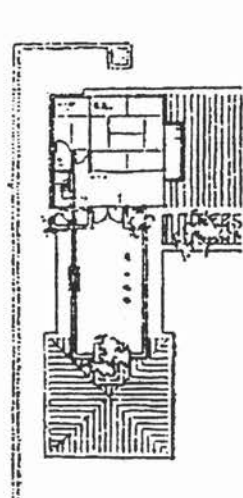


(図4) 有川治助邸 大正12年

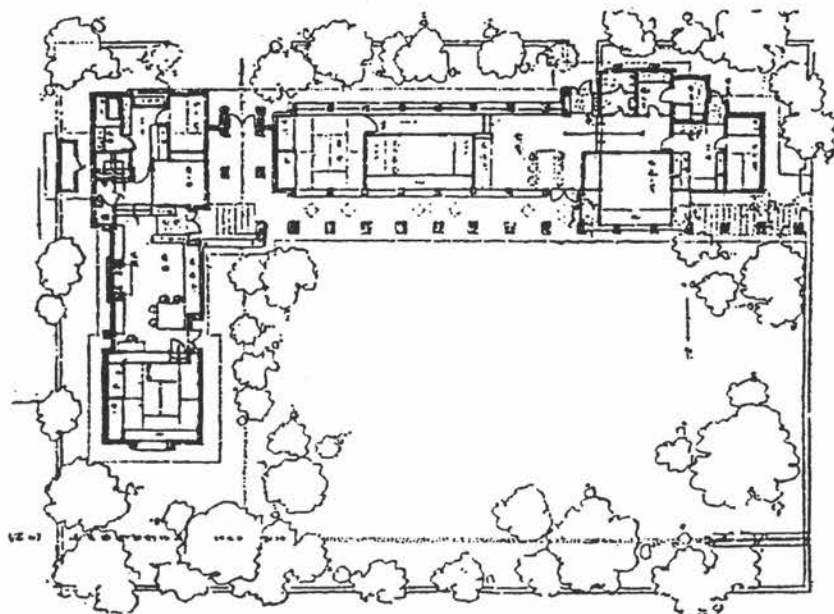


※平面図は、すべて等縮尺

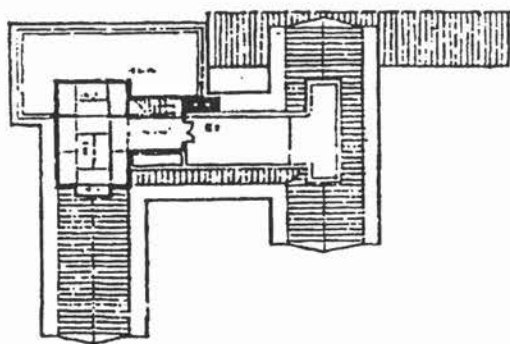
(図6) 上代淑邸 大正13年



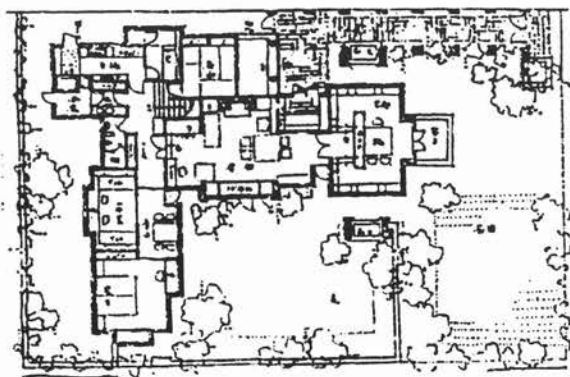
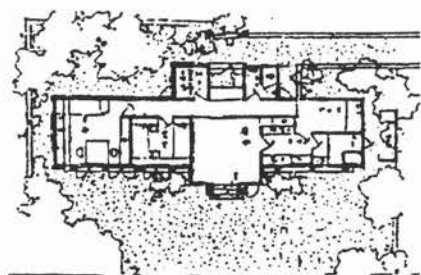
(図5) 星島氏子供の家 大正13年



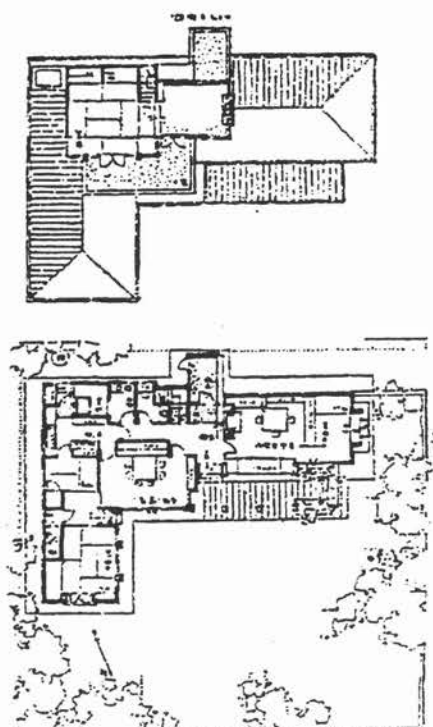
(図7) 井筒邸 大正13年



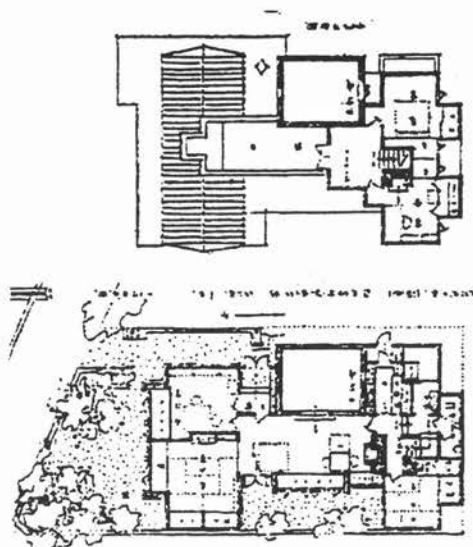
(図8) 安成邸 大正13年



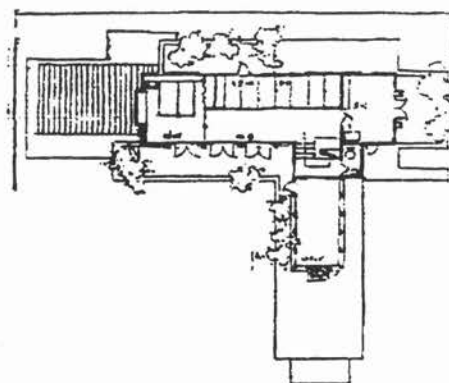
(図9) 相原邸 大正13年



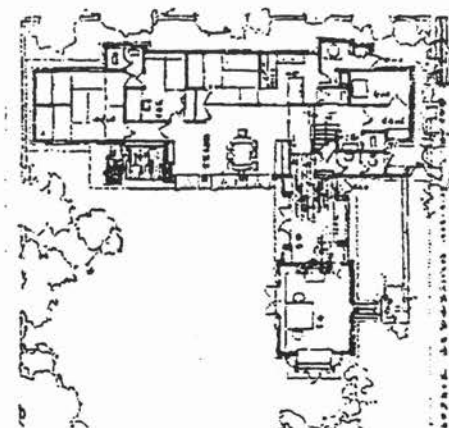
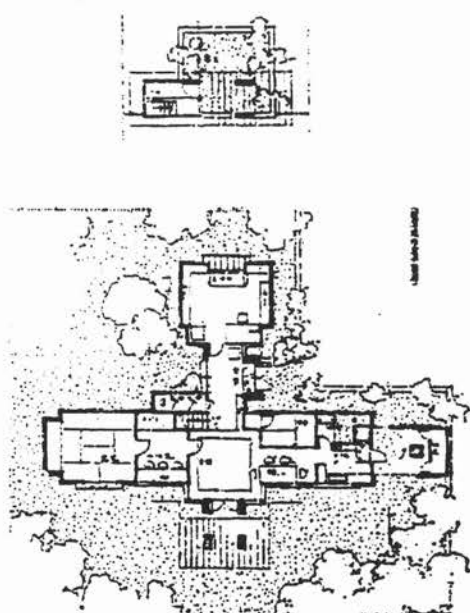
(図10) 大沢邸 大正13年



(図11) 稲田男爵邸 大正13年



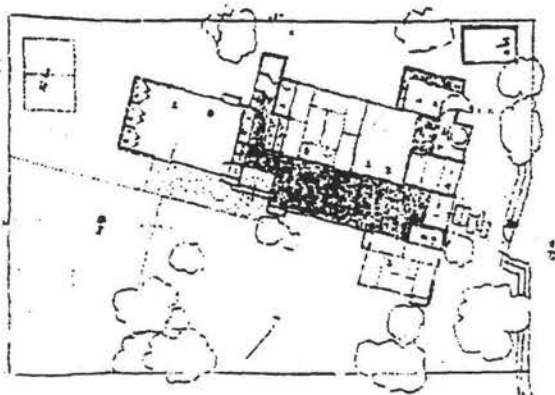
(図12) 萩原庫吉邸 大正13年



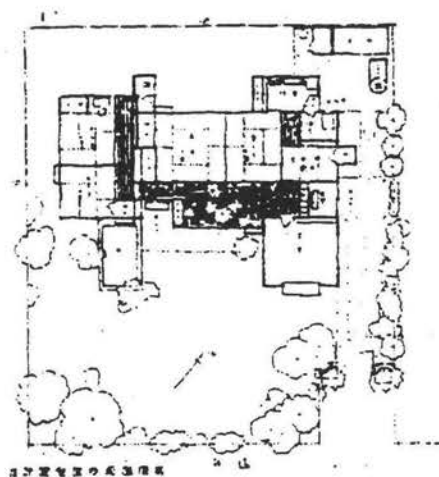
(図13) 石原謙邸 昭和2年



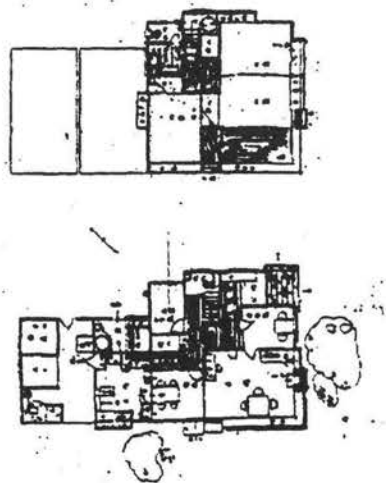
(図14) 黒崎貞彦邸 昭和2年



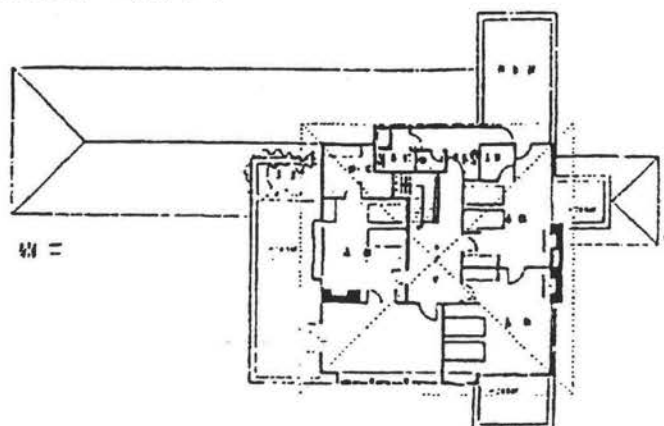
(図15) 高橋泰邸 昭和2年



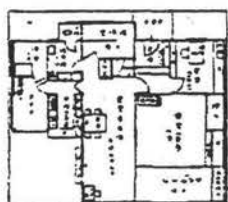
(図16) 羽仁吉一郎 昭和4年



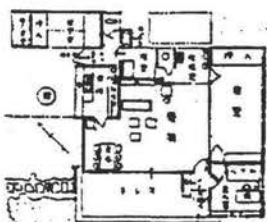
(図17) 加地利夫邸 昭和6年



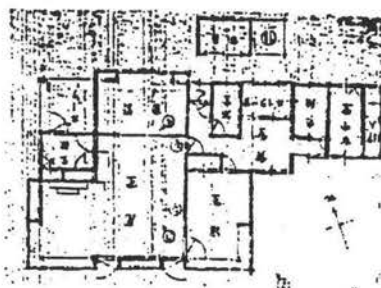
(図18) 千葉邸 昭和6年



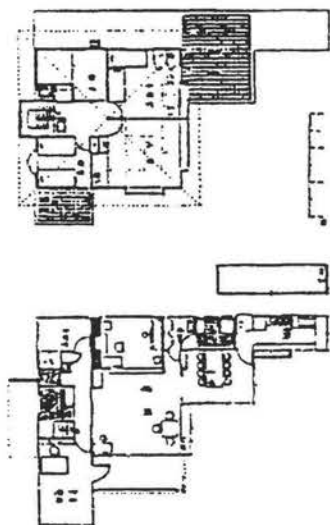
(図19) 遠藤新自邸 昭和6年



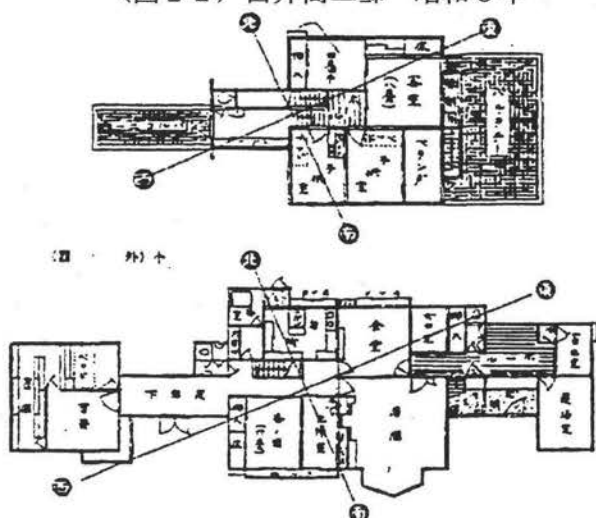
(図20) 田中富士雄邸 昭和7年



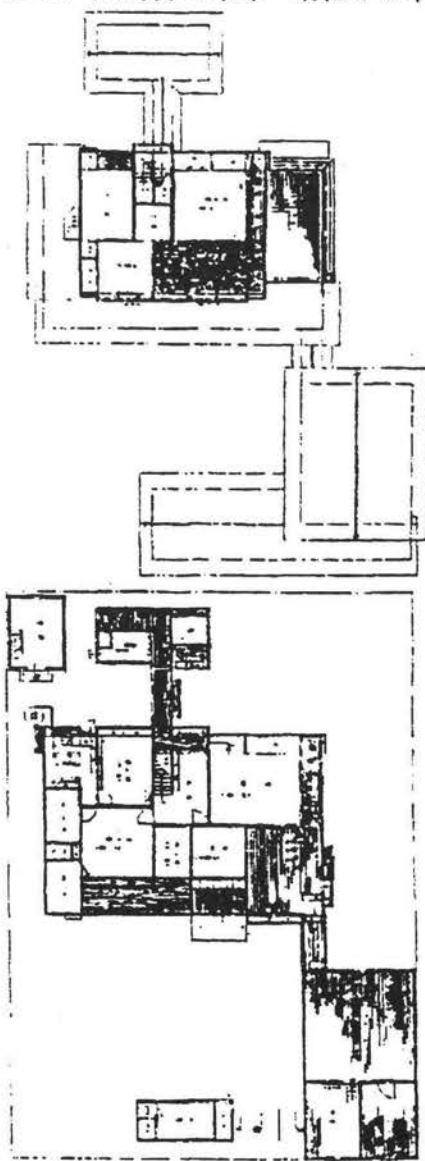
(図 2 1) 今泉邸 昭和 7 年



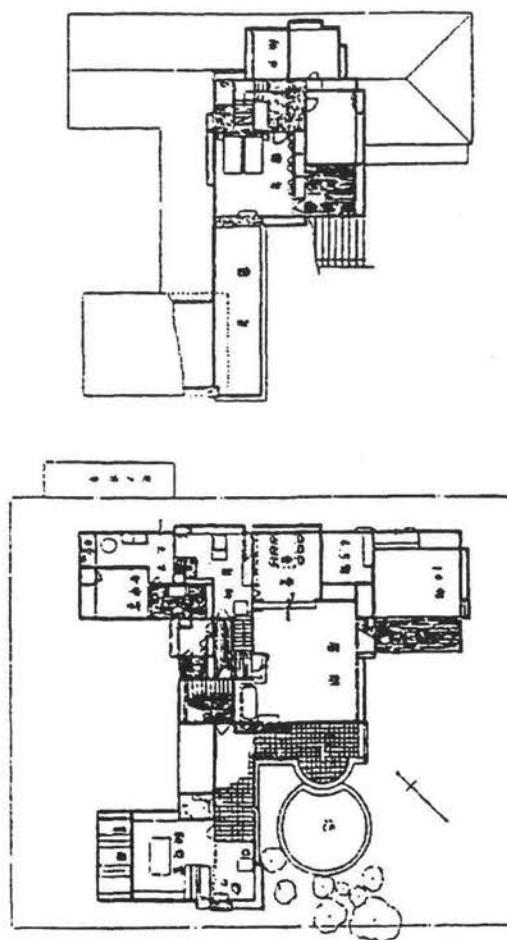
(図 2 2) 白井喬二郎邸 昭和 8 年



(図 2 4) 兒島善三郎邸 昭和 1 2 年



(図 2 3) 池口輝雄邸 昭和 1 1 年



第 2 章

建築家・南信の経歴と住宅作品にみられる特徴について

はじめに

フランク・ロイド・ライトが設計した、帝国ホテルの建設には多くの日本人スタッフが従事していたことは知られている。ここには、いわゆるライトの弟子とされる遠藤新をはじめ田上義也、土浦亀城をはじめとして、南信、河野傳¹、内山隈三²、渡辺己午蔵、藤倉憲二郎³、伊藤清造⁴、剣持某、高橋某⁵がいる。

ライトの弟子の一人である南信は、後に遠藤新とともに設計事務所を営んだが、遠藤の陰に隠れ、その経歴についてはあまり知られていなかった。また帝国ホテル建設以降に、南は遠藤新とともにライトのスケッチによる山邑太左衛門別邸を完成させたことでも知られているが、遠藤との共同事務所で彼が担当した作品や、彼が一人で活動した時期の作品については、これまであまり明らかにされていない。本章は、南が一人で活動した時代に着目し、雑誌資料および聞き取り調査等によって、新たに判明した南信の経歴および建築作品について報告すると共に、彼の作品の中でも数の多い住宅に見られる作風について言及するものである。

南の経歴については、主に彼の義妹にあたる南範子氏ならびに甥にあたる針岡繁氏からの、聞き取り及び提供資料、あるいは当時の建築雑誌『建築雑誌』『建築と社会』『新建築』によっている。また、南の作品（計画案を含む）については、主として当時（1923～1935）の建築雑誌『建築雑誌』『建築と社会』『新建築』『建築画報』『建築世界』『住宅』及び書籍『アルス建築大講座』『近代建築画譜近畿篇』について調査し、確認できた作品について報告する。なお、1作品については、1980年発行の『日本基督教団仙台ホサナ教会創立百周年記念小史』によっている。

1. 南信の経歴

南の経歴を大別すると、1) 仙台および東京時代、2) 兵庫および大阪時代、3) 満州（現中国東北部）時代に分けて考えることが出来る。

1) 仙台および東京時代

南家は元仙台藩の士族で、南信は小学校校長を勤めた父寛壽と、天文学者平山清次の姉である母きわの長男として、明治25年（1892年）2月13日に仙台市（本籍地：青葉区木町通二丁目三〇番地）で生まれた。後に、宮城県立仙台第二中学校および第二高等学校を経て、大正6年（1917）に東京帝国大学工科大学建築学科を卒業し⁶、日本トラスコン鋼材に入社した⁷。その後、帝国ホテルの建設に参加している。ちなみに南は、第二高等学校および東京帝国大学工科大学建築学科で遠藤新の3年後輩に当たる。なお、アメリカの建築家フランク・ロイド・ライトが設計し東京の日比谷に建設が進められた帝国ホテルは、ライトの帰国後一年が過ぎた大正12年9月1日に竣工披露の日を迎えたことはよ

く知られている。ライト帰国後の大正11年10月には「遠藤南建築創作所」⁸の名称で遠藤新と共に設計事務所を開設している。この事務所名については、遠藤新の次男である楽氏に寄れば、昭和20年の戦災で焼けるまで遠藤の事務所⁹には、遠藤の字で板に筆書きされた「遠藤新・南信建築創作所」の表札が掛かっていた。しかし、山邑邸建設の後には、分かれて南は独立したという¹⁰。

2) 兵庫および大阪時代

南は帝国ホテルの建設工事がまだ完成を見ない大正12年(1923)の春に、「兵庫県武庫郡精道村芦屋山坂、山邑別邸方」に住所を移転している¹¹。

南が芦屋に転居したのは、山邑太左衛門邸の現場に常駐して設計監理に当たるためであることは、移転先の住所からみて明らかであろう。ライト設計の山邑邸施主の孫にあたる山邑芳子氏に寄れば、山邑別邸はライト設計の建物が建つ以前には和風の建物で、南はその一室を事務所として使用していたという¹²(当時の写真が残っている)。

山邑邸が竣工した¹³翌年、『建築と社会』の大正14年7月号には、新入会員として南の氏名と住所が掲載されている¹⁴。住所は「大阪市北区堂島ビル3階202室」で、この時には、ここに居所を設けていたことが分かる。また、同年9月には「南建築事務所」の名称が使われており¹⁵、所在地は記されていないが、『建築と社会』の大正15年12月号に次の移転先が「兵庫県芦屋山坂1537」となっている。このことから考えれば¹⁶、「南建築事務所」の当初の所在地は、既出の「堂島ビル」と考えられる。また、南の義弟の伊東和雄(1907～1933)が、大正14年9月に「遠藤南建築創作所」から「南建築事務所」に移籍している¹⁷ことから、大正14年に南が独立した可能性が高いと判断できよう。なお、『建築と社会』大正15年12月号と同じ芦屋の住所は、『新建築』の昭和2年3月号の広告にも見られ、ここでは「南建築事務所」の名称が記されている¹⁸。

その後、『建築雑誌』の昭和3年4月号には、「事務所新設、大阪市中ノ島大阪ビル5階」という記事があり、このころ、南が大阪の中心地である中ノ島に事務所を構えたことが分かる¹⁹。その後、『建築と社会』の昭和5年4月号には「大阪ビル南建築事務所」および昭和7年10月号には「大阪・北・宗是町、大ビル5階」とある²⁰。この「大ビル」は先の「大阪ビル」と所在地の表示は異なるものの、当時の株式会社大阪ビルヂングが所有していた「ダイビル本館」と考えられる²¹。昭和3年4月頃に「大阪ビル5階」で開設した設計事務所が、昭和7年10月にも同所に置かれていたことが明らかである。なお、所在地は移ったものの、大正14年9月から昭和7年10月までの期間は、「南建築事務所」の名称が使用されていることも明らかである。

また、このころ南は兵庫県武庫郡良元村鹿塩(現宝塚市仁川北)に自邸を建設している。なお、南の義弟の伊東和雄は、昭和8年7月から南の自邸で病気の療養をし、同年9月16日に没している。

彼の追悼集『伊東和雄小照』(昭和8年11月)に南信自邸の写真が「義兄の新邸」として載っている。南の義妹である南範子氏によれば、伊東の死の前年に南自邸が竣工したとのものであり、南の自邸の建築年代は昭和7年と考えてよからう。

南の自邸は、昭和9年4月に南の妻雪子の兄である伊東俊雄(南範子氏の父)一家に引き継がれ、平成2年(1990)までほぼ原型のまま住み続けられたが、1994年に取り壊された²²。

3) 満州（現中国東北部）時代

その後、南信は自邸を手放し、満州（現中国東北部）に渡っている。渡満の時期は明確でないが、南は『建築と社会』の昭和4年10月号から昭和8年12月号まで委員会委員等に名を連ねている。しかし、それ以降、彼の名前の掲載が見られないことや、昭和9年4月頃に自邸を手放している²³ことから判断しても、昭和9年の4月には渡満していたとするのが妥当であろう。なお、昭和8年10月の『住宅』に掲載された、南信自邸の解説文で南は、「過渡期的な自分」という表現をしている。

渡満後の居所については、新京で南の事務所にしばらく滞在していた、南の甥である針岡繁氏の証言によれば、昭和10年頃には新京特別市（現長春市）浪速町2丁目4番地に設計事務所があり、「遠藤新・南信建築設計事務所」の看板が掲げられていたという²⁴。また所員には、新田三郎、林実、佐藤高寿、他1名がいた。新京において、遠藤新と共同で再び設計事務所を開設したことが分かる。

南は昭和18年に結核を発病し、以後、新京郊外の孟家屯の療養所で療養を続けていたが、終戦後の昭和21年11月に病院船で日本に引き上げてきた²⁵。その後、昭和26年3月20日に仙台にて没している²⁶。

[表1] 南信年譜		南範子氏、針岡繁氏の証言・提供資料、『建築雑誌』『建築と社会』『新建築』および『伊東和雄小照』により作成
西暦	和暦	
1892	明治25年2月13日	南寛壽、きわの長男として仙台市に生まれる。
1917	大正6年	宮城県立仙台第二中学校、第二高等学校を経て 東京帝国大学工科大学建築学科卒業
		帝国ホテル建設に従事
1921	大正10年2月3日	伊東賢治次女雪子と結婚
1921	大正10年頃(?)	山邑邸(竣工13年)の現場監督のため芦屋に移住
1922	大正11年10月	「遠藤南建築創作所」の名称
1923	大正12年5月	「兵庫県武庫郡精道村芦屋山坂、山邑邸方」
1925	大正14年7月	「大阪市北区堂島ビル3階302室」
1925	大正14年9月	「南建築事務所」の名称
1926	大正15年12月	「転居 兵庫県芦屋山坂1537」
1927	昭和2年3月	「南建築事務所」(兵庫県芦屋山坂1537)
1928	昭和3年4月	「事務所新設、大阪市中ノ島大阪ビル5階」
1930	昭和5年4月	「大阪大ビル南建築事務所」
1932	昭和7年	兵庫県武庫郡良元村鹿塩(現宝塚市仁川北)に自邸竣工
1932	昭和7年10月	「南 信 大阪・北・宗是町、大ビル5階」
1933	昭和8年	自邸写真に「義兄の新邸」とある
1933	昭和9年	渡満
1935	昭和10年頃	遠藤新・南信建築設計事務所(新京特別市浪速町2丁目4番地) 所員; 新田三郎、林 実、佐藤高寿、ほか1名
1943	昭和18年	肺結核のため療養
1946	昭和21年11月	病院船で帰国
1951	昭和26年3月20日	仙台にて没する。

2. 南信の作品

南信は、「南建築事務所」時代をはさんで、遠藤新と建築設計の事務所を設立している。遠藤と共同で事務所を設立している時代の作品については、どの作品が、南信が主に担当した作品であるか定かではない。ここでは、南信が主に設計したものが明らかな、「南建築事務所」時代の作品、中でもその数が半数以上を占める住宅について特徴を考察する。

1) 作品掲載誌

南の作品についての記事は、雑誌の『新建築』『建築と社会』及び『住宅』に掲載が見られる。『新建築』には大正15年2月号(第2巻第2号1926)をはじめとして昭和4年4月号(第5巻第4号1929)までに、13件の掲載記事が認められる²⁷。また、『建築と社会』には昭和5年1月号(第13輯特集号)に1件²⁸、『住宅』には昭和7年6月(第17巻第6号)から昭和9年9月(第19巻第9号)までに、3件の掲載記事が認められる²⁹。[表2-1]

雑誌以外の書籍では、『アルス建築大講座(合本)第1巻』および『同第3巻』(1930)に各1件³⁰、『近代建築画譜近畿篇』(1936)に1件³¹の掲載記事が確認できた。また、『日本基督教団仙台ホサナ教会創立百周年記念小史』(1980)に1件確認した。

2) 掲載作品

南信の作品について、当時の建築雑誌『新建築』『建築と社会』『住宅』及び書籍『アルス建築大講座』『近代建築画譜近畿篇』の掲載記事、あるいは『仙台ホサナ教会創立百周年記念小史』から、合計19の作品が確認できる。19のうち17の作品(17の内の1つは、プランが2案ある。)は図面及び写真あるいは解説文等があるが、他の2つについては名称のみの掲載で、作品内容は不明である。内容が明らかな17について用途ごとに作品をみると次のようになる。(①から⑰の番号は[表2-1][表2-2][表3]および図版に示した番号)

住宅(11作品)

- ①K氏の住宅, ③(③-a)菅野真湛氏の住宅, ④-1および④-2 二十坪前後の家,
- ⑦某氏の家, ⑧郊外に建つ家, ⑩某氏の家, ⑪住宅, ⑬亀高邸, ⑭新荘氏邸, ⑮鹿姑居(自邸), ⑯高田氏邸

集合住宅(1作品)

- ⑨会下山のアパートメント

事務所付住宅(1作品)

- ⑥事務所付住宅

店舗(2作品)

- ②第一屋, ⑫山の喫茶店

医院(1作品)

- ⑤(⑤-a, ⑤-b, ⑤-c) 櫻根医院

教会(1作品)

- ⑰仙台バプテスト教会

なお、名称の掲載のみで用途不明の2作品は、⑱神戸婦人同情会館と⑲日本絹綿紡績会社である。

[表2-1]雑誌掲載の南信設計作品について

西暦	元号 誌名 巻 号	番号	タイトル (建築名称等)	用途	解説文	写真	図面 平面図	立面図	配景図 (透視図)	室内 透視図	鳥瞰図
1926	大正15年2月 新建築 第2巻第2号	①	K氏の住宅	住宅	○	—	○	○	—	—	—
	大正15年3月 新建築 第2巻第3号	②	戒る商店の 設計(改造) 第一層	店舗	○	○	○	—	—	—	—
	大正15年6月 新建築 第2巻第6号	③	菅野真湛氏の住宅 住宅行脚記(7)	住宅	○	○	○	—	○	—	—
	大正15年7月 新建築 第2巻第7号	④-1 ④-2	設計相談 二十坪前後の家	住宅	○	—	○	○	—	—	—
	大正15年9月 新建築 第2巻第9号	⑤	櫻根医院	医院	—	○	—	—	—	—	—
	大正15年10月 新建築 第2巻第10号	⑥	設計相談 事務所付住宅	事務所付住宅	○	—	○	○	—	—	—
1927	昭和2年5月 新建築 第3巻第5号	⑦	某氏の家	住宅	○	—	○	○	—	—	—
	昭和2年8月 新建築 第3巻第8号	⑧	郊外に建つ家	住宅	—	○ 模型	—	—	—	—	—
	昭和2年11月 新建築 第3巻第11号	⑨	『住宅に関する展覧 会』記事 会下山のアパートメ ント	集合住宅	—	—	○	—	—	○	○
	昭和2年11月 新建築 第3巻第11号	⑩	『住宅に関する展覧 会』記事 某氏の家	住宅	—	—	○	—	○	—	—
1928	昭和3年8月 新建築 第4巻第8号	⑪	住宅	住宅	—	—	○	—	○	—	—
	昭和3年10月 新建築 第4巻第10号	⑫	山の喫茶店	店舗	—	—	—	—	○	—	—
1929	昭和4年4月 新建築 第5巻第4号	⑬	亀高邸	住宅	○	○	○	—	—	—	—
1930	昭和5年1月 建築と社会 第13輯特集号	⑬-a	亀高邸	住宅	—	○	—	—	—	—	—
1932	昭和7年6月 住宅 第17巻第6号	⑭	新荘氏邸	住宅	○	○	○	—	—	—	—
1933	昭和8年10月 住宅 第18巻第10号	⑮	鹿姑居 (自邸)	住宅	○	○	○	—	—	—	—
1934	昭和9年9月 住宅 第19巻第9号	⑯	高田氏邸	住宅	○	○	○	—	—	—	—

[表2-2]その他の掲載書籍と作品について

西暦	元号 書名 巻 号	番号	タイトル (建築名称等)	用途	解説文	写真	図面 平面図	立面図	配景図 (透視図)	室内 透視図	鳥瞰図
1930	アルス建築大講 座(合本)第1巻 昭和5年	③-a	菅野真湛邸 芦屋1925	住宅	—	○	○	—	—	—	—
	アルス建築大講 座(合本)第1巻 昭和5年	⑤-a	櫻根医院 大阪1925	医院	—	○	—	—	—	—	—
	アルス建築大講 座(合本)第1巻 昭和5年		山色邸(芦屋1925 ライトと共作)	住宅(別荘)	—	—	—	—	—	—	—
	アルス建築大講 座(合本)第1巻 昭和5年	⑱	神戸婦人同済会館 (神戸1925)	?	—	—	—	—	—	—	—
	アルス建築大講 座(合本)第1巻 昭和5年	⑲	日本絹綿紡績会社 (高槻1926)	?	—	—	—	—	—	—	—
	アルス建築大講 座(合本)第1巻 昭和5年		亀高邸(神戸1928)	住宅	—	—	—	—	—	—	—
	アルス建築大講 座(合本)第3巻 昭和5年	⑤-b	櫻根医院	医院	—	○	—	—	—	—	—
1936	近代建築面譜 近畿篇 昭和11年9月	⑤-C	櫻根病院	医院	—	○	—	—	—	—	—
1980	日本基督教団仙 台ホサナ教会創 立百周年記念小 史	⑰	仙台バプテスト教会 昭和6年(1931)	教会	○	○	—	○	○	—	—

以上19作品のうち、資料図面等により⑧と⑩および⑪と⑬は夫々同一の建物であることが判明し、建物数は17軒（但し④-1、④-2は1軒とする）と確認できた。但し、建物用途および概要が確認できた建物は15軒である。また15軒の内、掲載写真により②第一屋、③菅野真湛氏の住宅、⑤櫻根医院、⑬亀高邸、⑭新荘氏邸、⑮鹿姑居（自邸）、⑯高田氏邸、⑰仙台バプテスト教会の8軒が建設されたことが判明したが、他については、実際に建設されたことの確認はとれない。

3. 住宅作品にみられる特徴

建築内容が明らかな15軒の南の作品について、外観、平面および室内についてそれぞれの特徴をまとめたものが〔表3〕である。

このうちの、9軒の住宅について、特徴を見る。

1) 外観の特徴

(1) 屋根について

屋根の形状については、緩勾配屋根および陸屋根が採用されている。勾配屋根は、切妻、寄せ棟あるいは切妻・寄せ棟併用のものがある。勾配屋根に一部陸屋根を併用したものが最も多く、9軒のうち③菅野真湛氏の住宅、④-1二十坪前後の家、⑧郊外に建つ家（⑩某氏の家）、⑪住宅（⑬亀高邸）の4軒（44.5%）ある。次いで、勾配屋根のみ使用の建物は①K氏の住宅、⑦某氏の家、⑭新荘氏邸（和風）の3軒（33.3%）ある。陸屋根のみが使用されている住宅は⑮自邸並びに⑯高田氏邸の2軒（22.2%）ある。なお、緩勾配屋根は、①K氏の住宅、③菅野真湛氏の住宅、④-1二十坪前後の家、④-2二十坪の住宅、⑦某氏の家、⑪住宅（⑬亀高邸）、⑭新荘氏邸の6軒（7プラン）（67%）に見られる。また、9軒全てが深い軒を有している。

次に、ケラバの転びについては、①K氏の住宅、④-1二十坪前後の家、⑦某氏の家、3軒（33.3%）、鼻隠しの転びについては、①K氏の住宅、③菅野真湛氏の住宅、⑦某氏の家、⑪住宅（⑬亀高邸）の4軒（44.5%）に確認できる。

(2) 水平線について

⑭新荘氏邸、⑮自邸および⑯高田氏邸の3軒を除いて6軒（67%）に、軒の線、パラペット上端および内法高と腰高位置での押し縁による水平線を強調したデザインがみられる。

これら、深い軒、ケラバおよび鼻隠しの転び、水平線を強調した外観デザインは、ライトの建築に見られる特徴として知られておりW.ヒコック邸（1900年）他、多数のプレーリーハウスに見られる特徴と共通している³²。

(3) 太柱について³³

例えば③菅野真湛氏の住宅の1階南側や東側に見られるように、壁厚よりも大きい柱を<太柱>とすると、⑭新荘氏邸、⑮自邸、⑯高田氏邸の3軒を除いて、6軒（67%）に太柱が使用されている。

(4) 窓建具の格子について

9軒のうち、⑭新荘氏邸、⑮自邸、⑯高田氏邸の3軒と確認で出来ない1軒を除いて、①K氏の住宅、③菅野真湛氏の住宅、⑦某氏の家、⑪住宅（⑬亀高邸）の4軒（44.5%）

の建具に均等割りではない格子が使用されている。例えば、③菅野真湛氏の住宅には格子内の一部に鏡板をはめ込んだガラス窓のデザインが使用されている。

このデザインは、遠藤設計の萩原邸（1924年）【写真1】ほか多くの住宅に見られるものに類似している。

（5）その他

【表3】の項目には挙げていないが、③菅野真湛氏の住宅の門扉には、例えば、フランク・ロイド・ライトの設計したストックマン邸（1908年）他の、外壁に使われている、「バックハンド・トリム」と呼ばれるデザインの押し縁飾りを採用している。【写真2】

2）平面の特徴

9軒の住宅について、次の点が指摘できる。

（1）平面の型

9軒の住宅の平面について類型化すると、a）一文字型およびa'）一文字変形型、b）十字型、c）T字型、d）ロ字型の5つに分類できる。

- a）一文字型およびa'）一文字変形型（2軒3プラン）：④-1・④-2 二十坪前後の家、⑭新荘氏邸
- b）十字型（4軒）：①K氏の住宅、③菅野真湛氏の住宅、⑦某氏の家、⑩（⑧）某氏の家
- c）T字型（1軒）：⑬亀高邸（⑪住宅と同一建物）
- d）ロ字型（2軒）：⑮自邸、⑯高田氏邸

a）一文字型およびa'）一文字変形型については、例えば遠藤新自邸に見るように、中央の居間の両側に居室を、北に水廻りを配した平面型に類似している。また、b）十字型については、例えばライト設計のステフェンズ邸（1909年）のように、中央のリビングの北にキッチン等を配置し、東西に居室あるいはポーチを配した平面型に類似している。

【図1】

なお、④-2 二十坪前後の家を除き各型とも軸線の通った平面計画をもっている。また、d）ロ字型については、ほぼ長方形の平面で、昭和8年（雑誌掲載年）以降の作品にみられる。

（2）凹凸の多い平面形

9軒のうち、①K氏の住宅、③菅野真湛氏の住宅、④-2 二十坪前後の家、⑦某氏の家、⑩某氏の家、⑪住宅（⑬亀高邸）、⑭新荘氏邸の7軒（78%）が、凹凸の多い平面形をしている。

（3）室3面の開口部

部屋の壁面4面のうち、3つの面に開口部を設けた、1室3面開口（開放）のある部屋は、①K氏の住宅、③菅野真湛氏の住宅、④-1・④-2 二十坪前後の家、⑦某氏の家、⑪住宅（⑬亀高邸）、⑭新荘氏邸である。9軒のうち、6軒（7プラン）（67%）が1室の3面に開口部を設けている。南の設計の1室3面開放という特徴は、ライト設計のプレーリーハウスに多数見られる特徴と共通している。

（4）窓の開閉形式について9軒のうち①K氏の住宅、③菅野真湛氏の住宅、④-2 二十坪前後の家（④-1 は不明）、⑩某氏の家、⑪住宅（⑬亀高邸）の5軒（56%）に、開き窓の形式を採用している。⑭新荘氏邸、⑮自邸、⑯高田氏邸の3軒については開き窓が無く、

[表3]南信の作品の特徴について

掲載年	建物名称	大正一五年	大正一五年	大正一五年	大正一五年	大正一五年	大正一五年	昭和二年	昭和二年	昭和二年	昭和二年	昭和三年	昭和三年	昭和四年	昭和七年	昭和八年	昭和九年	昭和五年
		①	②	③	④	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯
		K氏の住宅	ある商店の改造 第一層	菅野真澄氏の住宅	二十坪前後の家	二十坪前後の家	櫻根医院 ⑤-a、⑤-b、⑤-c	設計相談 事務所付住宅	某氏の家	※1 郊外に建つ家	会下山のアパートメント	※1 某氏の家	※2 住宅	山の喫茶店	※2 亀高邸 ⑬-a	新荘氏邸 和風	鹿島居(自邸) 乾式工法	高田氏邸 乾式工法
	各部の特徴																	
構造	木造	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	鉄筋コンクリート	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
(一)	緩勾配屋根	○	—	○	○	○	—	—	○	—	○	—	○	○	○	○	—	○
外観	切妻屋根	○	—	—	○	○	—	—	○	—	○	—	○	○	○	○	—	○
	寄せ棟屋根	—	—	○	—	—	—	—	—	○	○	○	○	○	○	—	—	○
	入母屋屋根	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—
	方形屋根	—	—	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—
特徴	陰屋根	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	中央が高く両端が低い位置	—	○	—	—	—	○	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	瓦葺き	—	—	○	△	△	—	—	—	—	?	—	?	?	—	—	—	?
	スレート葺き	○	—	—	△	△	—	—	○	—	?	—	—	?	—	—	—	?
	瓦葺き	—	—	—	—	—	—	—	—	○	?	○	?	?	○	○	—	?
	深い軒の出	○	—	○	○	○	—	—	○	○	○	○	○	○	○	○	○	?
	屋根つきテラス	—	—	○	—	—	—	—	○	—	—	○	?	○	—	—	—	—
	ケラバの転び	○	—	—	○	?	—	—	○	—	?	?	—	○	—	?	—	?
	鼻隠しの転び	○	○	○	?	?	○	○	○	?	?	?	○	○	?	—	—	?
	塔状の煙突	—	—	○	—	—	—	—	○	○	○	○	○	○	—	—	—	—
	水平線の強調	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—	—	—
	テラス	○	—	○	—	—	—	—	—	○	?	○	○	?	○	—	○	—
	バルコニー	—	—	○	—	—	—	—	—	○	○	○	○	?	○	—	○	○
	太柱	○	○	○	—	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—	—	?
	均等割りでない格子の建具	○	○	○	?	?	○	?	○	?	?	?	○	?	○	—	—	?
	開き窓	○	○	○	?	○	○	?	○	?	?	?	○	?	○	—	—	○
	建物と統一された門扉デザイン	—	—	○	—	—	—	—	—	—	?	—	○	?	○	?	○	?
	建物と統一された照明器具デザイン	—	—	—	—	—	—	—	—	—	?	—	?	?	○	—	—	?
(二)	一文字型平面	—	—	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
平面	一文字変形型平面	—	—	—	—	○	—	—	—	—	○	—	—	—	—	○	—	—
	十字型平面	○	—	○	—	—	—	—	○	—	—	○	—	—	—	—	—	—
特徴	T字型平面	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—	—
	C字型平面	—	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	ロ字型平面	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	○	—
	凹凸の多い平面形	○	—	○	—	○	—	○	—	○	○	○	—	○	○	—	—	—
	スキップフロア	—	—	—	—	—	—	—	○	—	○	—	○	—	○	—	—	—
	廊下がない	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	裏三面の開口部	○	—	○	○	○	—	○	—	○	○	○	○	—	○	○	—	—
	開き窓	○	○	○	?	○	—	?	○	—	?	○	○	—	○	—	—	—
	暖炉	○	—	○	—	○	—	—	○	—	—	○	○	—	○	—	—	—
	造り付ソファ	○	—	○	—	—	—	—	—	—	?	○	?	—	○	—	—	—
	造り付収納(押入れを除く)	—	○	○	—	—	—	○	○	—	?	○	○	—	○	○	○	—
	太柱	○	○	—	○	—	○	○	○	—	○	○	○	—	○	—	—	—
	テラス	○	—	○	—	—	—	—	—	—	?	○	○	—	○	—	○	—
	バルコニー	—	—	○	—	—	—	—	—	—	○	○	○	—	○	—	○	—
(三)	洋室壁の長押	—	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
室内	建物と統一された家具デザイン	—	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—
	建物と統一された照明器具デザイン	—	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	—	?	?
	建物と統一された絨毯デザイン	—	—	?	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	—	?	?
特徴	幾何学形に彫刻された凝灰岩の暖炉	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—

＜凡例＞ ○：有り
—：無し
△：どちらかを使用
?：確認できず
/：図面または写真無し

※1：同一建物
※2：同一建物「亀高邸」
ルーフバルコニーも陸屋根とした
(一)：図面および写真による
(二)：平面図による
(三)：写真による

引き違い窓を採用している。他の1軒の開閉形式は、確認できない。

(5) その他

暖炉については、9軒中の①K氏の住宅、③菅野真湛氏の住宅、④・2 二十坪前後の家、⑦某氏の家、⑩某氏の家、⑪住宅（⑬亀高邸）の6軒（67%）に設置されている。

また、造り付収納は、③菅野真湛氏の住宅、⑦某氏の家、⑩某氏の家、⑪住宅（⑬亀高邸）、⑭新荘氏邸、⑮自邸、⑯高田氏邸の7軒（78%）に見られる。

以上により、南信が設計した住宅の作風の特徴として次の点が指摘できる。

深い軒、水平線を強調した外観、ケラバおよび鼻隠しの転び、太柱の採用、軸線の通った平面計画、均等割りでない建具格子、凹凸の多い平面形、部屋の3面にある開口部、開き窓、造り付収納、暖炉

これらの特徴は、南の住宅作品のなかでも特に昭和4年以前の建物において多く見られる³⁴。また、昭和7年以降の⑭新荘氏邸、⑮鹿姑居（自邸）、⑯高田氏邸には、これらの特徴は見られない。このことは、昭和4年から昭和7年の間に、南信の作風に変化が生じたことを示している。

なお、昭和7年の自邸建設に当たっては、乾式工法、陸屋根、ほぼ長方形の平面形で、3面開口を持つ室はなく、外壁は羽目板に白く塗装され、開口部は主に引き違い建具を用い、丸窓も見られる。建具には格子が無いという、それ以前の住宅作品にはない作風へと大きく変わっていることもわかる。

4. 終わりに

以上によって、南信の経歴と住宅作品にみられる特徴を明らかにすることができた。

南信は明治25年（1892）2月13日に仙台に生まれ、大正6年に東京帝国大学工科大学建築学科を卒業後、ライト設計の帝国ホテルの建設にかかわっている。大正11年秋には遠藤南建築創作所を遠藤と共同で開設し、同12年には兵庫県芦屋の山邑別邸（和館）で設計活動を続けた。その後、大正14年に南建築事務所を設立し、主に兵庫と大阪で仕事をしたが、昭和10年に、満州で再び遠藤と共同の事務所を設けた。しかし、昭和18年に肺結核に感染し、その後療養生活に入ったが終戦となり、昭和21年11月に病院船で帰国した。戦後も引き続き療養生活を送り、昭和26年（1951）3月20日に仙台で没した。

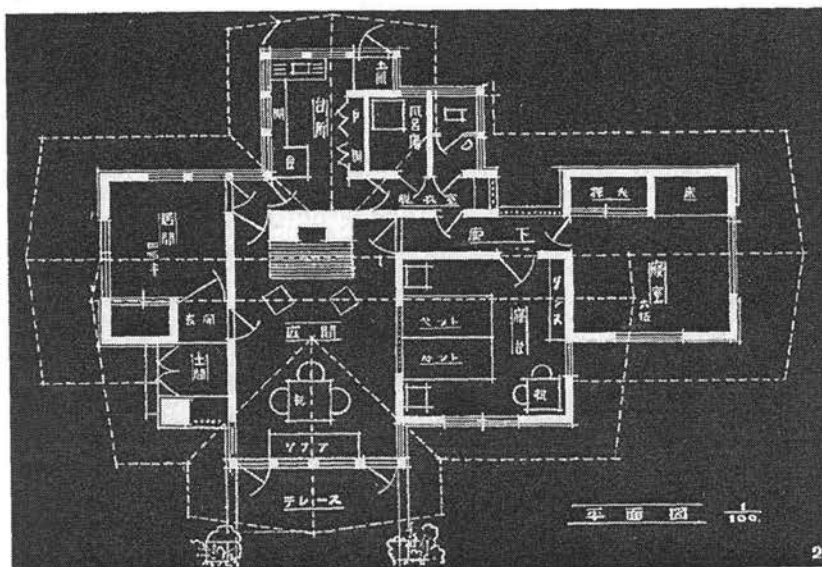
南信の昭和4年以前の住宅作品にみられる特徴には、外観では、緩勾配屋根、深い軒、屋根のケラバおよび鼻隠しの転び、塔状の煙突、太柱、均等割りでない格子の建具、水平線を強調したデザイン、平面では、軸線が通り、室の凹凸が多く、部屋の3面に開口部がある設計で、太柱、開き窓の使用、暖炉が見られた。これらの点については、水平線を強調したデザインや3面開口の部屋、あるいはケラバの転びなどのようにライトや遠藤新の設計になる住宅とも共通した特徴がみられることも明らかになった。

その後、南信の住宅作品は、昭和4年から昭和7年の間に作風に変化が生じ始めている。

特に昭和 7 年に竣工した自邸には、それ以前にはみられない住宅の作風が現れていることが明らかである。

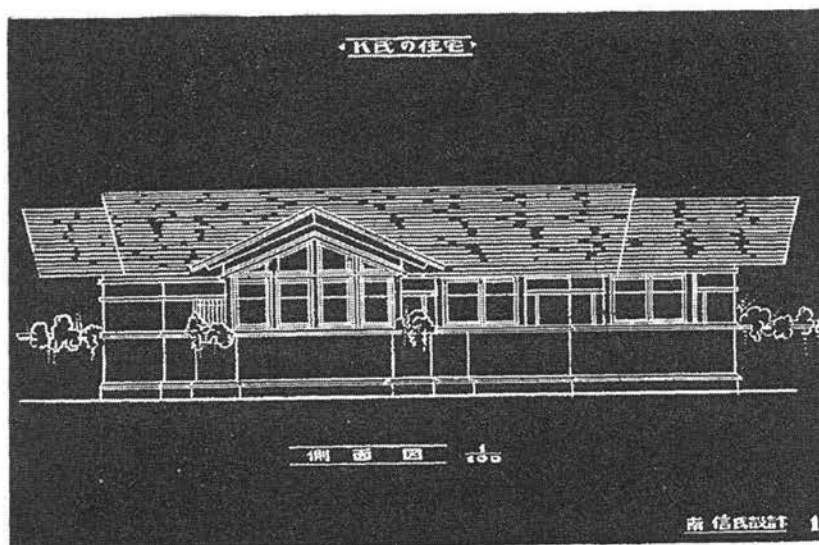
(1) 住宅

①K氏の住宅 (T15.02 新)



十字型平面

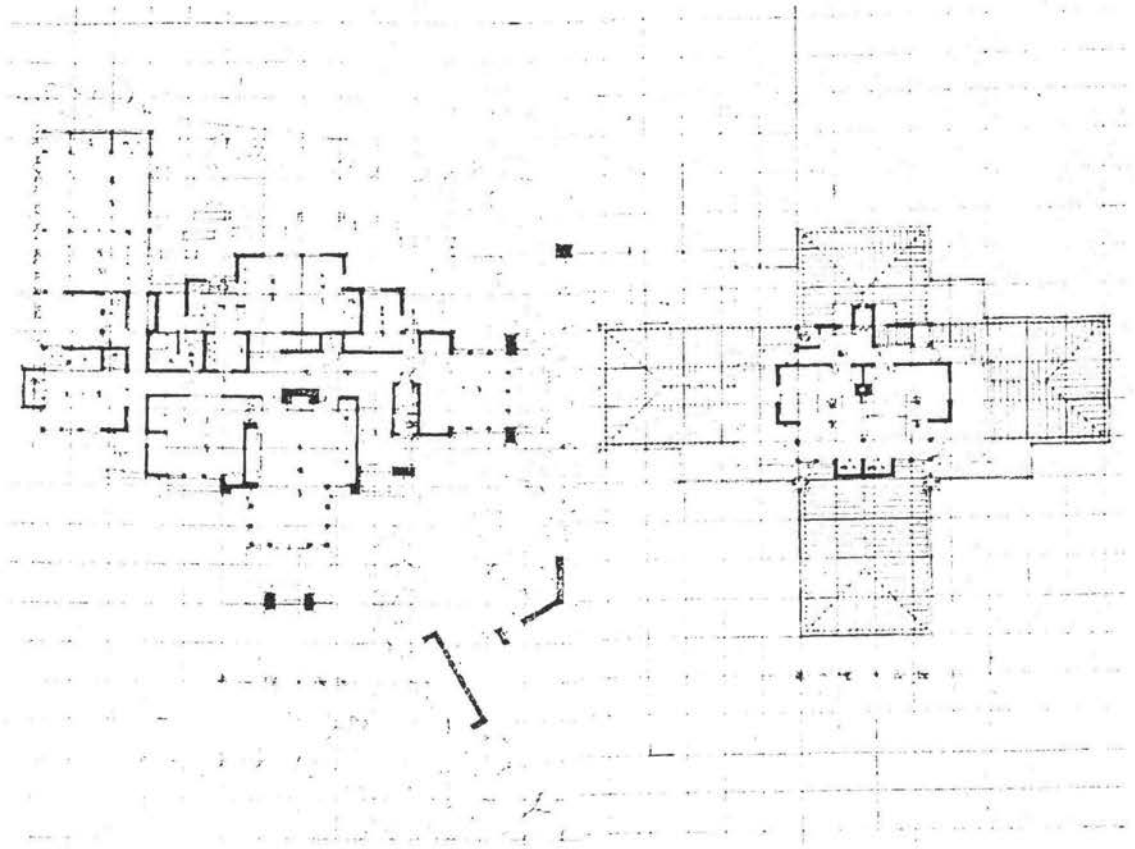
凹凸の多い平面



深い軒の出

水平線の強調

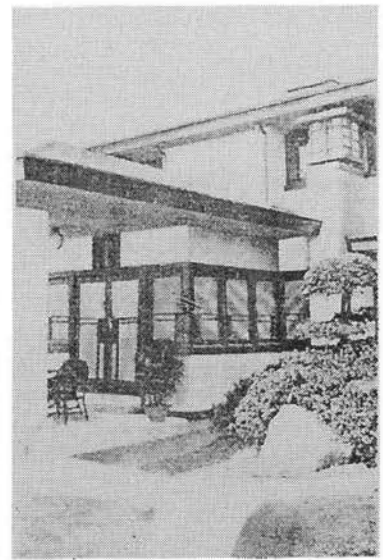
③菅野真湛氏の住宅（T15.06 新 S5 ア）



十字型平面
凹凸の多い平面
深い軒の出
水平線の強調

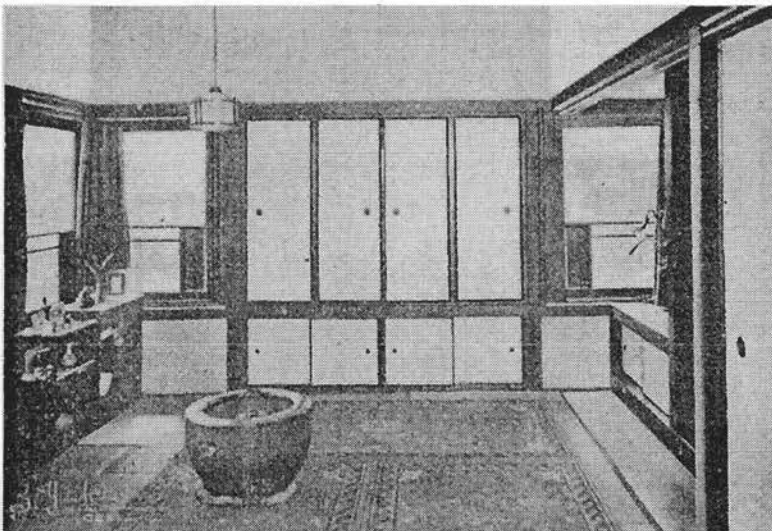
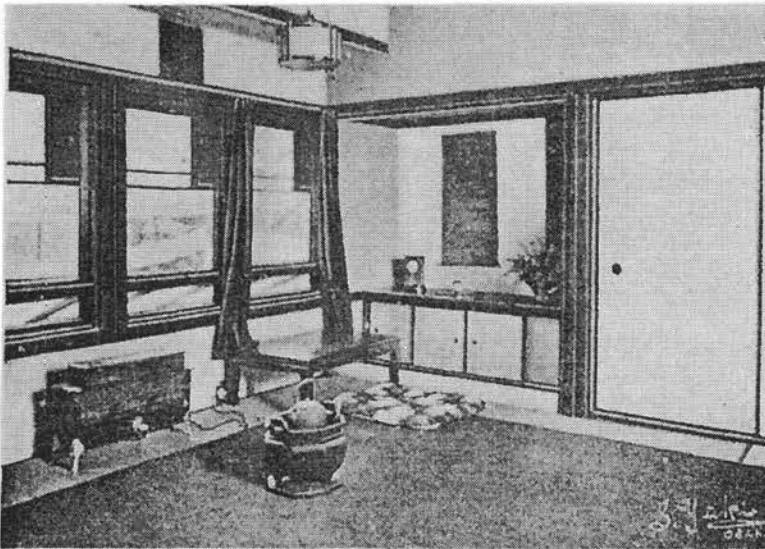
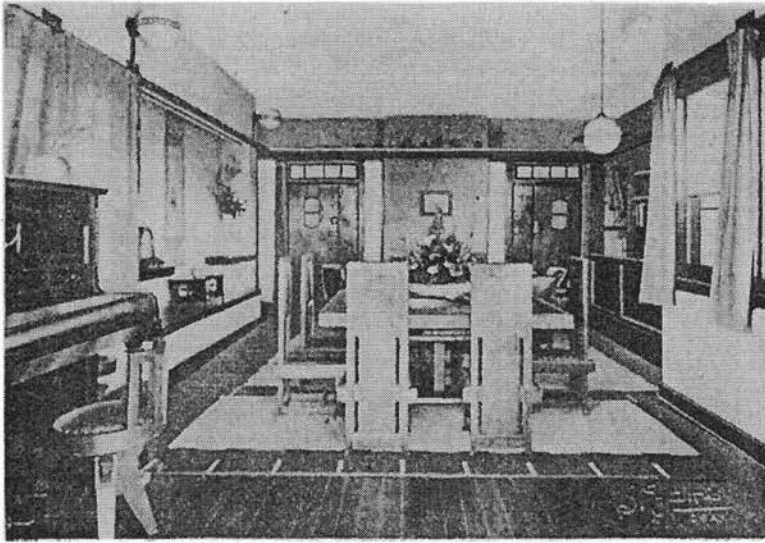


塀にバックハンド・トリムが見える



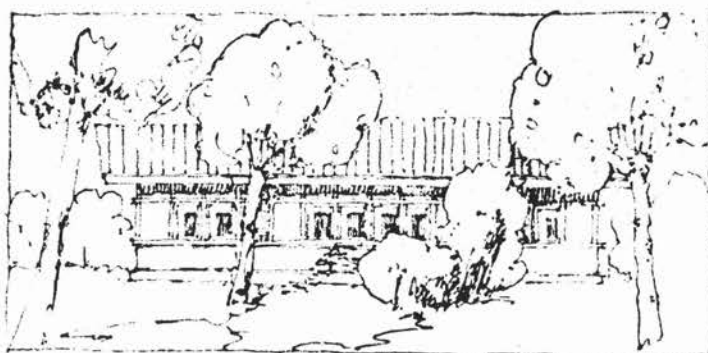
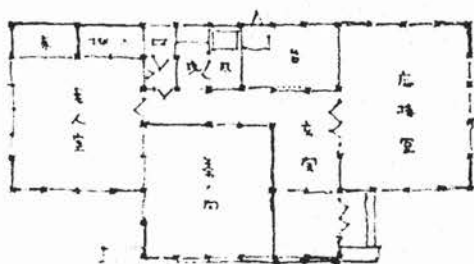
格子の一部に鏡板がある建具

③菅野真湛氏の住宅

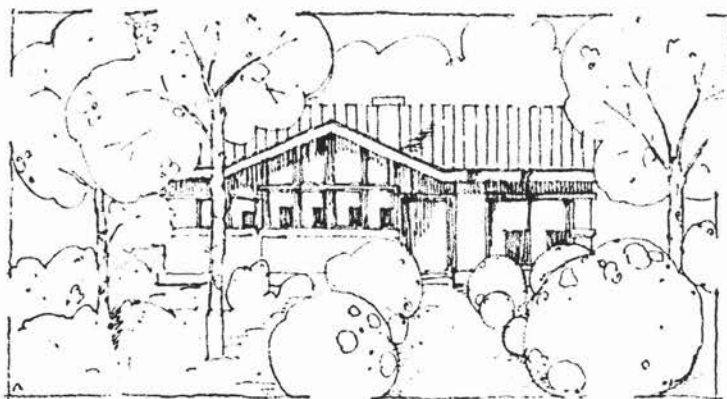


格子の一部に鏡板がある建具

④二十坪前後の家 (T15.07 新)

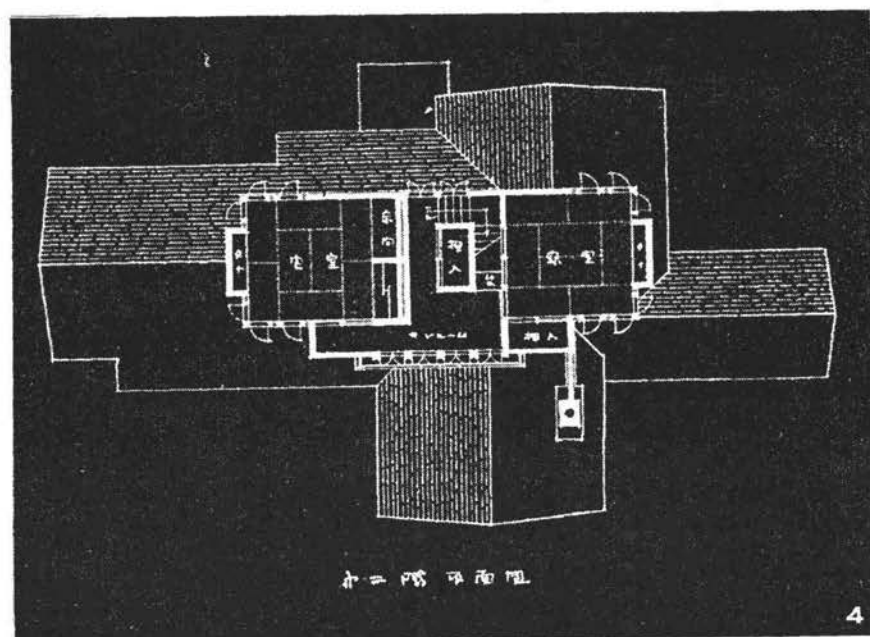
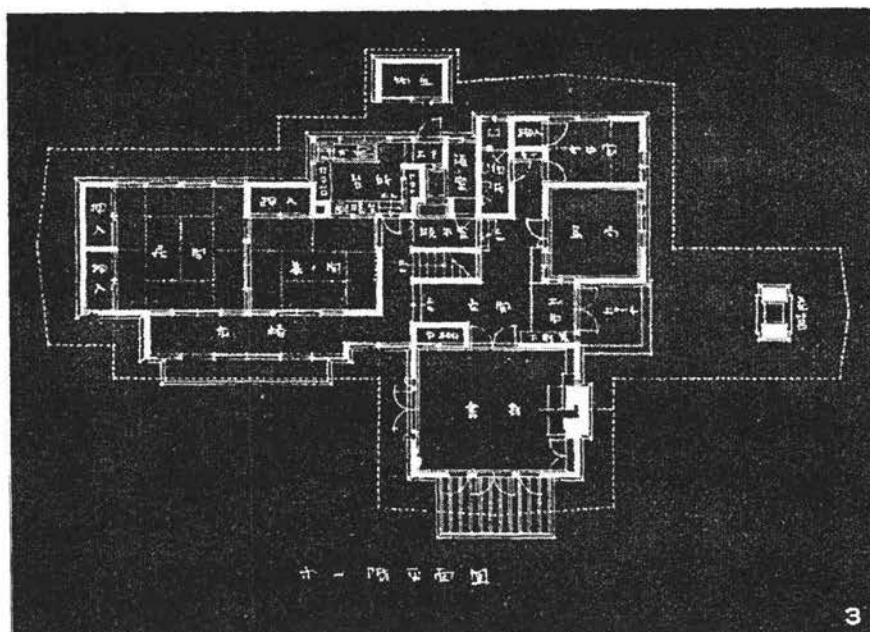


一文字型平面



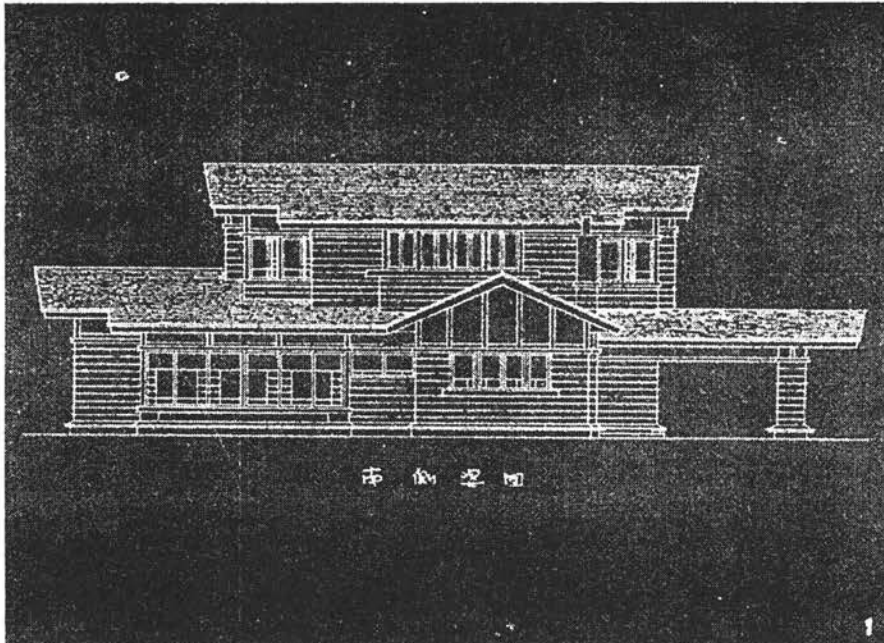
一文字変形型平面 凹凸の多い平面

⑦某氏の家 (S.2.05 新)



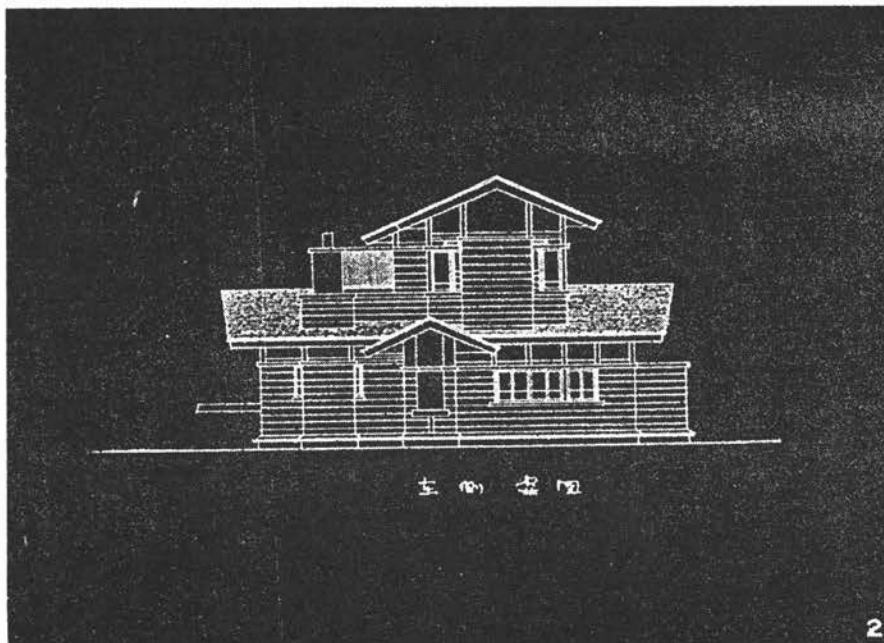
十字型平面図
 凹凸の多い平面
 深い軒の出
 3面開放の室

⑦某氏の家

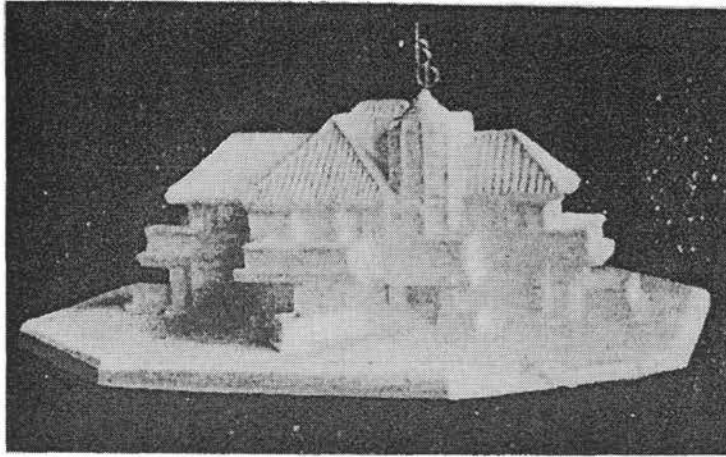


水平線の強調

窓に不均等割り格子の建具



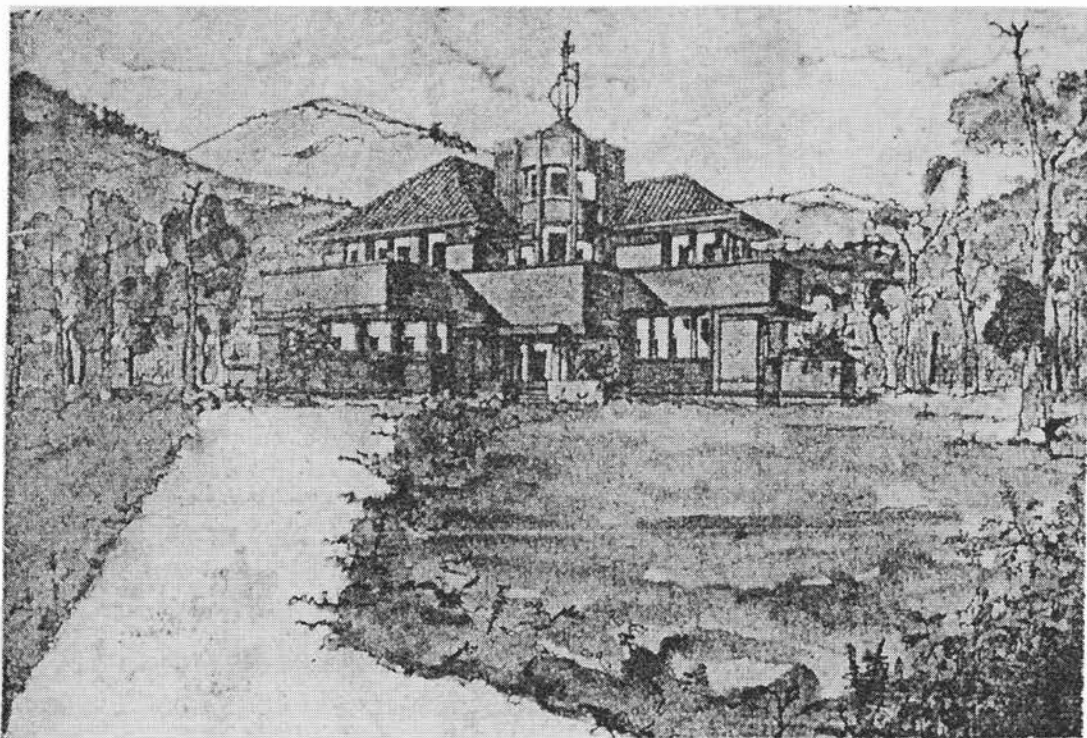
⑧ (⑩) 郊外に建つ家 (S.2.08 新)



⑩ (⑧) 某氏の家 (S2.11 新)

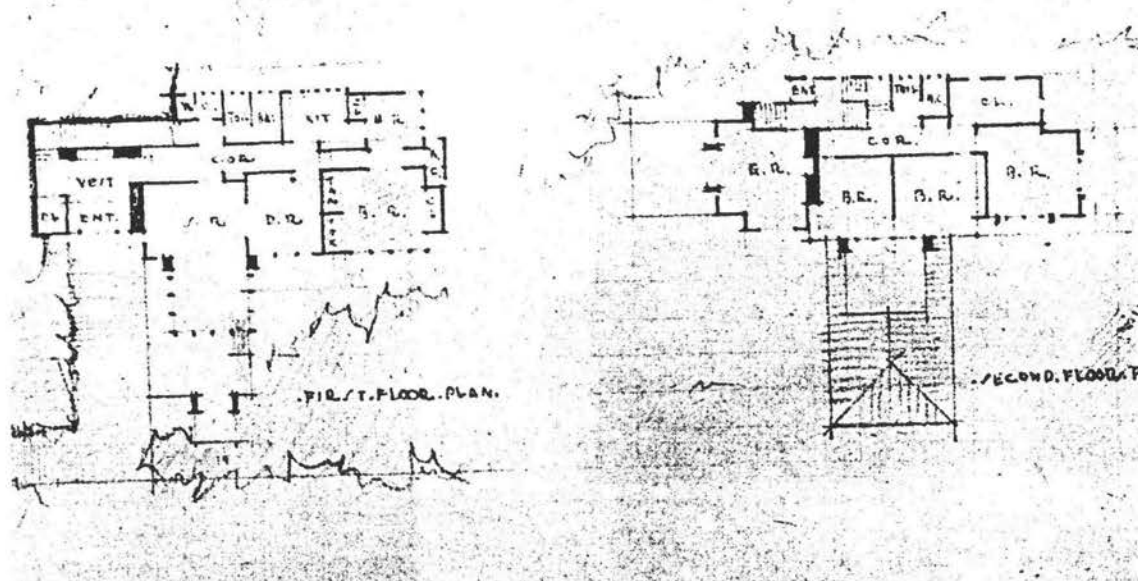


十字型平面図 凹凸の多い平面 3面開放の室



深い軒の出 水平線の強調

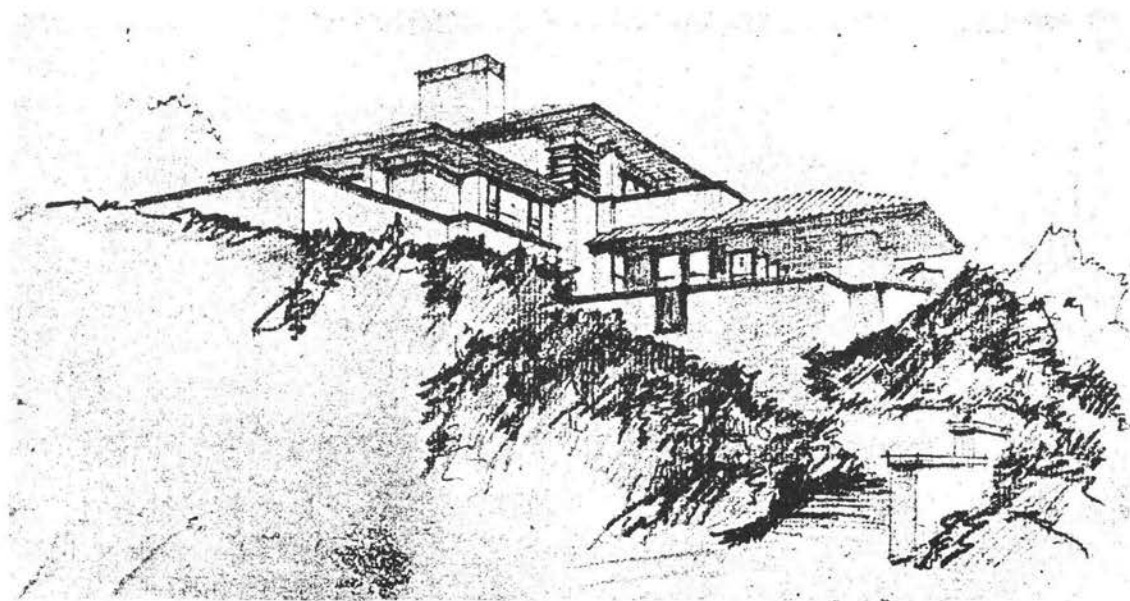
⑪ (⑬) 住宅 (S3.08 新)



T字型平面

凹凸の多い平面

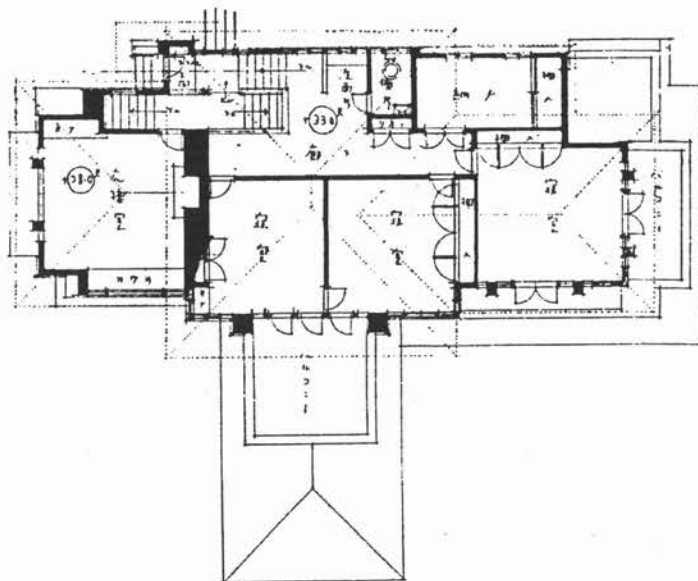
3面開放の室



深い軒の出

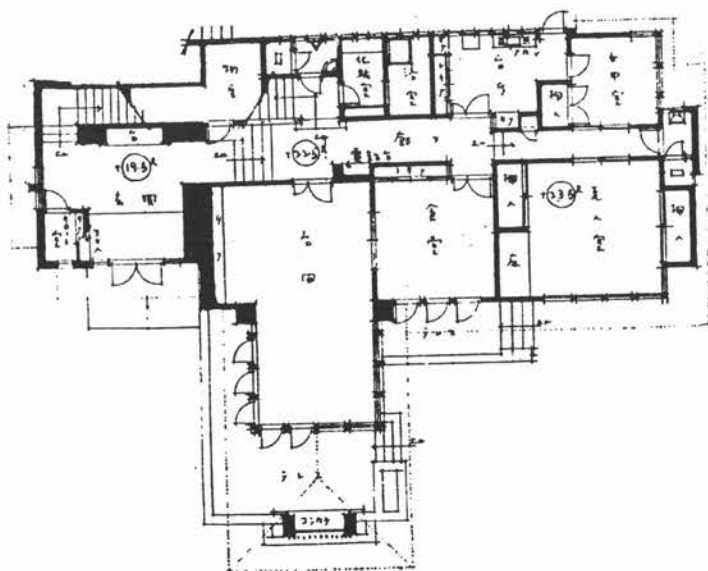
水平線の強調

⑬ (⑪) 龜高邸 (S4.04 新 S5.01 社)



二階平面図

龜 高 邸
南 信 氏 設 計



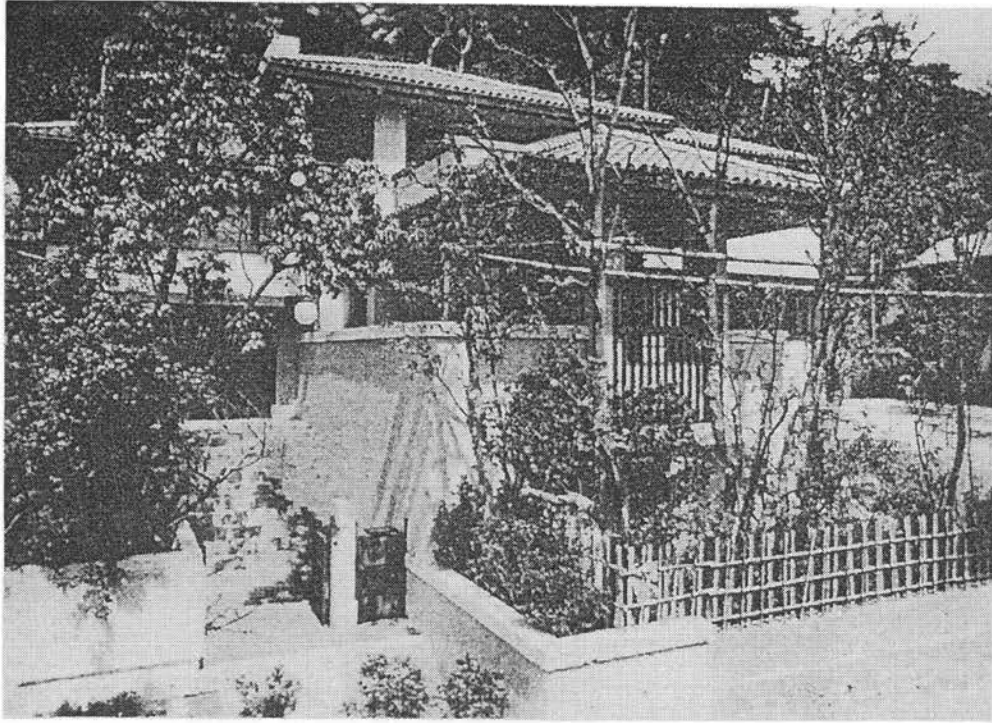
一階平面図

龜 高 邸
南 信 氏 設 計

T字型平面

凹凸の多い平面

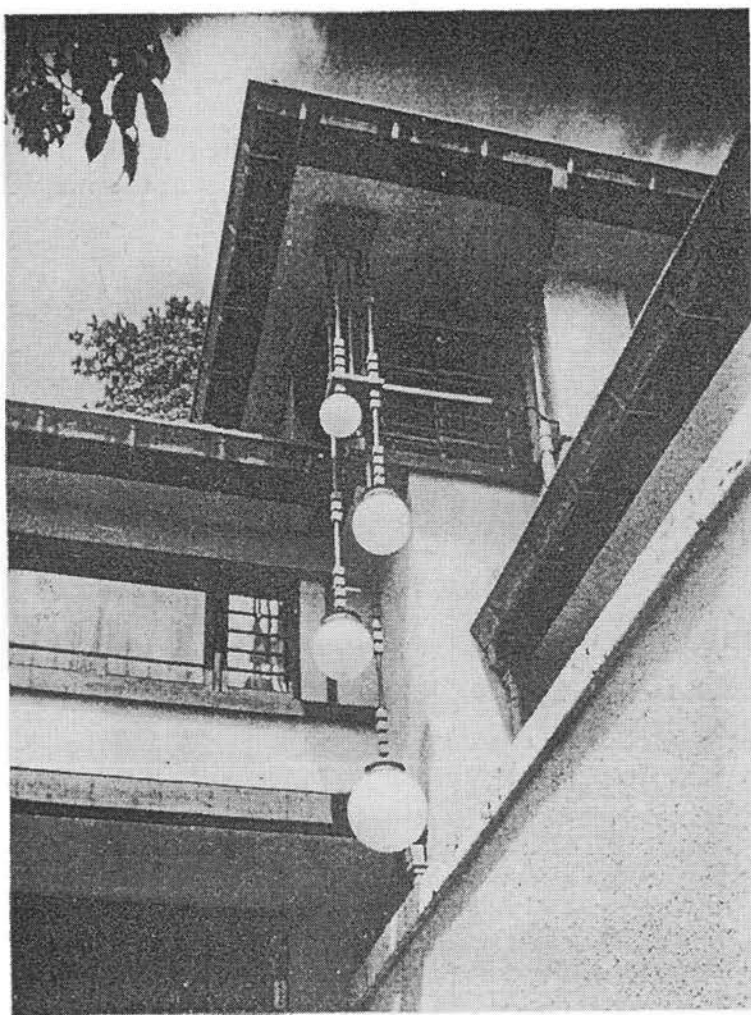
3面開放の室



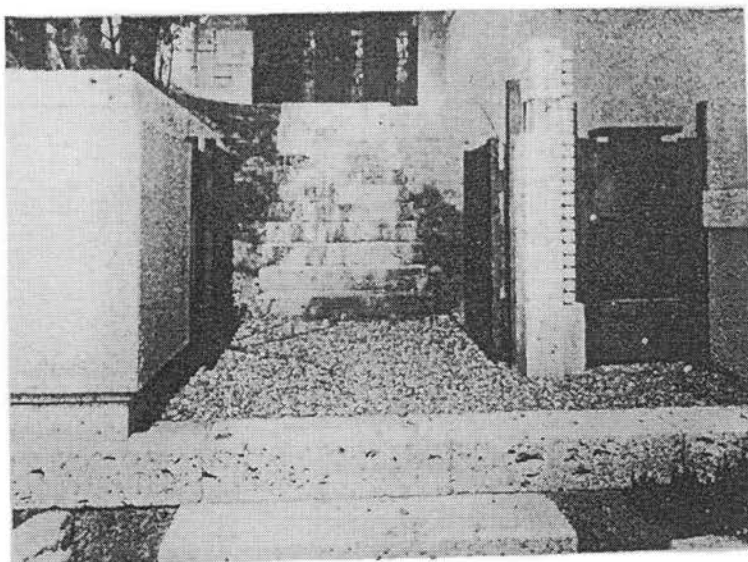
深い軒の出
水平線の強調



⑬ (⑪) 亀高邸

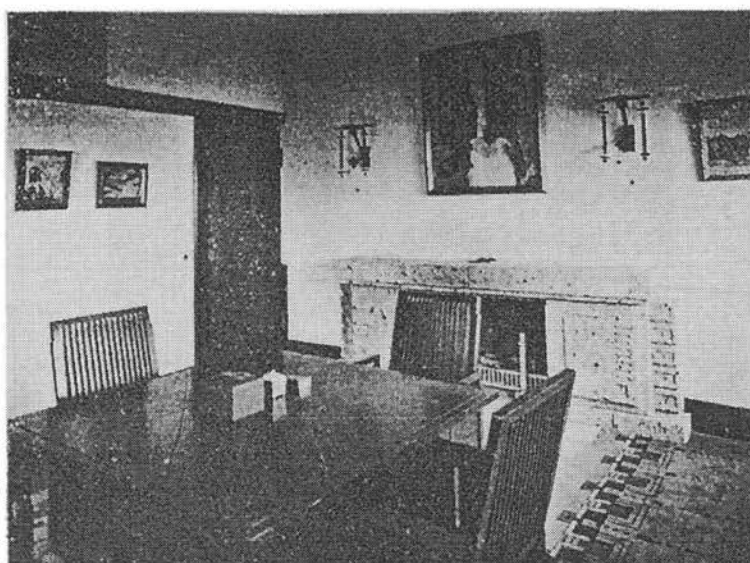


窓に不均等割り格子の建具

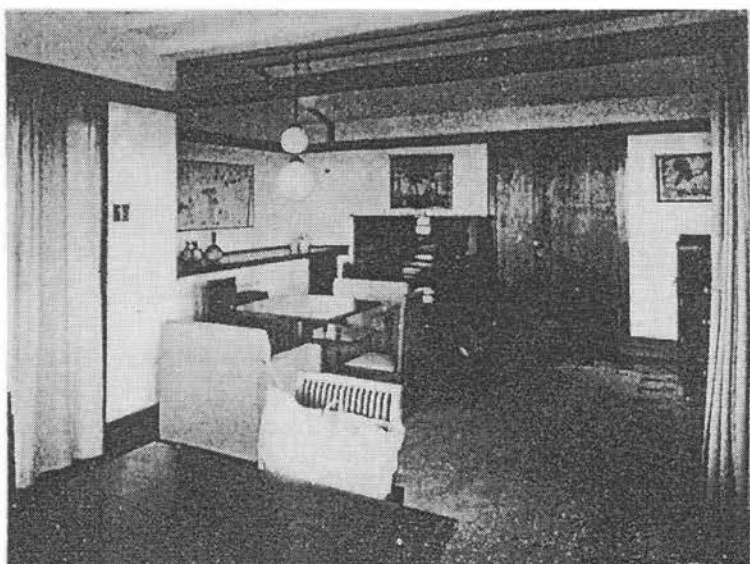


暖炉と同様にデザインされた門柱

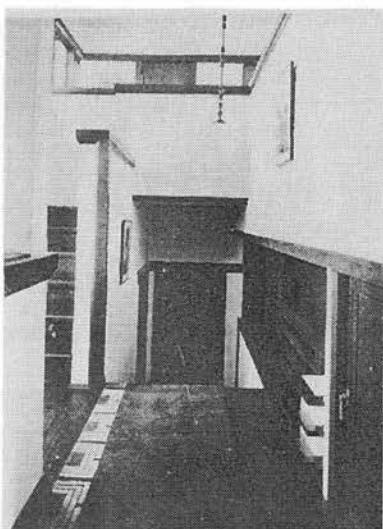
⑬ ⑪



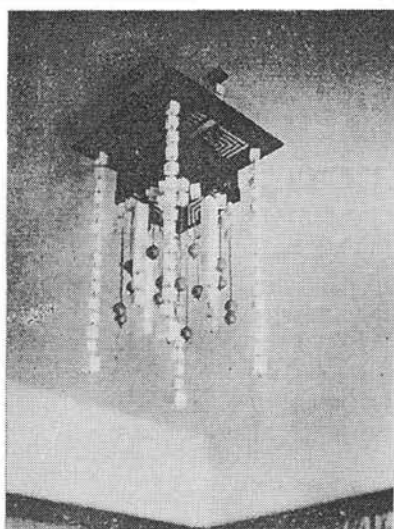
門柱同様にデザインされた暖炉



山邑邸と同様のデザインの椅子

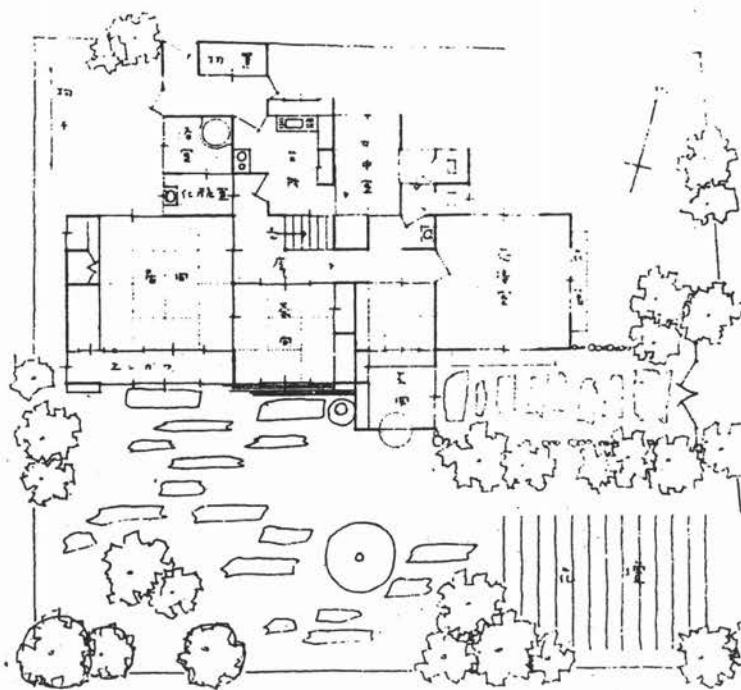


暖炉同様の絨毯デザイン



建物と統一の照明デザイン

⑭新莊君の家 (S7.06 住)

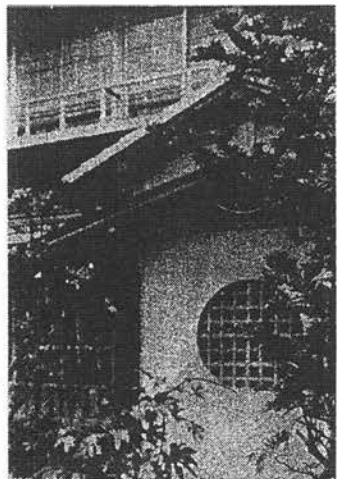
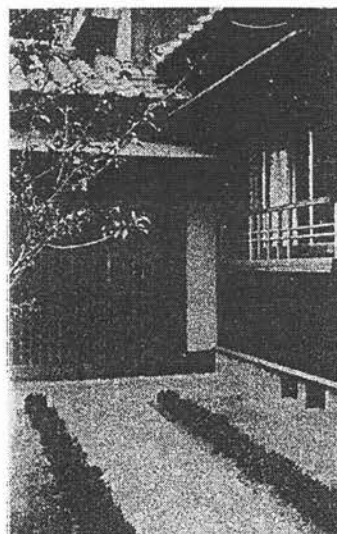


一文字変形型平面

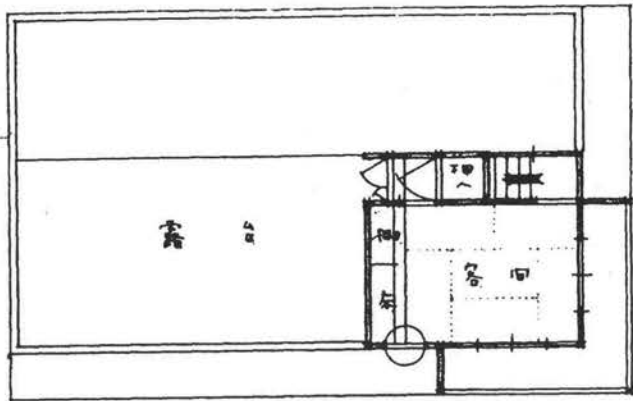
凹凸の多い平面



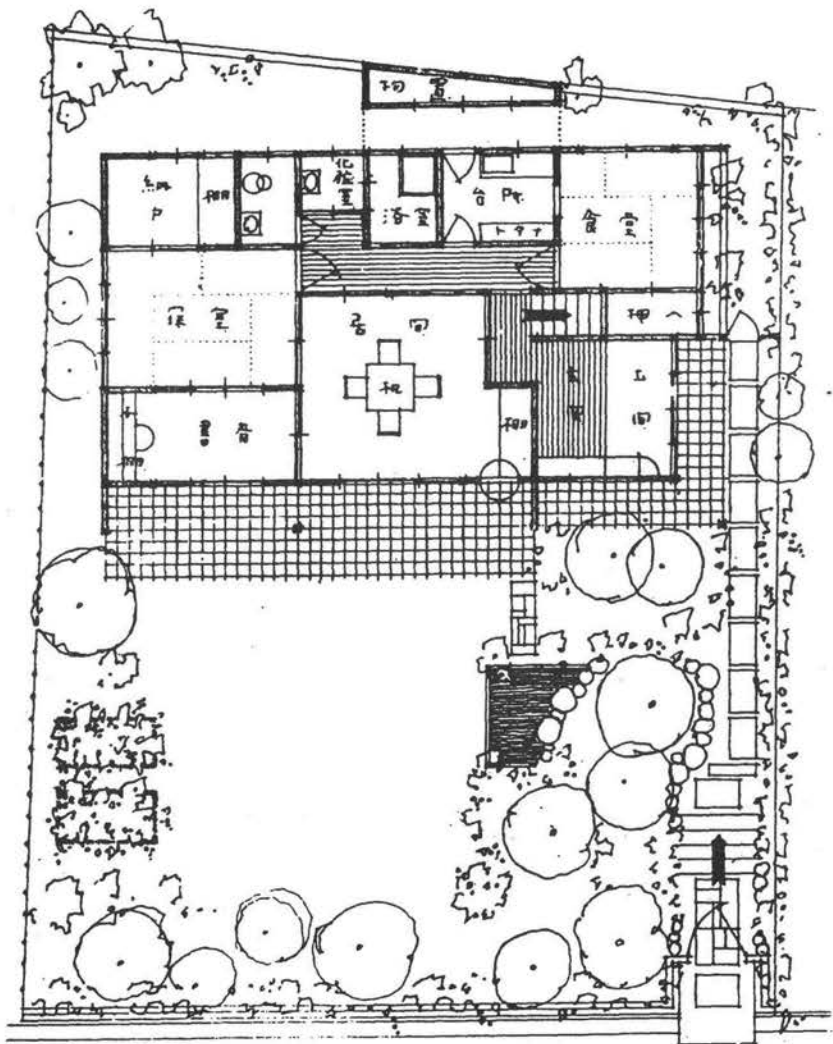
和風



⑮鹿姑居（自邸）（S8.10 住）



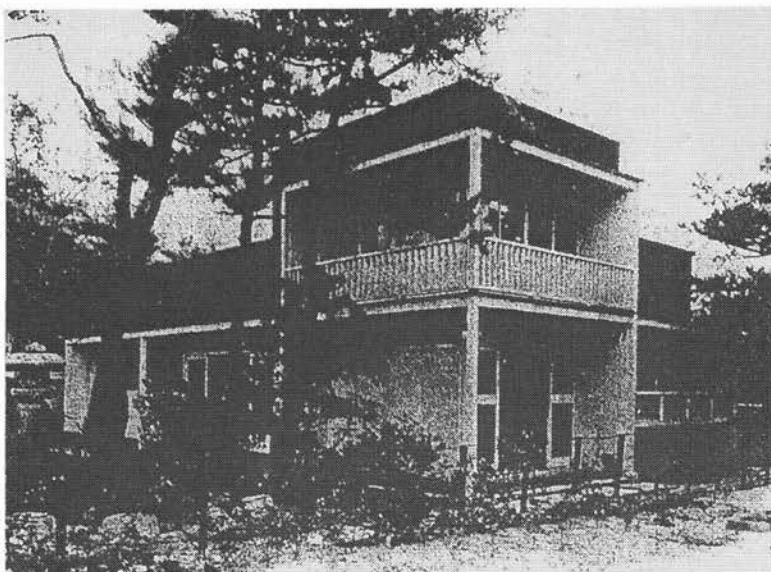
第二階平面圖



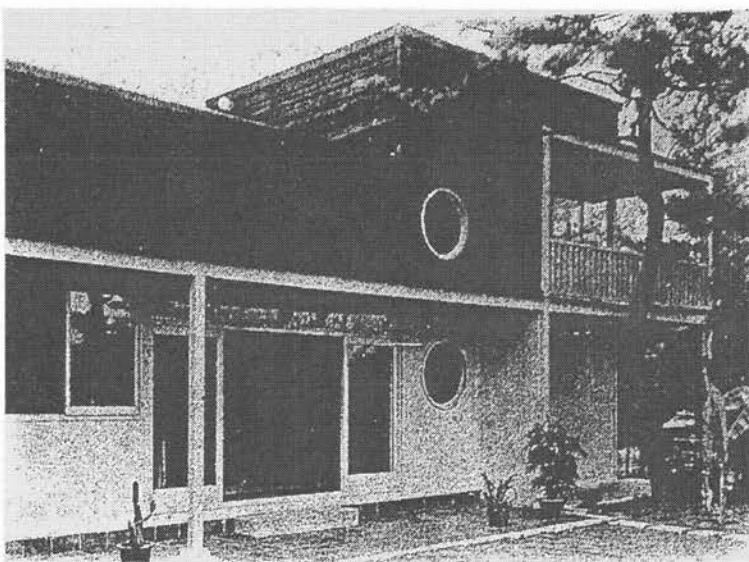
第一階平面圖

口字型平面

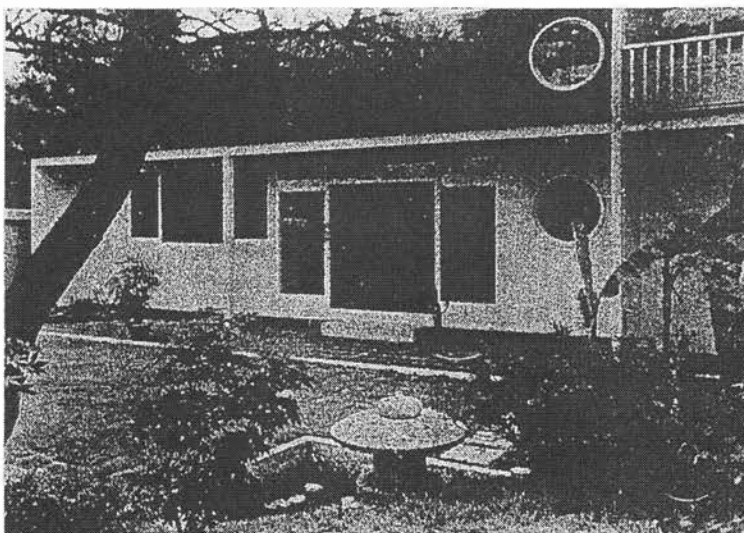
⑮鹿姑居



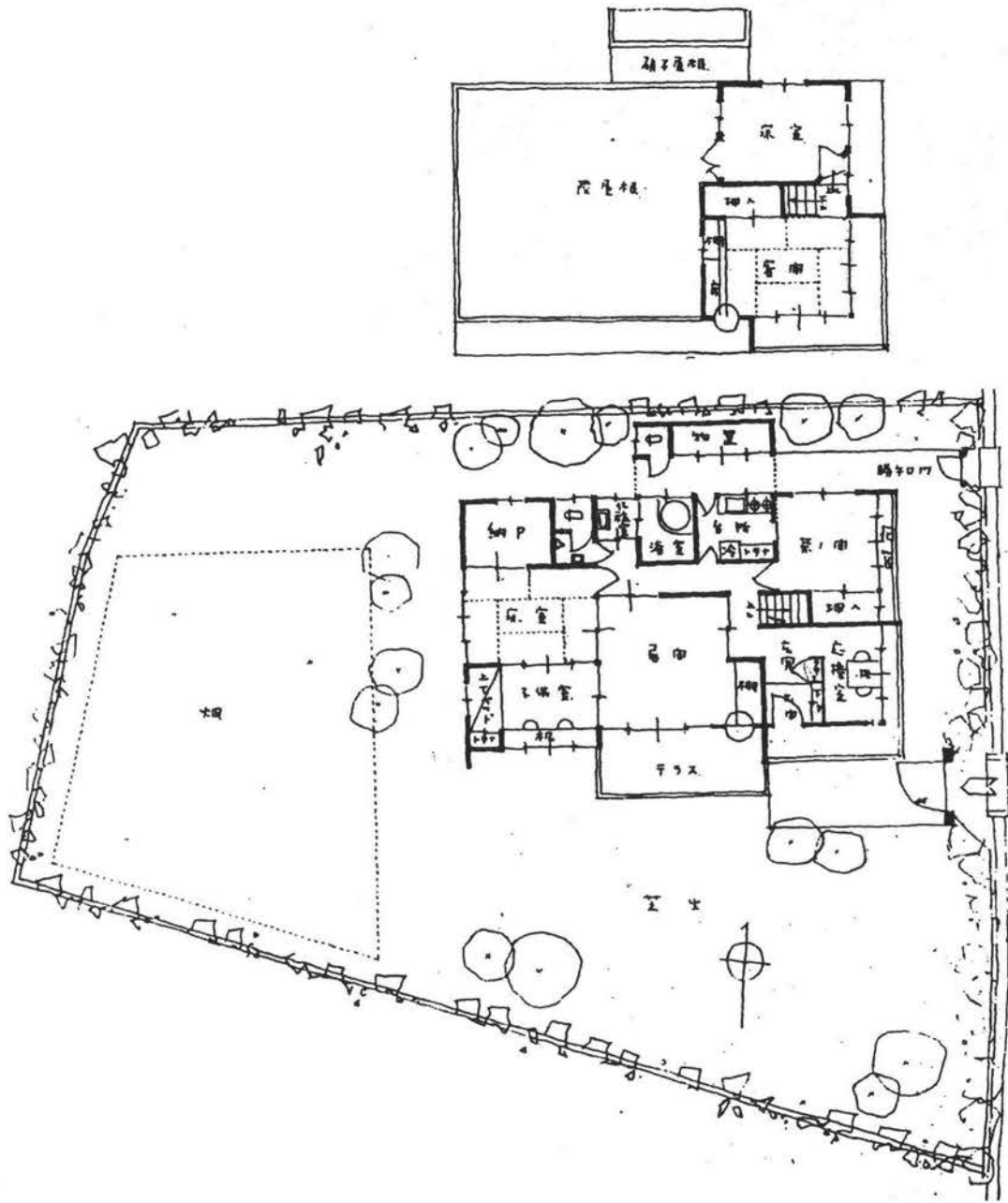
乾式工法



格子の無い引き違い建具

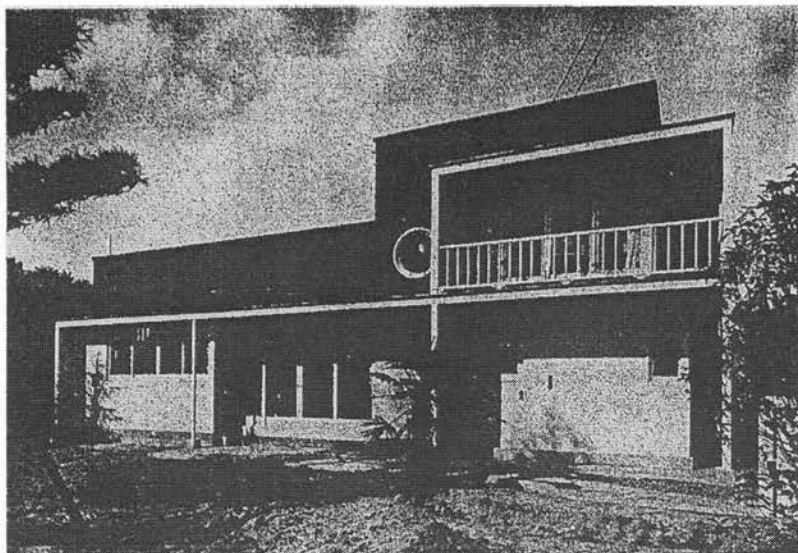


⑩高田氏邸 (S9.09 住)

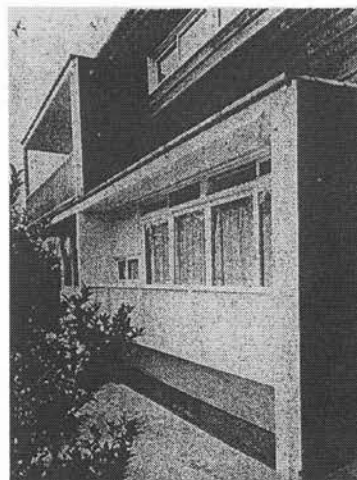
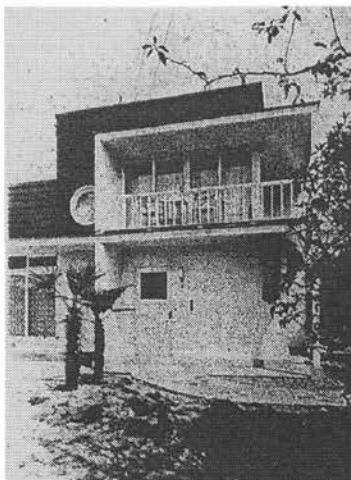
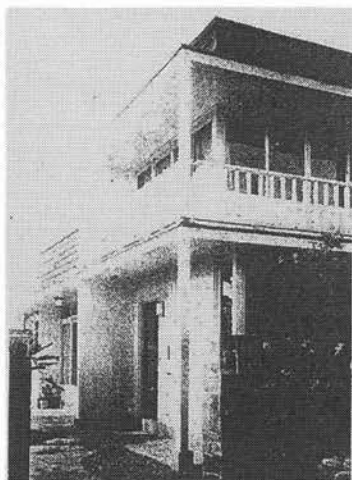
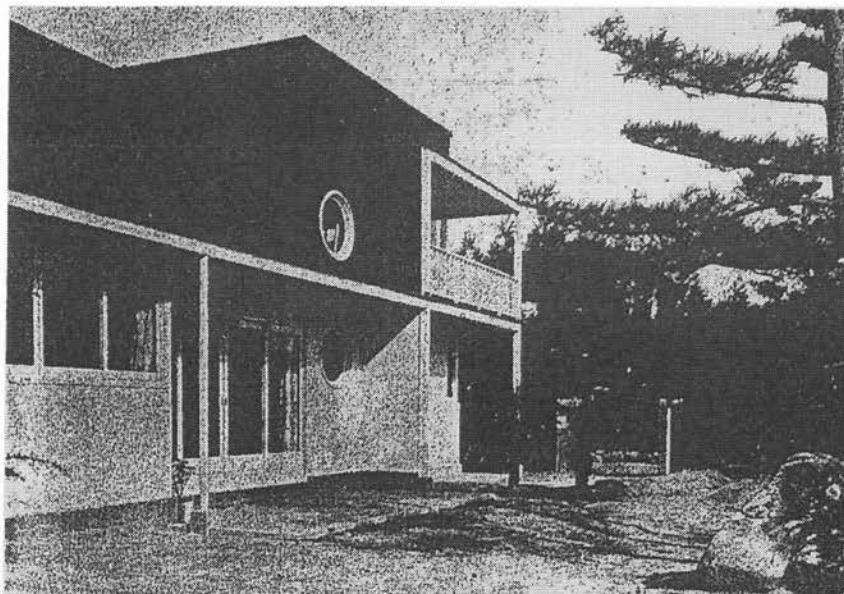


口字型平面
乾式工法

⑩高田氏邸

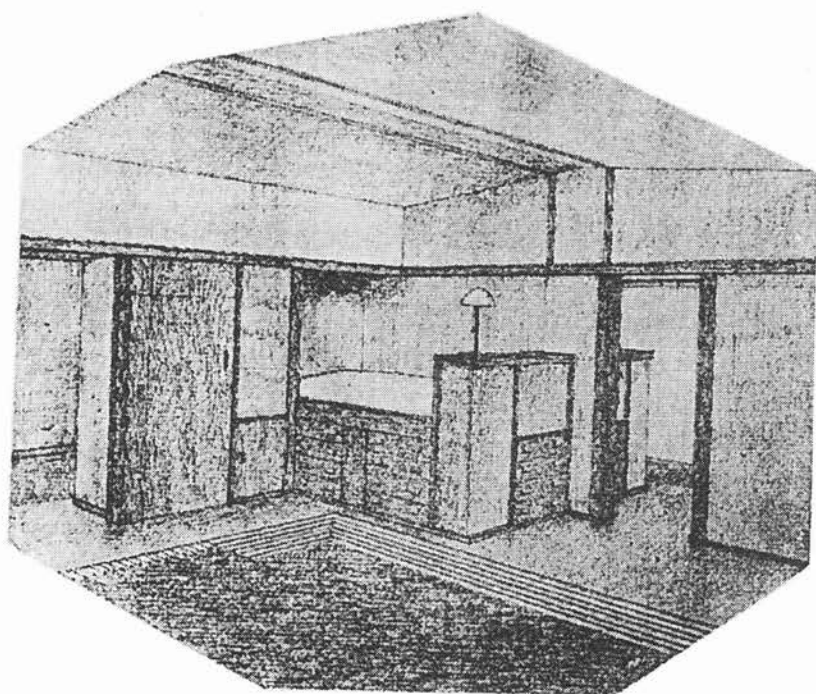
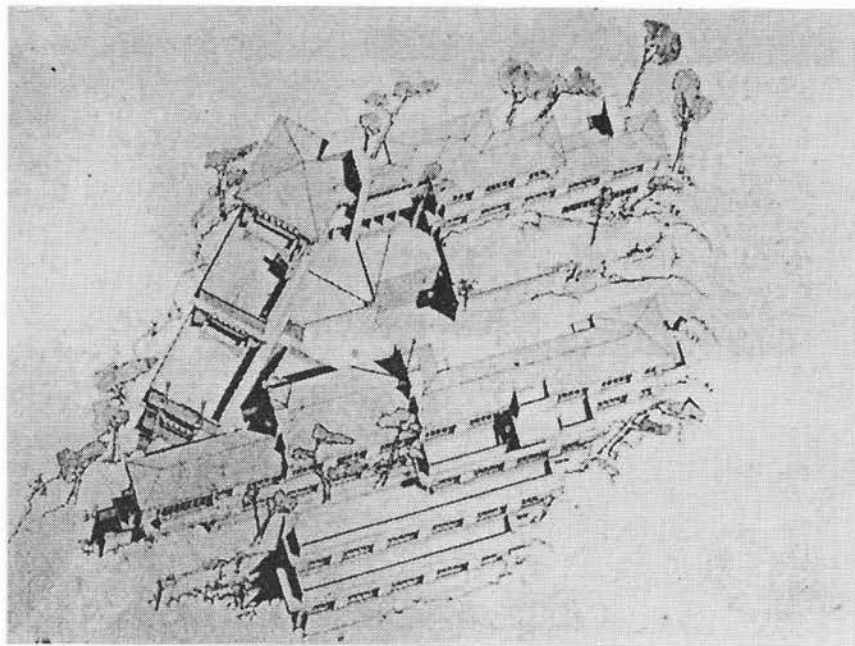


格子の無い引き違い建具

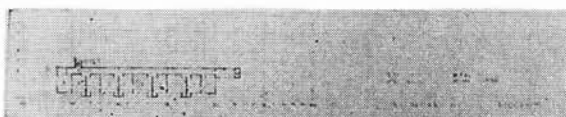
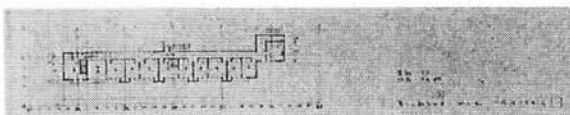
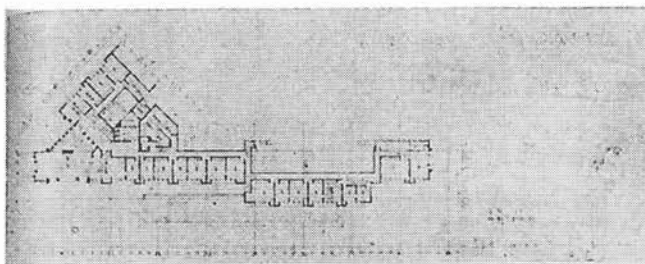
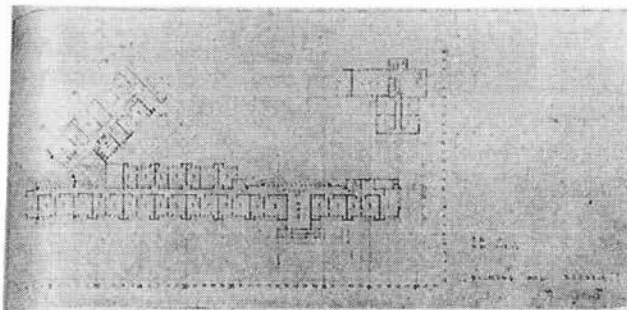
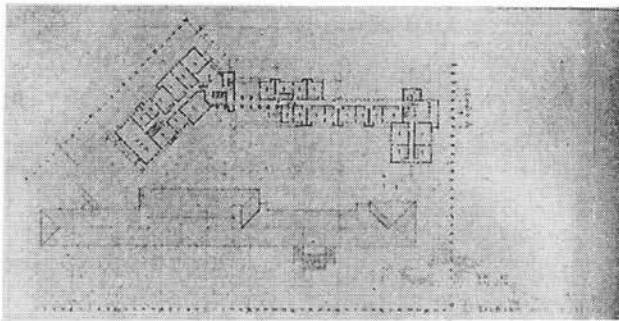
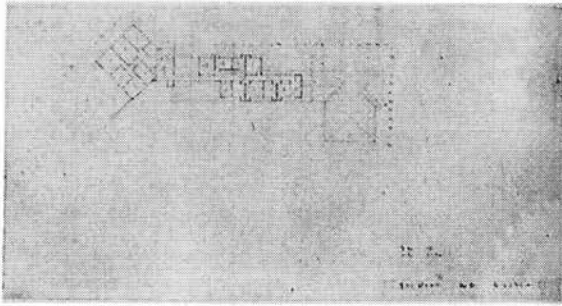


(2) 集合住宅

⑨会下山アパート (S2.11 新)

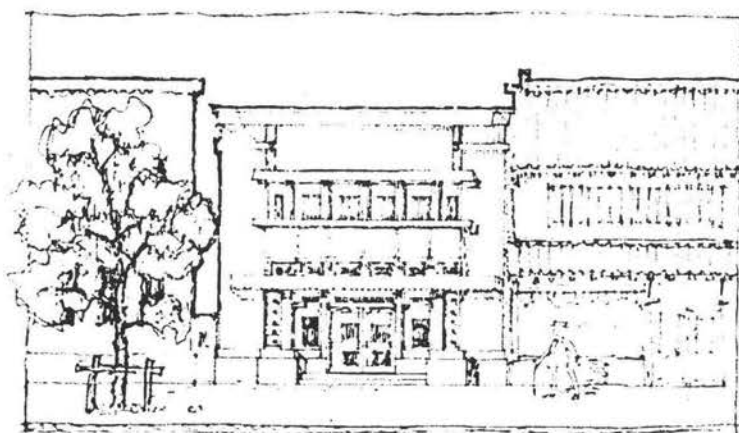
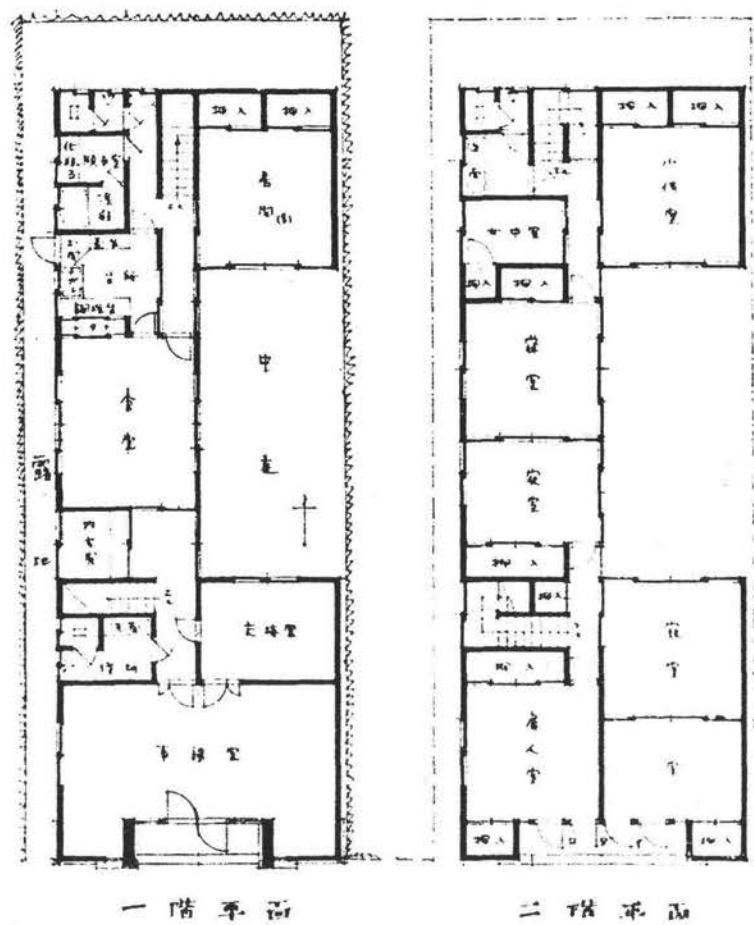


⑨ 会下山アパート



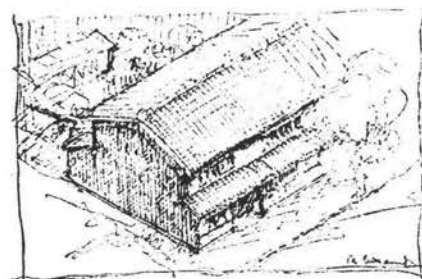
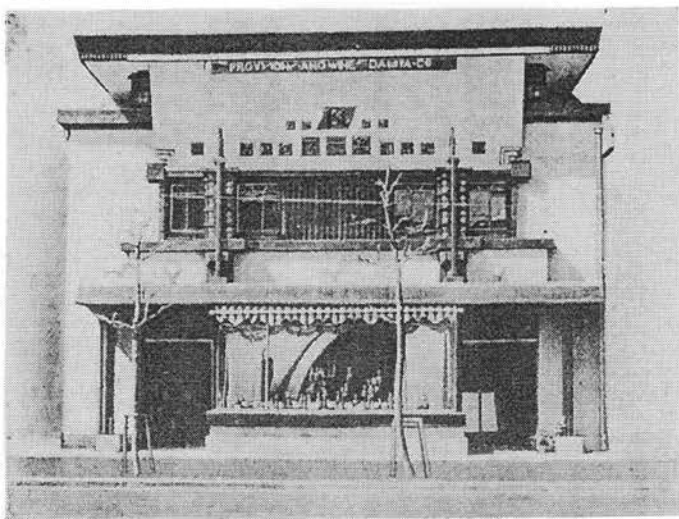
(3) 事務所付住宅

⑥事務所付住宅 (T15.10 新)

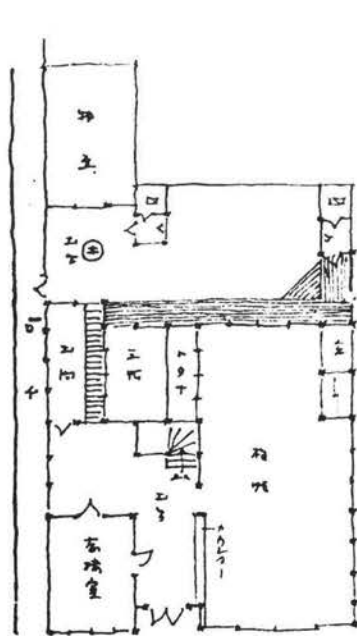


(4) 店舗

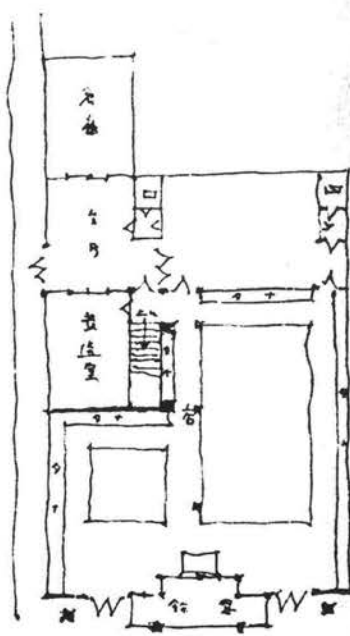
②或る商店の設計（改造）（T15.03 新）



屋家の前造改

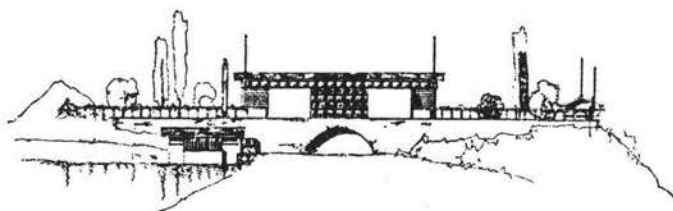


ンラブの前造改



ンラブの後造改

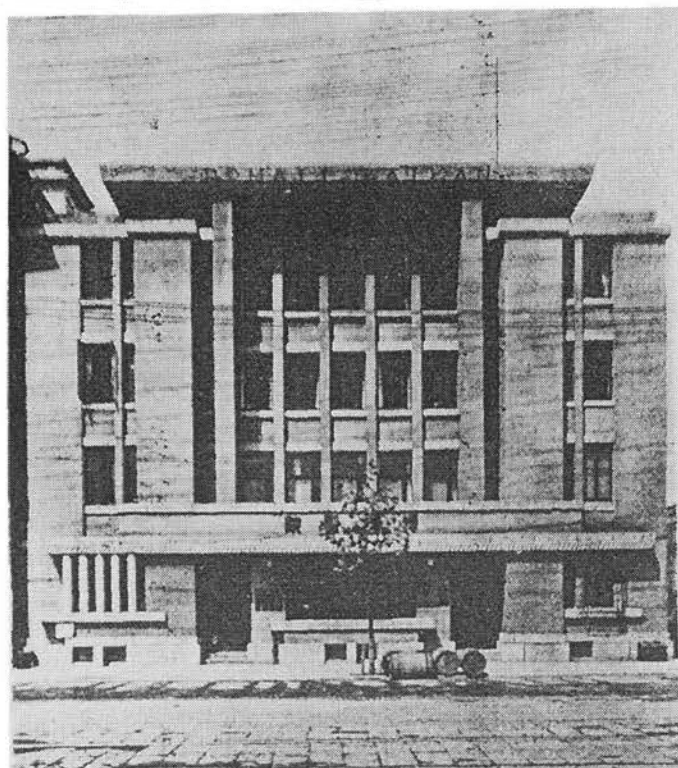
⑫山の喫茶店（S3.10 新）



山の喫茶店 南信氏設計

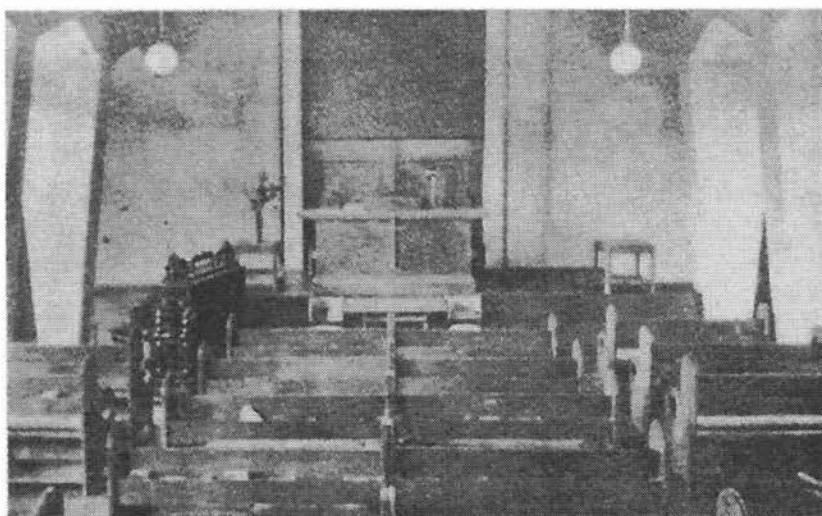
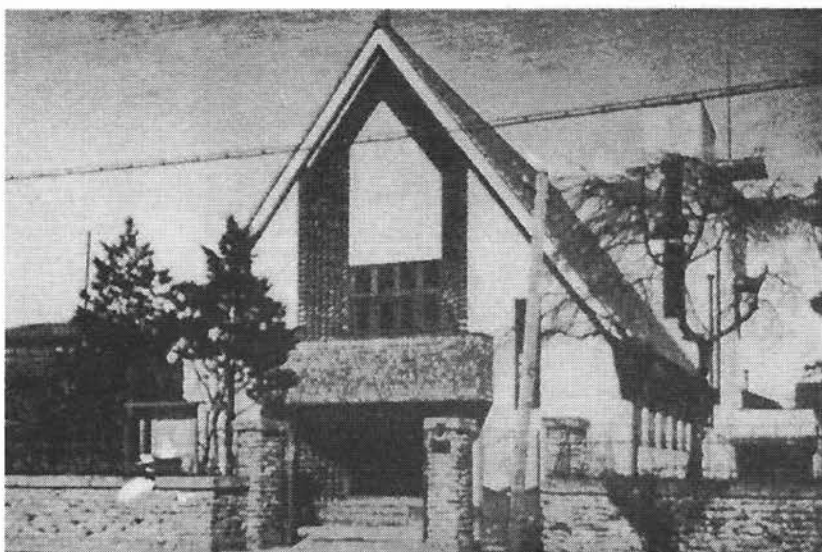
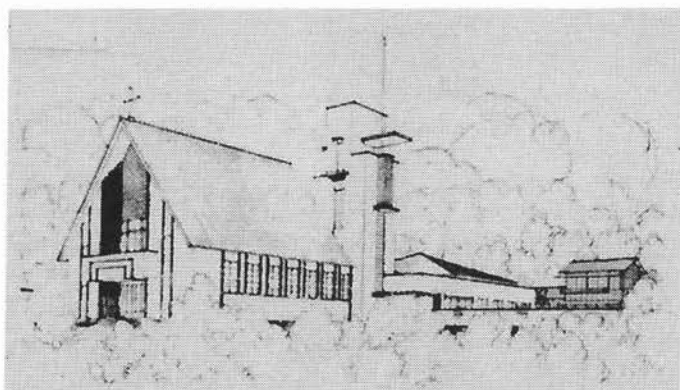
(5) 医院

⑤ 櫻根医院 (T15.09 新 S5 ア S11 近)



(6) 教会

⑰仙台バプテスト教会 (S55 史)



凡例：T=大正 S=昭和 新=『新建築』 住=『住宅』 ア=『アルス建築大講座』

近=『近代建築画譜近畿篇』 史=『日本基督教団仙台ホサナ教会創立百周年記念小史』

【写真1】萩原庫吉邸 1924年

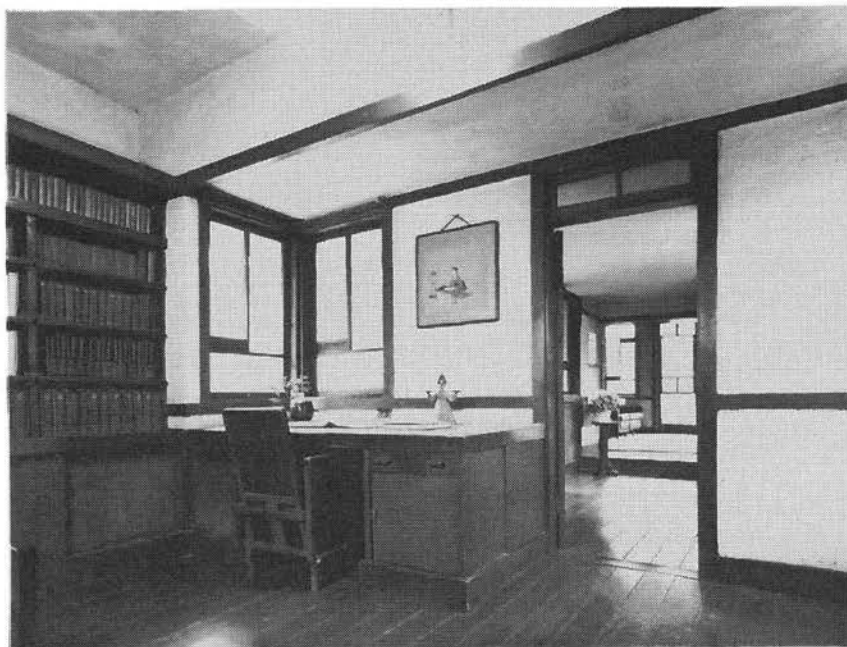


写真 秋山 実

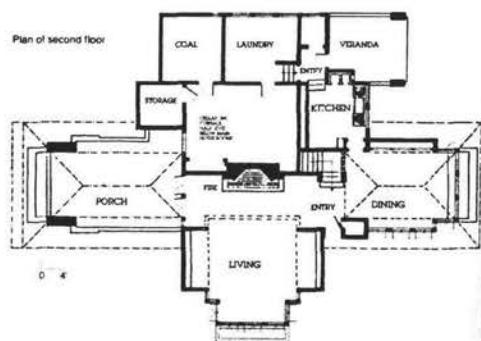
【写真2】G.C.Stockman 邸1908年



外壁にバックハンド・トリムが見える

William Allin Storrer 『THE FRANK LLOYD WRIGHT COMPANION』 1993

【図1】Oscar Steffens 邸 1909年



William Allin Storrer 『THE FRANK LLOYD WRIGHT COMPANION』 1993

第 3 章

建築家・柴田太郎の経歴と作品の概観および

住宅作品の特徴について

はじめに

本章は、ライトの影響の系譜の一つとして、遠藤新建築創作所に所属していたことが知られている¹柴田太郎の経歴と作品について、その特徴について考察する。

柴田太郎の経歴と作品については、主として戦後に柴田太郎建築事務所で指導を受けた熊沢猛氏²、および柴田の長女に当たる小野ミスズ氏からの聞き取りによる³。また、建物に関する図面については、施主である正木家および藤原家保管の資料を使用した。そして、写真資料については、既出の小野ミスズ氏、および富士見高原病院資料室ほかの所蔵写真を使用した。ほかに『長善館物語』⁴などの書籍等を資料とした。

1. 柴田太郎の経歴

柴田太郎の経歴については、これまでほとんど明らかでなかった。調査の結果、[表1]柴田太郎年譜に示した次の事項が判明した。

柴田は、明治34年（1901）11月24日に父新吉と母や越（やお）の六男として長野県諏訪郡上諏訪町285に生まれた⁵。高島尋常高等小学校尋常科を卒業後⁶、大正3年に長野県立諏訪中学校に入学し⁷、その後、東京高等工業学校附設工業教員養成所建築科を大正12年（1923）3月30日に卒業した⁸。なお、同校に在学中の大正10年には、後に自らが建て替える設計をする諏訪出身者のための寮である「長善館」に寄宿している⁹。また、帝国ホテルの現場の遠藤新の下で図面描きのアルバイトを経験している¹⁰。卒業と同時に、大正12年3月30日付で北海道庁立函館工業学校に就職し、同14年3月31日付で退職している。この間、同工業学校大正15年卒業の第3回生の担任を勤めた。¹¹【写真1】

その後、東京に戻った柴田は、大正14年（1925）に遠藤新建築創作所に入所し、昭和3年（1928）まで在籍していたと考えられる¹²。【写真2】【写真3】

翌昭和4年に東京地下鉄道ビルヂング懸賞の2等に当選している。『建築雑誌』昭和4年4月号に掲載の「東京地下鉄道ビルヂング懸賞当選者発表」の記事には「二等 東京府下和田堀町和泉九一 柴田太郎」とあるように、居所と柴田の個人名が記されている¹³。また、昭和4年7月12日の日付の入った「正木氏の家新築設計図」（青図）には、事務所印と見られる「柴田太郎建築事務所」の名称と所在地の「東京府下和田堀町和泉九一」が判読できる。

このことは、昭和4年7月には東京府下和田堀町和泉九一に柴田太郎建築事務所の名称で設計事務所を開設していたことを示している。また、東京地下鉄道ビルヂング懸賞当選案選外佳作四席には、土浦亀城・ビー・ファイアースタインの連名が見られる。

[表1] 柴田太郎 年譜

和暦	西暦	
明治34年11月24日	1901	長野県諏訪郡上諏訪町285に柴田新吉・や越(やお)の6男として生まれる。 ※1 ※11
大正 3年	1913	高島尋常高等小学校尋常科卒業 ※2 長野県立諏訪中学校入学 ※3
大正12年 3月30日	1923	東京高等工業学校附設工業教員養成所建築科卒業 ※4 ※11
大正12年 3月30日	1923	北海道庁立函館工業学校就職 大正15年3月卒業生(第3回)担任 ※11
大正14年 3月31日	1924	北海道庁立函館工業学校退職 ※11
大正14年	1925	遠藤新建築創作所所員 ※5
大正15年	1926	遠藤新建築創作所所員 ※5
昭和 2年	1927	遠藤新建築創作所所員 ※5
昭和 3年	1928	建築設計事務所自営 ※13
昭和 4年 4月	1929	東京地下鉄道ビルヂング懸賞 二等当選 (『建築雑誌』昭和4年4月) 東京府下和田堀町和泉91 柴田太郎
昭和 4年 7月12日	1929	正木氏の家 信州 新築設計図 柴田太郎建築事務所／所在地:東京府下和田堀町和泉91
昭和 5年 1月14日	1930	名古屋市庁舎設計図案 ※12
昭和 5年 4月27日	1930	正木邸竣工 ※6
昭和 5年	1930	長善館・巣鴨・新築設計図
昭和 5年 7月13日	1930	長善館着工 ※7
昭和 5年10月12日	1930	長善館竣工 ※7
昭和 6年	1931	川口屋林銃砲火薬店竣工 ※12
昭和 9年 9月	1934	栗谷商店竣工 ※12
昭和10年 1月17日	1935	藤原氏別宅新築設計図 柴田太郎建築事務所／所在地:東京府下吉祥寺2404
昭和10年	1935	藤原別邸竣工 ※8 五味巖邸竣工 ※9
昭和12年	1937	富士見高原療養所竣工(昭和25年焼失) ※9
昭和12年	1937	守谷商店竣工 ※12
昭和26年～27年	1951 ～52	富士見高原療養所竣工 ※9
昭和44年	1969	出身地:上諏訪 職業:建築設計事務所 現住所:武蔵野市吉祥寺南町4-12-7 ※10
昭和59年 4月23日	1984	没※1

※1 柴田太郎のご子息柴田岩根氏による

※2 『高島学校百年史』(1973)による

※3 諏訪清陵高等学校『会員名簿創立九十周年記念』(1986)による

※4 冬夏会『会員名簿』(2002)による

※5 岡見健彦『ノート』記載による

※6 正木家による

※7 関之『長善館物語』による

※8 藤原家による

※9 五味巖夫人の五味邦氏による

※10 『諏訪郷友会報』(1969)

※11 函館工業高校 人事記録簿による

※12 柴田太郎の長女小野ミスズ氏所蔵の写真による

※13 『建築界紳士録』(1962)による

なお、『建築界紳士録』（1962）によれば、柴田は昭和3年に遠藤新建築創作所から独立している。¹⁴

その後、昭和10年1月17日付の「藤原氏別宅新築設計図」（青図）には柴田太郎建築事務所の名称と所在地の「東京府下吉祥寺2404」および電話番号が入った事務所印の印影があり、昭和10年1月には既出の東京府下和田堀町和泉九一から東京府下吉祥寺2404に所在地を移転していたことが分かる。

また、『諏訪郷友会報』（1969）によれば、出身地は「上諏訪」、職業は「建築設計事務所」および現住所は「武蔵野市吉祥寺南町4-12-7」とあることから、昭和44年に武蔵野市吉祥寺南町4-12-7で建築設計事務所を営んでいたことが分かる。

なお、現在は既出の「吉祥寺」という町名は存在しないことに加え、柴田の長女である小野ミスズ氏の証言に基づき「東京府下吉祥寺2404」と「武蔵野市吉祥寺南町4-12-7」は同一場所と考えてよい。

戦後の柴田は殆ど仕事らしい仕事をするともなく昭和59年（1984）4月23日に没した。¹⁵

2. 柴田太郎の作品

柴田の作品については、計画案を含めて14の建物が確認できた。その内訳は、住宅3、店舗4、療養所2、寄宿舍1、事務所ビル1、庁舎1、店舗併用住宅1、事務所・工場1である。また、現存する建物は3件あり、他の建物については、建設された建物が9件と計画案が2件あることが分かった。

なお、現存する3件の建物は住宅が2軒と店舗併用住宅が1軒で、何れも現諏訪市内に建設されたものであることが判明した。

そのうちの住宅2軒は諏訪湖畔にある「正木氏の家」と高台にある「藤原氏別宅」で、店舗付き住宅は上諏訪の商店街に在り、当初は自転車店として建設されたが現在は用途変更して使用されている。なお、14の建物について纏めた表が〔表2〕柴田太郎作品リストである。また、〔表3〕は確認できた住宅2軒の設計図（青図）リストである。〔表1〕を含めて、年代順に作品を見てみる。なお、青図が現存するものに対しては、あわせて図面の種類について確認する。（以下に示す①～④は〔表2〕および写真図版に付した番号）

①昭和4年の『建築雑誌』4月号に「東京地下鉄道ビルヂング懸賞当選者発表」と題する記事が掲載されている。記事によれば神田区末広町に建設予定の東京地下鉄道株式会社ビルヂングの建築設計競技で、柴田は応募総数238の内の2等に入っている。同4年5月号の『建築雑誌』には懸賞応募案の設計図が掲載されている。図面内容は、外観透視図、1階平面図、2・3・4・5階平面図、6階・食堂平面図、7階・食堂平面図、8階・台所平面図、である¹⁶。外観は水平線を強調した意匠となっている。

②「名古屋市庁舎設計図案」の書き込みのある図面に、昭和5年1月14日の日付と柴田太郎の名前が仮止めされ写真にとってある。写真の枚数は9枚で、図面内容は、外観透視図、地下階・1階平面図、2階・3階平面図、4階・5階平面図、西側立面図、北側立面図、東西断面図、南北断面図、正面玄関詳細図がある。

③「正木氏の家」は、昭和5年4月27日の竣工で、施主正木不如丘（俊二）によって諏訪湖畔に建てられた。この住宅については〔表3〕柴田太郎設計作品 設計図リストに

[表2]柴田太郎作品リスト

	和暦	西暦	建物名称	備考
①	昭和4年	1929	東京地下鉄道ビルヂング	設計競技2等
②	昭和5年	1930	名古屋市庁舎設計図案	
③	昭和5年	1930	正木氏の家	上諏訪
④	昭和5年	1930	長善館	東京府下巢鴨宮下1572
⑤	昭和6年	1931	川口屋林銃砲火薬店	東京日本橋区本銀町2-3
⑥	昭和9年	1934	栗谷商店	大阪市西区京町堀通5丁目
⑦	昭和10年	1935	藤原氏別宅	上諏訪
⑧	昭和10年	1935	五味巖邸	上諏訪
⑨	昭和12年	1937	富士見高原療養所	富士見町 昭和25年焼失
⑩	昭和12年	1937	守谷商店	東京神田駅付近
⑪	昭和13年	1938	今朝	東京新橋
⑫	昭和26年 ～27年	1951 ～52	富士見高原療養所	富士見町
⑬	—	—	自転車店	上諏訪
⑭	—	—	東邦自動車工業	蒲田区羽田

示すように18枚の青図が確認できた。各図面の内容は、平面図・立面図、居室詳細図、居室詳細図、居室・玄関詳細図、居室・玄関詳細図、居室詳細図、書斎詳細図、台所、台所、名称記入なし（1階床伏図）、護岸・基礎・浴槽・温水槽・便所、書庫、浴室・脱衣室詳細図、子供室・裏玄関・望湖室、子供室・望湖室、小屋伏図、名称記入なし（立面図）および庭園設計図となっている。また、庭園設計図については「設計竹柏園 牛込」との記入がある。なお、柴田と正木は従兄弟にあたる。

④正木氏の家と同年の昭和5年（1930）4月27日に竣工の「長善館」は、最初は諏訪青年会によって諏訪出身者の寄宿舍として明治24年（1891）4月15日に東京本郷元町2丁目50番に建設された建物から始まり、その後、結成された諏訪郷友会により明治44年（1911）8月30日に府下巢鴨宮下1572番地に新長善館が完成し、移転した。更に、柴田の設計した長善館は、同じ巢鴨宮下1572番地に昭和5年に建てかえられたものである。柴田設計の長善館は昭和20年（1945）4月13日に空襲により焼失した。¹⁷

⑤昭和6年（1931）に竣工したと考えられる川口屋林銃砲火薬店¹⁸は、東京日本橋

区本銀町2丁目3番地に建設された¹⁹。「川口屋林銃砲火薬店新築工事」の文字が焼き付けてある工事の8枚の写真それぞれに、「第一号」から「第八号」までの番号が付されている。

この番号順に「昭和6・5・25」(2枚)、「昭和6・6・5」,「昭和六年六月十一日」,「昭和六年七月四日」(2枚)、「昭和六年七月九日」,「昭和六年七月十五日」の6種類の日付が付されている。8枚の写真は工事の経過を示すもので、第1号・第2号は足場が組まれた全景および基礎工事全景、第3号は基礎工事部分(地下階)が写してあり、松杭と見られる杭が多数打ち込まれていることが分かる。第4号は防水シートと見られるロールが多数あることから地下階の防水工事と考えられる。第5号は現場外観、第6号は1階床コンクリート打ち、第7号は2階床配筋、第8号は3階床コンクリート打ちの状況と見られる。

⑥「昭九・九 粟谷商店新築記念」と印刷された絵葉書より、粟谷商店は昭和9年(1934)9月に竣工したものと考えられる。業種は銃砲火薬店で、既出の川口屋林銃砲火薬店によって大正12年に吸収合併されており、昭和9年に改築との記録が残っている。

20

⑦「藤原氏別宅」は昭和10年(1930)に牛山清人²¹が、祖母藤原ふくと娘の潤子のために建てたものである。藤原ふくの夫である藤原光蔵は、台湾総督府土木部長などを務めた人物で、長女のさわの、次女のふさ、中央气象台長を勤めた長男の咲平、諏訪信用組合長であった次男の彦、の4人の子供がいた。長女のさわのの長男が牛山清人である²²。ちなみに、彦の次男にあたる寛人は、小説家・新田次郎の名で知られる直木賞作家である。なお、柴田は、藤原家と縁戚にあたる。

⑧五味巖邸は、昭和10年に五味巖の新居として上諏訪に建てられた住宅で、新築当時の写真によれば、湿潤な敷地に土盛りをした上に新築されたことが分かる。²³

⑨昭和12年に建てられた富士見高原療養所は、富士見町の南斜面に建てられた。

最初の療養所は、1926年に総合病院として始まったが、1928年に解散し、正木俊二の個人経営として新たに富士見日光療養所として設立された。その後、1936年に(財)高原療養所を設立、富士見高原療養所の経営を開始した。この財団の設立を機に建物の建て替えが実施されたものと考えられる。なお、この建物は昭和25年に焼失した。²⁴

⑩「守谷商店」については、8枚の写真により次の事項が確認できた。

写真には、「守谷商店新築工事・地鎮祭(其一)」,「守谷商店新築工事・地鎮祭(其二)」,「守谷商店新築工事・地鎮祭(其三)」,「守谷商店新築工事・敷地全景」,「守谷商店新築工事・隣接家屋状態」(三益商社),「守谷商店新築工事 隣接家屋状態」(神田駅洋服店),「守谷商店新築工事・上棟式」(2枚),のように建築名称と撮影名称が付されている。また、日付が入っていることから、地鎮祭は昭和11年11月4日に、上棟式は昭和12年6月1日に行われたことが分かる。なお、敷地と両隣については、昭和11年11月9日の日付があり、着工前の状況は分かるものの完成後の資料が確認できず、建物概要については明らかでない。

⑪昭和13年に東京新橋に新築された今朝(いまあさ)は、藤森今朝次郎により明治13年(1880)に創業された飲食店で、何度かの建て替えを経て「桃山風の純日本建築」となった。藤森は上諏訪出身であり、二歳の時に実母が亡くなったあとは既出の藤原光蔵・

[表3]柴田太郎設計作品 設計図リスト

	図面日付 4桁:西暦 2桁:和暦	設計図名称	図面名	縮尺	手書き事務所名	事務所印	備考
1	1929. 7.10	正木氏の家 信州 新築設計図	平面図・立面図	1/20	○ 柴田太郎事務所	×	青図
2	1929. 7.12	正木氏の家	居室 詳細図	1/20	○ 柴田太郎建築事務所	○	青図、印:東京府下和田堀町和泉九一 柴田太郎建築事務所
3	1929. 7.12	正木氏の家 信州 新築設計図	居室 詳細図	1/20	○ 柴田太郎建築事務所	×	青図
4	1929. 7.13	正木氏の家 信州 新築設計図	居室・玄関 詳細図	1/20	○ 柴田太郎建築事務所	○	青図、印:東京府下和田堀町和泉九一 柴田太郎建築事務所
5	1929. 7.13	正木氏の家 信州 新築設計図	居室・玄関 詳細図	1/20	○ 柴田太郎建築事務所	×	青図
6	1929. 7.14	正木氏の家 信州 新築設計図	居室 詳細図	1/20	○ 柴田太郎建築事務所	×	青図
7	1929. 7.15	正木氏の家 信州 新築設計図	書斎 詳細図	1/20	○ 柴田太郎建築事務所	×	青図
8	1929. 7.15	正木氏の家 信州 新築設計図	台所	1/20	○ 柴田太郎建築事務所	○	青図、印:東京府下和田堀町和泉九一 柴田太郎建築事務所
9	1929. 7.15	正木氏の家 信州 新築設計図	台所	1/20	○ 柴田太郎建築事務所	×	青図
10	1929. 7.17	正木氏の家 信州 新築設計図	(1階床伏せ図)	1/50	○ 柴田太郎建築事務所	×	青図
11	1929. 10. 3	正木氏の家 信州 新築設計図	護岸・基礎・浴槽・ 温水槽・便所	1/50	×	○	青図、印:東京府下和田堀町和泉九一 柴田太郎建築事務所
12	1930. 2. 1	正木氏の家 新築設計図	書庫	1/20 1/2	×	○	青図、印:東京府下和田堀町和泉九一 柴田太郎建築事務所
13	1930. 2. 1	正木氏の家 新築設計図	浴室・脱衣室 細詳図	1/20	×	×	青図
14	1930. 2. 2	正木氏の家	子供室・裏玄関・望湖室	1/20	×	○	青図、印:東京府下和田堀町和泉九一 柴田太郎建築事務所
15	1930. 2. ?	正木氏の家 新築設計図	子供室・望湖室	1/20	×	○	青図、印:東京府下和田堀町和泉九一 柴田太郎建築事務所
16	1930. 2. 6	正木氏の家 新築設計図	小屋伏図	1/50	×	○	青図、印:東京府下和田堀町和泉九一 柴田太郎建築事務所
17	×	× (正木氏の家)	(立面図)	(1/20)	×	○	青図、印:東京府下和田堀町和泉九一 柴田太郎建築事務所
18	×	正木家庭園設計図			○ 設計竹柏園 牛込	×	青図
19	1930 . ? . ?	長善館・巢鴨・新築設計図	立面図	1/100	×	○	青図、印:東京府下和田堀町和泉九一 柴田太郎建築事務所
20	×	?? 設計図 (長善館)	貳階平面図	1/100	×	×	青図
21	×		長善館配景図		×	×	『長善館物語』掲載
22	昭和五年七月?	長善館新築設計図	壹階平面図 貳階平面図	1/100	×	×	『長善館物語』掲載 署名捺印
23	10(1935).1.17	藤原家別宅新築設計図	平面図及び立面図	1/100	×	○	青図、印:東京府下吉祥寺二四〇四 柴田太郎建築事務所 電話荻窪二八八三
24	10(1935).1.17	藤原家別宅新築設計図	構造図	1/50	×	○	青図、印:東京府下吉祥寺二四〇四 柴田太郎建築事務所 電話荻窪二八八三
25	10(1935).1.17	藤原家別宅新築設計図	台所平面図	1/10	×	○	青図、印:東京府下吉祥寺二四〇四 柴田太郎建築事務所 電話荻窪二八八三
26	10(1935).1.17	藤原家別宅新築設計図	居室及び台所詳細図	1/10	×	○	青図、印:東京府下吉祥寺二四〇四 柴田太郎建築事務所 電話荻窪二八八三
27	10(1935).1.17	藤原家別宅新築設計図	台所詳細図	1/10	×	○	青図、印:東京府下吉祥寺二四〇四 柴田太郎建築事務所 電話荻窪二八八三
28	10(1935).1.17	藤原家別宅新築設計図	日光室矩計図	1/10	×	○	青図、印:東京府下吉祥寺二四〇四 柴田太郎建築事務所 電話荻窪二八八三
					11件	16件	

()内は、筆者による

○印: 有る

×印: 無し

?印: 解説不可

[表4]柴田太郎設計作品 仕様書リスト

	日付	名称	内訳
1	昭和 10年1月21日	藤原家新築別宅木材内訳書	表紙+12枚(21頁)
2	昭和 10年1月22日	藤原家新築木材仕様書	表紙+11枚(17頁)
3	昭和 10年1月24日	藤原家新築工事仕様書	表紙+12枚(21頁)

ふく夫妻に養育されている。²⁵

⑫昭和25年に焼失した後の建て替えによる富士見高原療養所は、昭和26年から27年にかけて建設された²⁶。その後、昭和48年（1973）に竣工した新築工事²⁷のために取り壊された。

⑬上諏訪の商店街に現存する店舗併用住宅は、自転車店として建てられたが建設年代は不明である²⁸。なお、現在は異業種の店舗として使用されている。

⑭ 東邦自動車工業については、「東京蒲田区羽田」と「大阪西淀川区佃町」の2箇所の所在地と電話番号および社章の入った写真7枚のうち建物の写真が6枚ある。写真には「東京 蒲田 白陽写真館」の文字が付されていることから、所在地は「東京蒲田区羽田」と考えるのが妥当であろう。

3. 住宅作品の特徴

柴田の14の建築作品のうち住宅は3軒ある。各建物の名称は「正木氏の家」「藤原氏別宅」および「五味邸」であり、正木氏の家と藤原氏別宅の2軒は上諏訪に現存している。

この、現存する2軒の住宅に関しては設計図（青図）があり、正木氏の家については上棟後、および竣工当初と見られる外観写真があることが判明した。藤原氏別宅については昭和12年の外観および昭和15年の外観の一部の写真が藤原家に保管されている。五味邸については、建設当時の写真は1枚あるが、図面は残っていない。

正木氏の家と藤原氏別宅は、共に設計図の内容と施工内容との間に多少の違いはあるものの、ほぼ設計図に従って造られている。住宅の特徴について〔表5〕に示した。

1) 正木氏の家について

(1) 外観の特徴

屋根については緩勾配の瓦葺きであり、設計図の立面図には信州の伝統的な意匠である雀

〔表5〕柴田太郎の住宅作品の特徴について

竣工年	各部の特徴	構造	外観の特徴														平面の特徴										室内の特徴									
			屋根		屋根材		壁仕上げ						平面型		造作			その他																		
			木造	緩勾配屋根	切妻屋根	寄せ棟屋根	入母屋屋根	瓦葺き（鉄板）	瓦葺き	左官仕上げ	下見板張り（腰）	押縁下見（内法高まで）	羽目板張り	深い軒の出	屋根つきテラス	水平線の強調	太柱	バーゴラ	均等割でない棧の建具	引き違い窓	一文字変形型平面	凹凸の多い平面形	引き違い窓	暖炉	囲炉裏	造り付ソファ	造り付収納（押入れを除く）	日光室（サンルーム）・広縁	太柱	テラス	バルコニー	池	一室内複数の天井高	洋室壁の長押	建物と統一された家具デザイン	建物と統一された照明器具デザイン
昭和5年	③正木氏の家	○	○	○	—	—	—	○	—	○	—	○	○	○	○	○	—	○	○	—	○	○	○	—	○	○	—	○	○	—	○	○	○	○	○	○
昭和10年	⑦藤原氏別宅	○	○	—	○	○	○	—	○	—	○	○	—	—	—	—	—	○	○	—	○	—	○	—	○	○	—	○	—	○	—	—	—	—	—	—
昭和10年	⑧五味巖邸	○	○	—	○	—	○	—	○	—	○	—	○	—	○	—	○	○	—	①	—	①	—	／	—	／	①	／	—	—	—	／	／	／	／	

凡例 ○：有り
—：無し
／：資料無し
①：外観写真による

踊りの使用が見られる。このことは、柴田の設計が地域性を十分に意識したものであることを物語っている。しかし、竣工当初の写真には雀踊りは確認できないことから、設計変更されたものと考えられる。また、外壁は腰壁が下見板張りで、壁は押縁付羽目板が使用されている。なお、太柱は左官仕上げとなっている。そして、深い軒の出、屋根のかかったテラス、水平線の強調された外観、太柱、パーゴラ、引き違い窓、テラスなどが外観の特徴として考えられる。

(2) 平面の特徴

平面の型は一文字変形型で、凹凸の多い平面形をしている。また造作には、暖炉、造り付ソファ、造り付収納がある。

(3) 室内の特徴

室内では、一室内に高さの異なる天井が使用されており、洋室ではあるが長押の使用されている部屋がある。また、家具および照明器具には建物と統一された意匠の使用が見られる。

2) 藤原氏別宅について

(1) 外観の特徴

屋根は、緩勾配の瓦棒葺きで寄せ棟と入母屋を併用している。また、深い軒の出で、窓の建具には均等割りでない棧が見られる。敷地が傾斜地で、土地の段差を利用したこの建物は、母屋のある敷地の高さが2階として設計され、段差のある低い側が1階で、納屋とされている。外壁は、1階及び2階の内法高までが羽目板で、上部は左官仕上げとされている。また、この敷地の段差に対して、設計図には2階から1階への外階段が設置されているが、実際には、外階段は造られていない。また、北側にある便所と西側の廊下および南側のサンルームが、持送りとされている。

(2) 平面の特徴

平面図からは、畳敷きの居間と茶間および板敷きの台所が西から東に並んでおり、外部に面した西側が廊下で南側が日光室（サンルーム）であることが分かる。平面の型は口型平面である。また、角間川に面して建てられたこの家の図面には、北側にバルコニーが描かれているが実際にはバルコニーではなく便所の前室として施工されている。この場所は持送りになっている。なお、L字形になる南側の日光室（サンルーム）と西側の廊下についても持送りとしている。また、造作については囲炉裏と造り付棚が見られる。ちなみに、開口部は引き違い窓の形式が採用されている。

3) 五味巖邸について

(1) 外観の特徴

和風の住宅で、緩勾配屋根の1階部分が鉄板平葺きの寄せ棟と切妻、2階が瓦棒葺きの入母屋となっている。なお、2階は窓上にひさしが廻っており、平葺きとなっている。外壁は、1階・2階ともに、内法高までが押縁下見による仕上げが施されており、内法高より上は左官仕上げによっている。2階屋根の軒の出は短いものの、軒の直ぐ下の底の出および1階の軒の出は深く造られている。この軒および底の出が水平線の強調を示している。

また、建具は引き違いで均等割りでない棧の意匠が見られる。

(2) 平面の特徴

この建物についての図面はないため、図面での確認は出来ないが、写真および聞き取り調査によれば、口型平面で南に広縁があることが分かる。

以上のことから、昭和5年に竣工した正木氏の家は、外観では、設計段階の雀踊りに見るように地域性を意識した意匠が施され、腰壁の下見板・壁の羽目板や太柱およびパーゴラ、テラスあるいは池が特徴と考えられる。なお、屋根の瓦葺にも着目したい。また、平面では一文字変形型で凹凸の多い平面形をしており、暖炉、造り付ソファおよび造り付収納が、そして、室内空間では一室内の複数の天井高、洋室の長押、建物と統一したデザインの家具および照明器具を特徴としている。

このことは、遠藤新の大正期の作風の特徴である下見板・太柱・パーゴラ・テラス・池、および昭和初期の作風の特徴である瓦屋根・羽目板・引き違い窓が柴田の設計の触媒となっていると考えられよう。つまり、正木氏の家は、遠藤の大正期と昭和初期の作風を併せ持つと考えてよい。たとえば、大正期では遠藤自邸（1924）のテラス・太柱・パーゴラ、昭和初期では森久保邸（1928）²⁹の瓦葺切妻屋根と平面の構成あるいは羽仁吉一郎（1929）の外壁の羽目板が例に挙げられる。

また、昭和10年に竣工した藤原氏別宅は、外観では瓦棒葺き屋根、2階の内法高までの羽目板と上部が左官仕上げの外壁を、平面では口型平面、造り付収納を特徴としている。

瓦棒葺き屋根は遠藤の大正期の住宅に多くみられ、羽目板と左官仕上の併用および口型平面形は昭和初期の特徴としている。つまり、ここでも柴田の作品は、遠藤の作風が触媒となり設計されたと考えられる。たとえば、遠藤の昭和初期の特徴である既出の外壁仕上は羽仁吉一郎（1929）や羽仁五郎邸（1930）³⁰に見ることが出来る。

そして、五味巖邸（1930）は、外観では入母屋の瓦棒葺きの軒の出の短い2階の屋根と直下の深い庇が水平線の強調となり建物を特徴付けている。外壁仕上は、1階・2階ともに内法高の上下で、左官と押縁下見とに分けている。たとえば、この仕上げ方は、遠藤の設計による矢田部勤吉邸（1928）に見られる。また、窓の建具には1枚の中に異なる割付が見られるが、このことについても遠藤の手法が触媒として介在したと考えられる。

なお、2軒は、建物全体が和風の意匠であることが分かる。

終わりに

以上のことから次のことが明らかになった。柴田太郎は、明治34年生まれの上諏訪出身者で、東京工業学校在学時に帝国ホテルの工事現場で図面描きのアルバイトをし、遠藤新と知り合った。卒業後は、大正12年3月30日から大正14年3月31日まで函館工業学校の教諭を務めたが、同工業学校退職後に遠藤新建築創作所の所員となり、遠藤の下で構造設計を主として仕事をした。しかし、昭和3年に独立し、柴田太郎建築事務所を設立して設計活動を開始した。

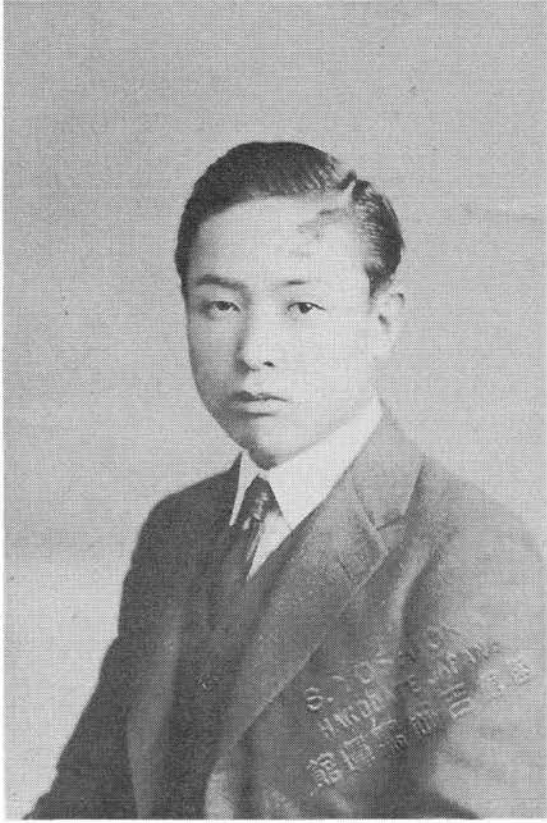
柴田の設計作品は、住宅、物販店、飲食店、療養所、事務所ビルなど多岐にわたるが、設計競技への応募作品を除いて、郷里の上諏訪あるいは岡谷出身者を施主としている。

このことは同郷者の人脈が、設計活動に大きく関わっていたことを示している。

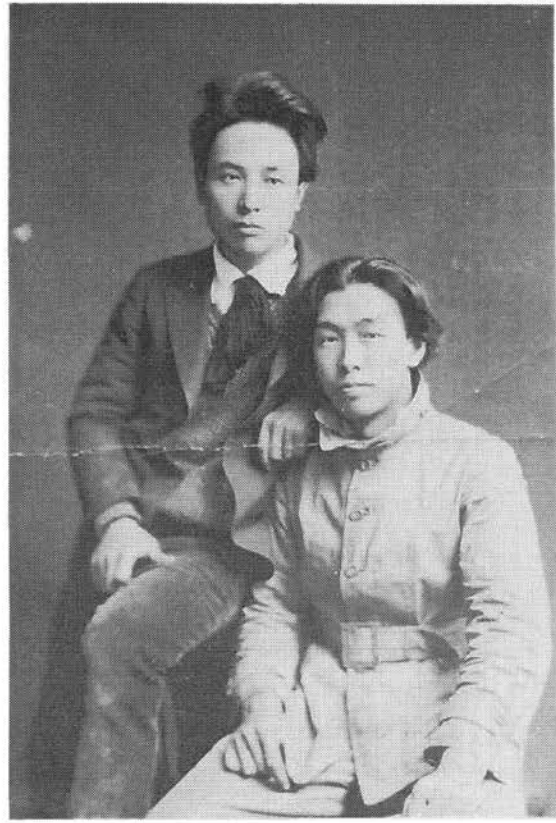
また、住宅についての特徴は、地域性を考慮し、遠藤新の大正期と昭和初期の作風を併

せ持つ意匠が見られる事から、帝国ホテルでのアルバイト期間および遠藤新建築創作所の所員として設計に従事した大正14年4月から昭和3年にかけての3年間の蓄積が設計の触媒となって表出したものと考えられる。

柴田太郎 函館工業学校勤務の頃



【写真1】 撮影：函館吉岡写真館



【写真2】 柴田（左側）と
阿部春勝（右側：甲子園ホテル設計補助）

遠藤新とスタッフ

柴田太郎 川喜田煉七郎 山村伍一郎 遠藤新

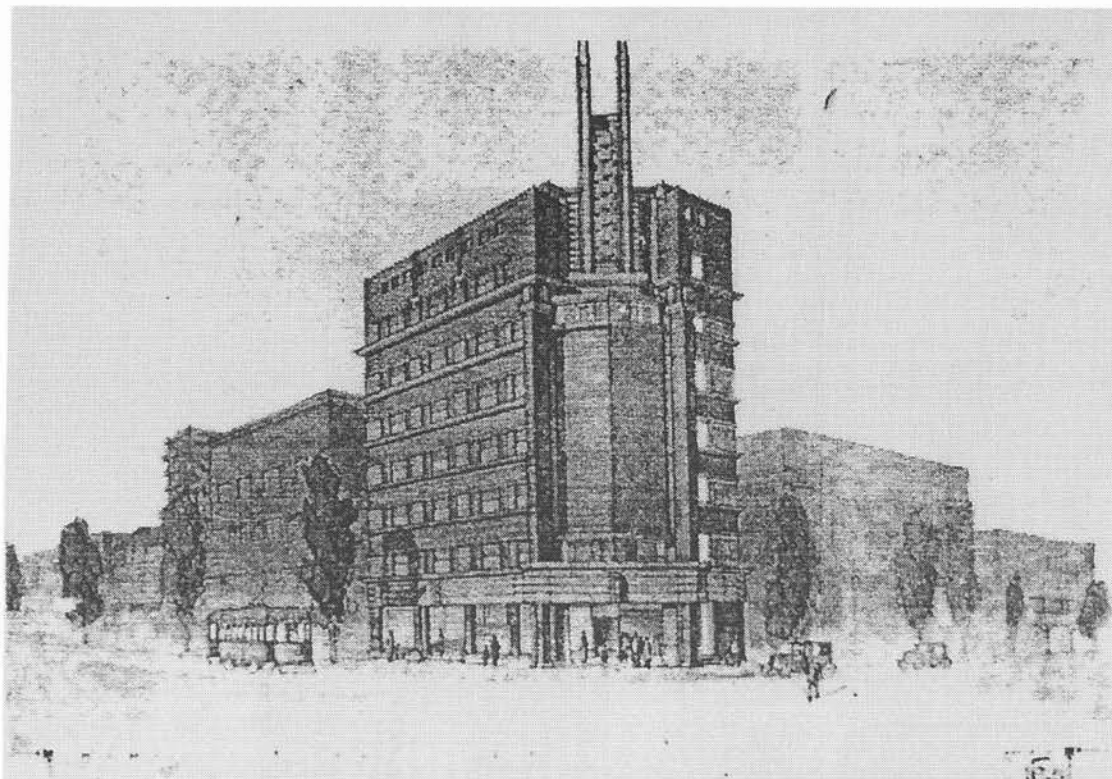


【写真3】 八木橋西造 阿部春勝 大河原才吉 岡見健彦

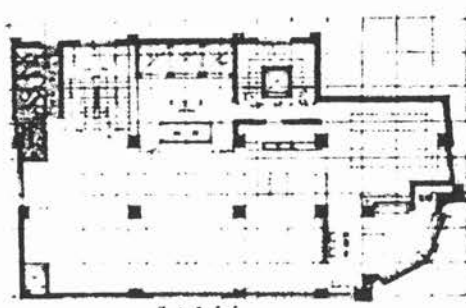
柴田太郎 設計作品

①東京地下鉄道ビルヂング 昭和4年（1929）

建築意匠設計懸賞当選図案 第二等 1929『建築雑誌』昭和4年5月号



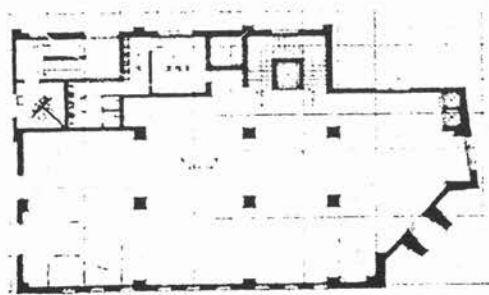
（一階平面図）



（二、三、四、五階平面図）

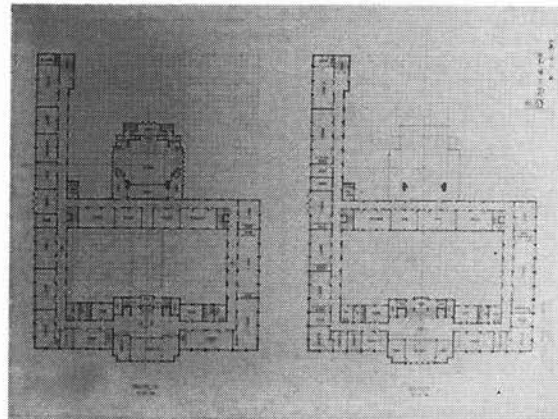
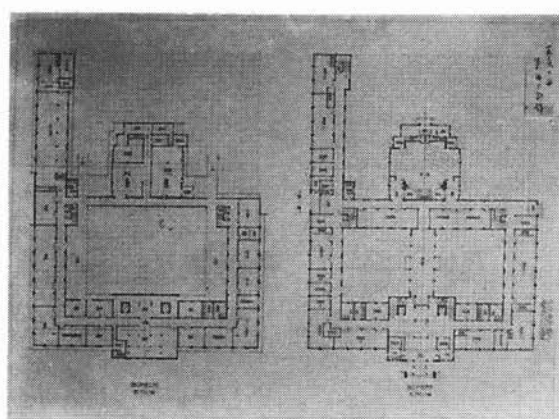
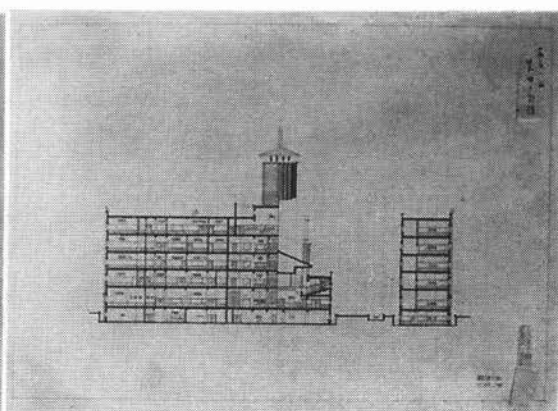
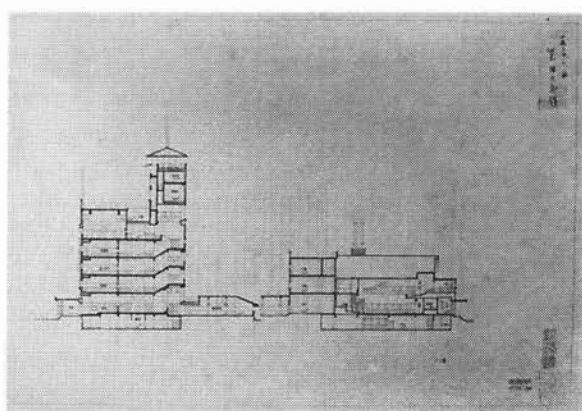
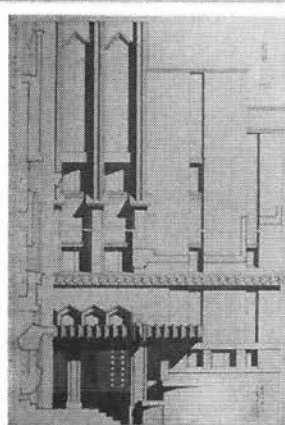
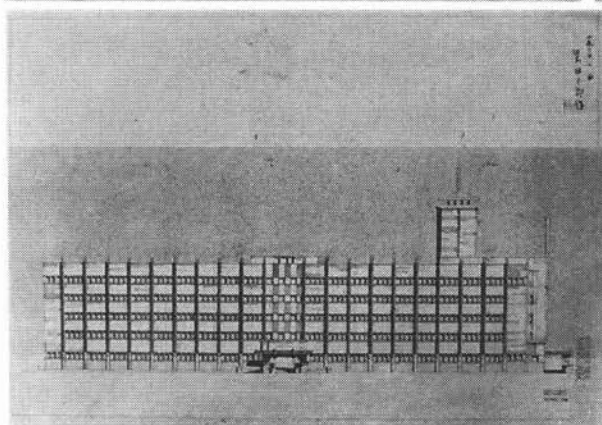
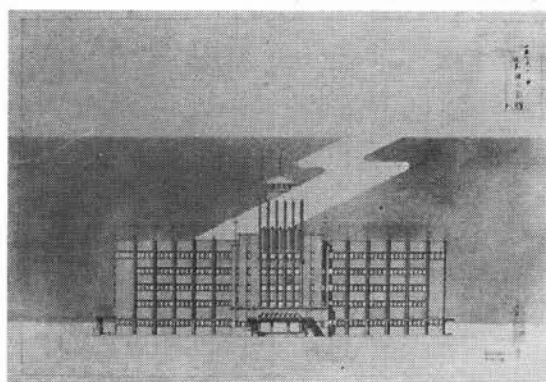
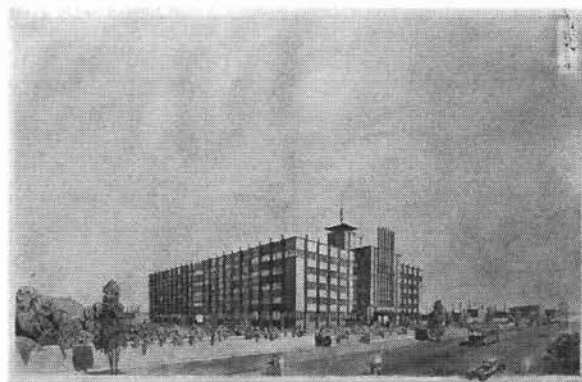


（七階、食堂平面図）

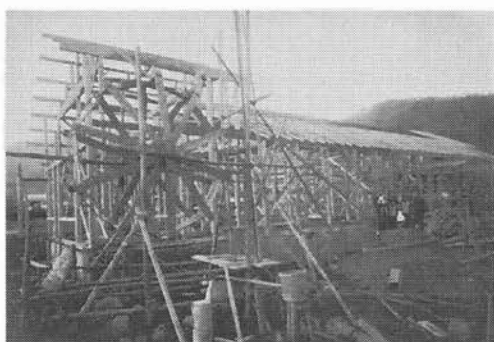
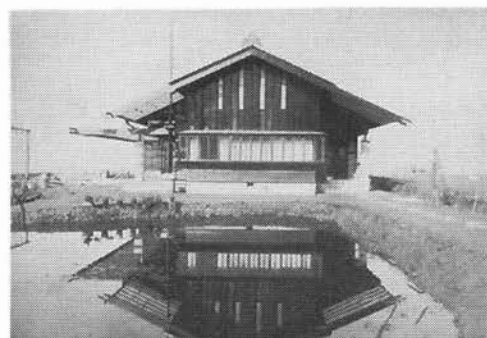


（八階、臺所平面図）

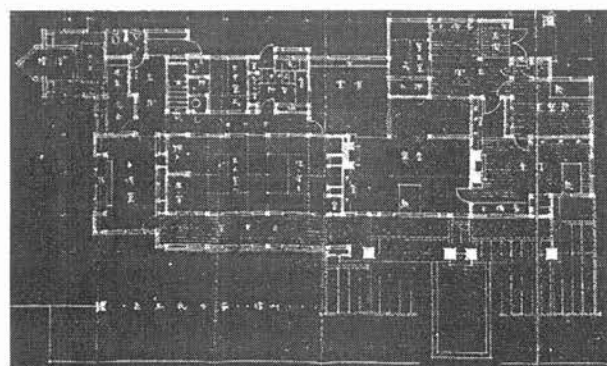
②名古屋市庁舎設計図案 昭和5年（1930）



③正木氏の家 昭和5年（1930）

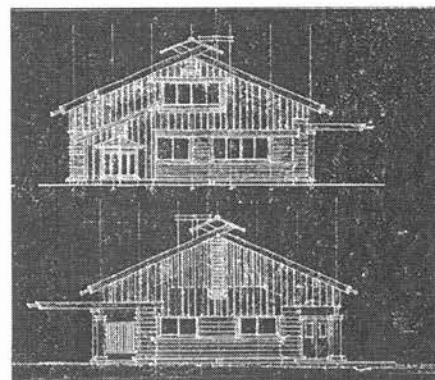
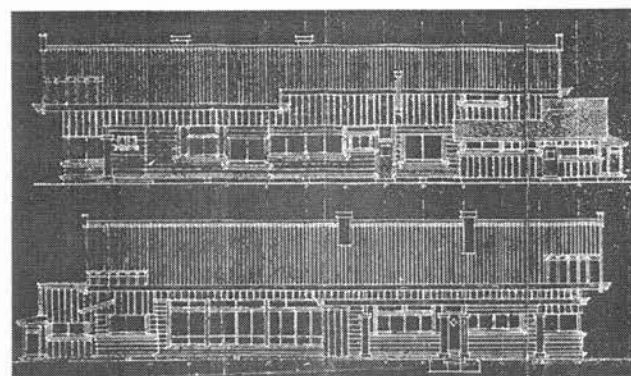


居間（現状）

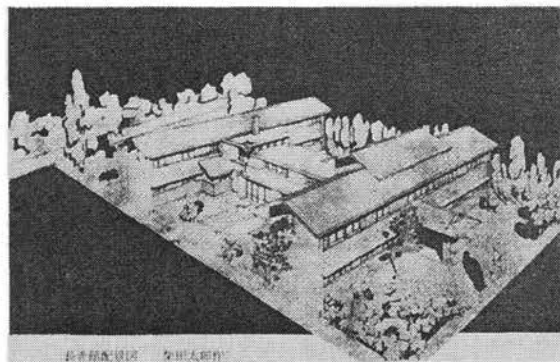


昭和五年四月二十七日
長男高、次子建之
一時の塔とあつて胡平ら
正木氏如左

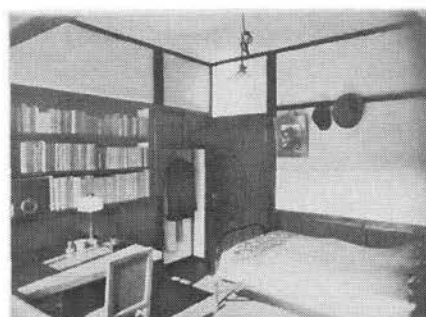
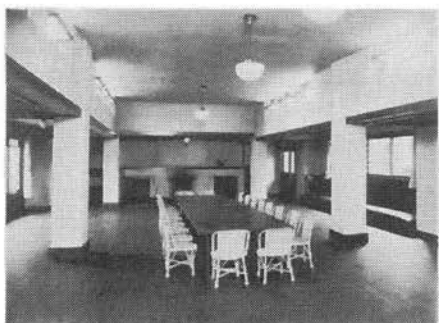
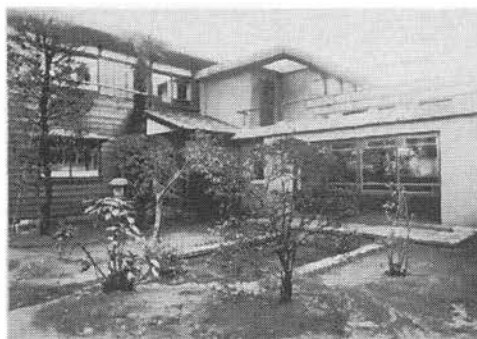
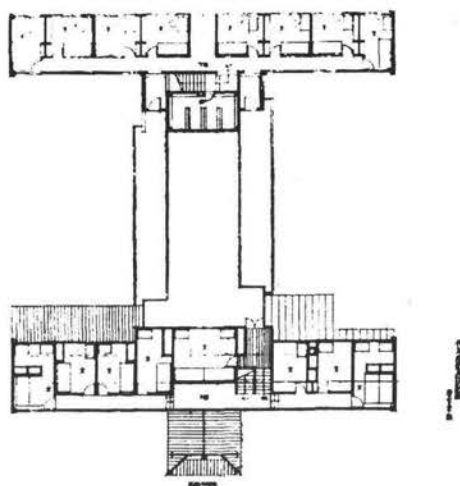
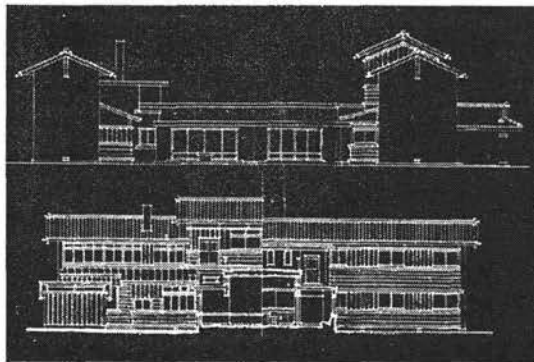
左：平面図，下：立面図（雀踊りが見られる）



④長善館 昭和5年（1930）



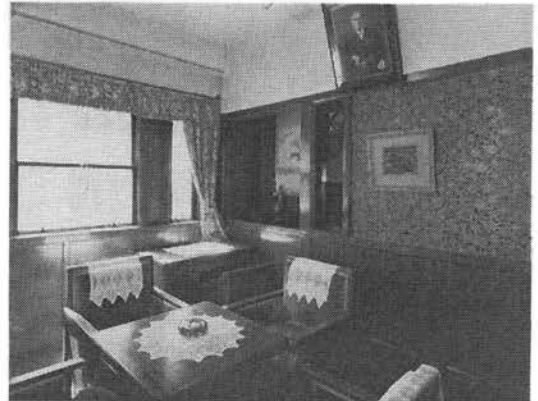
透視図、平面図『長善館物語』関 之著より



上：玄関前、下：食堂・社交室（正面に暖炉）

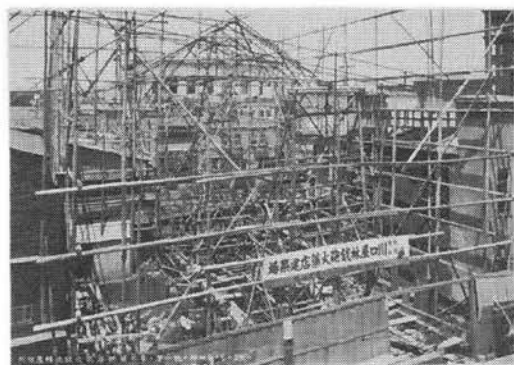
上：外観、下：個室

⑤川口屋林銃砲火薬店 昭和6年（1931）

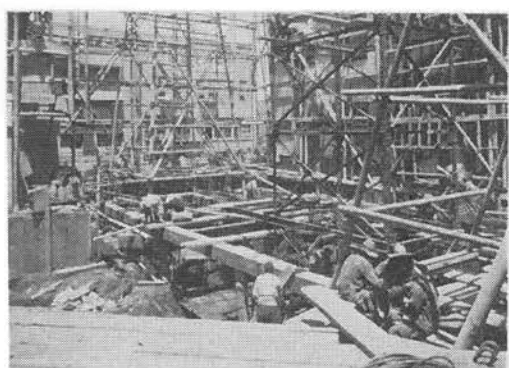


遠藤新設計の甲子園ホテルあるいは梁瀬自動車に見られる意匠を髣髴とさせる

第一号



第二号



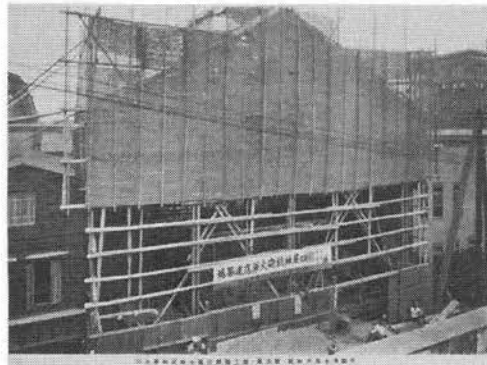
第三号



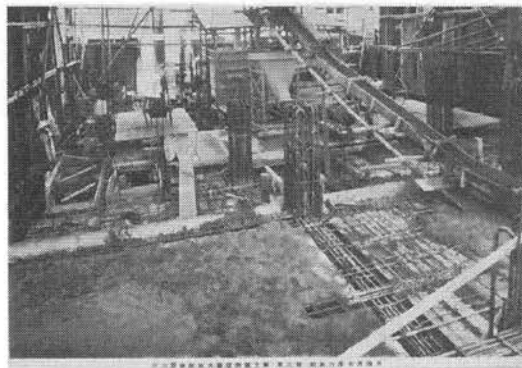
第四号



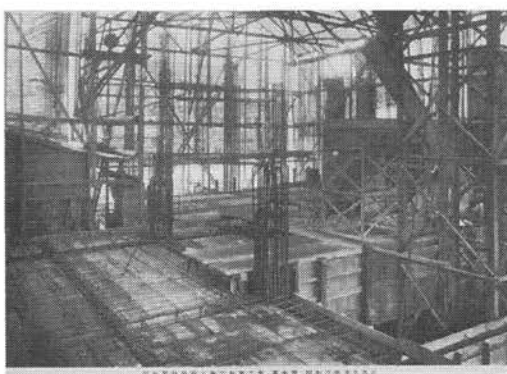
第五号



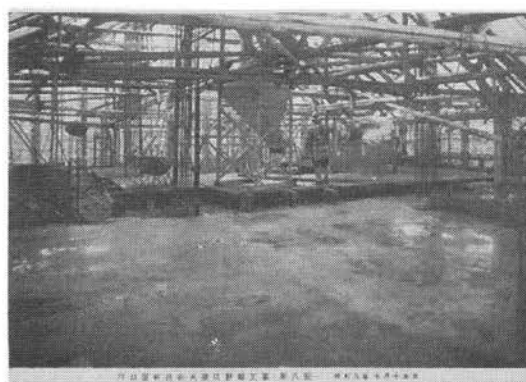
第六号



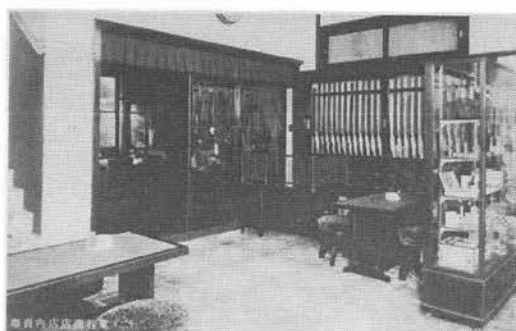
第七号



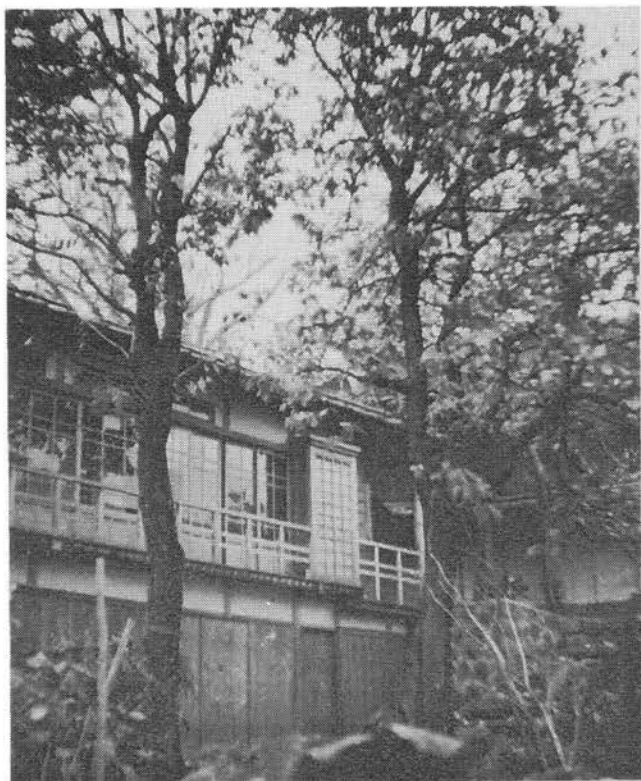
第八号



⑥栗屋商店 昭和9年（1934）



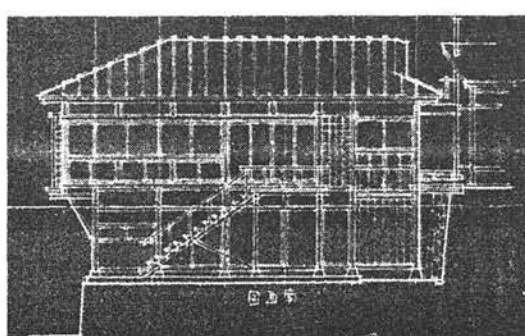
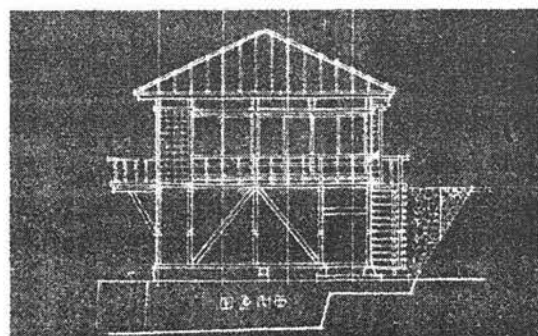
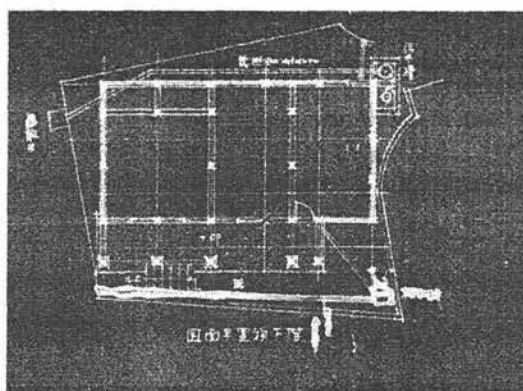
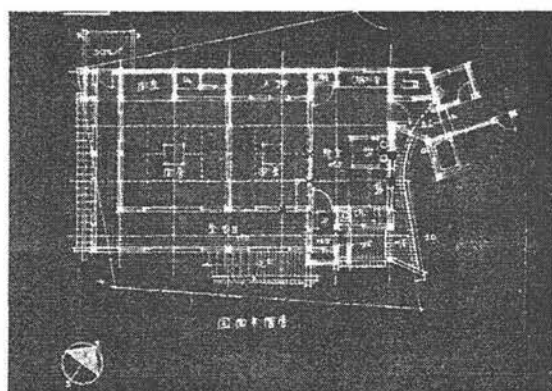
⑦藤原氏別宅 昭和10年(1935)



南側外観：建設当初

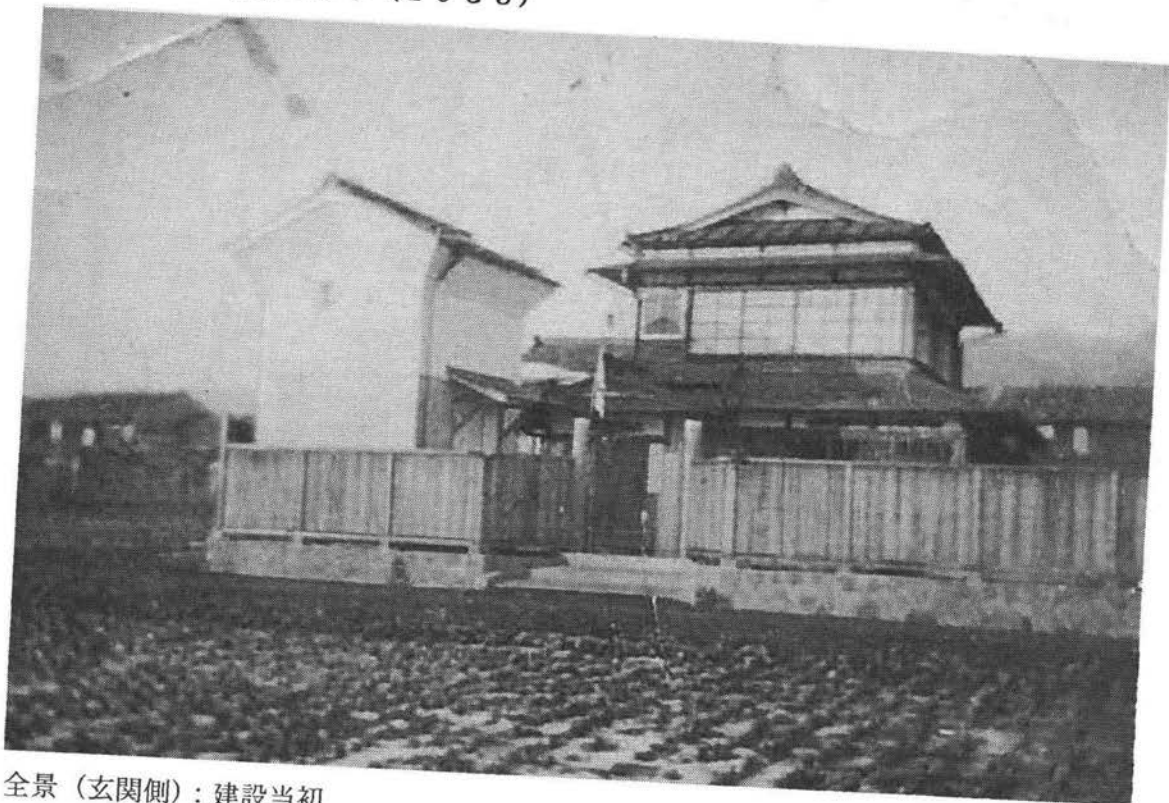


8帖間：均等割りでない建具棧

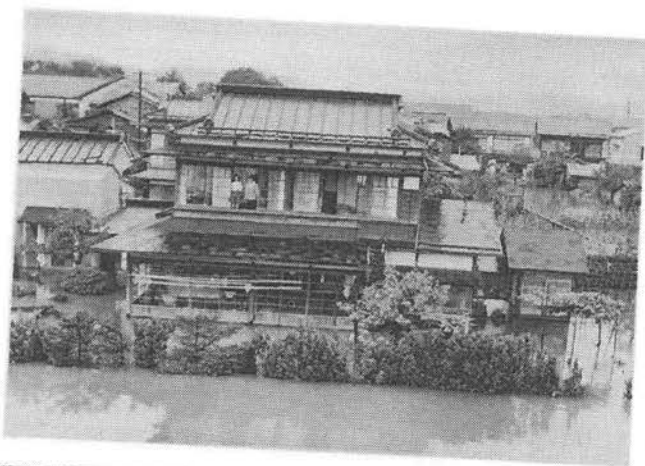


上：2階および1階平面図、下：西および南立面図

⑧五味巖邸 昭和10年(1935)



全景（玄関側）：建設当初



特徴ある建具棧



室内



縁先

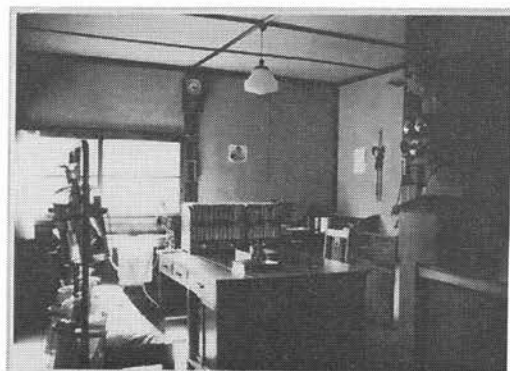
⑨富士見高原療養所 昭和12年（1937）



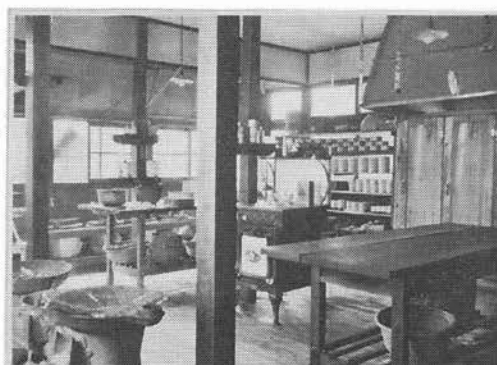
病 棟



病 棟



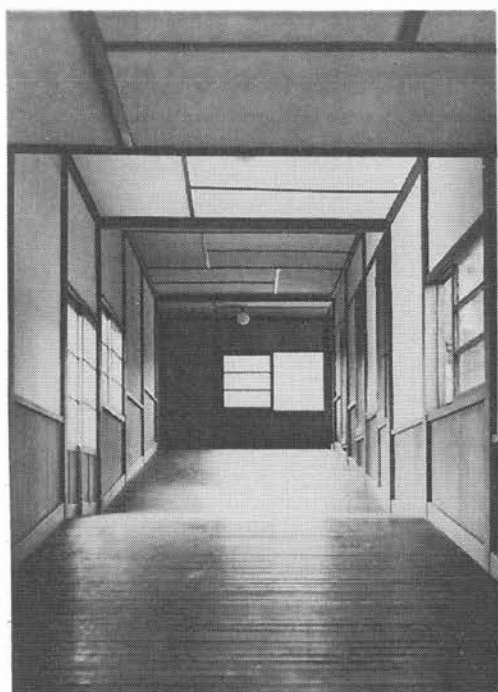
診療室



厨 房



病 室



廊 下



廊 下

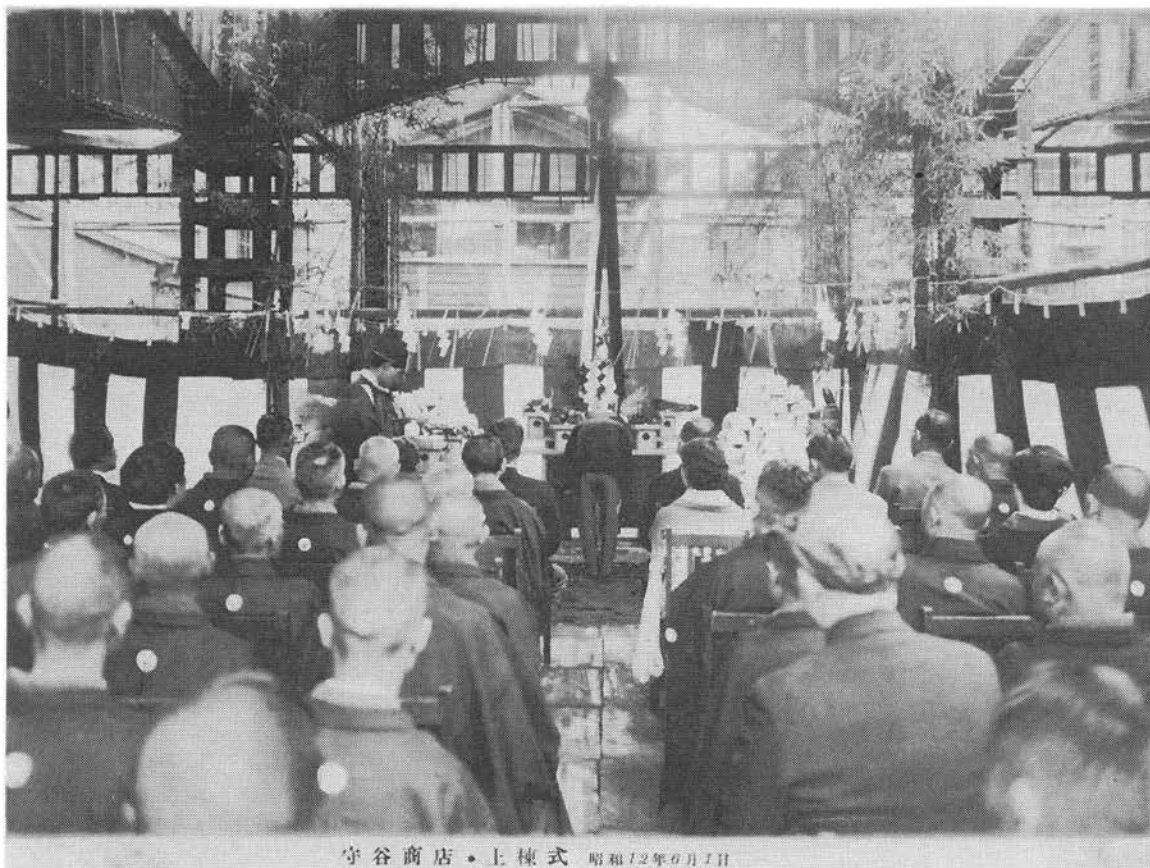
⑩守谷商店 昭和12年（1937）



隣家：三益商社

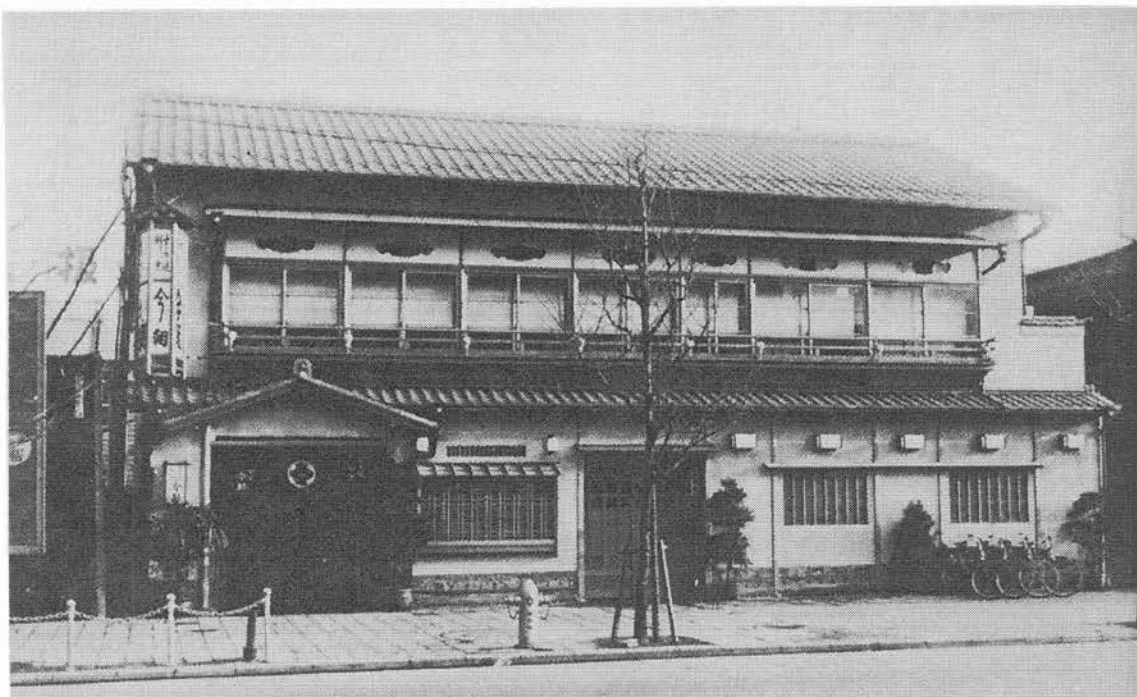
建設敷地

隣家：神田駅洋服店



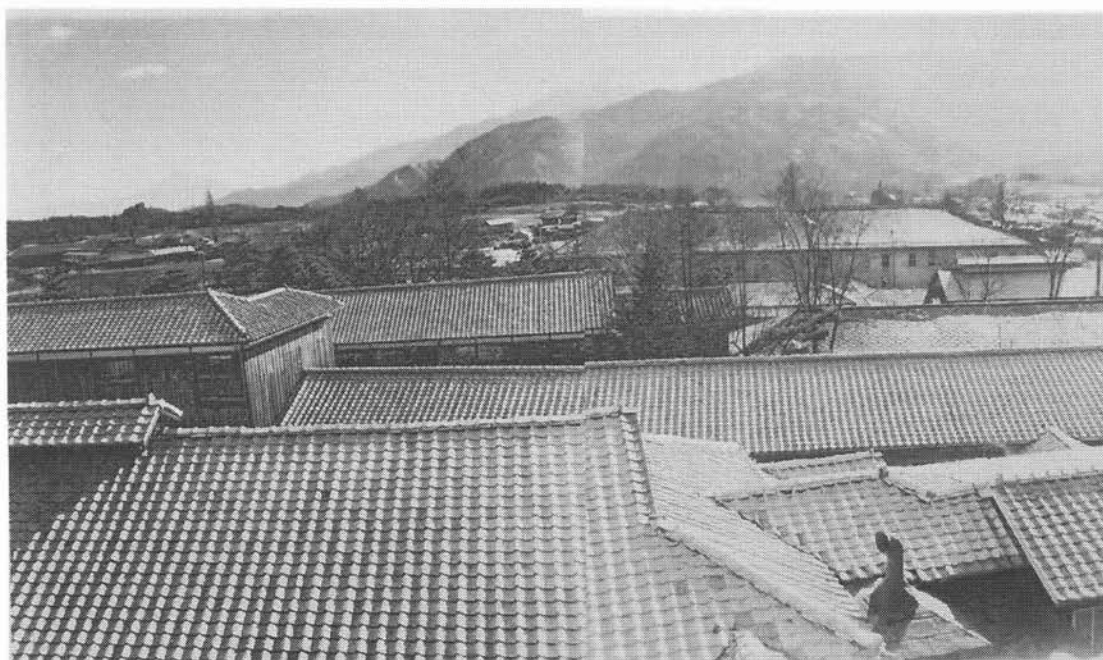
上棟式：昭和12年6月1日

⑪今朝 昭和13年（1938）

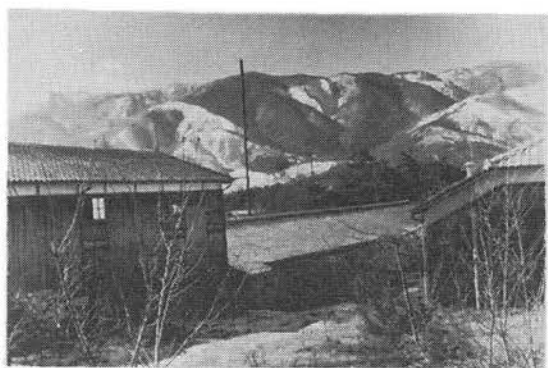


桃山風の意匠とされる

⑫富士見高原療養所 昭和25年・26年（1950～1951）



全 景

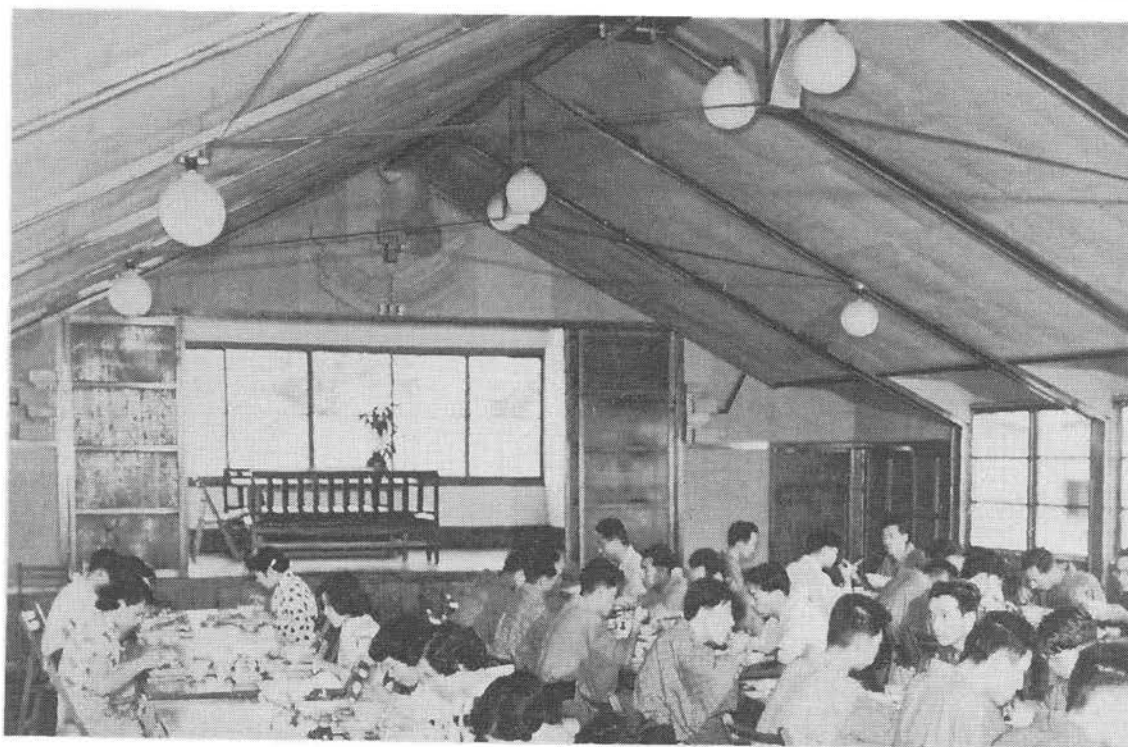


桂病棟



食堂

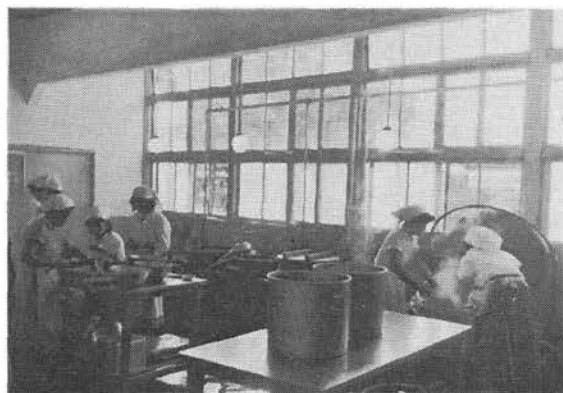
白樺病棟 1956年撮影



食堂兼講堂（舞台側） 1953年撮影



食堂兼講堂

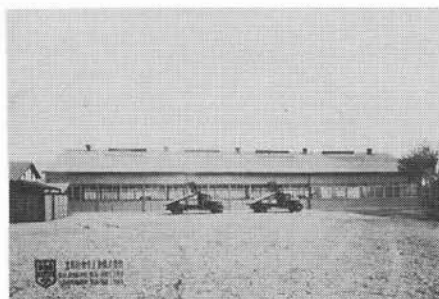
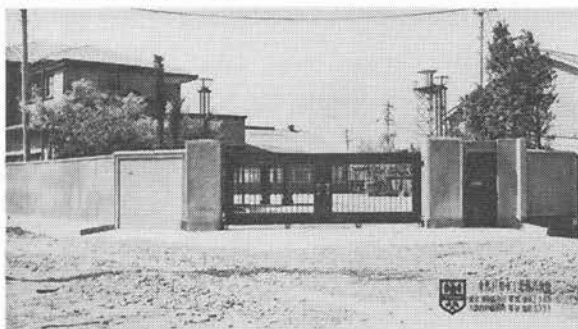


厨房

⑬茅野自転車店



⑭東邦自動車工業



第 4 章

建築家・岡見健彦の昭和前期の作品について

はじめに

本章では、ライトの愛弟子とされる遠藤新の設計事務所所員を経て¹、アメリカのライトのもとに学び、帰国後に、ライトの影響が明らかな高輪教会（1932）や頌栄高等女学校記念堂（1937）を設計したことで知られ、モダニズムの影響も見られるものの、自己の作風に収束したと推察される岡見健彦の住宅作品の特徴について考察する。

なお、資料は2002年から2003年にかけての調査²により存在が明らかになった2冊のスケッチノート及び約700枚の原図のうち、原図を使用した。

1. 岡見健彦の略歴

岡見健彦は、明治31年（1898）3月29日に岡見義治と光子の長男として生まれた。大正14年（1925）に東京美術学校建築科を卒業し、遠藤新建築創作所に入所した。昭和3年7月31日に同所を辞任し、同年12月に渡米して、昭和4年（1929）8月6日から昭和5年8月6日までライトの工房タリアセン（1932年に学校となる）に滞在した。その後、パリにル・コルビュジェの事務所を訪ね、ジャンヌレに会うなどして帰国した。³

岡見は、帰国後の昭和7年（1932）に岡見健彦設計事務所を開設し、高輪教会を始め、主に住宅の設計を行った。ちなみに、前章に示した写真「遠藤新とスタッフ」の中の八木橋西造は、岡見の所員として昭和7年から昭和17年頃まで勤務していた⁴。

戦後の岡見は、昭和21年にアメリカ海軍施設部の設計部門に所属し、昭和34年（1959）に退職している。退職後も住宅や教会を設計したが、昭和47年（1972）12月3日に74歳で没した⁵。

2. 住宅作品

これまで岡見の住宅作品については、間邸、水谷邸、若尾別邸、小町谷操三邸および岡見自邸（戦前と戦後の2軒）の6軒が知られていた⁶。しかしながら、その建物内容については明らかでなかった。この度の調査で、既出の6軒の内の戦前の岡見自邸を除く5軒を含む24軒の住宅原図の存在が判明した。

そのうちの21軒について、平面図及び年代の記入が認められ、ほかにも仕様書あるいは外観を示す立面図や透視図が確認できた。

次の21軒が確認できた住宅である。

①間邸（1933）、②岡見富雄邸（1933）、③永島邸（1933）、④今岡邸、

⑤-1 由良邸 (1935), ⑥山川邸 (1935), ⑦岡見弟三邸 (1936), ⑧藤田邸 (1936), ⑨林 (リン) 邸 (1937), ⑩増田邸 (1937), ⑪田中邸 (1937), ⑫鳥居邸 (1937), ⑬水谷邸 (1938), ⑭山中湖畔の家 (1939), ⑮小川邸 (1940), ⑯大森氏貸家 (1941), ⑤-2 由良邸 (1942), 昭和後期(戦後)の⑰BAGAI 邸 (1953), ⑱小町谷操三邸 (1956), ⑲依田邸 (1956), ⑳岡見自邸 (1956)

なお, ⑭山中湖畔の家は, 既出の若尾別邸と同一建物である。(①から⑳は, [表1] 及び図版に示した番号。ただし, 2 軒の由良邸については⑤-1, ⑤-2 とした。)

以上 21 軒のほか, 年代不明あるいは建築内容が明らかでない, 岡邸, 住宅, 松平市三郎邸 (1933), 小住宅 (1963) の 4 件がある。

3. 昭和前期の住宅の特徴

ライトの住宅の特徴として, 水平線を強調した外観デザイン, 緩勾配の屋根, 切妻屋根ケラバの転び, 深い軒の出, 連続した開き窓, 均等でない建具の棧割り, 凹凸の多い平面形, 部屋の 3 面の開口部, 造り付長椅子, 造り付棚などが知られている⁷。ほかにも, 切妻屋根や寄せ棟屋根あるいは陸屋根を多用している。

岡見の住宅の特徴について [表1] に示した 21 軒のうち, 昭和前期 (戦前) の①から⑯までの 17 軒の外観と平面について見てみる。

1) 外観について

(1) 屋根

・緩勾配屋根は, ①間邸, ②岡見富雄邸, ④今岡邸, ⑤-1 由良邸, ⑥山川邸, ⑦岡見弟三邸, ⑨林邸, ⑩増田邸, ⑪田中邸, ⑫鳥居邸, ⑬水谷邸, ⑭山中湖畔の家, ⑮小川邸, ⑯大森邸貸家, ⑤-2 由良邸に認められ, 17 軒中の 15 軒 (88%) であり, ほぼ全てに見られる。

・屋根形状については, 寄せ棟屋根が, ①間邸, ②岡見富雄邸, ④今岡邸, ⑥山川邸, ⑦岡見弟三邸, ⑨林邸, ⑪田中邸, ⑫鳥居邸, ⑬水谷邸にみられ, 半数を超える 9 軒 (53%) ある。切妻屋根は, ②岡見富雄邸, ⑥山川邸, ⑦岡見弟三邸, ⑩増田邸, ⑭山中湖畔の家, ⑮小川邸, ⑯大森邸貸家, ⑤-2 由良邸の 8 軒 (47%) あり, 陸屋根が, ①間邸, ②岡見富雄邸, ⑦岡見弟三邸, ⑧藤田邸, ⑨林邸, ⑪田中邸, ⑮小川邸の 7 軒 (41%) で, 各屋根形状が, ほぼ半数の建物に見られる。また, 各形状の併用が, ①間邸, ②岡見富雄邸, ⑥山川邸, ⑦岡見弟三邸, ⑨林邸, ⑪田中邸, ⑮小川邸の 7 軒 (41%) にみられることが分かる。⑤-1 由良邸は, 片流れ屋根 (6%) を用いている。

陸屋根のみの建物は, ⑧藤田邸 1 軒 (6%) であり, 他の住宅にも見られるモダニズムの影響が⑧藤田邸に顕著である。

・屋根葺き材は, 瓦が 1 番多く, ②岡見富雄邸, ④今岡邸, ⑥山川邸, ⑦岡見弟三邸, ⑨林邸, ⑩増田邸, ⑪田中邸, ⑫鳥居邸, ⑬水谷邸, ⑭山中湖畔の家, ⑮小川邸, ⑯大森邸貸家, ⑤-2 由良邸の 13 軒 (76%) に使用している。

・深い軒の出は、②岡見富雄邸、⑨林邸、⑪田中邸、⑫鳥居邸、⑬水谷邸、⑭山中湖畔の家、⑮小川邸にみられ、17軒中の7軒（41％）になる。なお、⑥山川邸、⑦岡見第三邸、⑩増田邸の3軒（18％）については軒の深い部分と浅い部分が同時に見られるが、建物全体としては「深い軒の出」とは言い難い。

（2）水平線の強調

水平線の強調は、鼻隠しやパラペット上部板材あるいは窓上下端位置の水平材等によるが、ここでは、①間邸、②岡見富雄邸、④今岡邸、⑥山川邸、⑦岡見第三邸、⑧藤田邸、⑨林邸、⑩増田邸、⑪田中邸、⑫鳥居邸、⑬水谷邸、⑭山中湖畔の家、⑮小川邸の13軒（76％）に見られる。

（3）開口部

開き窓は、①間邸、②岡見富雄邸、④今岡邸、⑤・1 由良邸、⑧藤田邸、⑨林邸、⑪田中邸、⑬水谷邸の8軒（47％）に見られ、引き違い窓は、①間邸、②岡見富雄邸、④今岡邸、⑤・1 由良邸、⑥山川邸、⑦岡見第三邸、⑧藤田邸、⑨林邸、⑩増田邸、⑪田中邸、⑫鳥居邸、⑬水谷邸、⑭山中湖畔の家、⑮小川邸、⑯大森邸貸家、⑤・2 由良邸の16軒（94％）に見られる。

また、均等割りでない棧の建具は、⑮小川邸1軒（6％）に見られる。なお、[表1]の項目には無いが、①間邸には丸窓の使用が見られる。

（4）外壁仕上

外壁は左官仕上が一番多く、②岡見富雄邸、⑤・1 由良邸、⑦岡見第三邸、⑧藤田邸、⑨林邸、⑪田中邸、⑭山中湖畔の家、⑮小川邸、⑯大森邸貸家、⑤・2 由良邸の10軒（59％）に見られる。2番目に多いのは、内法高までが下見板張りで内法高以上が左官仕上のもので、⑥山川邸、⑩増田邸、⑫鳥居邸、⑬水谷邸の4軒（24％）あり、続いて内法高までがタイル張りで内法高以上が左官仕上の、①間邸、④今岡邸の2軒（12％）ある。なお、1軒が明らかでない。

（5）その他

・建物と統一された門塀デザインは、①間邸、②岡見富雄邸、③永島邸、④今岡邸、⑤・1 由良邸、⑨林邸、⑩増田邸、⑫鳥居邸、⑮小川邸の半数を超える9軒（53％）に見られる。

なお、テラスおよびバルコニーについては、平面の項目で見る。

2）平面について

（1）平面の型

平面の型⁸は、長方形型平面が1番多く、③永島邸、④今岡邸、⑥山川邸、⑩増田邸、⑫鳥居邸、⑬水谷邸、⑯大森邸貸家、⑤・2 由良邸の8軒（47％）あり、約半数となっている。正方形型平面の⑤・1 由良邸1軒（6％）を加えると9軒（53％）となり、半数を超える。次に多い複合型が、⑧藤田邸、⑨林邸、⑪田中邸、⑮小川邸の4軒（24％）で、一文字変形型が、①間邸、⑦岡見第三邸、⑭山中湖畔の家の3軒（18％）ある。

ちなみに、長方形型平面は遠藤設計の住宅平面24軒中に2軒、正方形型平面は3軒が昭和初期に、また、一文字型および一文字変形型は大正期の3軒に見られる⁹。

[表1] 岡見健彦設計による住宅の特徴

図面日付 (最新)	建物名称	昭和 八年 (二月一日)	昭和 八年 (五月五日)	昭和 八年 (九月)	昭和 九年 (二月)	昭和 一〇年 (七月二〇日)	昭和 一〇年 (十二月)	昭和 一一年 (一月)	昭和 一一年 (七月)	昭和 一二年 (二月)	昭和 一二年 (四月八・九日)	昭和 一二年 (四月八日)	昭和 一二年 (六月)	昭和 一三年 (六月)	昭和 一四年 (六月)	昭和 一五年 (二月六日)	昭和 一六年 (二月二三日)	昭和 一七年 (一月二日)	昭和 一八年 (四月一五日)	昭和 三一年 (三月三日)	昭和 三一年 (一〇月)	昭和 三一年
		①	②	③	④	⑤ — — —	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰ 5—2 — —	⑱ BAGAI部	⑲ 小町谷三郎	⑳ 依田部	㉑ 岡見健彦自部
平屋	特徴	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二階層		○	○	○	—	—	—	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
外 観	緩勾配屋根	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	切妻屋根	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	寄せ棟屋根	○	○	—	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	入母屋屋根	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	方形屋根	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	片流れ屋根	—	—	—	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	陸屋根	○	○	—	—	—	—	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	屋根葺き	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	金属板瓦葺き	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	金属板葺き	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	スレート葺き	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	瓦葺き	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	防水層+モルタル(タイル)	○	○	—	—	—	—	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	深い軒の出	—	○	—	—	—	△	△	—	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
	屋根付きテラス	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	ケラバの転び	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	鼻隠しの転び	○	—	—	—	—	—	△	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	塔状の煙突	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	—	—	○	—	—	—	—	—	—	—
	塔状のトップライト	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	水平線の強調	○	○	—	—	—	—	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	テラス	—	○	—	—	—	—	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	バルコニー	○	○	—	—	—	—	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	太柱	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	均等割りでない格子の建具	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	引き窓	○	○	—	○	○	—	—	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	引き違い窓	○	○	—	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	建物と統一された門構デザイン	○	○	○	○	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	建物と統一された照明器具デザイン	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	外壁	—	○	—	—	—	—	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	下見板	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	内法下見板・上部左官	—	—	—	—	—	○	—	—	—	○	—	○	○	—	—	—	—	—	—	—	—
	内法下見板・上部右官	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	羽目板	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
平 面	一文字型平面	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	一文字変形型平面	○	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○
	丁字型平面	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	L字型平面	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	十字型平面	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	長方形型平面	—	—	○	○	—	○	—	—	—	○	—	○	○	—	—	○	○	○	○	○	○
	正方形型平面	—	—	—	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	雁行型平面	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	複合型平面	—	—	—	—	—	—	—	○	○	—	○	—	—	—	—	○	—	—	—	—	—
	凹凸の多い平面形	○	○	○	○	—	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	スキップフロア	—	—	○	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	廊下がない	—	—	—	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	開口	—	○	○	—	○	—	—	—	—	—	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	開口部	○	○	○	○	○	—	—	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	引き違い窓	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	造り付けソファ	○	—	○	—	—	—	—	○	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	造り付け収納(押入れを除く)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	太柱	—	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	テラス	—	○	○	○	—	—	○	○	○	—	○	○	—	○	○	—	—	○	○	○	○
	ルーフバルコニー	○	○	○	—	—	—	○	○	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	池	—	—	○	—	—	—	○	○	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

①～㉑の住宅は、年代記入と平面図が有り、なおかつ外観を示した図が有るもの(図面は原図)

<凡例>

○: 有り △: どちらともいえない
—: 無し /: 該当資料無し

（２）凹凸の多い平面

凹凸の多い平面は、①間邸、②岡見富雄邸、③永島邸、④今岡邸、⑦岡見第三邸、⑧藤田邸、⑨林邸、⑩増田邸、⑪田中邸、⑫鳥居邸、⑬水谷邸、⑭山中湖畔の家、⑮小川邸の１３軒（７６％）あり、１７軒中の約８割を占めている。

（３）開口部

室３面の開口部は、②岡見富雄邸、③永島邸、⑥山川邸、⑪田中邸、⑫鳥居邸、⑬水谷邸、⑭山中湖畔の家の、７軒（４１％）に見られる。

また、開口形式については、開き窓は、①間邸、②岡見富雄邸、③永島邸、④今岡邸、⑤・１由良邸、⑨林邸、⑪田中邸、⑬水谷邸の８軒（４７％）にあり、引き違い窓は全建物１７軒（１００％）に見られる。このことから、両形式の併用は、８軒（４７％）あることが分かる。

ちなみに遠藤設計の住宅では、両形式の併用は大正期に多く見られ、昭和初期には引き違い窓のみの使用へと変化している。

（４）その他

造り付収納は、⑯大森邸貸家を除く１６軒（９４％）にみられ、造り付ソファは、①間邸、③永島邸、⑧藤田邸、⑨林邸、⑪田中邸、⑭山中湖畔の家の６軒（３５％）に見られる。また暖炉は、①間邸、③永島邸、⑨林邸、⑪田中邸、⑭山中湖畔の家の５軒（２９％）に設置されている。

テラスは、②岡見富雄邸、③永島邸、④今岡邸、⑦岡見第三邸、⑧藤田邸、⑨林邸、⑪田中邸、⑫鳥居邸、⑭山中湖畔の家、⑮小川邸の１０軒（５９％）に見られ、バルコニーは、①間邸、②岡見富雄邸、③永島邸、⑦岡見第三邸、⑧藤田邸、⑨林邸、⑪田中邸、⑮小川邸の８軒（４７％）に見られる。また、池については、③永島邸、⑦岡見第三邸、⑧藤田邸、⑨林邸、⑬水谷邸、⑮小川邸の６軒（３５％）に設置されている。

以上により、岡見健彦の住宅の作風について次のことが明らかになった。

屋根は、緩勾配屋根（８８％）と陸屋根（４１％）の併用が多数見られた。また、水平線の強調（７６％）やモダニズムの影響も見られた。建物と統一された門塀は半数を超える５３％あった。また、殆どが凹凸の多い平面形（７６％）で長方形型・正方形型平面（５３％）が半数を超え、一文字変形型（１８％）と複合型（２４％）合わせて４２％あった。

外壁は、左官仕上げ（５９％）、あるいは２種類の材料を併用した、下見張りとは左官仕上の併用（２４％）、およびタイル張りとは左官仕上の併用（１２％）を多用している。

開口部については、室３面の開口が４１％あり、開き窓（４７％）と引き違い窓（１００％）の併用が４７％あったが、昭和１４年以降は主に引き違い窓を使用している。ほかに、暖炉（２９％）、造り付ソファ（３５％）、造り付収納（９４％）、テラス（５９％）、バルコニー（４７％）、池（３５％）が岡見設計の住宅の特徴として考えられる。

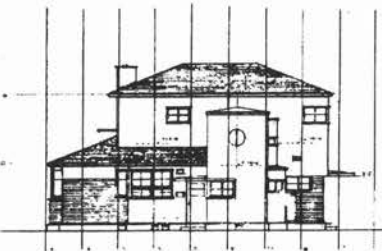
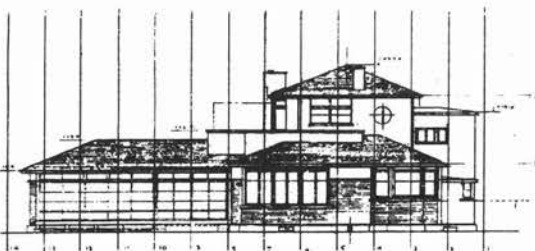
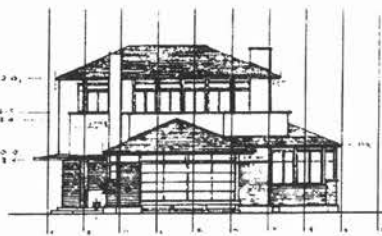
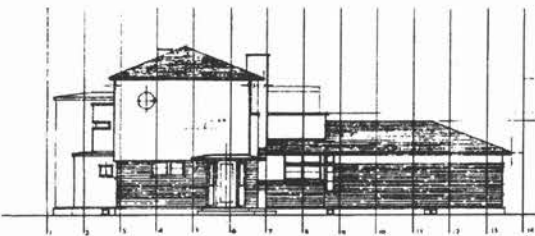
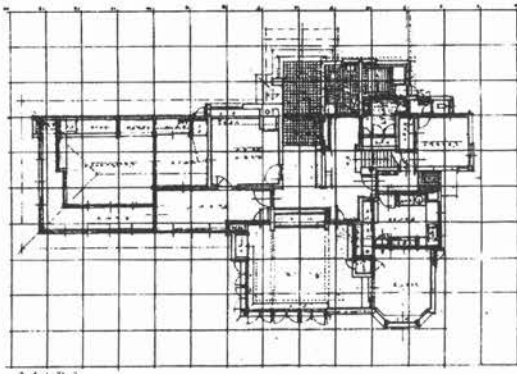
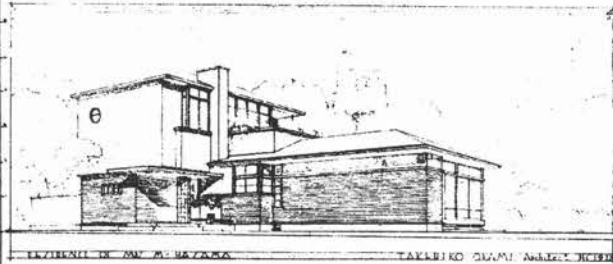
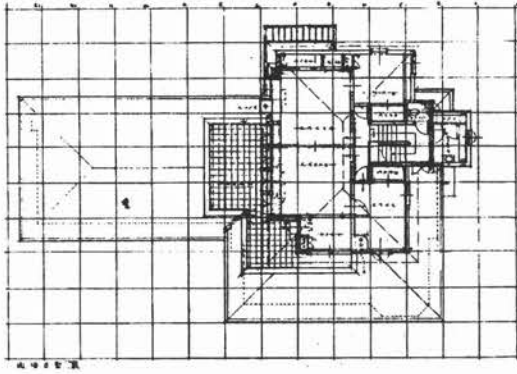
終わりに

原図に見る岡見健彦の設計になる住宅の外観および平面の特徴は、緩勾配屋根、瓦葺、水平線の強調、外壁の左官仕上あるいは下見板（タイル）と左官仕上の併用、建物と統一された門塀デザイン、凹凸の多い平面形、造り付家具、暖炉、テラス、バルコニー、室3面の開口部、など多くの点で、フランク・ロイド・ライトや遠藤新の住宅の特徴と共通していることが分かった。一方、①間邸に使用された丸窓に見るように、早い時期からモダニズムの影響が部分的に見られた。なお、モダニズムの影響は、陸屋根で四角い外観デザインの⑧藤田邸に最も顕著であり、⑨林（リン）邸にも同様の影響が見られた。しかし、その後は再び遠藤の影響と考えられる意匠を単純化した外観に収束している。

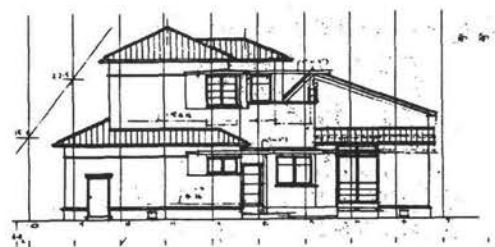
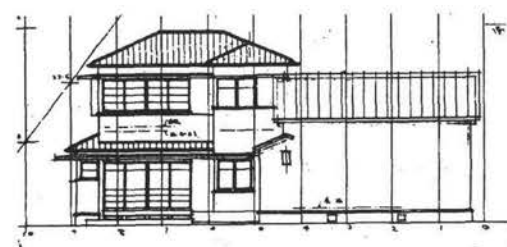
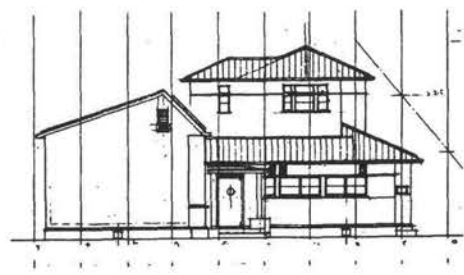
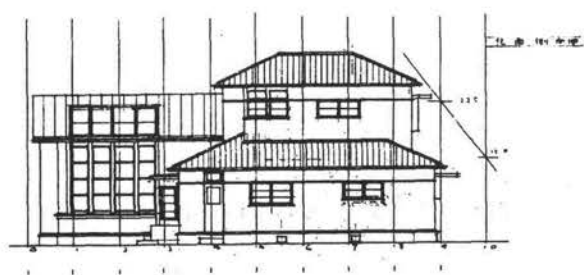
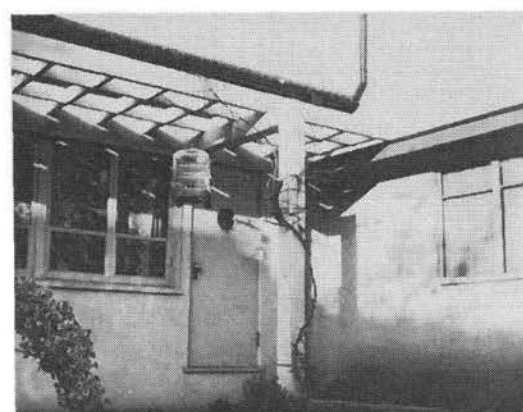
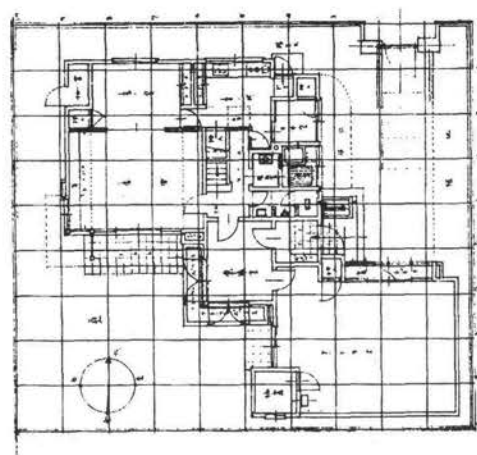
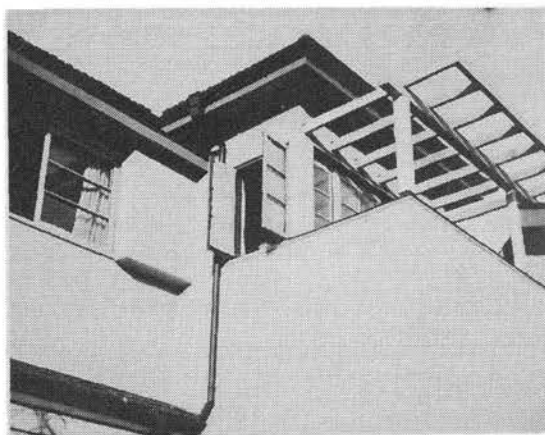
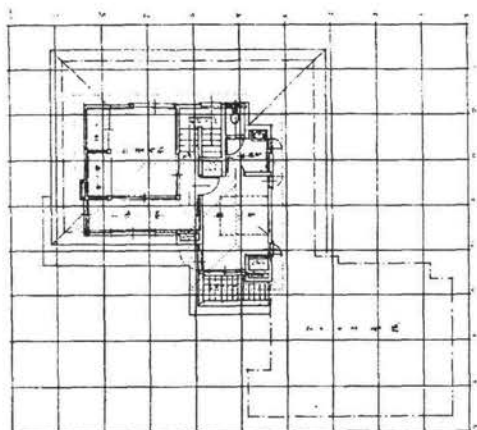
つまり、岡見はライトや遠藤から受けた影響を基盤としながら、モダニズムの影響を受けた後、より単純化した独自の住宅デザインを展開したものと考えられる。

岡見健彦 住宅作品

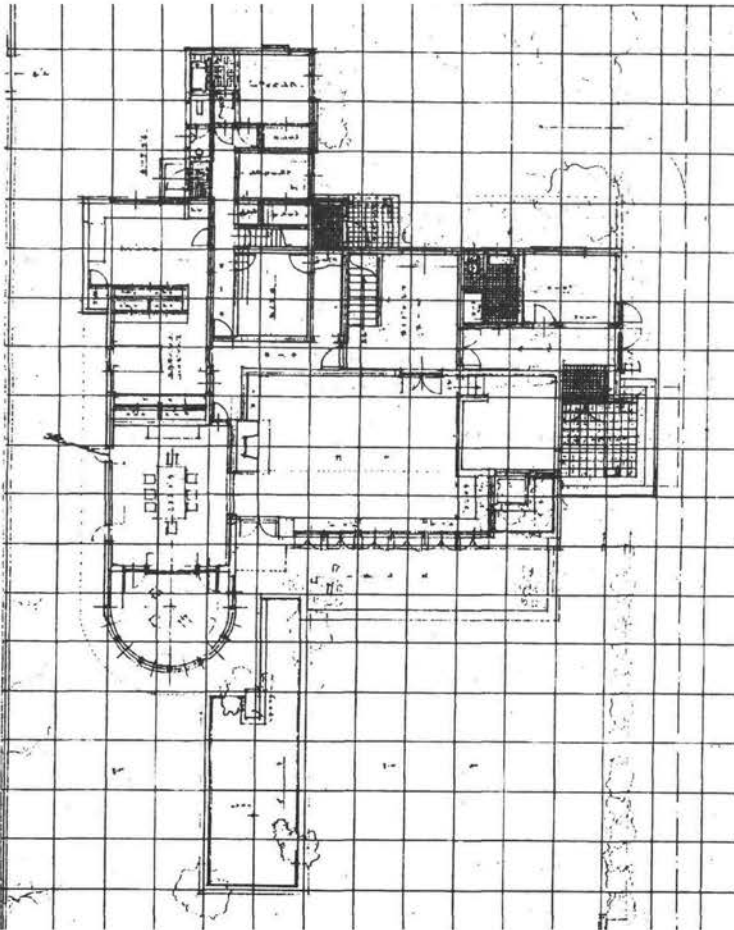
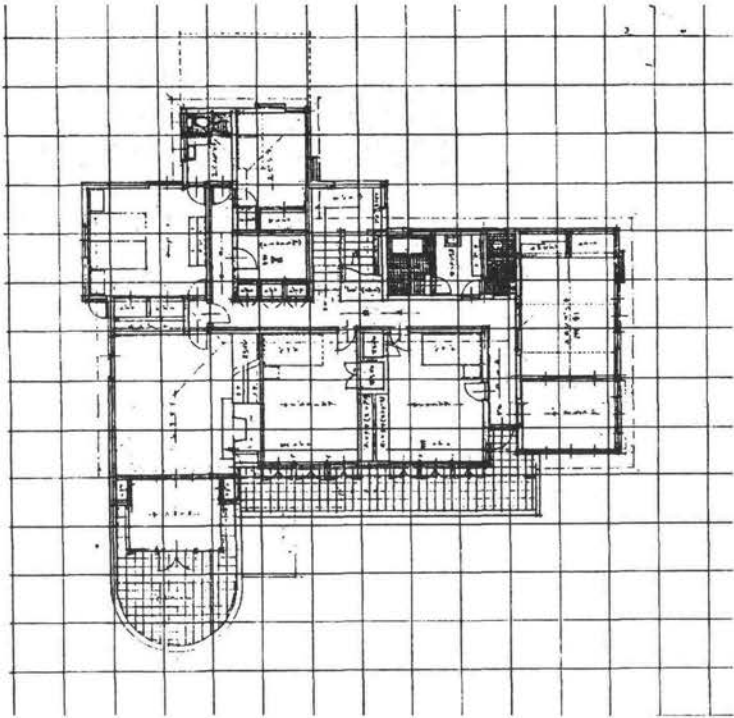
①間邸 S8.02.01 (1933)



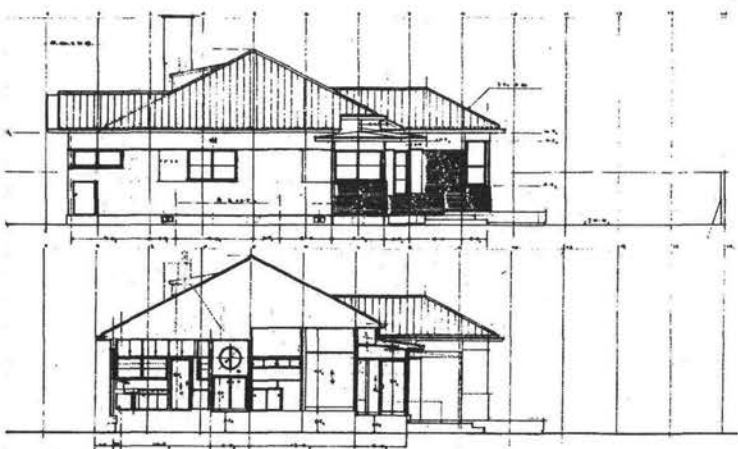
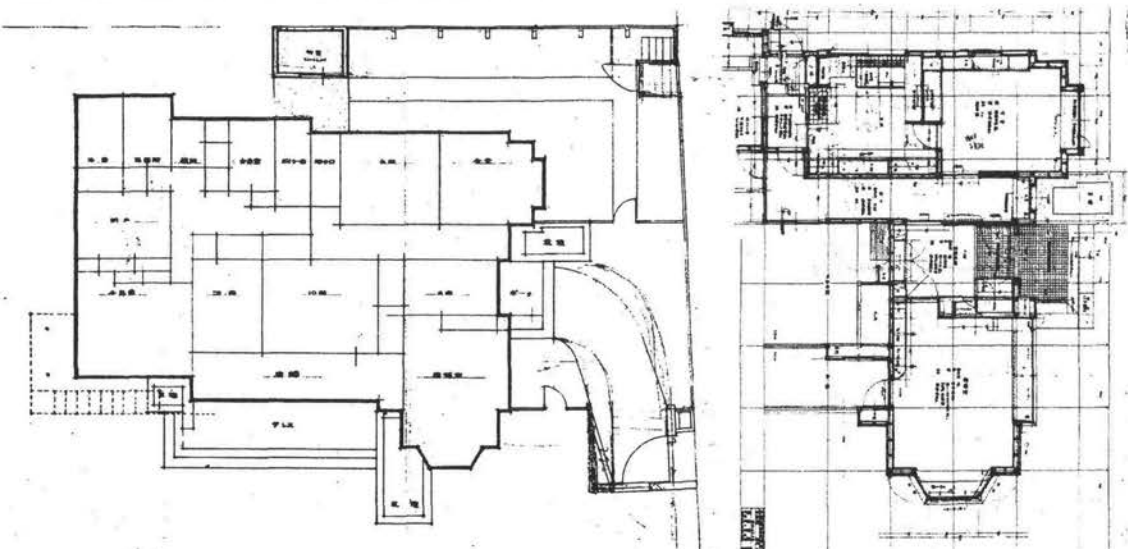
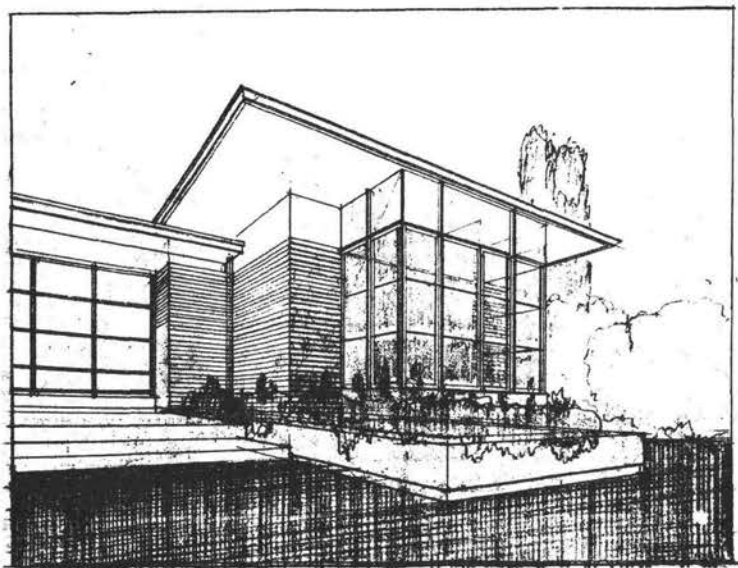
②岡見富雄邸 S8.05.05 (1933)



③永島邸 S8.09 (1933)



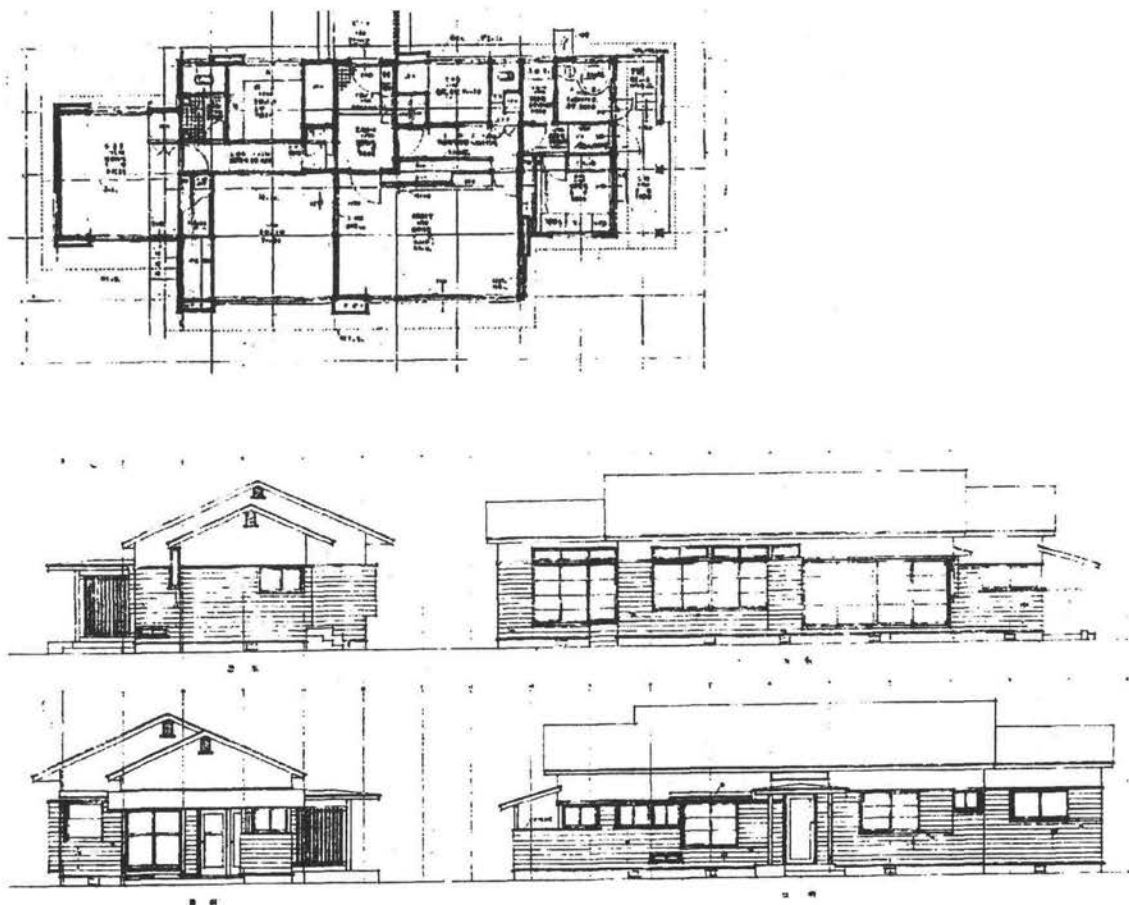
④今岡邸 S9.10 (1934)



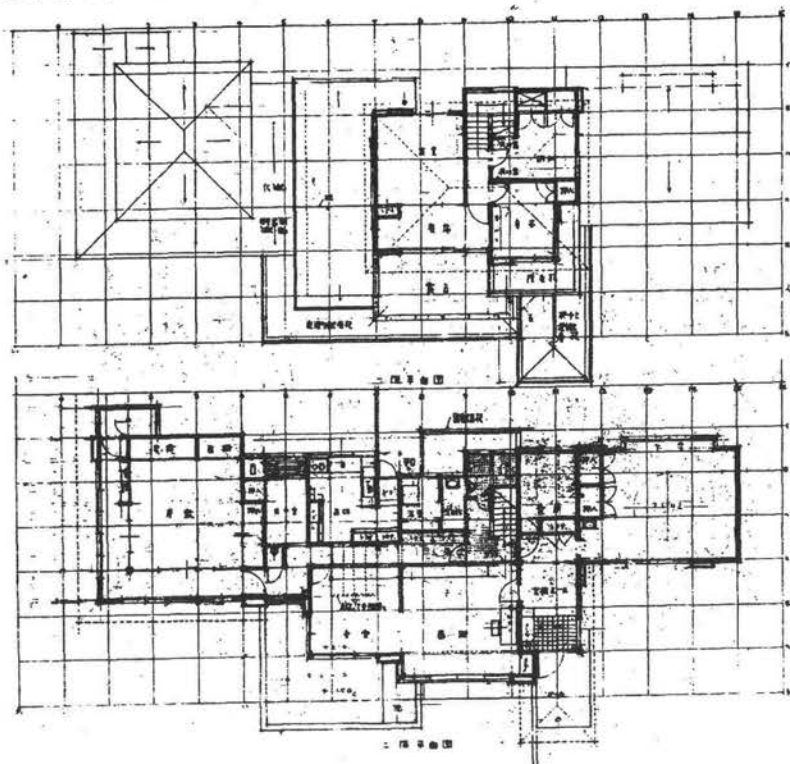
⑤-1 由良邸 S10.07.02 (1935)



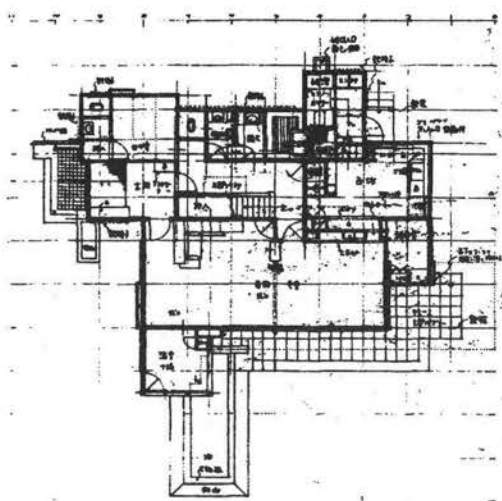
⑥山川邸 S10.12 (1935) 平面図 S10 立面図



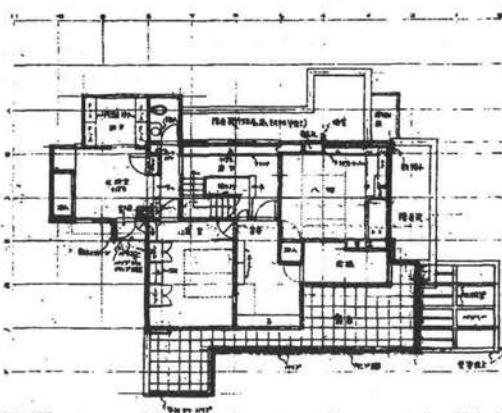
⑦岡見第三邸 S11.01 (1936)



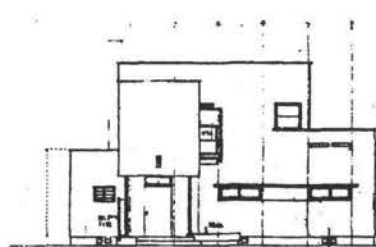
⑧藤田邸 S11.07 (1936)



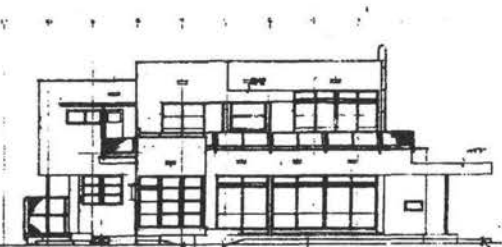
一 階 平 面 図



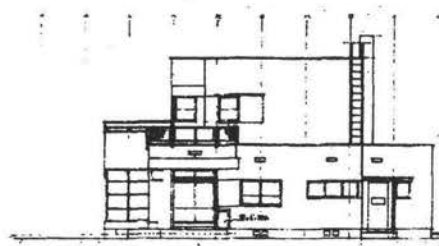
二 階 平 面 図



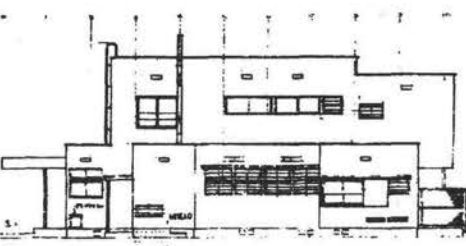
左 側 図



右 側 図

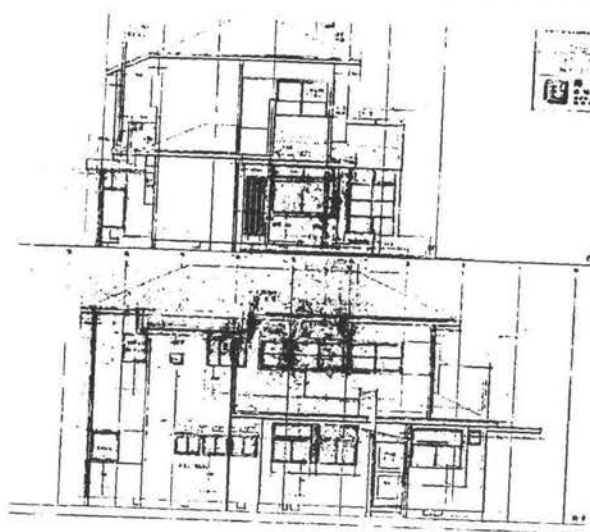
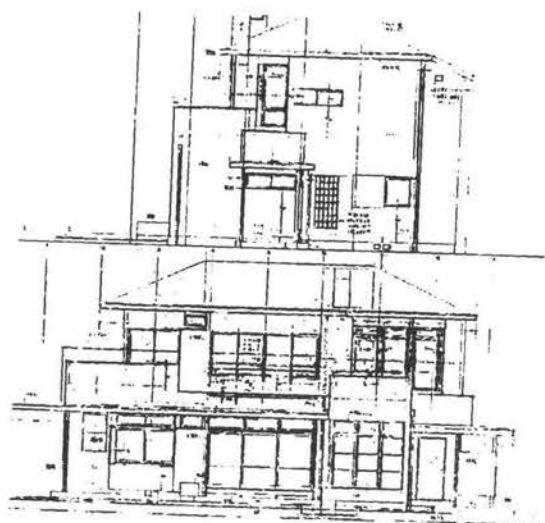
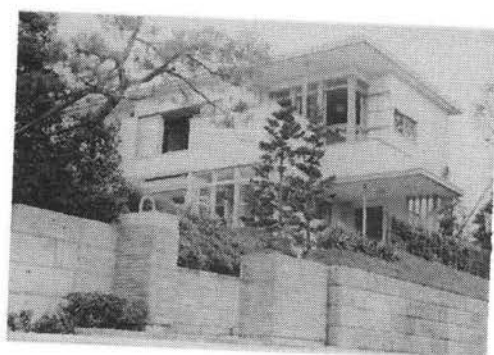
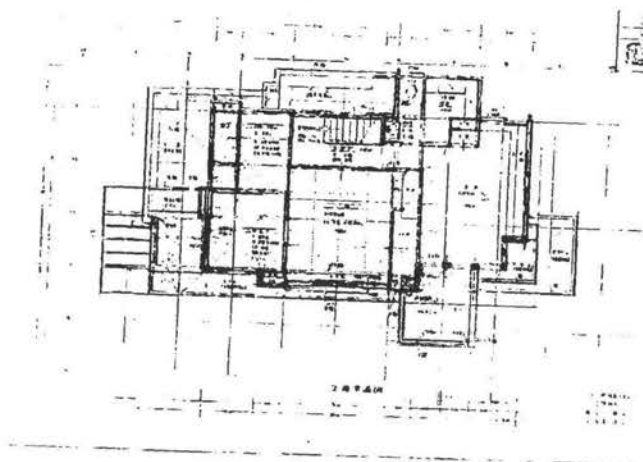
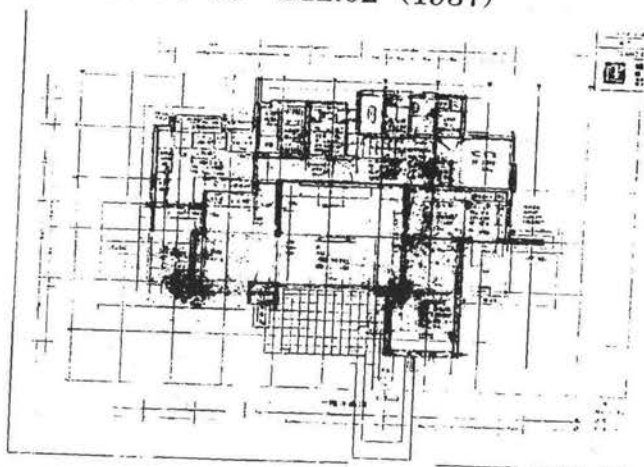


前 面 図

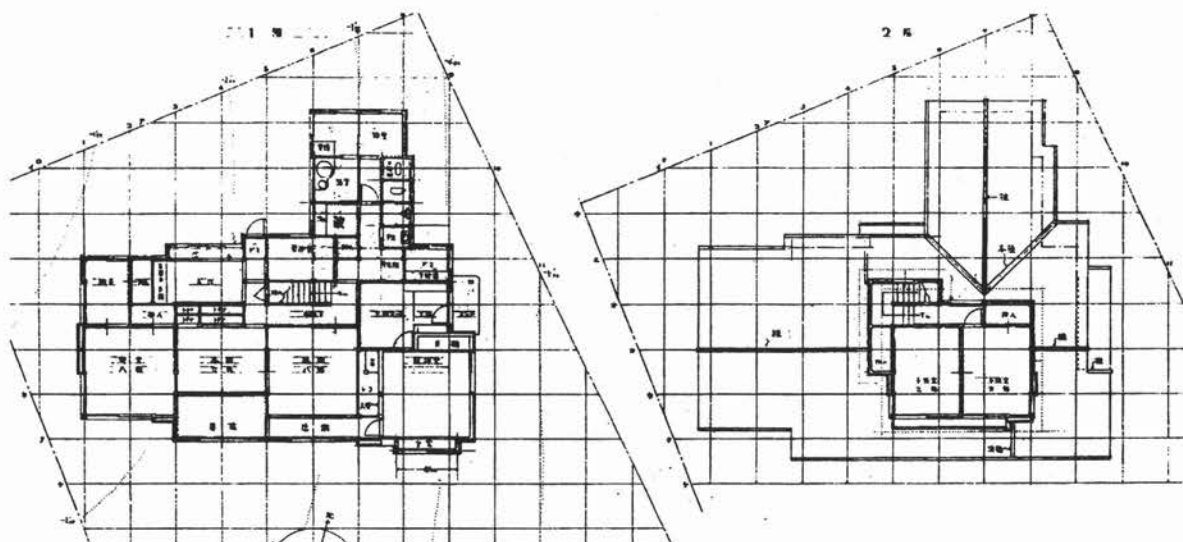


後 面 図

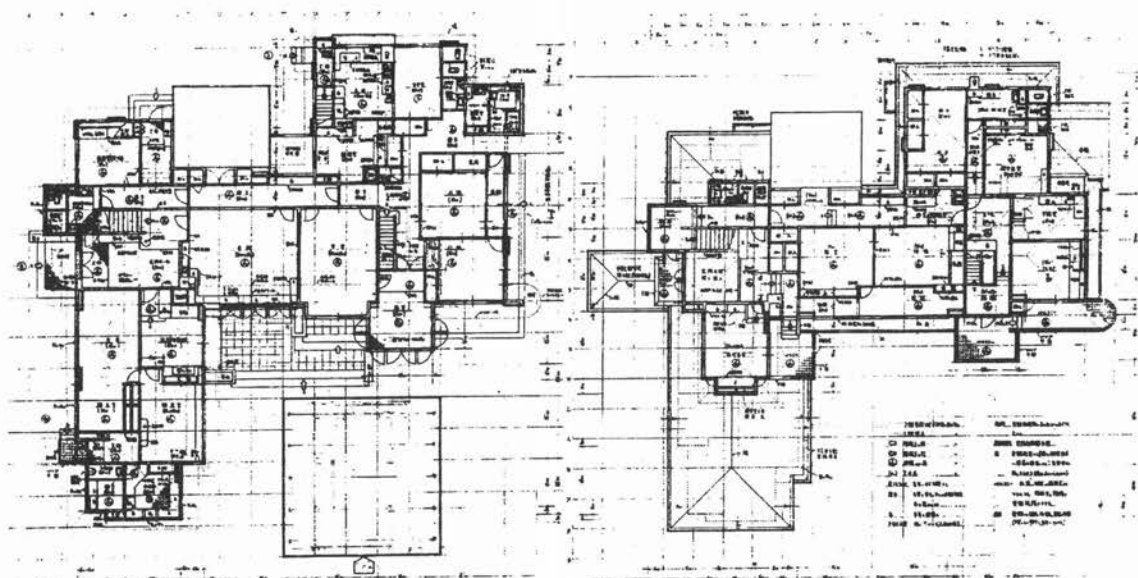
⑨林 (リン) 邸 S12.02 (1937)



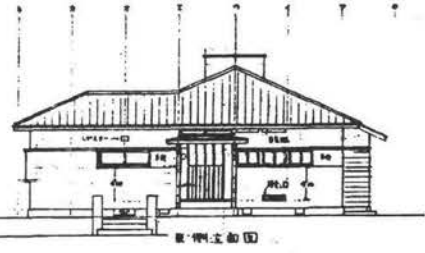
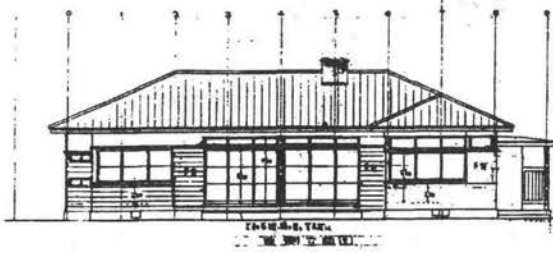
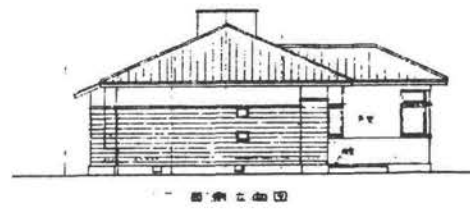
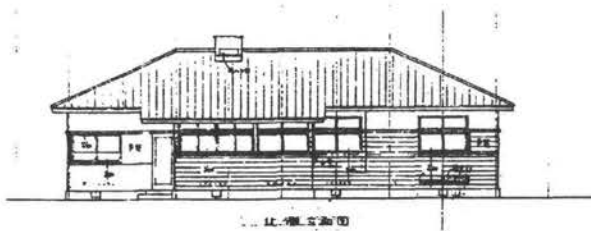
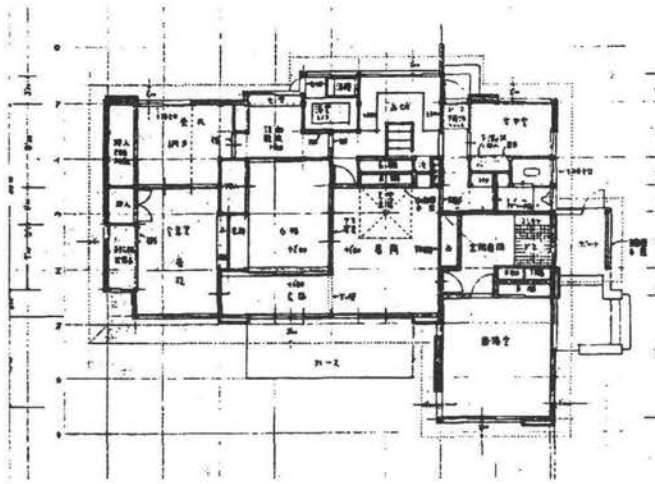
⑩増田邸 S12.04.08 (1937) 平面図 S12.04.09 立面図



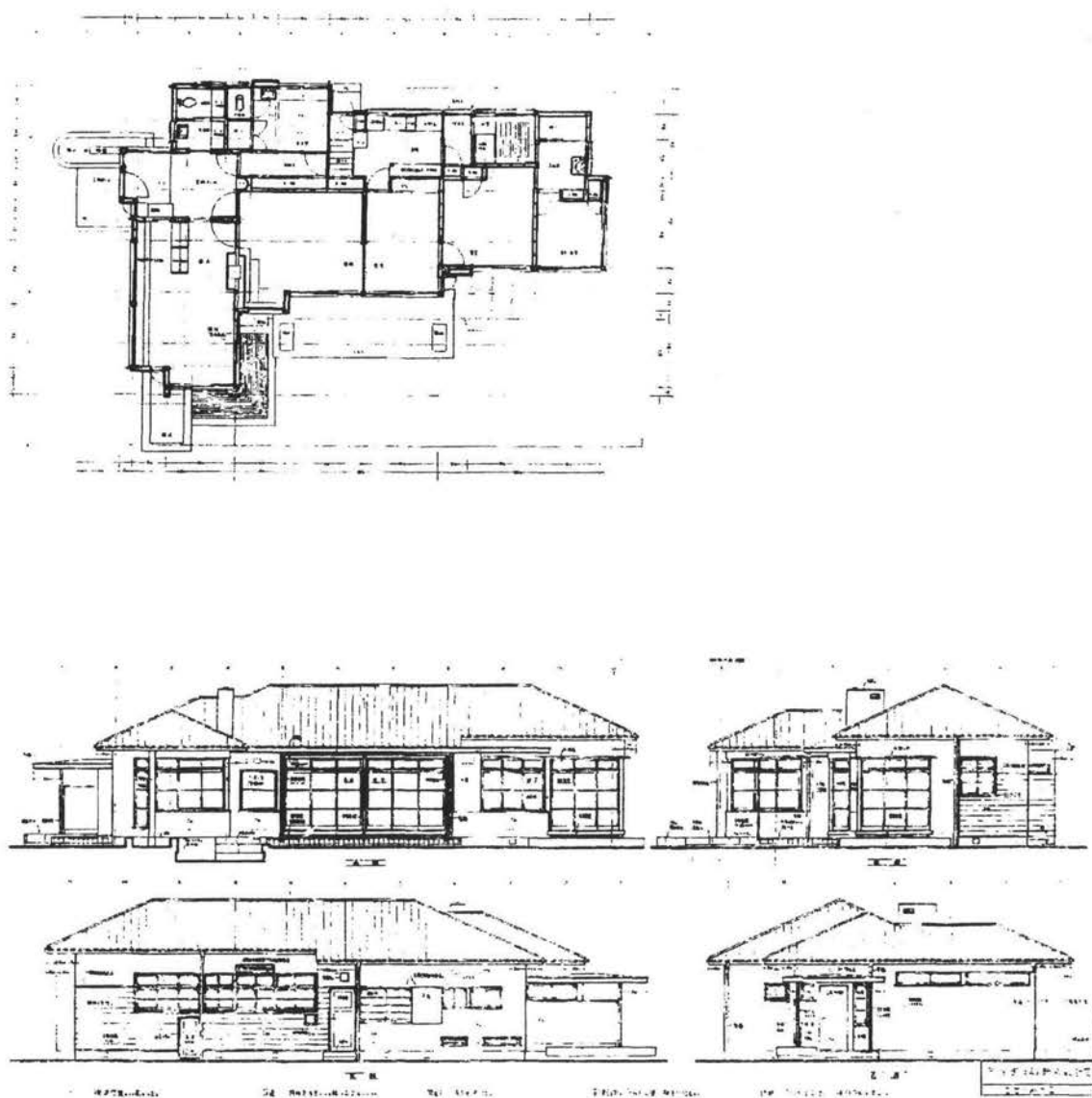
⑪田中邸 S12.04.08 (1937)



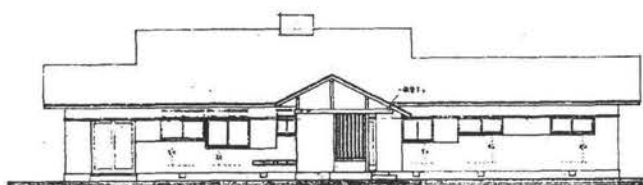
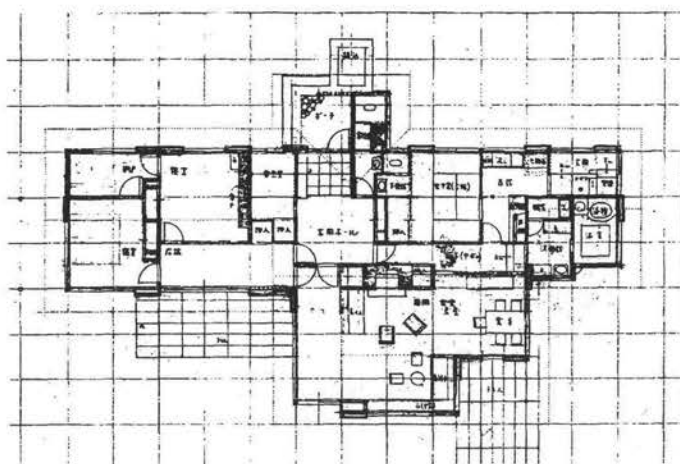
⑫鳥居邸 S12.06 (1937)



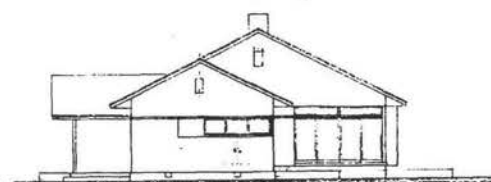
⑬水谷邸 S13.06 (1938)



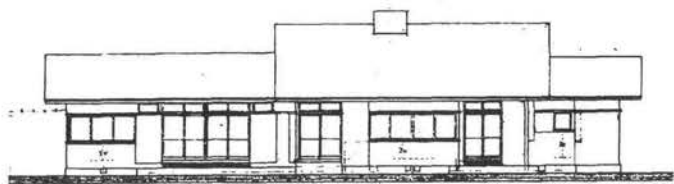
⑭山中湖畔の家 S14.06 (1939)



正面
(4.5m)



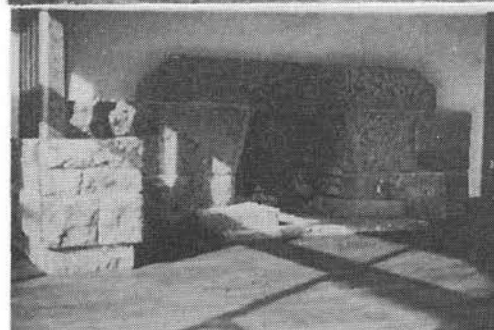
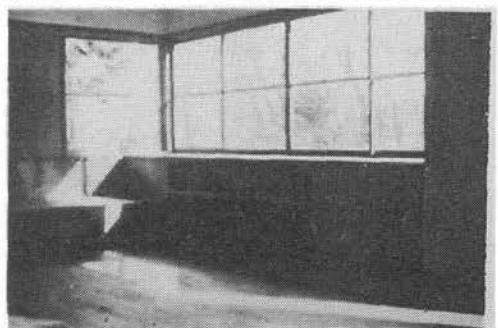
右側
(4.5m)



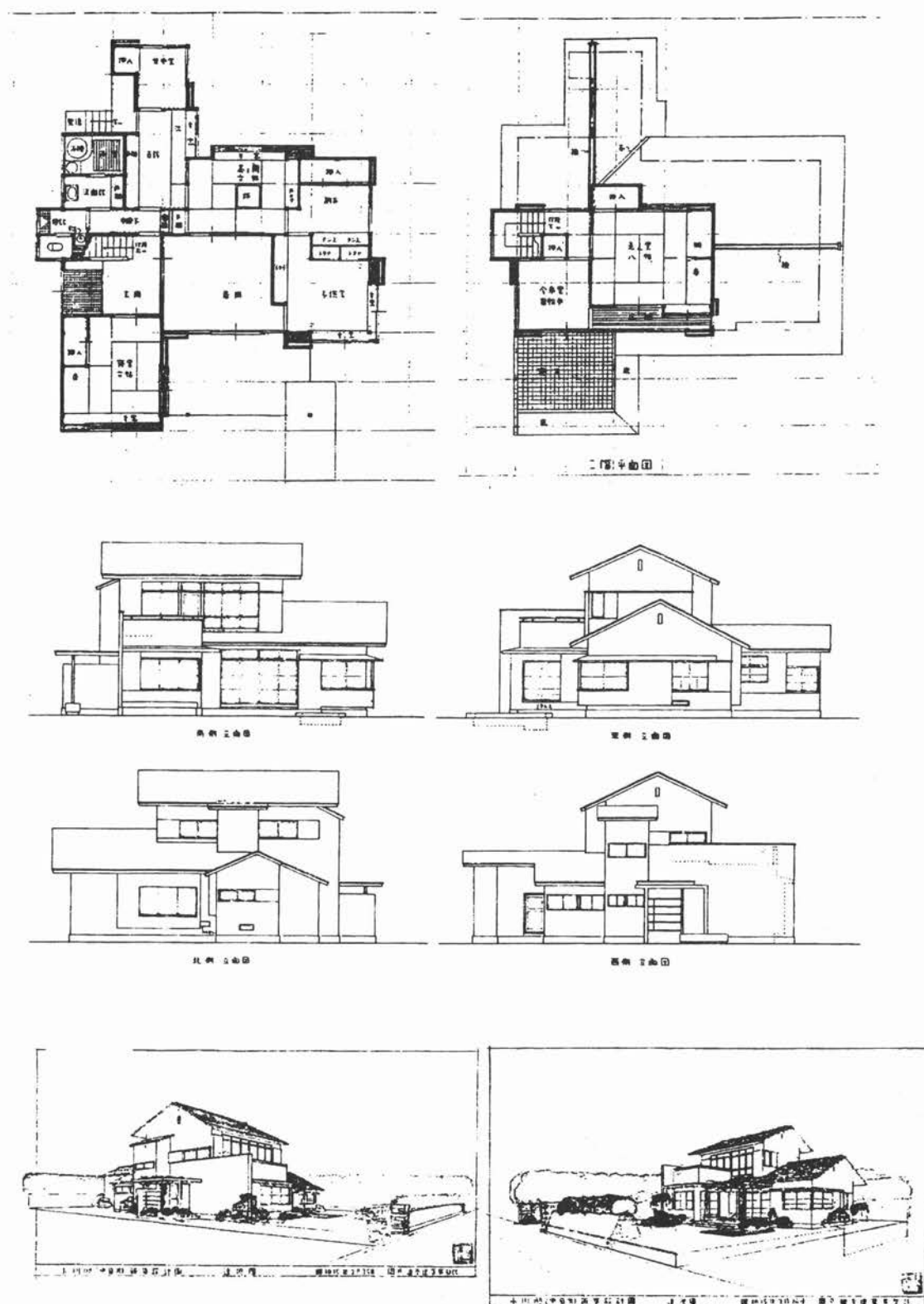
背面
(4.5m)



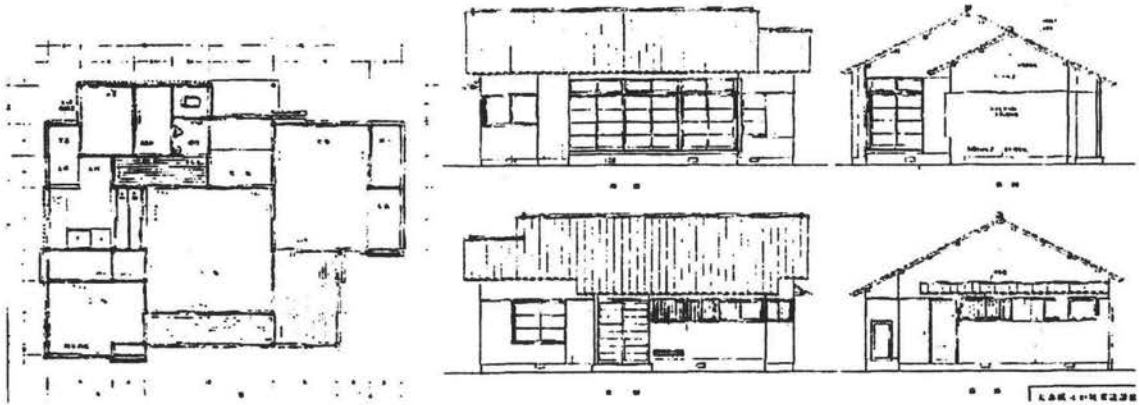
左側
(4.5m)



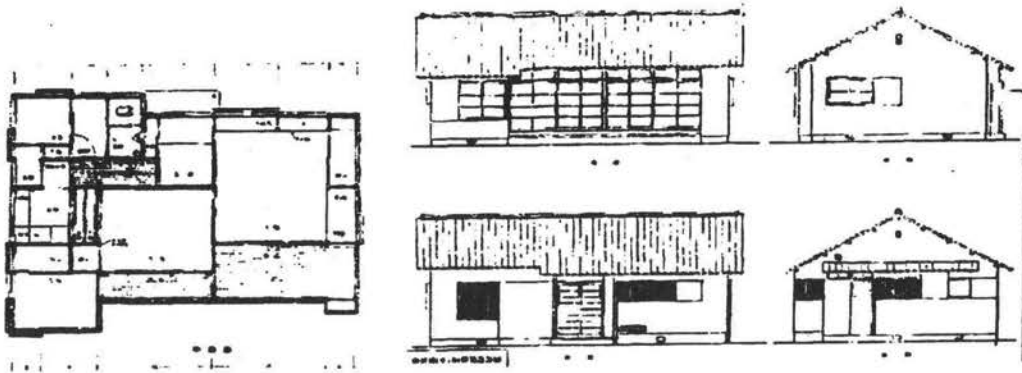
⑮小川邸 S15.02.06 (1940) 平面図 S15.01.31 立面図 S15.02.25/26 透視図



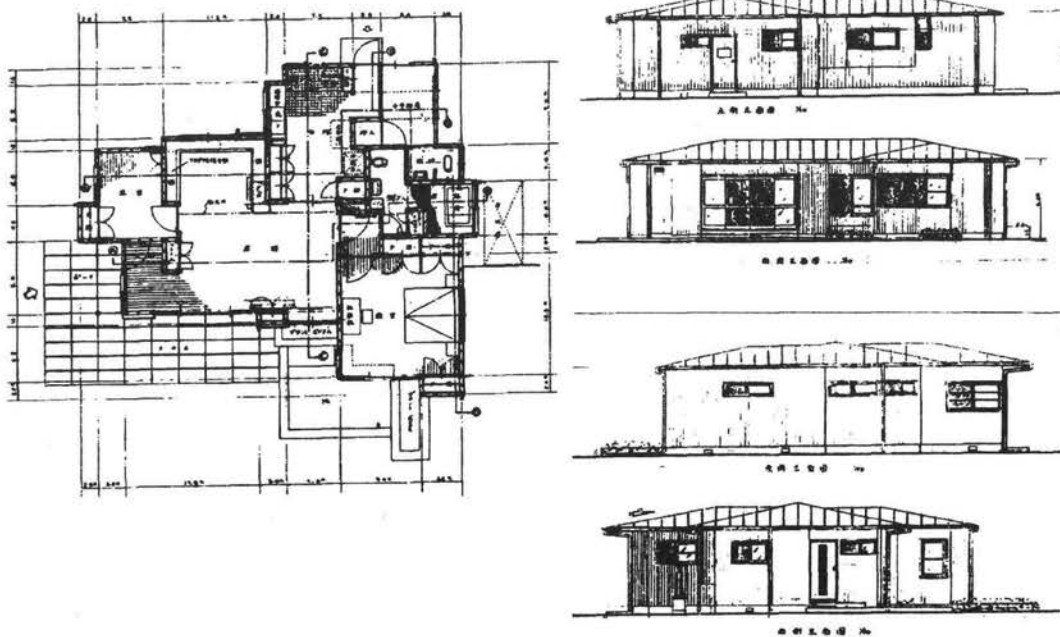
⑩大森氏貸家 S16.12.23 (1941)



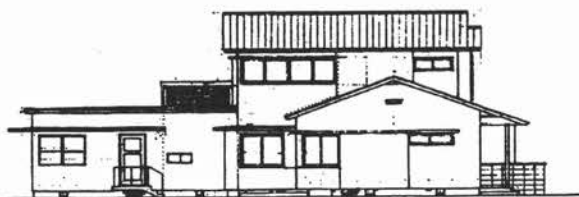
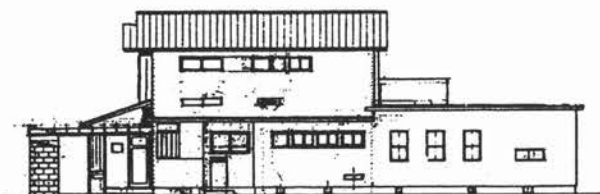
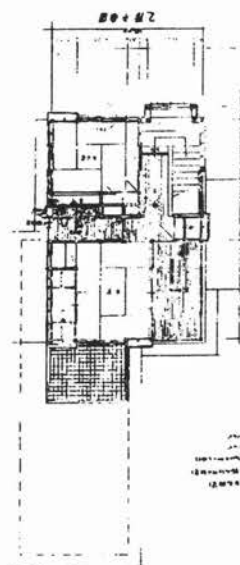
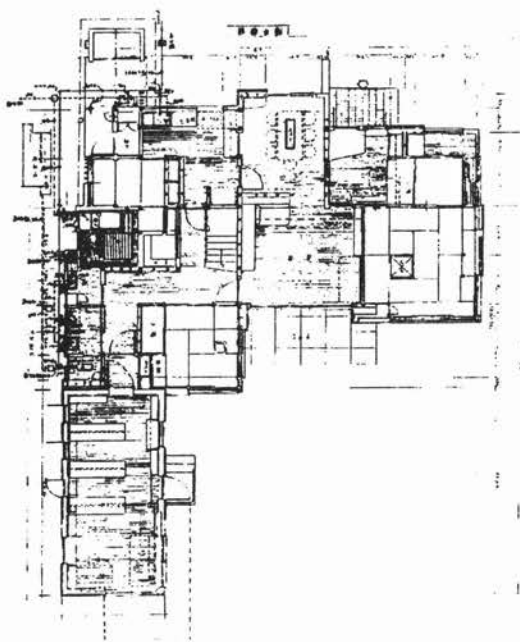
⑤-2 由良邸 S17.01.12 (1942)



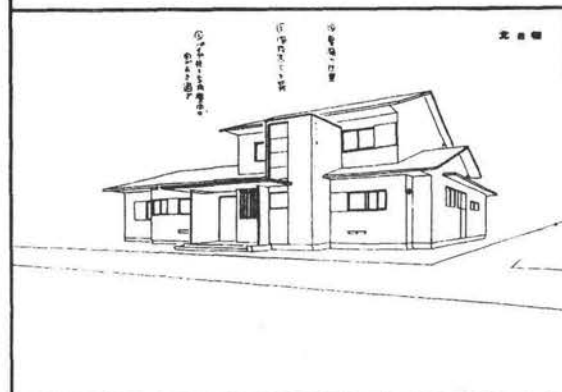
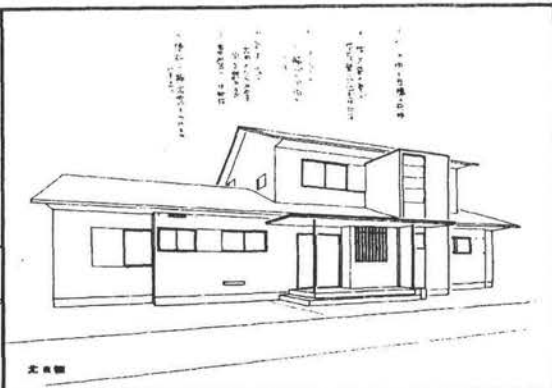
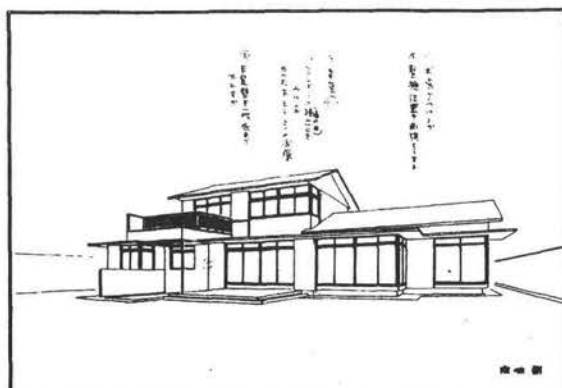
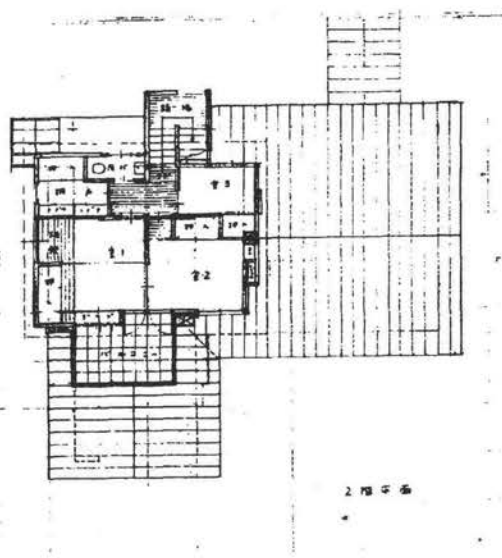
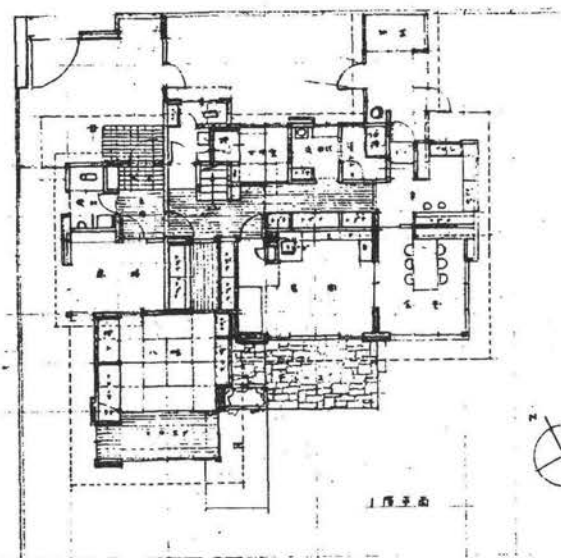
⑰BAGAI 邸 S28.04.15 (1953)



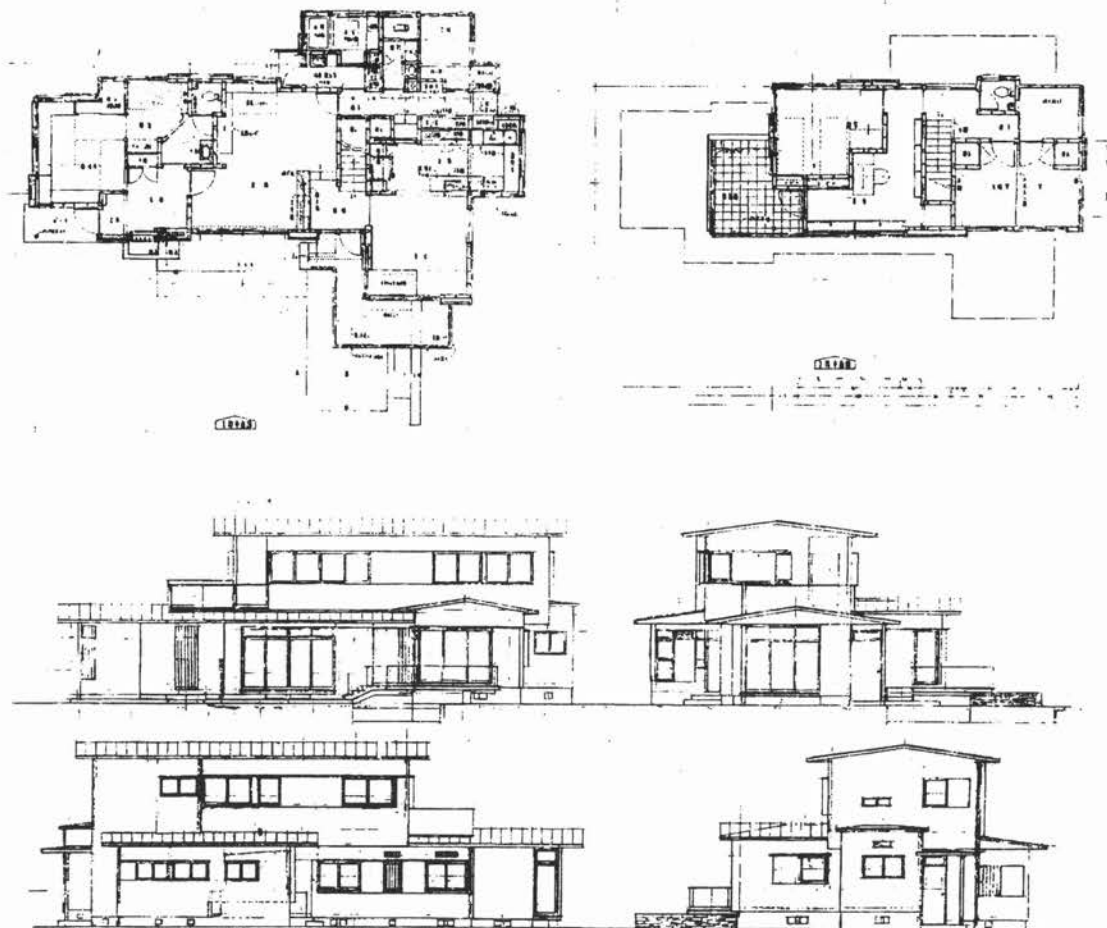
⑱小町谷操三郎 S31.03.03 (1956)



①⑨依田邸 S31.10 (1956)



②岡見健彦自邸 S31 (1956)



第 5 章

大正・昭和初期における、いわゆる「ライト式」の用語の使用について

はじめに

帝国ホテルをはじめ、計画案を含む13件の業績¹を日本に残したフランク・ロイド・ライトが、当時のわが国の建築界に強い影響を残したことは、よく知られている。また、大正後期を中心に、いわゆる「ライト式」建築が、流行したことも周知のことである。

ライトの建築は、水平線の強調や凹凸の多い平面形あるいは左右対称の平面形などが特徴として知られている²。

また、ライトについては、『建築雑誌』大正3年6月号に、「新論新説」の記事として『The Architectural Record. May, 1914 (米)』を取り上げ「In the Cause of Architecture. By Frank Lloyd Wright. 建築なるものゝ本源に就て自己の所信を述べたるものにて Style と云ふ事にも言及して居る。」³と紹介されている。あるいは、『建築雑誌』大正3年7月号には、岡田信一郎が「新建築の意義(演説)」という表題で、「亜米利加で新建築に優俊なるフランク・ロイド・ライトと云ふ人があります、其人が『自分は過去の伝習に忠実ならん為に過去の伝習を打破せんとす』と云っていますが、是は決して堅白同異の辨ではない、其言葉通り解釈して差支えないと思ひます。」⁴と、ライトを引き合いに出して「新建築」を語っている。

しかしながら、「ライト式」「ライト風」等の呼び名が、いつ頃から使用され始め、また、どのような意味を持って使用されていたのかについては、あまり明確にされていない。あるいは、いわゆる「ライト式」の用語がどのような意味を持って使われていたのか、ほとんど明らかでない。本章では、いわゆる「ライト式」について、どのような用語をもって使用されていたのか、その用語の意味と、使われ方の年代の変遷について考察する。

なお、考察に当たっては、当時の建築雑誌である『建築雑誌』『建築新報』『建築評論』『建築世界』『建築と社会』『住宅』『建築画報』『新建築』などを主な資料とした。また、いわゆる「ライト式」の用語は、ライトが設計した帝国ホテルの出現とともに現れたと考えられるので、大正元年以降昭和初期までについての資料を対象として用いた。

1. 「ライト式」の用語の出現

当時の雑誌に見られる「ライト式」の用語、もしくは「ライト式」に準ずる用語について、使用年代順に並べたものが、[表1]である。

「ライト式」の用語が使用された最初の論文と考えられるものに、建築家下田菊太郎⁵が帝国ホテルについて述べたものがある。帝国ホテルの起工(大正8年9月)⁶の前の『建築新報』大正8年8月号⁷に使用されたもので、下田は、次のように述べている。

[表1]いわゆる「ライト式」の用語について

年 月号 誌(紙) 名 執筆者	用語	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)	(19)	(20)	(21)	(22)	(23)	(24)	(25)	(26)	(27)	(28)	(29)	(30)	(31)	(32)	
		ライト式 恩師ライト氏の創案	ライト氏の流れを汲んだ建築	ライト派建築家	ライト屋	ライト式建築	ライト張り	ライトの風貌	ライトの様式	ライト氏流	遠藤氏の創作	ライトまがい式	帝国ホテル式	遠藤氏の様式	遠藤氏の型	ライト式の建築	ライト式の家	正真正のライト式の家	ライト擬ひ建築	ライト風の家	ライト風の板張り	ライト式の住宅	ライト風の	帝国ホテルの様式	立体的新建築	立体建築	建築は立体である	立体主義の手法	立体的有機体	立体的観念の下に設計	立体式	立体式建築		
大正 8年 8月号 建築新報	下田菊太郎	○																																
大正 9年 4月号 建築評論	遠藤 新																							○										
大正 9年 7月号 建築評論	山本拙郎																								○									
大正10年 3月号 建築世界		○																							○									
大正10年 6月10日号 家庭週報	遠藤 新																									○								
大正10年12月号 建築世界		○																																
大正11年 6月号 住宅	高島司郎																								○									
大正11年 8月号 住宅	高島司郎		○																						○									
大正11年 9月号 建築画報	森口多理																										○							
大正11年10月号 住宅	目白千登作			○																									○					
大正11年10月号 住宅	高島司郎																													○				
大正11年10月号 建築世界					○	○																												
大正11年11月号 建築世界	桜井小太郎						○																											
大正11年11月号 建築画報	三浦元秀	○						○																										
大正12年 1月号 住宅	高島司郎																															○		
大正12年 4月号 住宅	高島司郎																									○							○	
大正12年 6月号 住宅																																	○	
大正12年 6月号 住宅																																	○	
大正12年 7月号 住宅																																	○	
大正12年11月号 建築世界	名畑良造								○	○																								
大正13年 8月号 建築世界	遠藤於菟							○																										
大正13年10月号 建築画報	三浦元秀										○																							
大正13年10月号 建築画報	峯尾春陽	○																																
大正13年10月号 建築画報	濱岡周忠											○																						
大正13年10月号 建築画報	吉井俊太郎												○																					
大正13年10月号 建築画報														○																				
大正14年1月号17日 東京朝日新聞	山本拙郎	○													○	○																		
大正14年 2月号 建築画報	林 敏明						○										○	○																
大正15年 6月号 新建築	元良	○																	○															
大正15年 7月号 新建築	南 信	○																																
大正15年 7月号 新建築	夕顔																			○														
大正15年10月号 新建築	南 信	○																																
昭和 2年 4月号 建築画報		○																																
昭和 2年 8月号 新建築	岸本 豊																				○													
昭和 2年11月号 新建築																						○												
昭和 2年12月号 新建築																							○											
昭和 3年 8月号 新建築		○																					○											
昭和 4年 4月号 新建築	南 信	○																																
昭和 4年 4月号 新建築	貞永直義																						○											
昭和 5年 9月号 建築雑誌																								○										

「予輩の不可解なるは帝国第一のホテルに日本もしくは欧米の様式に拠らずして、一個のライト式に拠らんとすることである。」とし、ライトの作風は、サリバンがいたことのあるフィラデルフィアの事務所の「ヒウキト」⁸が用いた「近東式を加味」したものが最初であり、「ライト氏は第三代目の採用者で住宅に初めて用ふるに至り、今は広くライト式とでも云ふ様になった」と、ライト式について述べている。

2. 「ライト式」および関連する用語

下田菊太郎が、「ライト式」を使用した後には、「ライト式」もしくはそれに準ずる用語に多様な使用が、見られるようになる。

「ライト式」の用語は、ライトの設計になる作品に対して「ライト式」と呼ぶもののほか、「ライト式建築」などいくつもの用語が見られるようになる。また、ライト風を表す用語や、「遠藤氏の…」⁹「立体」など、「ライト式」と同様、あるいは同じような形態や形式を持つ建築を示す意味で使用される用語も多く現れた。

例えば、山本拙郎⁹の「住宅建築の宿命 遠藤氏の個展をみて」（『東京朝日新聞』大正14年1月17日）には、「世間ではライト式と呼んでいるが、今日ではもう遠藤氏の様式と言ってもいい」とある。また、『建築世界』大正10年3月号には、「フランク・ロイド・ライト氏の設計になるライト式と銘打つ最新式の立体建築と称する物」とある。このように、「遠藤氏の様式」あるいは、「立体建築」という表現も、当時は「ライト式」の用語と同様の意味を持って語られていた。このことから本論では、「ライト」の名前を用いた「ライト式」の用語と共に、これらの用語についても、いわゆる「ライト式」に準じた用語として扱っている。

〔表1〕にみられるように、「ライト式」あるいはそれに準じた用語の種類は32、使用件数は、53件確認できた。

中でも、使用例が最も多いのは、「ライト式」(1)で、12件(23%)あり、その使用は、大正8年から昭和4年までの大正期および昭和初期の全期間に及んでいる。

「ライト式」(1)に、ライト式の言葉を含む「ライト式建築」(6)、「ライト式の建築」(16)、「正真のライト式」(18)、「ライト式の板張り」(20)、「ライト式の住宅」(21)の5種類を合わせると、使用例は、18件(34%)となる。

二番目に多い使用は、「立体建築」(25)で、5件(9%)認められる。その使用年代は、大正9年から大正12年7月までの大正期である。また、「立体建築」(25)に、立体を含む「立体的新建築」(24)、「建築は立体である」(26)、「立体主義の手法」(27)、「立体派の手法」(28)、「立体的有機体」(29)、「立体的建築観の下に設計」(30)、「立体式」(31)、「立体式建築」(32)を加えた9種類の言葉は、15件(28%)あり、大正9年から大正12年7月まで使用されていることが分かる。この期間は、帝国ホテル起工の翌年から竣工前までの期間に相当する¹⁰。

三番目に多い「ライト風」(22)は、3件(6%)の使用が認められる。使用年代は、昭和2年から4年である。また、ライト風を含む「ライト風の家」(19)を加えた4件(8%)は、大正15年から昭和4年までの、昭和初期に使用されていたことが分かる。

「ライト式」(1)と「ライト風」(22)の使用は、合計15件(28%)あり、それに「ライト式建築」(6)、「ライト式の建築」(16)、「正真のライト式」(18)、「ライト式の

板張り」(20)、「ライト式の住宅」(21)、「ライト風の家」(19)を合わせた使用例は、22件(42%)ある。

なお、その他の言葉については、大正期に使用されていたことが分かる。

3. 「ライト式」および関連する用語の使用例

32種類の「ライト式」の用語が、どのような意味をもって使用されていたか、について掲載年代を追って考察すると次のようになる。

大正8年：「ライト式」(1)

ライトと旧知であった下田菊太郎は、「帰朝所感」¹¹の中で、帝国ホテルが、日本や欧米の様式ではなく「一個のライト式に拠らんとする」ことを不可解としている。また、「今は広くライト式とでも云ふ様になった」とし、ライトの作風に対して「ライト式」という表現を使用している。

大正9年：「立体的新建築」(24)、「立体建築」(25)

「立体的建築」(24)は、ライトの弟子の遠藤新が、建築を論じた小文の表題である。文中には「立体的建築観が正しい」との表現がある¹²。また、「立体建築」(25)は、山本拙郎が「二人の建築家とその作品」と題し、後藤慶二の遺作である「東京区裁判所」と遠藤新の「帝国ホテル仮館」について述べたもので、その中で、帝国ホテルについては、「ライト氏とそして遠藤氏の立体建築」と記している¹³。それは、ライトと遠藤の帝国ホテルの作風を「立体建築」という言葉で表したものと考えられる。

大正10年：「ライト式」(1)、「立体建築」(25)、「建築は立体である」(26)

「ライト式」(1)および「立体建築」(25)は、帝国ホテルについて、「建築の様式は、(中略)ライト式と銘打つ最新式の立体建築と称する物」¹⁴と記した、帝国ホテルに対して使用された言葉であることが分かる。また、帝国ホテルについて、「建築はライト式と称して頗る美術的の建築である」と、述べている記事もある¹⁵。「建築は立体である」(26)は、遠藤新が設計した、櫻風会アパートメントについて、遠藤自身が「今やっと形の世界、空間の世界に入ってまいりましたが、私はここで建築は立体であると申すのであります。」¹⁶と、ライトの弟子である遠藤の作風を説明した表現である。

大正11年：「ライト式」(1)、「恩師ライト氏の創案」(2)、「ライトの流れを汲んだ建築」(3)、「ライト派建築家」(4)、「ライト屋」(5)、「ライト式建築」(6)、「ライト張り」(7)、「立体建築」(25)、「立体主義の手法」(26)、「立体派の手法」(28)、「立体的有機体」(29)

「ライト式」(1)は、「ライト張り」(7)と共に使用されている。「気の早い処でライト式」という、流行の兆しを示すと考えられる意味での使用が見られる。また、「ライト式は今の処専売特許であり」と使われ、ライトの建築に冠せられた言葉とも受け止められる。あるいは、「ライト式は本国米では強ちライト式のみでなくライト張りは充分既に或種の人々の様式となっている」とあることから、ライトの作風に類似したものをライト張りとして表現していることがわかる。

「恩師ライト氏の創案」(2)は、「立体建築」(25)と共に高島司郎¹⁷が使用している。「こゝに生まれ出たのが、立体建築です即ち恩師ライト氏の創案せる独歩の主義主張」と、ライトの考案した考え方を説明したものである¹⁸。【図1】

「ライトの流れを汲んだ建築」(3)は、「立体派の手法」(28)とともに使用されている。「ライト氏の流れを汲んだ建築が此頃おりおり東京市内に見られます。四谷信濃町の犬養氏の邸宅や、音楽家の多氏兄弟の東中野の新居などがそれであります。」と、遠藤新設計の犬養邸¹⁹を例に上げ、多邸の解説をしている²⁰。また、「天井も窓も電燈も暖炉もすべて立体派の手法に由って居ます。」²¹と、ライトの流れを汲んだデザイン手法を述べている。【図2】

「ライト派建築家」(4)および「ライト屋」(5)は、「ライト氏の芸術は、氏の追従者に於て、模倣となり、伝統踏襲となり、やがて生命のない形骸のつぎはぎとなる恐れがある。(中略)畢竟ライト氏の賛嘆は、ライト氏への追従と区画せねばならぬ。ライト派建築家にして、もしも、この区画を忘れる時は、彼は終に、単なる『ライト屋』となり了るであらう。」と、「ライト派建築家」にしても、追従者は、模倣となり形骸化しかねないことを予測しており、追従者を「ライト屋」と表現している²²。

「立体建築」(25)は、高島司郎が、「所謂立体建築と名づけられたもので一口に云へば建物を自然の一部と考へて自然をお手本とし、」²³と、ライトの建築に対する考え方を説いたものと考えられる。また、同じく高島司郎は、「こゝに生まれ出たのが、立体建築です即ち恩師ライト氏の創案せる」²⁴と、「立体建築」は、ライトの創案した建築であるとしている。【図1】

「立体主義の手法」(27)は、帝国ホテルについて「東洋趣味に一種の新鮮さを感じるのは、設計者が、東洋芸術の原始的精神にさかのぼっていて、その上近代芸術の構成主義や立体主義の手法まで取り入れているからだ。」²⁵と述べ、「立体主義の手法」をライトのデザイン手法の一つとして扱っている。

「立体的有機体」(29)は、高島司郎が、計画案の説明で、「建築についての言葉に『軒先から地形まで』と云ふのがあるネ。建物を立体的有機体と考へないとこんな味の言葉は出ないと思ふ。」と、設計依頼者に答えている²⁶。【図3】

大正12年:「ライトの風貌」(8),「ライトの様式」(9),「立体建築」(25),「立体的觀念の下に設計」(30),「立体式」(31),「立体式建築」(32)

「ライトの風貌」(8)と「ライトの様式」(9)は、同時に使用され、名畑良造が「ライトの風貌及ライトの様式及其理想に就いて多くの缺点はあると思ふ、」²⁷とライトの建築について述べている。

「立体建築」(25)は、「立体式」(31)と併用して、高島司郎が使用している。「南国佳和文化俱樂部 郷里の友人達に贈る立体建築の習作」と題した文中で、「立体建築の特質」は「自由に建物の占有して居る空間を利用したもの故、はっきりと何階かを決めることはむづかしい、」と述べ、スキップフロアの説明をしている。また、「立体式とでも名付け様か。吾々はこれを平常、立体建築と云ひこれこそ眞の建築であると信じて居る。」ともある。加えて、「去る人が、先年まで丸の内帝国ホテルを設計中の恩師ライト氏を訪ねて」ともあり²⁸、帝国ホテルに類する中間階を用いた文化俱樂部の設計に対して「立体建築」の言葉を使用しているものと考えられる。【図4】

「立体的觀念の下に設計」(30)は、高島司郎が、習作について説明したもので、「特徴、すべて立体的建築觀念の下に設計せられ(中略)一貫した主張の下に一つの有機体として設計」したと述べている。【図5】また、「立体式」(31)は、住宅写真(笹塚中村邸)の

説明に「清新な立体式の印象が遺憾なく味はれませう。」と書かれている²⁹。【図6】

「立体式建築」(32)は、住宅(笹塚中村邸)について、「造り付けのベンチ」「造付の腰掛」「電燈の装飾にも家全体と同じ様式」など室内の説明があり、「全体から見て立体式建築の一例です。」としている³⁰。また、他の住宅(中野八田邸)では、「小塚邸と同じ様式の立体建築の一例」と使用されている³¹。【図7】【図8】

大正13年:「ライト式」(1),「ライト張り」(7),「ライト氏流」(10),「遠藤氏の創作」(11),「ライトまがい式」(12),「帝国ホテル式」(13)

「ライト式」(1)は、ここでは、バラック建築について述べたもので、「ライト式の銀座ホテル、西村貿易店、(中略)等を推します。」と、遠藤新の作品を「ライト式」と称している³²。【図9】

「ライト張り」(7)は、「ライト氏に與ふるの書第四信」の中で使用され、執筆者である遠藤於菟は、「震災後の建築を見られたならば『ライト張り』(かく称へらるゝにより暫く夫に従ふ)建物の簇出せるに一驚を喫せらるゝならん。併し其多くが似て非なるものにしてあなたの外形を模倣して(中略)皮相の観を無したるものに過ぎず」³³と述べ、「ライト張り」をライトの作風に模した表面的なものと考えている。

「ライト氏流」(10)は、「莫とした記憶から、バラック装飾図案社のものと、ライト氏流の建物以外に、特にこれといつては別に何も建たなかったやうに思つて居ます。」³⁴と、バラックの印象を語っている。「遠藤氏の創作」(11)は、濱岡周忠が、「ライト氏を祖述されてゐるとはいへ(中略)建築の全量には特に建築的な美が感じられます。それはもう遠藤氏の創作として多くの未来を持つやうに考へられます。それは形骸だけの模倣ではない本物の感じですよ。」³⁵と、遠藤新の作風について述べている。「ライトまがい式」(12)は、バラック建築について「ライトまがい式が比較的に皆よいと思はれた。」と、ライトを模倣した、いわゆる「ライト式」の印象を語っている³⁶。「帝国ホテル式」(13)は、「日比谷の松月堂……帝国ホテル式によつたものですが、レストランとしては、ふさはしい出来かと思ひます。」と、バラック建築の中の、ライトの帝国ホテルの影響を受けたと思われる建物を称した表現と考えられる。

大正14年:「ライト式」(1),「ライト式建築」(6),「遠藤氏の様式」(14),「遠藤氏の型」(15),「ライト式の建築」(16),「ライト擬ひの建築」(17)

「ライト式」(1),「遠藤氏の様式」(14),「遠藤氏の型」(15)については、山本拙郎が、遠藤新の個展を見て、遠藤を評した文中に使用している。「帝国ホテルに見るやうな、(中略)特殊な建築型を世間ではライト式と呼んでいるが、今日ではもう遠藤氏の様式と言つてもいいと意う。(中略)自由無碍なその平面の組立から、特異な構造、明快な意匠まで、そこに全然新しい遠藤氏の型を完成している。」といい、帝国ホテルを模した建築を「ライト式」と呼び、「自由学園」と「赤倉温泉ホテル」を例に上げて、「遠藤氏の様式」あるいは「遠藤氏の型」と、遠藤の作風を呼んでいる³⁷。

「ライト式建築」(6),「ライト式の建築」(16)及び「ライト擬ひの建築」(17)は、同一文中に見られ、「ライト式擬ひの建築が私の言ふところのライト式建築であります。(中略)ライト式の建築とそれを追ふライト式建築」と、言葉を使い分けている。つまり、ライト式建築という言葉は、偽物を表す用語と考えられる。また、「ライト式建築は其後に住宅に盛んに応用されてきました。」³⁸とある事から、「ライト式」の流行を述べたものと考え

えてよからう。

大正15年：「ライト式」(1)，「正真のライト式の家」(18)，「ライト風の家」(19)

「ライト式」(1)は、3件の使用が見られる。一つ目は、「ライト式なんて『式』がついて来る様になると、(中略)つい偽物が出たがったりする。(中略)真似でない様に見せ渡くて、小さな自分をチョコチョコ出して仕舞う。蓋し似て非なるライト式の多い所以である。」³⁹と、偽物のライト式が多いことを述べている。二つ目の場合は、雑誌の読者が、設計相談で、「ライト式の様式を望む」と、ライト式を使用している。応答側の南信は、「ライト式といふ言葉が何時頃からかはれる様になりまして、此の頃では一つの形式を持った建築を分類するのに便利な言葉となっている様ですが、」と答えている⁴⁰。【図10】三つ目も、別の設計相談であり、読者は、「様式は出来ることなればライト式に」と、「ライト式」を望んでいる。これに対して、南信は、「所謂ライト式と称するものに近い形をこしらへて見ました。」と答えている⁴¹。【図11】このことから、建築関係者でない読者の間にも「ライト式」が、一般化して使用され、建築の分類を示す言葉一様式一として使われていることが分かる。

「正真のライト式の家」(18)は、南信設計の菅野真湛邸についての評論で、「スッキリとした正真のライト式の家」と使用されており、遠藤と南の二人の作品は、「ライトと多少異なった味があるように思はれる。」とも述べている⁴²。【図12】

「ライト風の家」(19)は、住宅図面の解説文の表題として、「雨の六月、ライト風の家」と使用されている。また、解説には、「深い軒の出、突出したバルコニー、壁体の巧な凹凸、広く採った高めの窓、美しい花鉢(中略)玄関を深く入り込めたところ、暖炉を背にして居間をホールから隠したところ地下階段の裏口の採り方など、ライト氏得意のプランであります。」と書いている⁴³。このことは、この建物の作風を挙げて、ライトと同じように、設計したと述べているものと考えられる。【図13】

昭和2年：「ライト式」(1)，「ライト式の板張り」(20)，「ライト式の住宅」(21)，「ライト風」(22)

「ライト式」(1)は、『ライト作品集』(洪洋社)の広告で、「今や、素人と雖も『ライト式』の名を知らざるなし。」⁴⁴と、「ライト式」が、一般化した呼び名として使用されていたことが、うかがえる。

「ライト式の板張り」(20)は、応募設計案の設計概要の仕様に「一階部分は大壁にしてライト式の板張り、」と書かれている⁴⁵。【図14】

「ライト式の住宅」(21)は、住宅についての展覧会の作品目録に、作品名称として「ライト式の住宅」とつけられている⁴⁶。「ライト風」(22)は、「東西両大学造型美術展覧会を観る」の記事に、「京大側の夫は、ライト風、独乙近世式、構成派等、」⁴⁷とあり、「ライト風」を様式の一つとして扱っていることが分かる。【図15】

昭和3年：「ライト式」(1)，「ライト風」(22)

「ライト式」(1)は、「第三回懸賞競技選評」の記事に、「バンガローやライト式には飽いたが、」⁴⁸とあり、「帝国ホテル」をはじめ、「自由学園」「音楽家の多氏の家」「笹塚中村邸」「中野八田邸」「銀座ホテル」「菅野真湛邸」など多くが建設された、「ライト式」の流行の衰退を示すと考えられる表現の中に、ライト式の使用が見られる。また、同じ記事中に、「ライト風」(22)が、「ライト風を加味した折衷様式とでも言ふべきものである。」

49と使用されている。【図16】それは、部分的にライトの作風を模した作品であるとの表現と考えられよう。

昭和4年：「ライト式」(1)，「ライト風」(22)

「ライト式」(1)は、南信が、亀高邸についての解説文中に使用している。「殆どカネ勾配の南面した斜面(中略)そうした土地でした。これはいかなライト式でも面くらひます。」⁵⁰とし、「ライト式」が、優れたものであることを意味した表現と見ることもできよう。「ライト風」(22)は、甲子園ホテルについて「関西人士も遠からずして、ライト風のホテルをもつであろう。」⁵¹と、遠藤新の設計した建物に対して、「ライト風」と称していることが分かる。【図17】

昭和5年：「帝国ホテルの様式」(23)

「帝国ホテルの様式」(23)は、「京都市美術館建築図案懸賞募集審査報告」の中で使用されている。応募案を4つに分類しており、その一つが、「日本式を基調とせる左記の建築を模倣せるもの」である。ここには、6つの建物が列記してあり、最後に「東京帝国ホテル」があげられている。このあとに、「上掲四種の内に於て帝国ホテルの様式は最も多く模倣者を出し之については明治神宮宝物館一等当選案を模倣せるものが多かった。」⁵²と述べている。

4. 「ライト式」という用語の使用方法の変遷と意味

帝国ホテルの出現とともに現れた、「ライト式」の用語について雑誌や新聞に記されたものは、確認できたものだけでも大正8年から昭和5年までの大正期から昭和初期にかけて、32種類の用語と、53件の使用例が認められた。また、32種類の内、「ライト」の名前を用いた「ライト式」の用語は、18種類(56%)、「立体」を用いた「ライト式」の用語は、9種類(28%)、「遠藤氏の…」を用いた「ライト式」の用語は、3種類(10%)あり、「帝国ホテル」を用いた用語は、2種類(6%)が確認できた。

使用例が最も多かった用語は「ライト式」(1)で、12件(23%)あり、「ライト風」(22)3件(6%)含めて、大正期から昭和初期の全期間に亘り使用されていた。また、「立体」を含む用語は、大正8年から大正12年までの、大正期にのみ使用例が見られた。

また、「ライトの風貌」(8)、「ライトの様式」(9)、「ライト氏流」(10)、「遠藤氏の創作」(11)、「ライトまがい式」(12)、「帝国ホテル式」(13)、「遠藤氏の様式」(14)、「遠藤氏の型」(15)、「ライト式の建築」(16)、「ライト擬ひ建築」(17)、「正真のライト式の家」(18)、「ライト風の家」(19)の12例(23%)は、大正12年の関東大震災の後から、大正15年までの期間使用されていた。

「ライト式」の用語は、初め、ライトの作風あるいは、帝国ホテルの建物について用いられたが、ほぼ同時期に、ライトの弟子の遠藤新の建物についても「立体建築」といった言葉が、冠せられた。帝国ホテルが、一部開業した⁵³大正11年には、「ライト屋」「ライト張り」というような、ライトの作風の模倣を意味する言葉が現れた。大正12年には、「ライトの様式」「立体式」「立体建築」など、ライトの建築に対する考え方を加味した言葉の使用が見られた。また、関東大震災後のバラック建築に対しては、「ライト張り」「ライトまがい式」の、ライトの表面的な模倣を意味する用語の使用が見られるようになった。その一方で、大正14年、大正15年には、「遠藤氏の様式」「正真のライト式の家」の、

ライトの弟子の作風をライトの作風と区別して扱う言葉も出現した。また、昭和2年には、「素人と雖も『ライト式』の名を知らざるなし」と、一般化した様式名として使用される一方で、「ライト式の板張り」というように、材料の使用方法を部分的に真似た建物にも、「ライト式」の用語が使用されていた。以上、種々の「ライト式」の用語は、大正15年から昭和初期にかけて「ライト式」「ライト風」の2つの言葉に収束していった。

終わりに

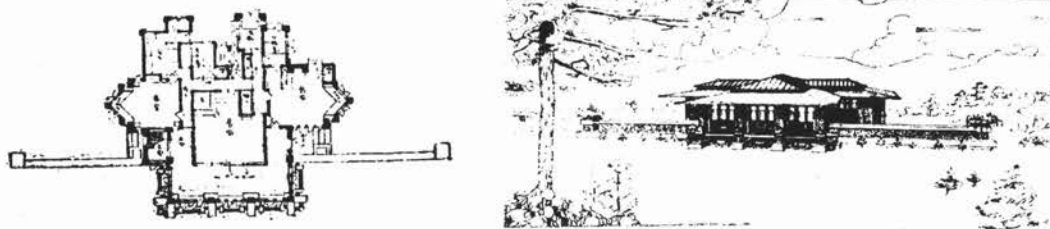
ライトの設計による、帝国ホテルの建設に伴い、大正8年に現れた「ライト式」の用語は、はじめは、ライトの建築を示すものであったが、同時に、ライトの弟子の作風にも用いられた。

やがて、ライトの作風を模倣した建物に対しても、使用され始め、関東大震災後には、材料などの表面的な模倣に対しても、いわゆる「ライト式」の用語が使用された。また、一方では、「ライトと多少異なった味」での「本物」として、ライトの弟子にあたる遠藤新や南信の作風にも、「ライト式」の用語が冠せられた。

大正後期から昭和初期にかけて、ライト風の建物が幅広く流行し、「ライト式」の用語は、徐々に、弟子たちの「正真のライト式」と表層的な模倣に対して、意味を違えて使用されたものの、一つの様式を示す言葉として、建築関係者以外にも使用される用語となった。

「ライト式」の用語は、大正15年から昭和初期にかけて、「ライト式」と「ライト風」という言葉に収束していくが、この現象は、わが国の建築の世界では、ライトの作風の特徴を見ることが、もはや一般化したことを示すものと考えられる。

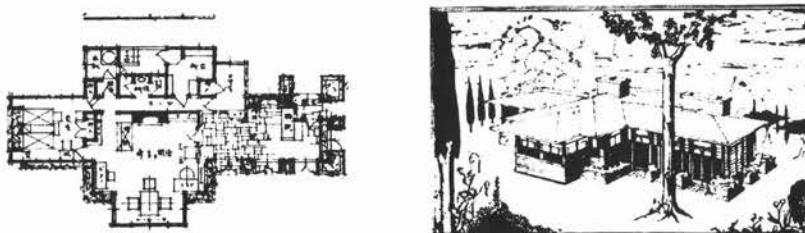
【図1】若き女性のための海浜別荘 高島司郎 『住宅』 T11.08



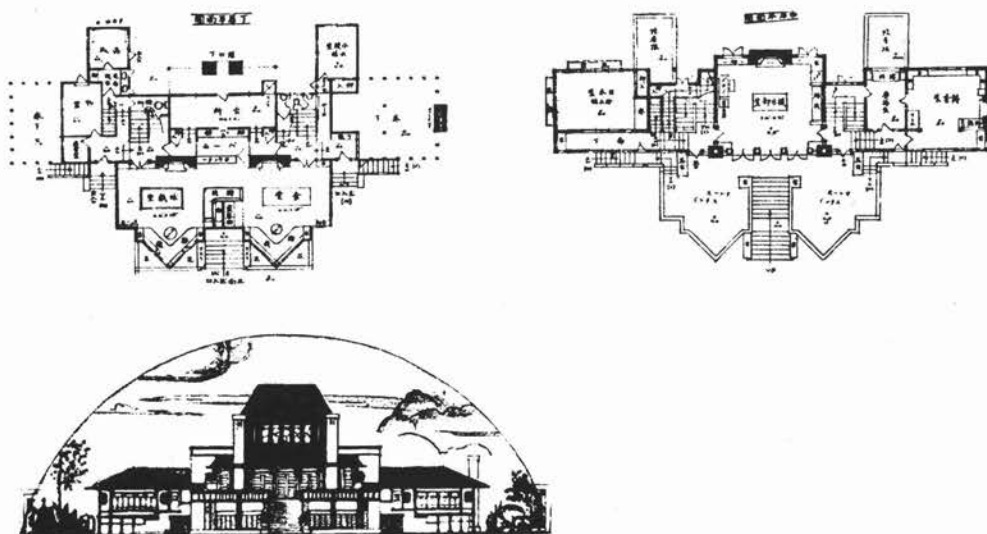
【図2】音楽家の家（多氏兄弟の新居） 『住宅』 T11.10



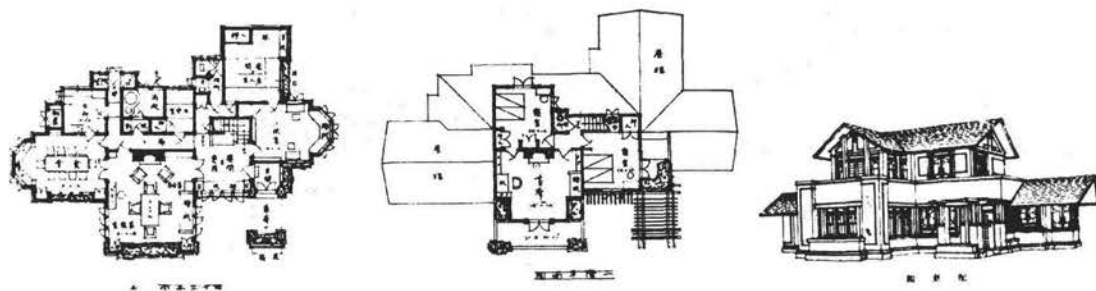
【図3】文化の農園住宅 高島司郎 『住宅』 T11.10



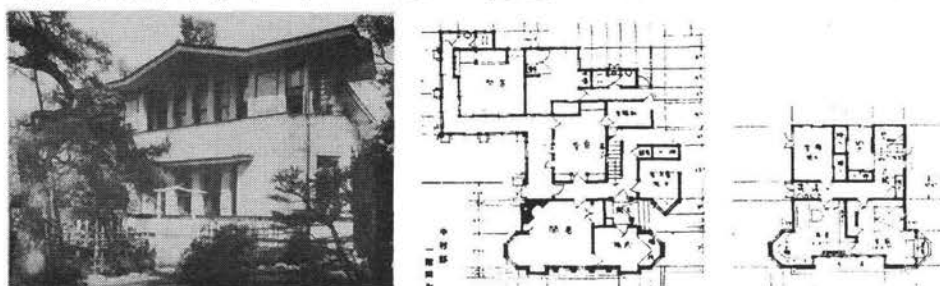
【図4】文化倶楽部 高島司郎 『住宅』 T12.04



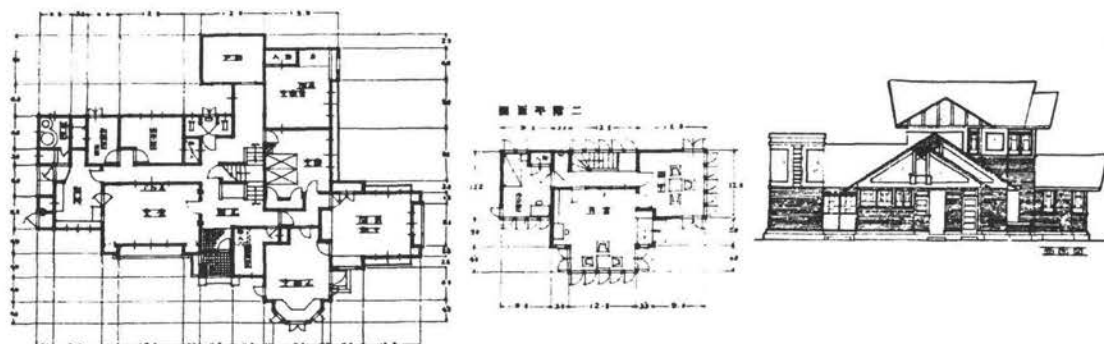
【図5】習作〔平和〕 高島司郎 『住宅』 T12.01



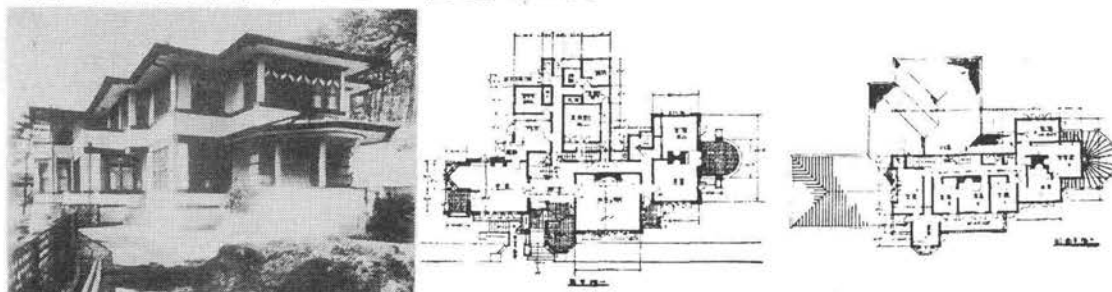
【図6】笹塚中村邸 あめりか屋 『住宅』 T12.06



【図7】中野八田熙邸 あめりか屋 『住宅』 T12.07



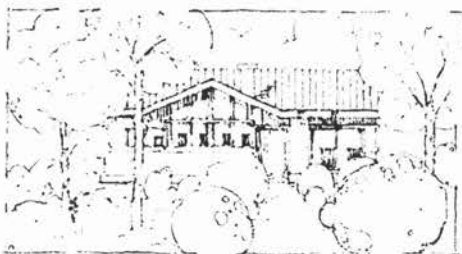
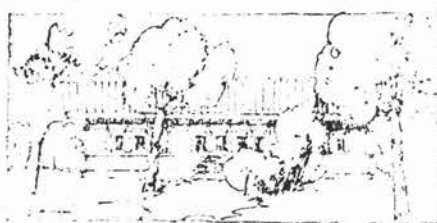
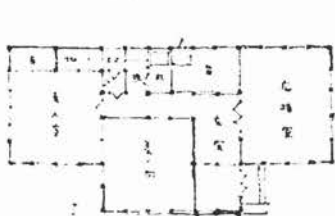
【図8】神奈川小塚邸 S生 『住宅』 T12.05



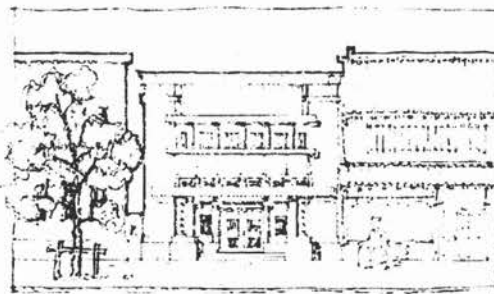
【図9】銀座ホテル (T12) 遠藤新 『近代建築史図集新訂版』 1994



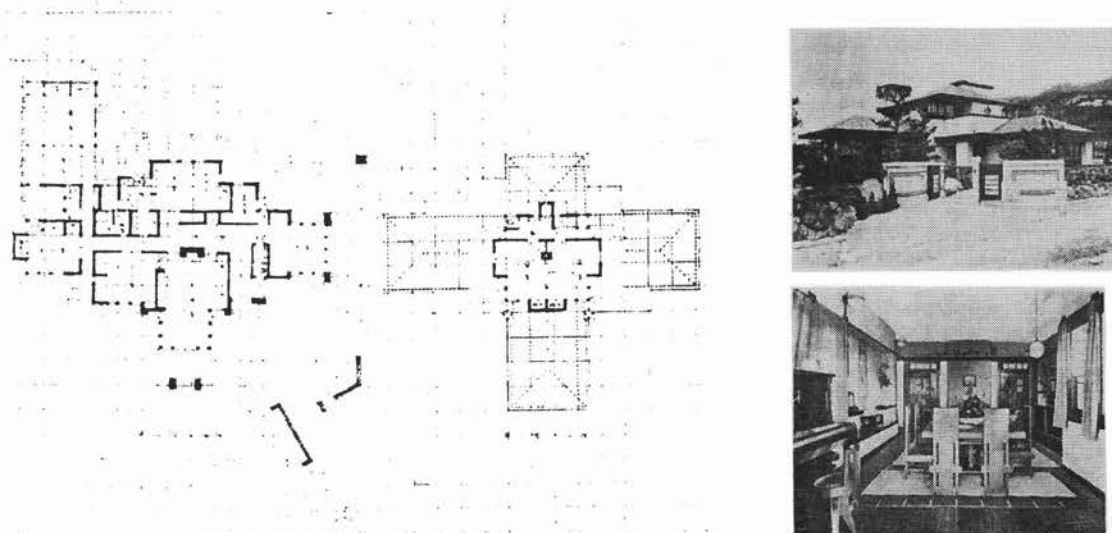
【図10】二十坪前後の家 南信 『新建築』 T15.07



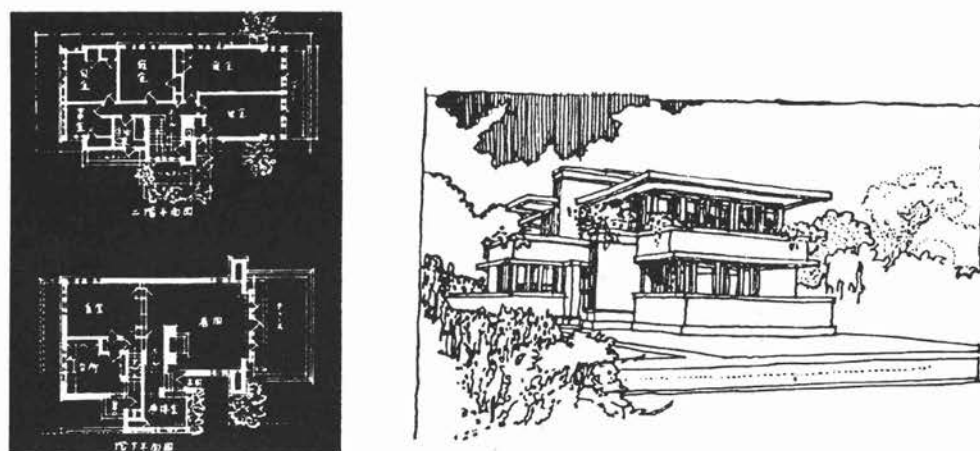
【図11】事務所付住宅 南信 『新建築』 T15.10



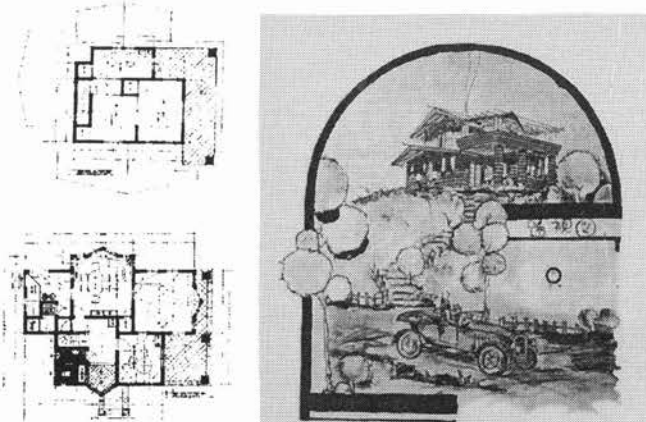
【図1 2】菅野真湛氏の住宅 南信 『新建築』T15.6 『アルス建築大講座』S5



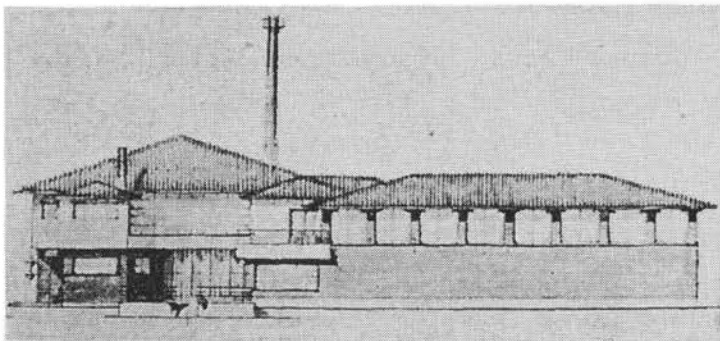
【図1 3】雨の六月、ライト氏風の家 夕顔 『新建築』T15.07



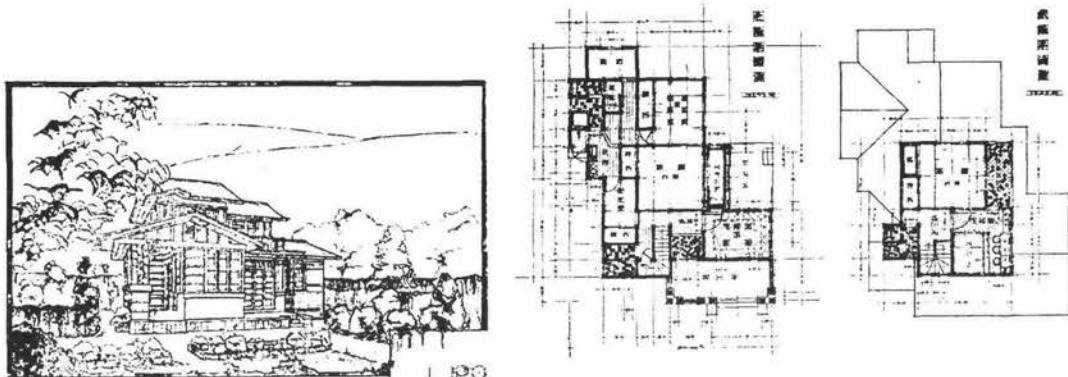
【図1 4】懸賞小住宅設計図案選外五席当選図案 岸本登 『新建築』S2.08



【図15】東西両大学造型美術展覧会を観る 公衆浴場 福田欣二 『新建築』S2.12



【図16】第三回懸賞競技三等二席 齋藤小司『新建築』S3.08



【図17】甲子園ホテル（S5）遠藤新 『近代建築史図集新訂版』1994



第 6 章

雑誌『住宅』にみるライト風住宅について

はじめに

大正期から昭和初期にかけて流行した、いわゆる「ライト式」と称する住宅は、アメリカの建築家フランク・ロイド・ライトが設計した帝国ホテルの建設に従事した弟子たちによって建てられたことは知られている。また、直接ライトに師事はしないものの、ライトの作品を模倣した建物も多く出現した。

本章は、ライト設計の帝国ホテルが営業を開始した大正11年に、雑誌『住宅』に掲載が見られ始めたライト風の住宅作品をはじめ、以後同誌に掲載された作品（計画案を含む）について考察する。

資料は、住宅の設計施工会社であるあめりか屋を設立した橋口信助が、会主を務めた住宅改良会により発行された住宅専門雑誌である『住宅』の大正7年から昭和10年までを対象とした。¹

1. 雑誌『住宅』に掲載のライト風住宅

雑誌『住宅』には、大正11年5月号に掲載された①「ご隠居向きの新しい別荘」²をはじめ、②「郊外に相当まとまった住宅をお建てになる方々の為に」（大正11年6月号）³、③「若き女性のための海浜別荘」（大正11年8月号）⁴、④「音楽家の家（多氏兄弟の新居）」（大正11年10月号）⁵、⑤「文化の農園住宅」（大正11年10月号）⁶、⑥「スーベニール・ド・カルイザワ」（大正11年11月号）⁷、⑦「習作（独居）」（大正11年12月号）⁸、⑧「習作〔平和〕」（大正12年1月号）⁹、⑨「神奈川小塚邸」（大正12年5月号）¹⁰、⑩「古園に建つ家 笹塚中村邸」（大正12年6月号）¹¹、⑪「丘の上に建つ家 中野・八田熙氏邸」（大正12年7月号）¹²、⑫「杜の家 目白近衛町杉卯七氏邸」（大正12年8月号）¹³、⑬「神谷卓男氏邸（門柱に植物を植えた門）」（昭和2年4月号）¹⁴、⑭「白石氏邸（門柱に植物を植えた門）」（昭和2年4月号）¹⁵、⑮「讃州武田謙氏本邸」（昭和2年10月号）¹⁶、⑯「郊外小住宅資料」（昭和3年2月号）¹⁷、および昭和3年6月号に掲載の⑰「海浜に近い山中に建つ別荘」¹⁸の17軒のライト風住宅が確認できた。〔表1〕

なお、掲載図面から判断して②「郊外に相当まとまった住宅をお建てになる方々の為に」は、⑪「丘の上に建つ家 中野・八田熙氏邸」の原案と考えられる。（建物名称に付した①～⑰は、〔表1〕〔表2〕および図版に示した番号）

2. いわゆる「ライト式」の用語の使用

以上、17軒の住宅のうち次の8軒（47%）の建物の解説文等に、いわゆる「ライト式」の用語の使用が見られる。使用されている用語は、「立体建築」「恩師ライト氏」「ライト氏の流れを汲んだ建築」「立体派の手法」「立体的有機体」「立体式観念」「有機体」「立体式」「立体式

【表1】雑誌『住宅』に掲載された、いわゆる「ライト式」住宅

掲載 年 月号	表題あるいは住宅名称	設計者名	いわゆる「ライト式」の用語の使用、および 備考
大正11年 5月号	①ご隠居向きの新しい別荘	高島司郎	
大正11年 6月号	②郊外に相当まとまった住宅をお建てになる方々の為に	高島司郎	「立体建築」 ⑪の原案と考えられる
大正11年 8月号	③若き女性のための海浜別荘	高島司郎	「恩師ライト氏」「立体建築」
大正11年10月号	④音楽家の家(多氏兄弟の新居)	—	「ライト氏の流れを汲んだ建築」「立体派の手法」
大正11年10月号	⑤文化の農園住宅	高島司郎	「立体的有機体」
大正11年11月号	⑥スーベニール・ドカルイザワ	高島司郎	
大正11年12月号	⑦習作(独居)	高島司郎	
大正12年 1月号	⑧習作[平和]	高島司郎	「立体式観念」「有機体」
大正12年 5月号	⑨神奈川小塚邸	S生(あめりか屋)	「有機体」
大正12年 6月号	⑩古園に立つ家 笹塚中村邸	あめりか屋	「立体式」「立体式建築」
大正12年 7月号	⑪丘の上に建つ家 中野・八田熙氏邸	あめりか屋	「中村邸…小塚邸と同じ様態の立体式建築」
大正12年 8月号	⑫杜の家 目白近衛町杉卯七氏邸	あめりか屋	
昭和 2年 4月号	⑬神谷卓男氏邸(門柱に植物を植えた門)	—	
昭和 2年 4月号	⑭白石氏邸(門柱に植物を植えた門)	—	
昭和 2年10月号	⑮讃州武田謙氏本邸	高島司郎	起工大正12年7月 落成大正14年
昭和 3年 2月号	⑯郊外住宅資料	高島司郎	
昭和 3年 6月号	⑰海浜に近い山中に建つ別荘	木曾 恕一	ライト設計による W.A.Glasner Houseに酷似

建築」の9種類で、このうち「立体建築」「有機体」および「立体式建築」の使用は各2件あり、その他については各1件の使用が確認できた。

既出のいわゆる「ライト式」の用語は次の各建物に対して使用されている。

「立体建築」：②「郊外に相当まとまった住宅をお建てになる方々の為に」、③「若き女性のための海浜別荘」

「恩師ライト氏」：③「若き女性のための海浜別荘」

「ライト氏の流れを汲んだ建築」：④「音楽家の家(多氏兄弟の新居)」

「立体派の手法」：④「音楽家の家(多氏兄弟の新居)」

「立体的有機体」：⑤「文化の農園住宅」

「立体式観念」：⑧「習作[平和]」

「有機体」：⑧「習作[平和]」、⑨「神奈川小塚邸」

「立体式」：⑩「古園に建つ家 笹塚中村邸」

「立体式建築」：⑩「古園に建つ家 笹塚中村邸」、⑪「丘の上に建つ家 中野・八田熙氏邸」

ちなみに、各用語は、8軒のうち高島司郎設計の建物4軒(50%)、あめりか屋設計2軒(25%)、S生(あめりか屋)および設計者不明の各1軒(12.5%)に使用されている。

3. 設計者について

記事の内容から判断して評論者（目白千登作）の執筆と考えられる1軒と記載のない2軒を除いた14軒の解説文に設計者名の記入がある。[表1]

17軒の建物のうち9軒（53%）があめりか屋の建築技師である「高島司郎」の設計となっている。次いで「あめりか屋」が3軒（18%）、「S生（あめりか屋）」「木檜怨一」が各1軒（6%）、無記名が3軒（17%）ある。

9軒の記事に名前が見られる高島司郎【写真1】に関しては、経歴については殆ど明らかではない。確認できたことは、香川県多度津の出身であること¹⁹、および早稲田大学理工科建築学科本科を大正9年3月に卒業していること²⁰の2点である。【写真2】 また、掲載記事に「恩師ライト氏」の表現があるものの、ライトに師事したかどうかは分からない。

なお、9軒の高島の作品のうち4作品にいわゆる「ライト式」の用語が使用されている。また、木檜怨一は、東京高等工芸学校教授として知られている。

そして、推測の域を出ないが、あめりか屋設計になるライト風の建物には高島以外の設計者名が見られないことからすれば、「S生」の「S」は高島司郎の「司郎」の頭文字「S」とも考えられよう。

4. 住宅の特徴

17軒の住宅について、掲載図面、写真および記事により特徴をみる。特徴は、外観の特徴、平面の特徴、室内の特徴の3項目に分類し、さらに細目化してまとめたものが[表2]である。

1) 外観の特徴

(1) 屋根形状：17軒のうち16軒（94%）が緩勾配で、屋根形状は「寄せ棟屋根」が12軒（71%）で1番多く、次いで「切妻屋根」7軒（41%）となっている。3番目は「陸屋根」で6軒（35%）あり、「腰折れ屋根」が1軒見られる。

また、7軒（41%）の建物に複数の屋根形状が併用されており、「切妻・陸屋根」および「切妻・寄せ棟・陸屋根」が各2件（12%）、「寄せ棟・陸屋根」、「寄せ棟・陸屋根」および「切妻・寄せ棟・入母屋・腰折れ屋根・陸屋根」が各1軒（6%）みられ、「陸屋根」のみ使用した建物は見られない。

(2) 屋根葺き材：屋根葺き材は6種類見られるが、1番多いのは「金属板」7軒（41%）で、2番目は「スレート」4軒（24%）、3番目は「パブコ」および「瓦」の各3軒（18%）、4番目が「柿」および「ラバー+コンパウンド」の各1軒（6%）である。

(3) 深い軒の出：[表2]に示したように、対象の17軒すべてが深い軒の出を有している。

(4) ケラバおよび鼻隠しの転び：切妻屋根は7軒見られるが、「ケラバの転び」は7軒全て（100%）にみられる。また「鼻隠しの転び」は11軒（65%）ある。

(5) 塔状の煙突：幅と奥行きのある塔状の煙突は15軒中に6軒（35%）あることが分かった。

(6) 水平線の強調：鼻隠し板や外壁の下見板（大貫）張り、あるいは腰壁上部の見切りや開口部水切りの連続、バルコニー笠木などによる水平線の強調されたデザインは、17軒全て（100%）にみられる。

(7) 外壁仕上材：外壁仕上材は「大貫（下見板）」、「漆喰」、「スタッコ」、「玉石」、「洗い出し」の5種類が確認できた。ただし、「大貫」と「下見板」は同一のものとして捉えている。

【表2】雑誌『住宅』に掲載された、いわゆる「ライト式」住宅の特徴

		① 二階層向きの新しい別荘	② お建てになる方々の為に 郊外に相当まとまった住宅を	③ 若き女性のための海浜別荘	④ 音楽家の家（多氏兄弟の新居）	⑤ 文化の薫陶住宅	⑥ スーベニール・ド・カルイザワ	⑦ 習作（独居）	⑧ 習作（平和）	⑨ 神奈川小塚邸	⑩ 古園に立つ家 管理中村邸	⑪ 丘の上に建つ家 中野・八田照氏邸	⑫ 社の家 目白近衛町杉卯七氏邸	⑬ 神谷卓男氏邸	⑭ 白石氏邸	⑮ 鎌州武田氏本部	⑯ 郊外小住宅資料	⑰ 海浜に近い山中に建つ別荘
		高	高	高	—	高	高	高	高	S	あ	あ	あ	—	—	高	高	木
(一) 外観の特徴	緩勾配屋根	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	切妻屋根	—	○	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	寄せ屋根	○	—	○	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	入母屋屋根	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	方形屋根	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	腰折れ屋根	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	陸屋根	—	—	—	○	—	—	—	—	○	○	○	○	—	—	—	—	—
	金瓦葺き	—	—	○	○	—	—	—	—	○	○	—	—	—	—	—	—	—
	柿葺き	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	バブコ葺き	—	—	—	?	○	—	○	—	—	—	—	○	?	?	—	—	—
	スレート葺き	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—	—	—
	瓦葺き	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	ラバー+コンパウンド	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	深い軒の出	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	屋根つきテラス	—	—	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	ケラバの転び	—	○	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	鼻隠しの転び	○	?	○	○	?	?	○	○	?	○	?	○	○	?	○	○	○
	塔状の煙突	—	—	—	○	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	水平線の強調	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	外 大真＝下見板	○	○	○	○	○	—	△	○	—	○	○	○	○	○	—	○	○
	壁 漆喰塗り	○	—	—	—	—	—	—	—	—	?	—	—	—	—	—	—	—
	仕 スタッコ	—	○	—	○	—	—	○	△	○	—	○	○	—	—	—	○	—
	上 玉石	—	—	○	—	—	—	—	—	—	?	—	—	—	—	—	—	—
	材 洗い出し	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	外壁面のバックハンドトリム	—	○	—	○	—	—	—	○	—	—	○	○	—	—	—	—	—
(二) 平面の特徴	バルコニー	—	—	—	○	—	—	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	本柱	?	○	○	○	—	○	○	○	○	○	○	○	?	?	○	—	○
	バーゴラ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	均等割りでない建具棧	○	○	○	?	○	?	○	○	○	○	○	○	?	?	○	?	?
	建物と統一された門扉のデザイン	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	—文字型平面	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○
	丁字型平面	—	—	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	し字型平面	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	—	○	—	—	—	—	—
	十字型平面	—	—	—	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	口型平面	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	複合型平面	—	○	○	—	—	—	—	○	—	—	—	—	—	—	—	○	—
	凹凸の多い平面形	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	?	?	○	—	○
	室三面の開閉部	—	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—	—	—	—	—
	開 形 開き窓	—	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—	—	—	—	—
	引き違い窓	○	○	—	○	○	○	○	○	○	○	○	○	?	?	○	○	?
	口 式 上げ下げ窓	—	—	—	—	—	—	—	—	○	○	—	—	?	?	—	—	—
	造 暖炉	—	—	○	○	○	○	○	○	○	○	—	—	?	?	○	—	—
	造 造り付ソファ	—	○	○	—	○	○	○	○	○	○	○	—	—	—	—	—	○
	造 造り付収納（押入れを除く）	○	○	○	—	○	○	○	○	○	○	○	—	—	—	—	—	—
	本柱	○	○	○	○	—	○	○	○	○	○	○	○	—	—	—	—	○
(三) 室内の特徴	バーゴラ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	テラス	—	—	—	○	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	バルコニー	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	洋室壁の長押	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	建物と統一された家具デザイン	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	建物と統一された照明器具デザイン	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	幾何学形にデザインされた暖炉	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	板張り	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	床 上 材	—	△	—	—	—	—	△	△	—	—	—	—	—	—	△	—	—
	米松	○	△	—	—	—	—	○	△	—	—	—	○	—	—	△	—	—
	カラ松	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	畳地	—	—	—	—	—	—	—	△	△	—	—	—	—	—	△	—	—
	杉	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	△	—	—
	桐	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	△	—	—
	樟	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	△	—	—
	樺	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	△	—	—
	米樟	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	—
	米樟	—	—	—	—	—	—	—	—	△	—	—	—	—	—	—	—	—
	米杉	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	台樟	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	コルク	—	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	畳	○	○	?	—	—	○	—	○	—	—	○	○	—	—	○	○	○
	タイル	—	—	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—
	大谷石	—	—	—	—	△	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	モルタル	—	—	—	—	△	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	漆喰塗り	—	○	—	—	○	—	○	?	?	?	?	?	—	—	○	—	?
	日本壁（砂壁）	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	大津壁	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	—
	壁 上 材	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	壁 上 材	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	壁 上 材	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	壁 上 材	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	壁 上 材	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

(一)、(二)、(三) 図面、写真、記事による

<凡例> ○：有り

—：なし

△：何れかを使用

？：資料による確認できず

／：項目に関する資料無し

「(三)室内の特徴」の「室内」は居室

<凡例>

高：高島司郎

S：S生

あ：あめりか屋

木：木村聡一

1 番多く使用されているのは「大貫（下見板）」の13軒（76%）で、2 番目は「スタック」8軒（47%）、ほかに「漆喰」、「玉石」、「洗い出し」各1軒が確認できた。ただし「大貫（下見板）」と「スタック」の併用が6軒（35%）あり、1階あるいは1階の内法高までが「大貫（下見板）」で内法以上あるいは2階は「スタック」が使用されている。なお、⑧「習作〔平和〕」については「大貫（下見板）」または「スタック」のどちらかを使用している。

（8）バックハンド・トリム：外壁に押縁のように水平と垂直のラインを描くバックハンド・トリムと呼ばれるオーナメントが、17軒中の5軒（29%）にみられる。

（9）太柱：壁厚よりも大きく、太い柱（木造では空洞）の使用が多くみられる。外観では12軒確認できたが、平面図により13軒（76%）あることが分かった。

（10）均等割りでない建具棧：建具の一部に水平・垂直の棧があるものや、あるいは斜めの棧があるものなど、建具面の均等ではない棧のデザインが多数見られる。

17軒中12軒（71%）に均等割りでない棧のある建具が使用されている。

（11）その他：ほかに、「バルコニー」が6軒（35%）に、建物と統一された門扉のデザインが4軒（24%）に見られた。

なお、⑮「海浜に近い山中に建つ別荘」については、フランク・ロイド・ライト設計によるW.A.Glasner House（1905年）に酷似している。

2) 平面の特徴

平面図による、平面型や開口形式などの特徴は、次のように見ることができる。

（1）平面型：平面の型を一文字型平面、丁字型平面、L字型平面、十字型平面、口型平面、複合型平面の6種類に分類することができる。

平面の型の1番多いものは、複合型平面で7軒（41%）ある。2 番目は、一文字型平面、L字型平面、および十字型平面が各2軒（12%）あり、丁字型平面と口型平面が各1軒（6%）ある。

（2）凹凸の多い平面形：平面の型にかかわらず、平面図のある15軒（100%）すべてに凹凸の多い平面形である。

（3）室3面の開口部：3面に開口部を有する部屋のある建物は、13軒（76%）ある。

（4）開口形式：開口形式については、引き違い窓が13軒（76%）に見られ、開き窓が12件（71%）に確認できた。これら2つの形式の併用は9軒（53%）ある。9軒のうち上げ下げ窓が2軒（12%）見られる。ちなみに引き違い窓のみの使用は4軒（24%）ある。

（5）造作：造作の「暖炉」、「造り付ソファ」および「造り付収納（押入れを除く）」は、「造り付ソファ」が最も多く11軒（65%）に見られる。2 番目は「造り付収納」が10軒（59%）で、「暖炉」は9軒（53%）に設置されている。

（6）太柱：すでに、1) 外観の特徴の項にも示したとおり13軒（76%）に確認できた。

（7）その他：他に、「テラス」5軒（29%）、「パーゴラ」3軒（18%）が確認できた。

3) 室内の特徴

室内については、居室について写真および使用材料の表記によって確認した。ただし、建物によっては、資料のないものがある。

（1）洋室壁の長押：洋室の壁の、内法位置に長押様の材の使用は、4軒（24%）に見られた。

（2）建物と統一された家具・照明器具デザイン：家具については2軒（12%）、照明器具に

については3軒（18％）に見られた。

（3）幾何学形にデザインされた暖炉：幾何学形態のデザインが用いられた暖炉は、4軒（24％）にあるが、暖炉が設置されている9軒に対して44％の設置率となる。

（4）床仕上材：床仕上材については、和室のない2軒と確認できない4軒を除く11軒（65％）に畳の使用が確認できた。板張りについては、米松4軒（24％）、檜2軒（12％）、カラ松および米桐が各1軒の使用が見られた。ただし、檜または米松の使用のものが1軒含まれている。なお、コルクの使用が1軒（6％）見られた。

その他、タイル1軒（6％）、大谷石またはモルタルの使用が1軒（6％）あった。

（5）壁仕上材：塗り壁では、漆喰の使用が5軒（29％）、日本壁（砂壁）が3軒（18％）、大津壁1軒（6％）の使用が確認できた。

また、縦羽目板張りが2軒（12％）と腰張りにコルクの使用が1軒（6％）見られた。

以上のことからこれら建物の特徴として次の結果が得られた。

1）外観では、資料のない1軒を除く16軒（94％）が緩勾配屋根で深い軒の出を有し、水平線を強調したデザインであることが分かった。屋根形状は、寄せ棟屋根が12軒（71％）で最も多く、次いで切妻屋根が7軒（41％）でほぼ半数を占めていた。

また、陸屋根は6軒（35％）にみられたが、陸屋根のみの使用は見られなかった。なお、各屋根形状の併用が7軒（41％）あった。

勾配屋根の屋根葺き材は金属板7軒（41％）、スレート4軒（24％）、瓦3軒（18％）の順で使用頻度が高かった。

鼻隠しの転びについては、11軒（65％）にみられ、ケラバの転びは切妻屋根のある7軒全てに確認できた。

外壁仕上げは、5種類の材料が確認できたが、大貫（下見板）13軒（76％）、スタッコ8軒（47％）が多用されていることが分かった。なお、この2種類の材料は、6軒（35％）で1階内法以下と内法以上、あるいは1階部分と2階部分に分けて使用されている。

また、太柱13軒（76％）、均等割りでない建具棧12軒（71％）も特徴として確認できた。あるいは、塔状の煙突6軒（35％）や5軒（29％）のバックハンド・トリムと呼ばれる壁面のオーナメントについても建物の特徴と考えられる。

2）平面では、平面図のある15軒（88％）の建物が凹凸の多い平面形であり、平面の型として分類した一文字型、丁字型、L字型、十字型、口型、複合型の6種類のうち、複合型平面形がほぼ半数の7軒（41％）を占めていることが分かった。

また、3面の開口部を有する部屋は、13軒（76％）の建物に確認でき、開口形式は、17軒のうち引き違い13軒（76％）、開き12軒（71％）で、この2形式の併用が9軒（53％）にあることが分かった。なお、造り付ソファは11軒（65％）、造り付収納10軒（59％）、暖炉は9軒（53％）に設置されていることが判明した。

3）室内の特徴では、確認資料件数は少ないものの、洋室の長押が4軒（24％）に、建物と統一されたデザインの照明器具3軒（18％）および家具2軒（12％）、幾何学形にデザインされた暖炉が4軒（24％）に確認でき、これらも建物の特徴と考えられよう。

また、仕上材については、床では畳の使用が11軒（65％）に見られ、和室のある建物が半数以上を占めていることが分かった。板張りは15軒（88％）に見られ、米松4軒（24％）、

檜2軒（12％）など12種類の材料が確認できた。ほかに、コルク、大谷石、モルタルが床仕上に使用されている。

最後に、壁については、6軒（35％）に塗り壁が確認できた。漆喰は5軒（29％）、日本壁（砂壁）3軒（18％）、大津壁が1軒（6％）に見られ、3軒（18％）に漆喰と日本壁（砂壁）が併用されていることも判明した。

終わりに

雑誌『住宅』に掲載された、いわゆる「ライト式」の住宅は、大正11年5月号から昭和3年6月号までの間に17軒確認できた。そのうちの9軒があめりか屋の建築技師であった高島司郎の設計によるものであった。

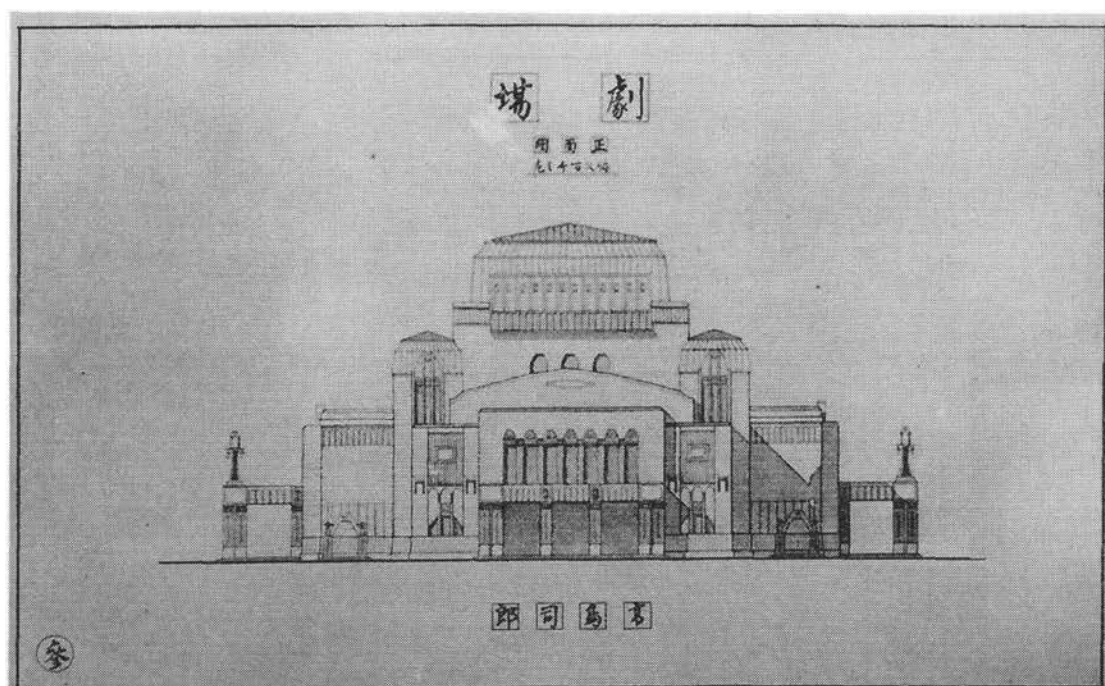
また、いわゆる「ライト式」の用語が使用された8軒の内その半数が高島の作品であることや、あめりか屋の設計になるライト風住宅に高島以外設計者名が確認できないことから、あめりか屋のライト風住宅は高島の手によるものと考えられることもできよう。

17軒の住宅は、水平線を強調した軒の出の深い緩勾配屋根や、鼻隠しおよびケラバの転び、寄せ棟屋根、太柱、均等割りでない建具棧などを外観の特徴とし、仕上材は、屋根の金属板およびスレート、壁の大貫（下見板）とスタッコが多用されていた。そして、バックハンド・トリムの使用も一つの大きな特徴としてあげられる。また、平面については、殆どの建物が凹凸の多い平面形をしており、複雑な複合型および丁字型、あるいはL字型平面で、室の三面開口、開き窓と引き違い窓の多用と併用、造り付ソファと収納家具、暖炉の設置、太柱を特徴としていることが分かった。

なお、床の板張りと畳敷、および漆喰と日本壁（砂壁）の使用は、椅子と座敷の併用を示したものであり、高島の記述による「西洋式とも日本式ともつかない様な家」ということになろう²¹。これらは、雑誌『住宅』に掲載されたいわゆる「ライト式」の住宅の特徴と考えることができる。なお、床材のうち板材は、米松、米樺など輸入材の名称が多く見られることも付しておきたい。

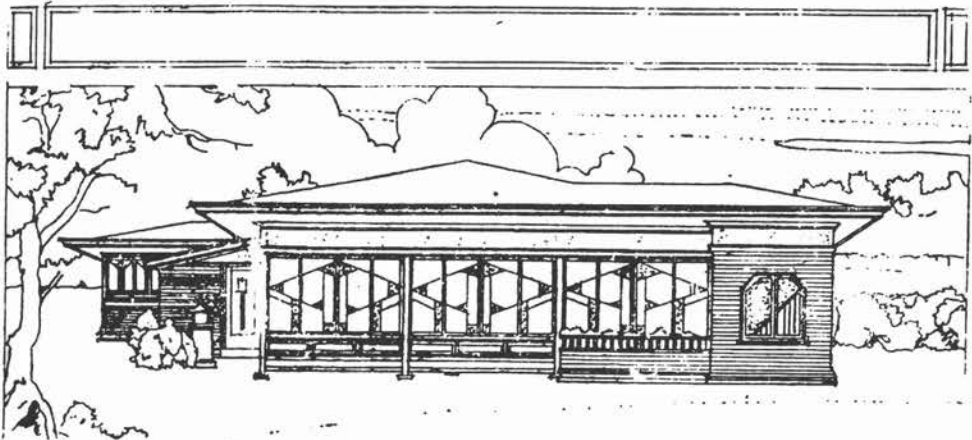
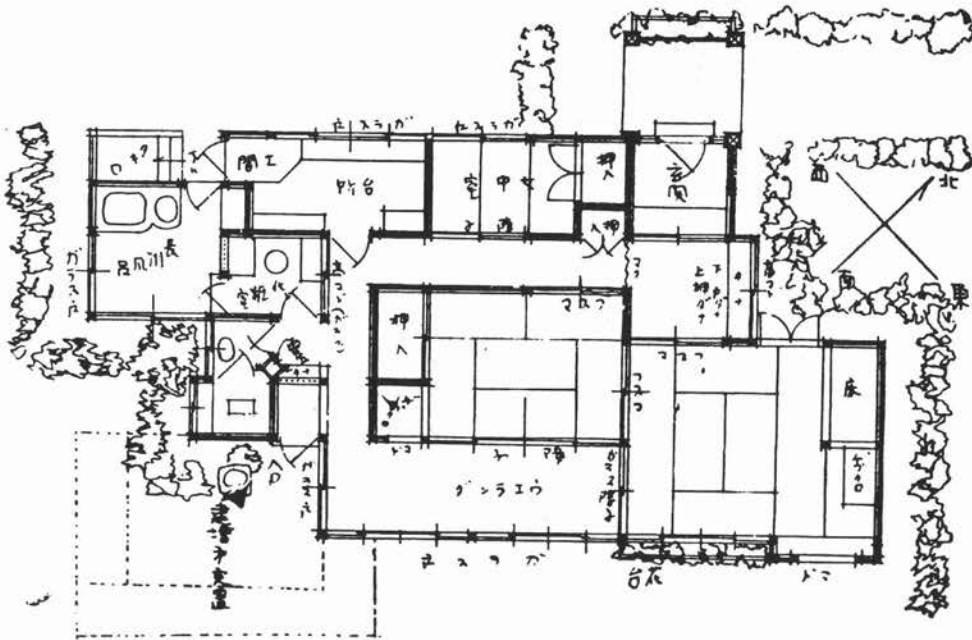


【写真1】高島司郎

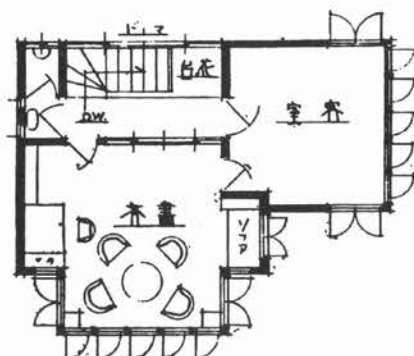


【写真2】卒業設計：高島司郎

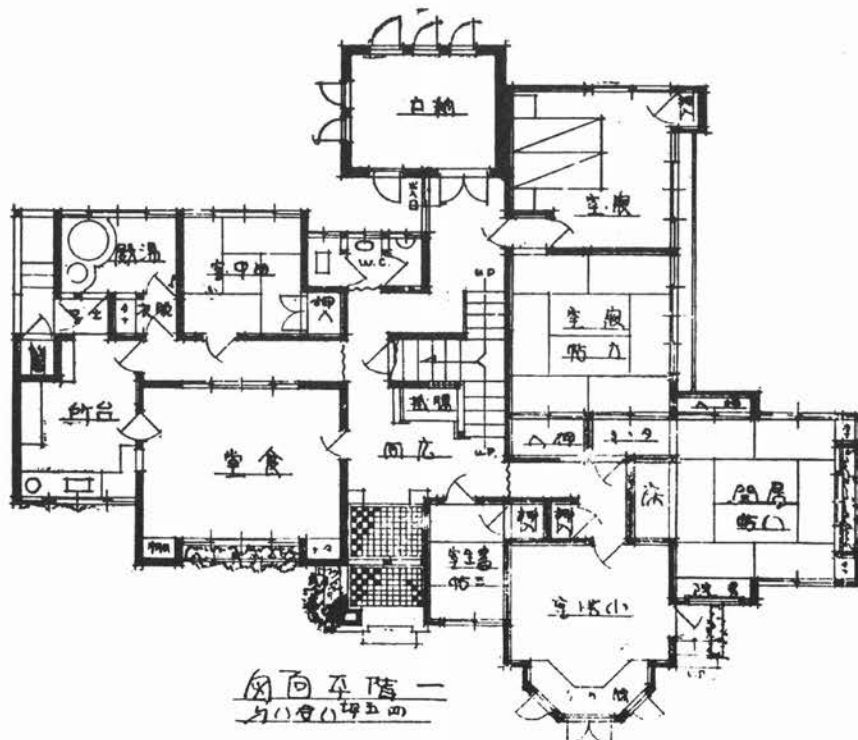
①ご隠居向きの新しい別荘 T11.05 高島司郎
 一文字型平面



②郊外に相当まとまった住宅をお建てになる方々の為に T11.06 高島司郎
複合型平面

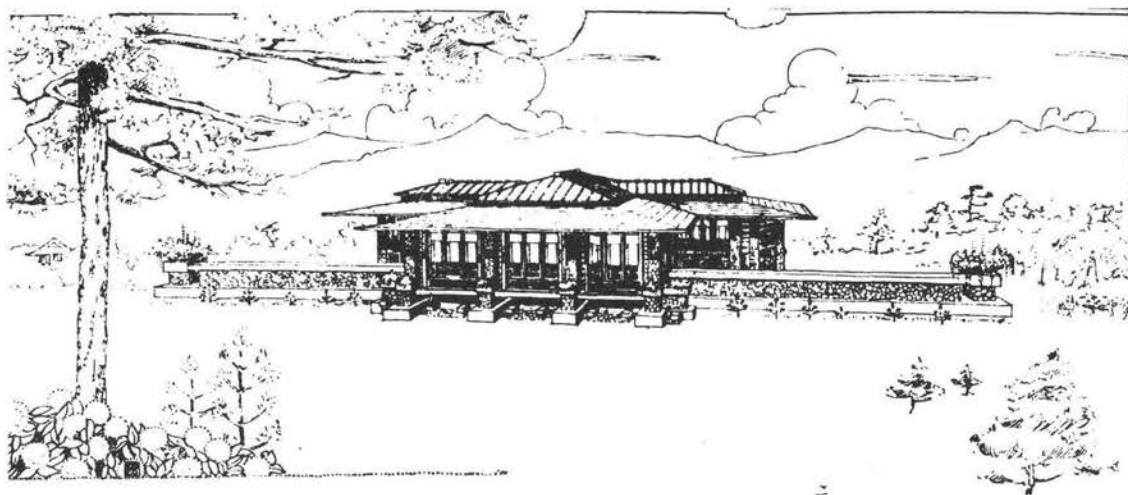


図面平階二
外寸全坪二十



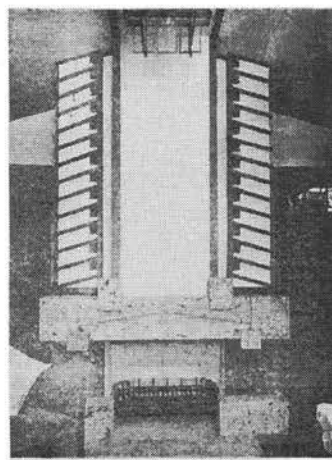
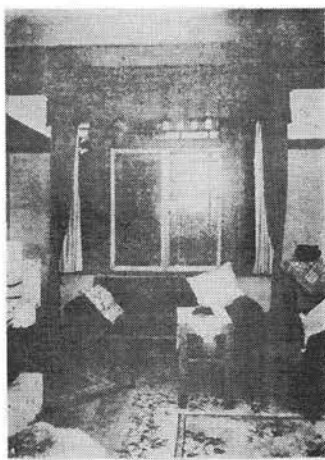
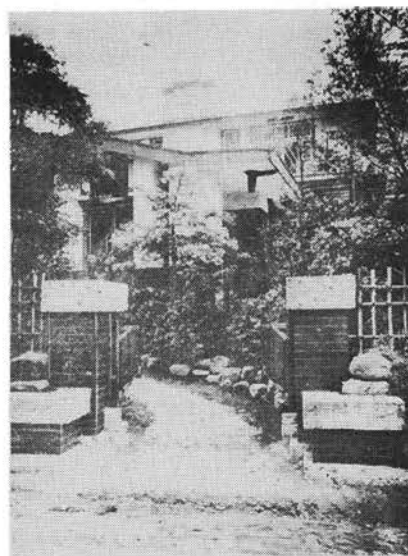
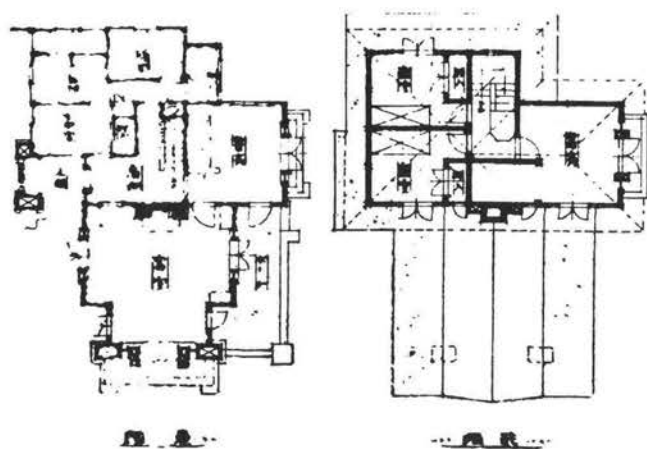
図面平階一
外寸全坪五十四

③若き女性のための海浜別荘 T11.08 高島司郎
複合型平面

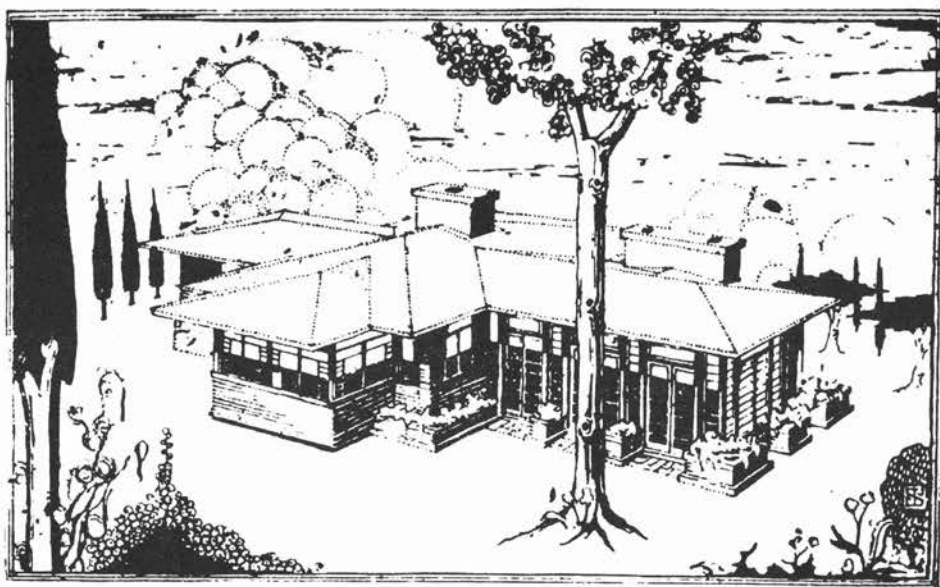
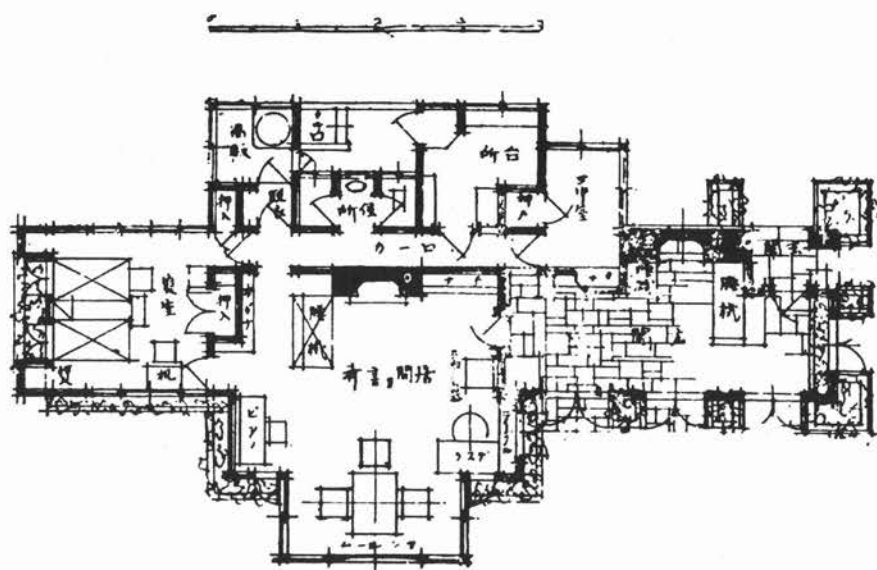


④音楽家の家（多氏兄弟の新居） T11.10

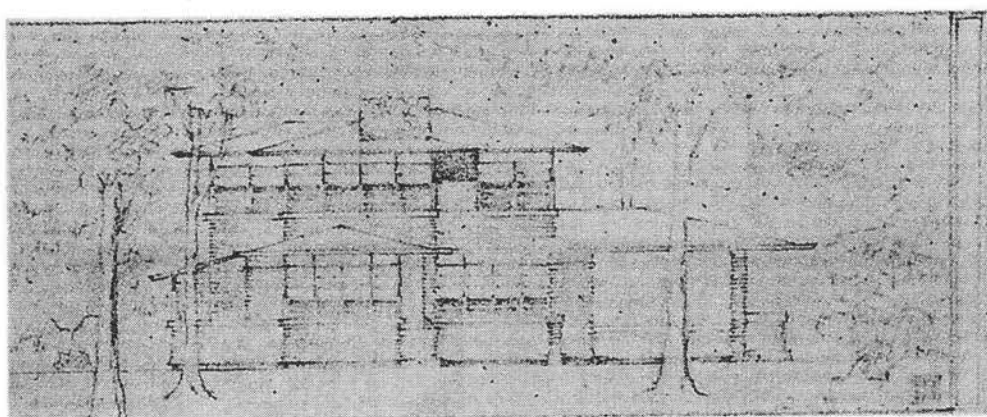
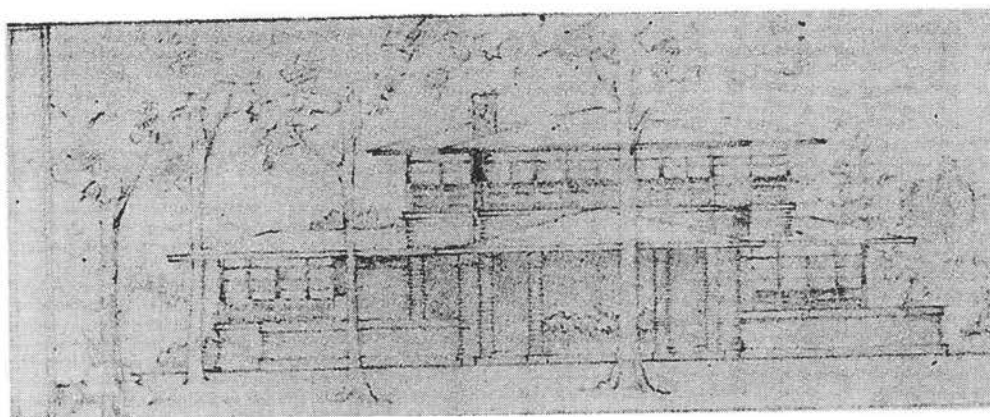
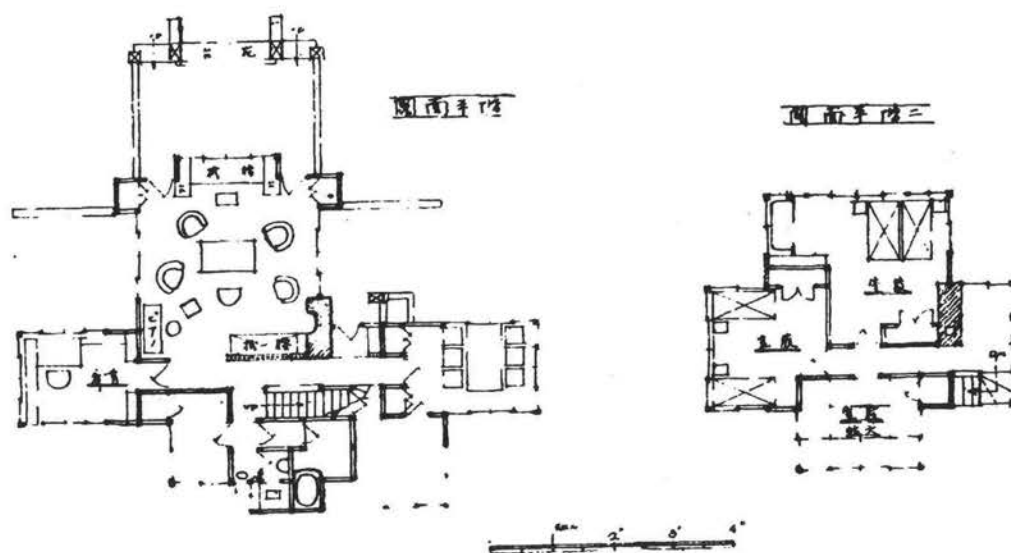
丁字型平面図



⑤文化の農園住宅 T11.10 高島司郎
十字型平面

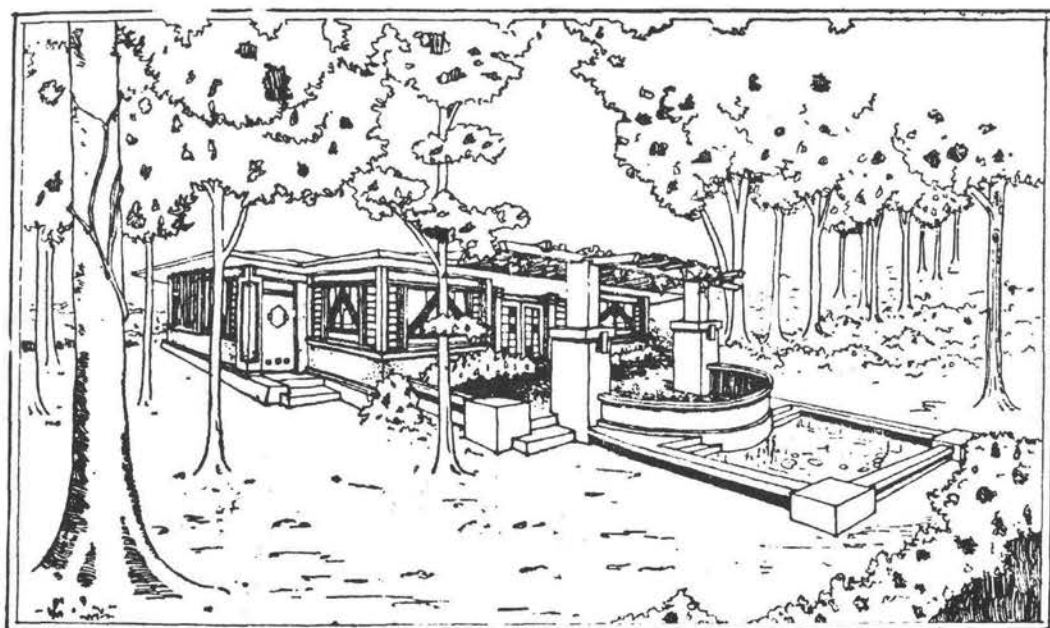
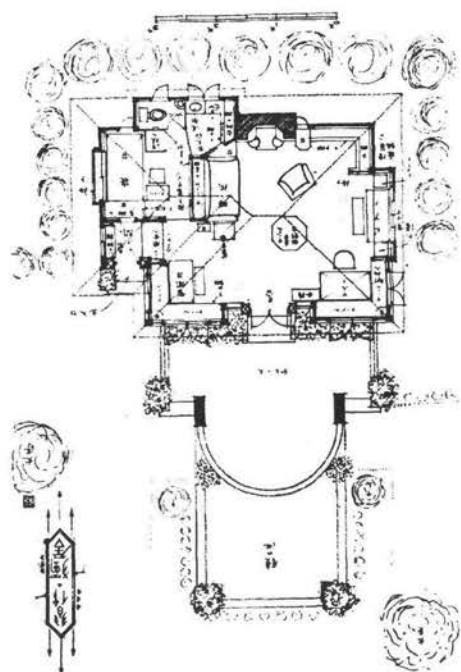


⑥スーベニール・ド・カルイザワ T11.11 高島司郎
十字型平面



⑦習作（独居） T11.12 高島司郎

□型平面



⑧習作〔平和〕 T12.01 高島司郎
複合型平面



図 景 配

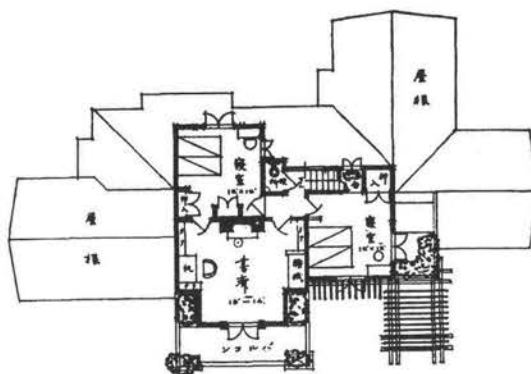
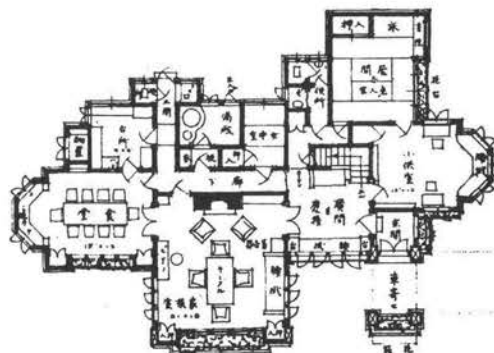
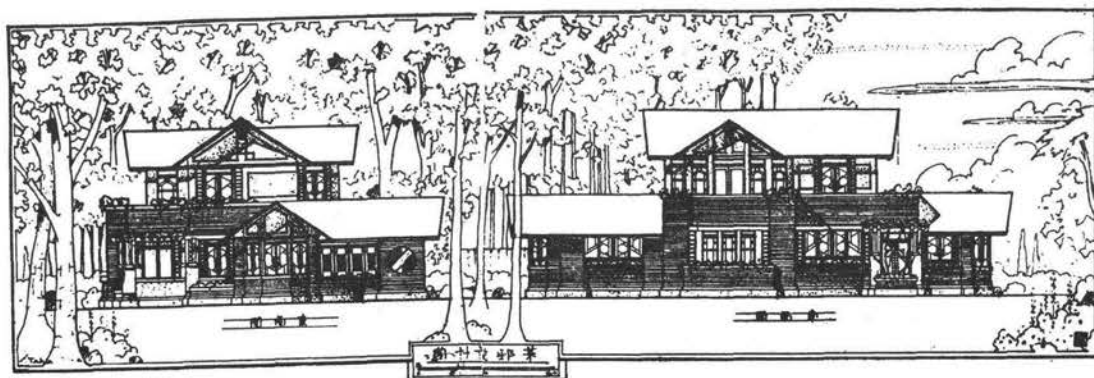


図 面 平 面 二

外壁面にバックハンドトリムが見られる
(スタッコ仕上の場合)

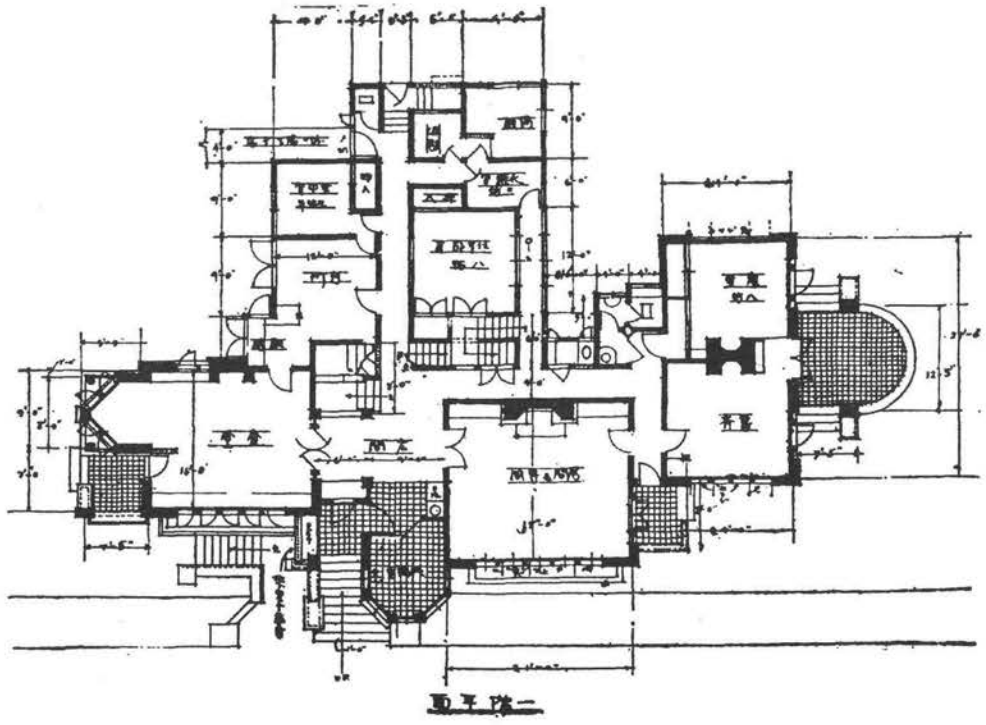
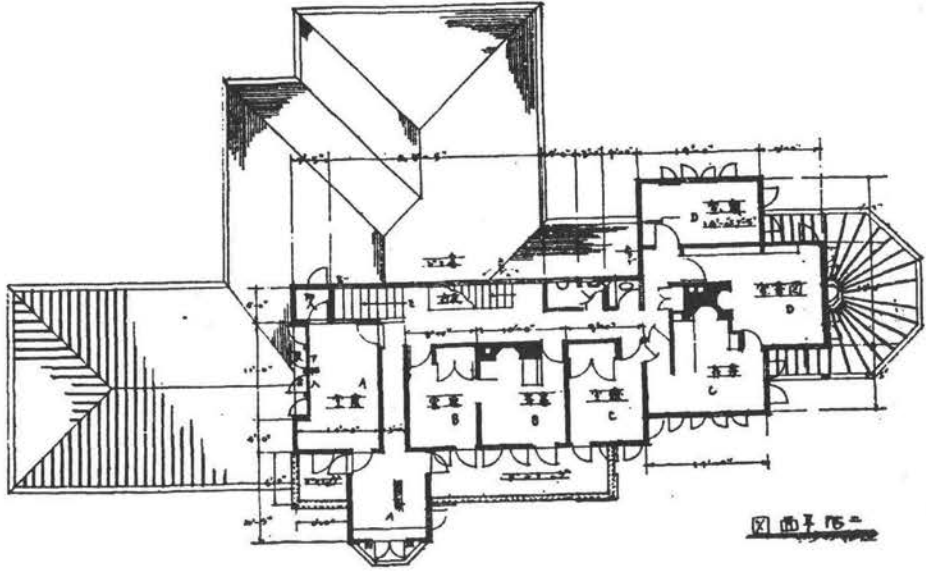


中 図 面 平 面 一

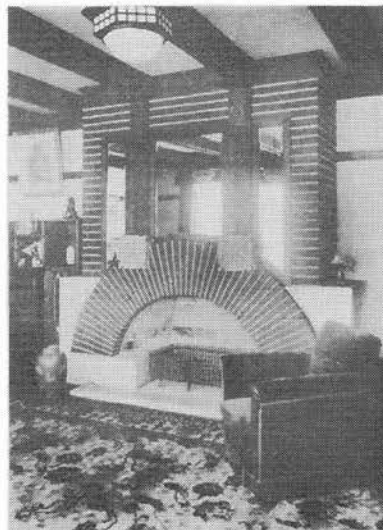
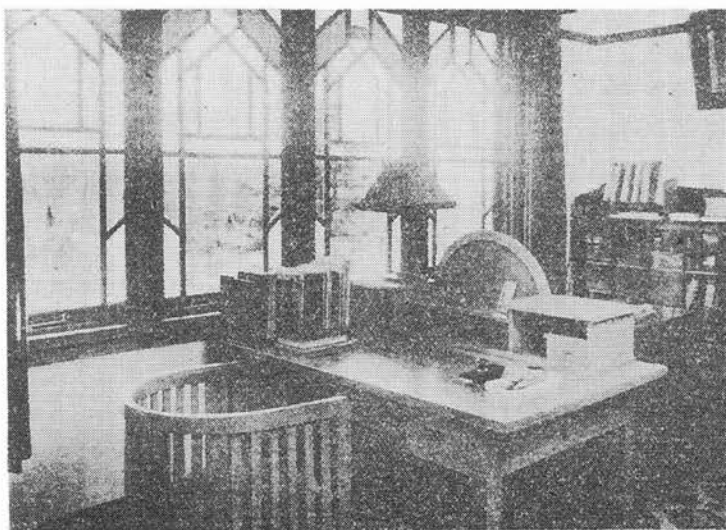
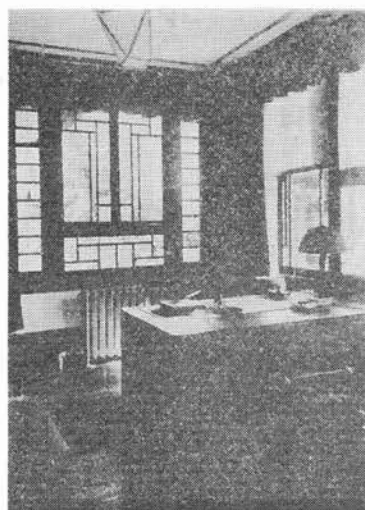
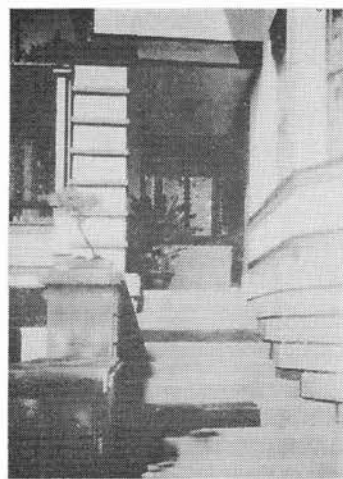
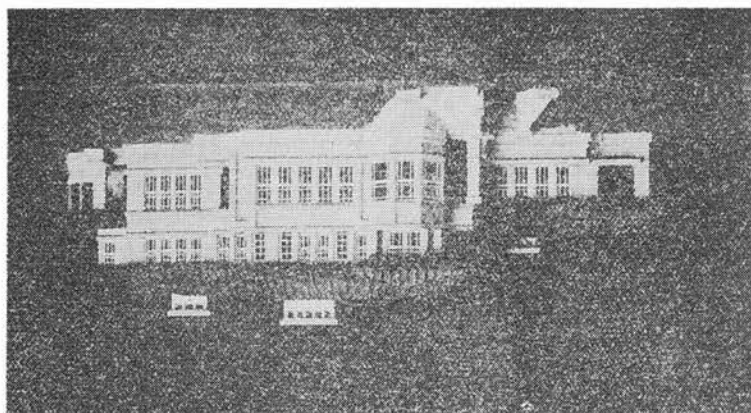


⑨神奈川小塚邸 T12.05 S 生（あめりか屋）

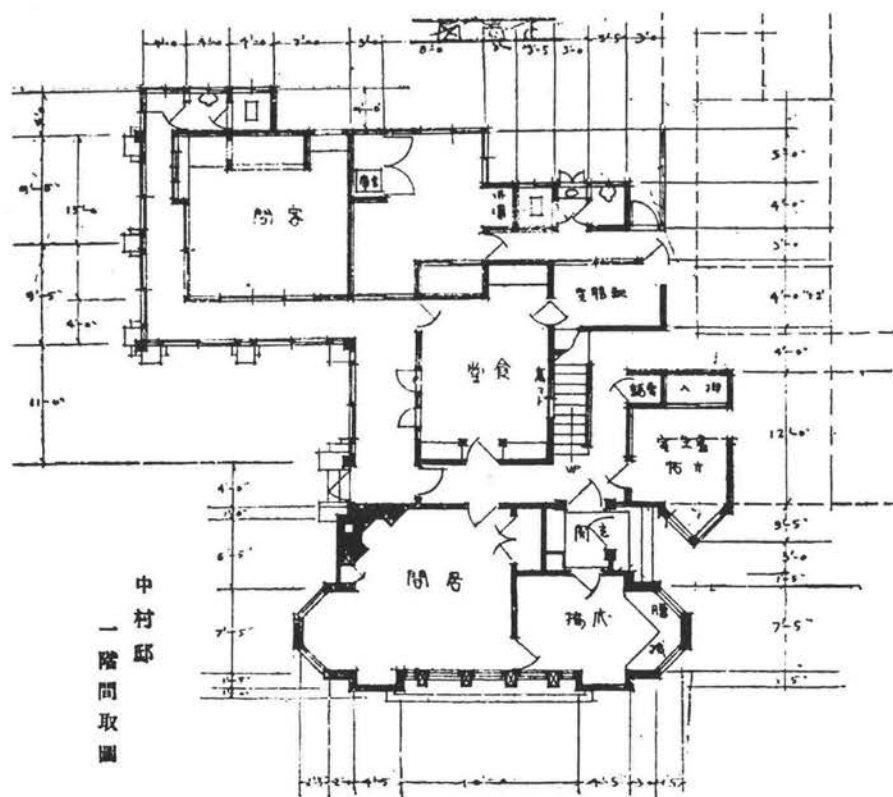
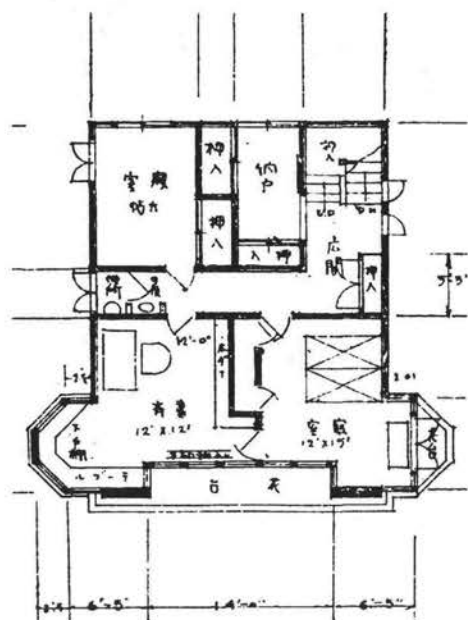
複合型平面



⑨神奈川小塚邸



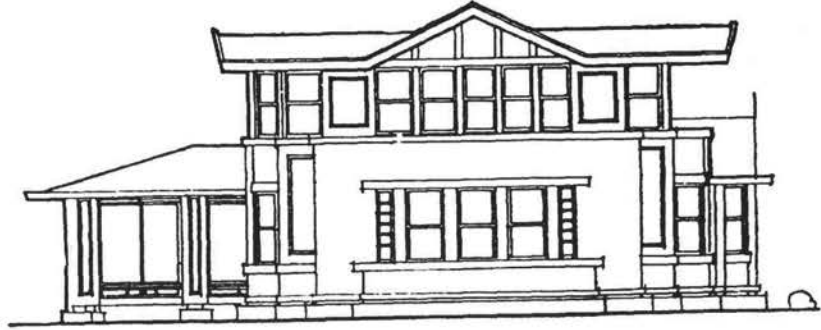
⑩古園の中に立つ家 笹塚中村邸 T12.06 あめりか屋
L字型平面



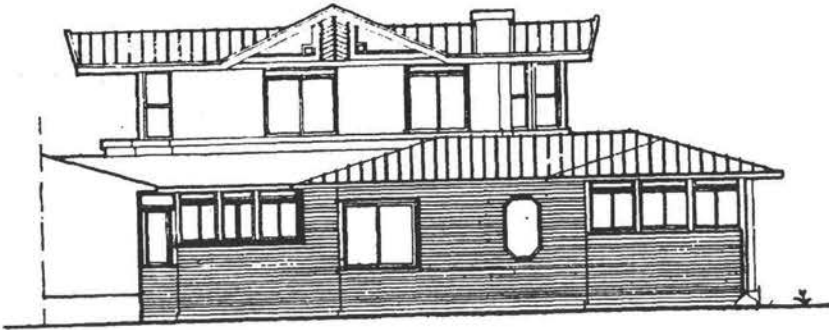
中村邸
一階間取圖

⑩古園の中に立つ家 笹塚中村邸

南側
正面の窓が
應接と居間
で左の袖が
日本間。



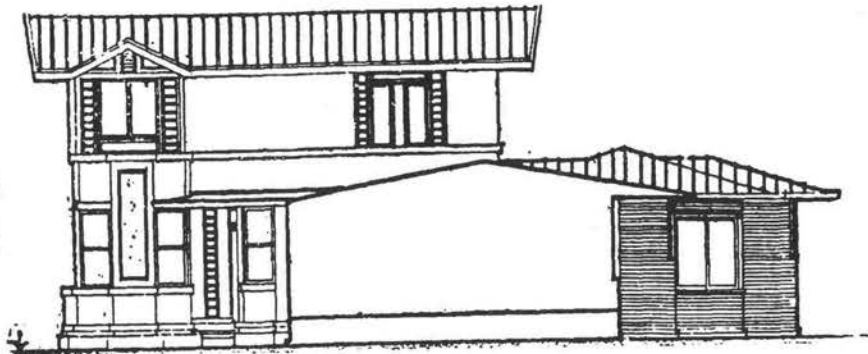
北側
裏手で、左端に
喰入つてゐるの
が舊館。



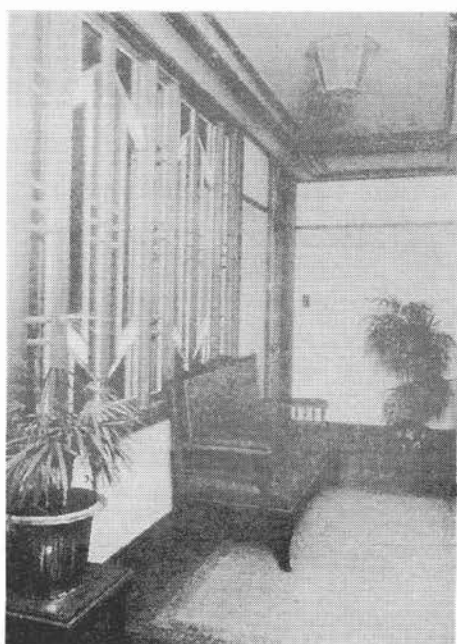
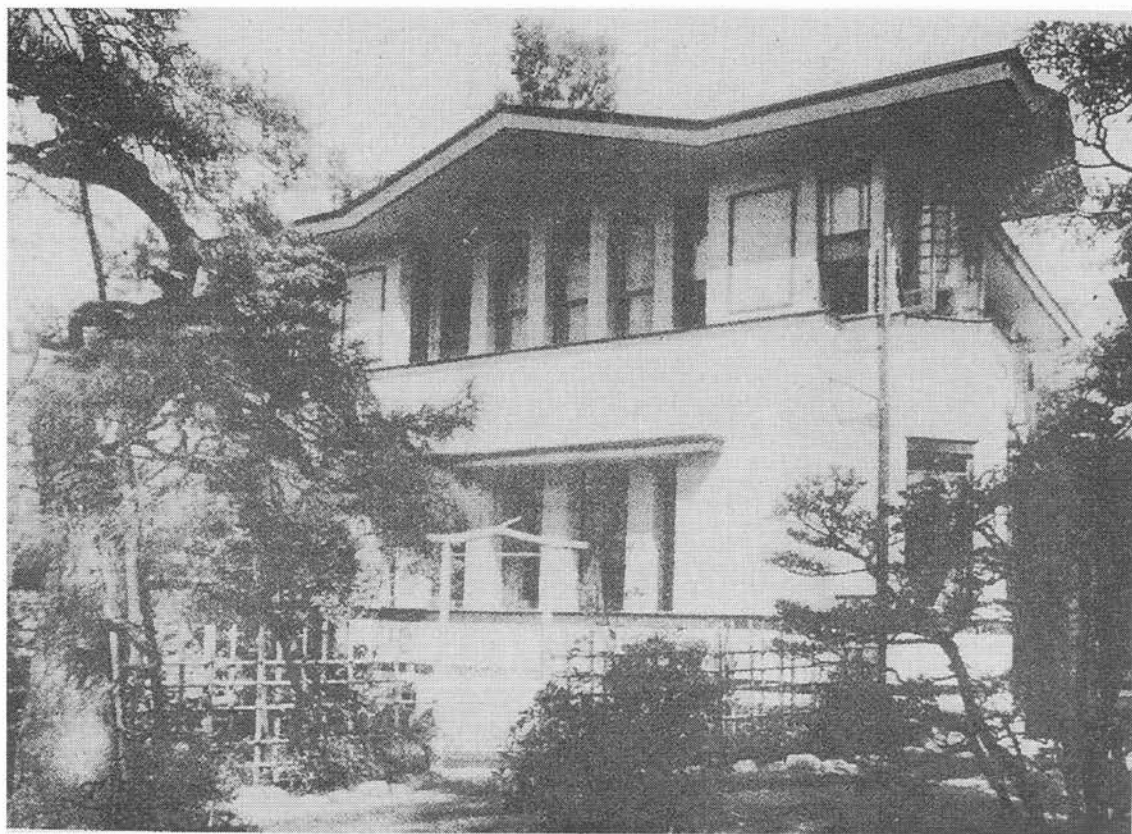
庭に直した所、
左の平建が前に
突出した日本間。
洋館へのとつ
きがヴェランダ



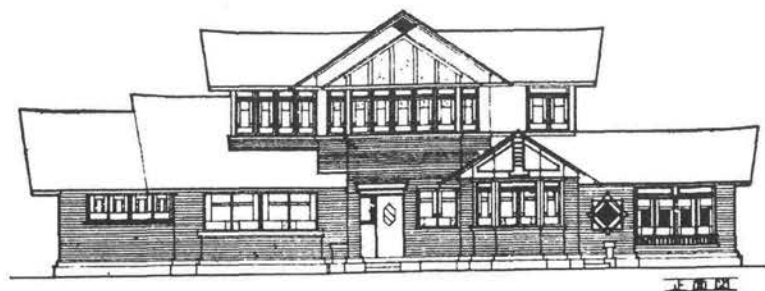
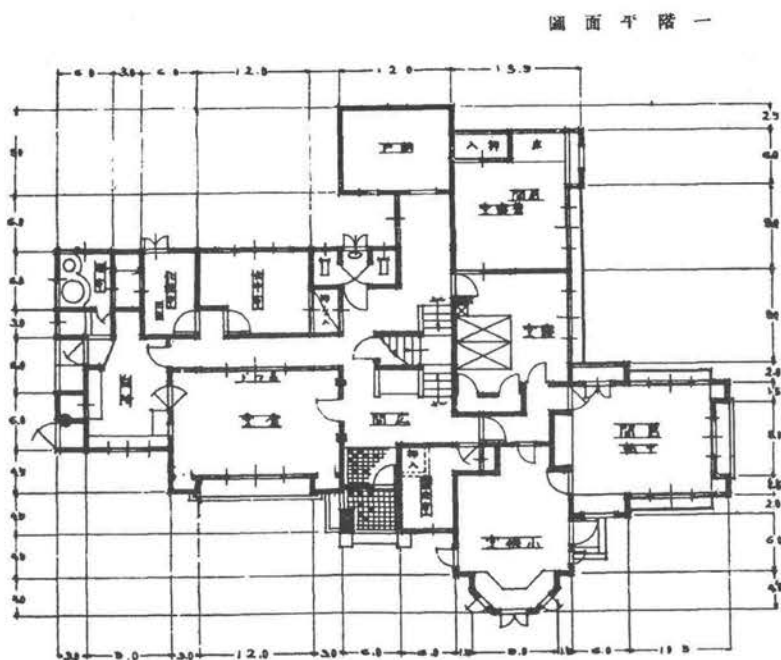
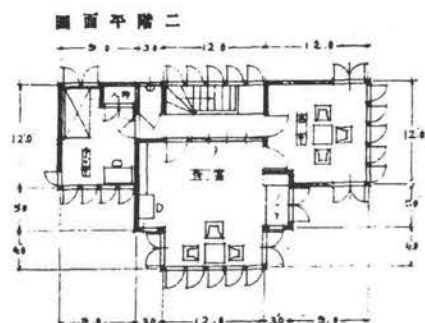
東側
白くなつてゐるの
は舊館に連接し
た所で、その左
が入口。



⑩古園の中に立つ家 笹塚中村邸

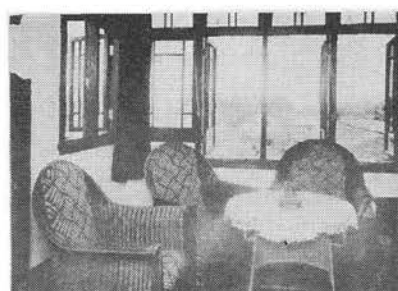
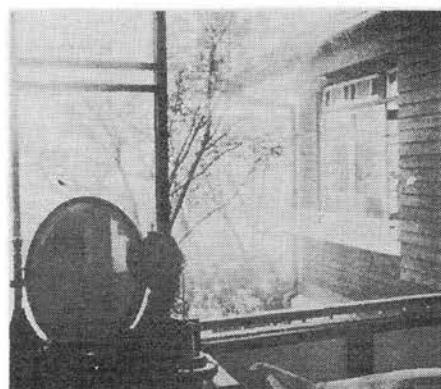
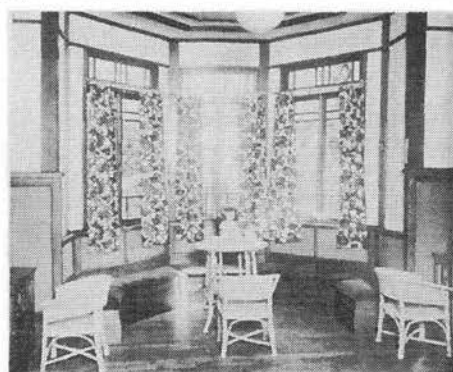
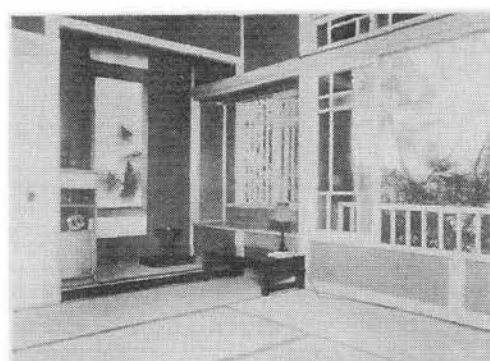
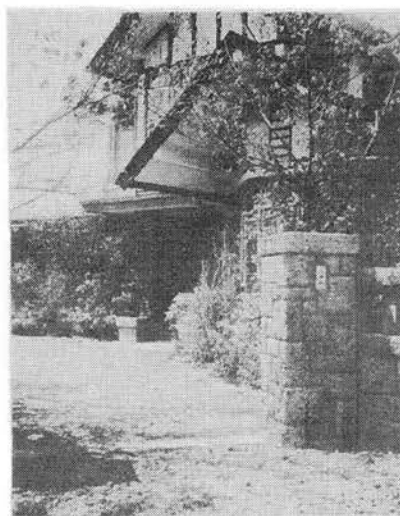
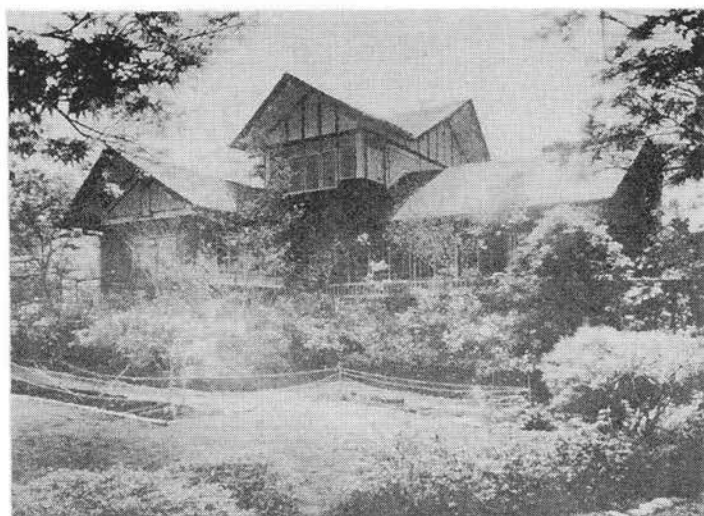


⑪丘の上に建つ家 中野八田熙邸 T12.07 あめりか屋
複合型平面

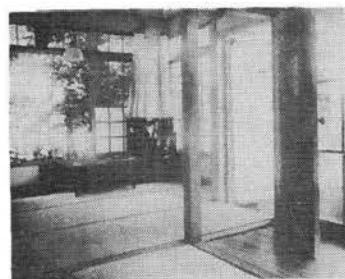
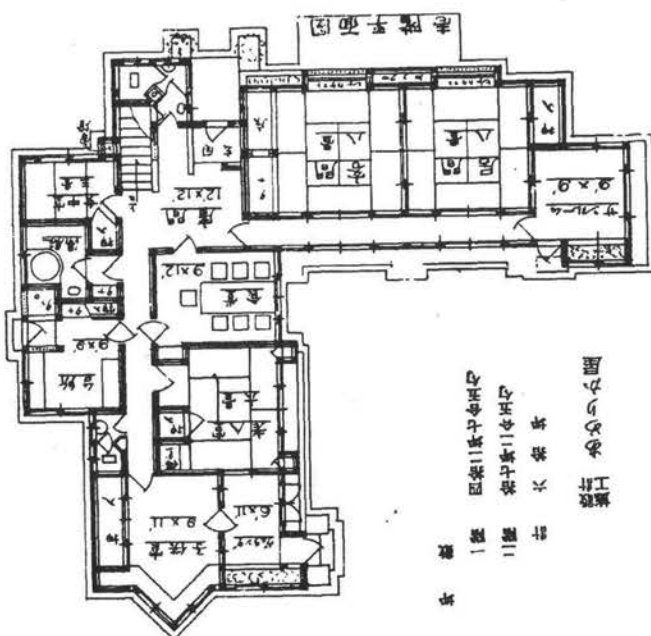
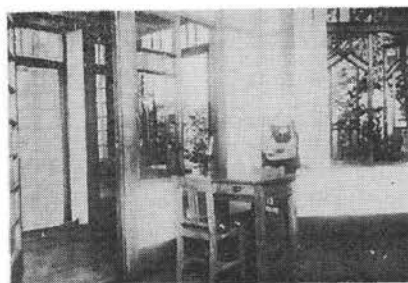
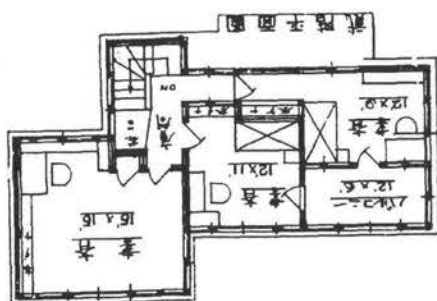
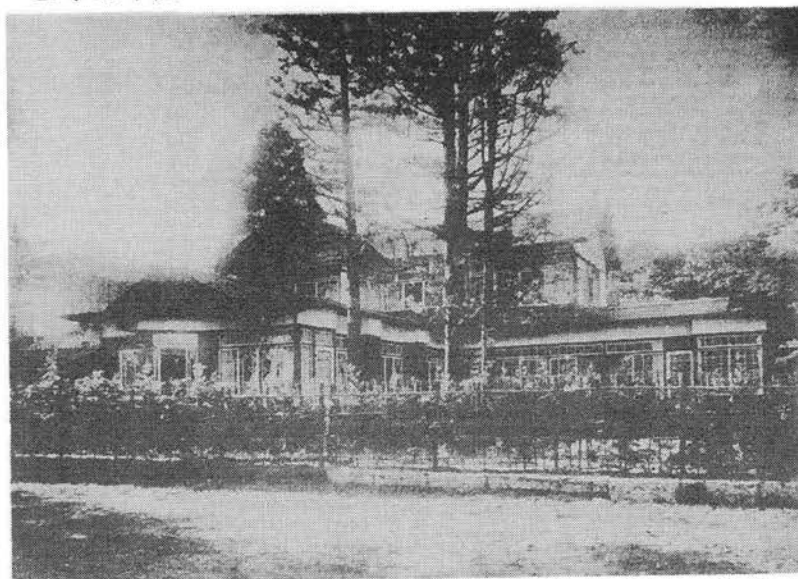


圖面立面正南

⑪丘の上に建つ家 中野八田熙邸

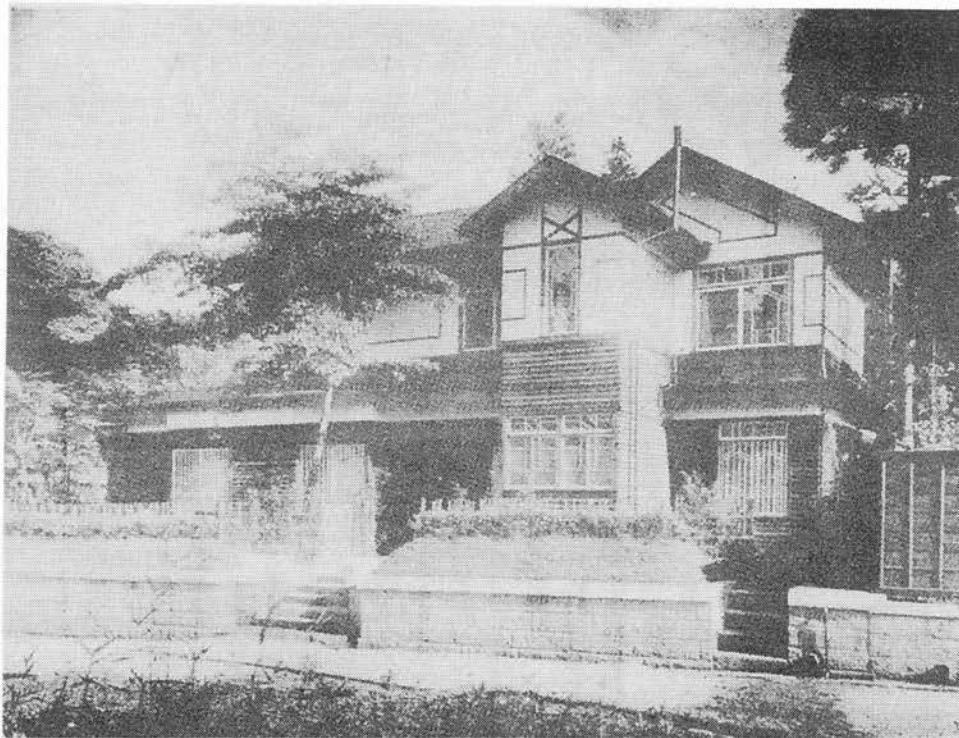
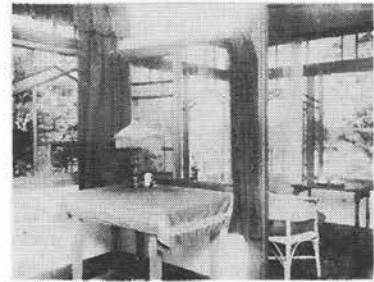
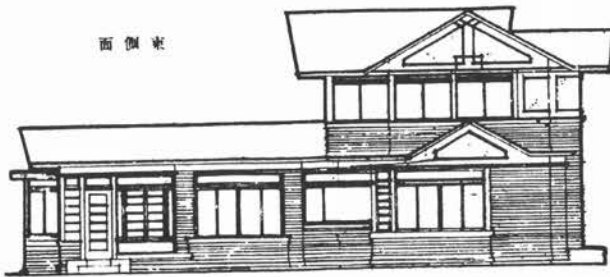
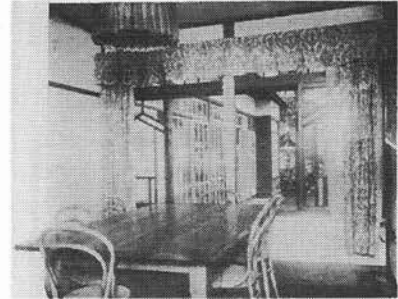
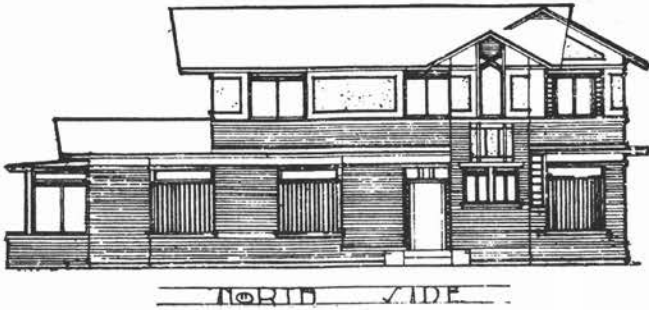


⑫杜の家 目白近衛町杉卯七郎 T12.08 あめりか屋
L字型平面

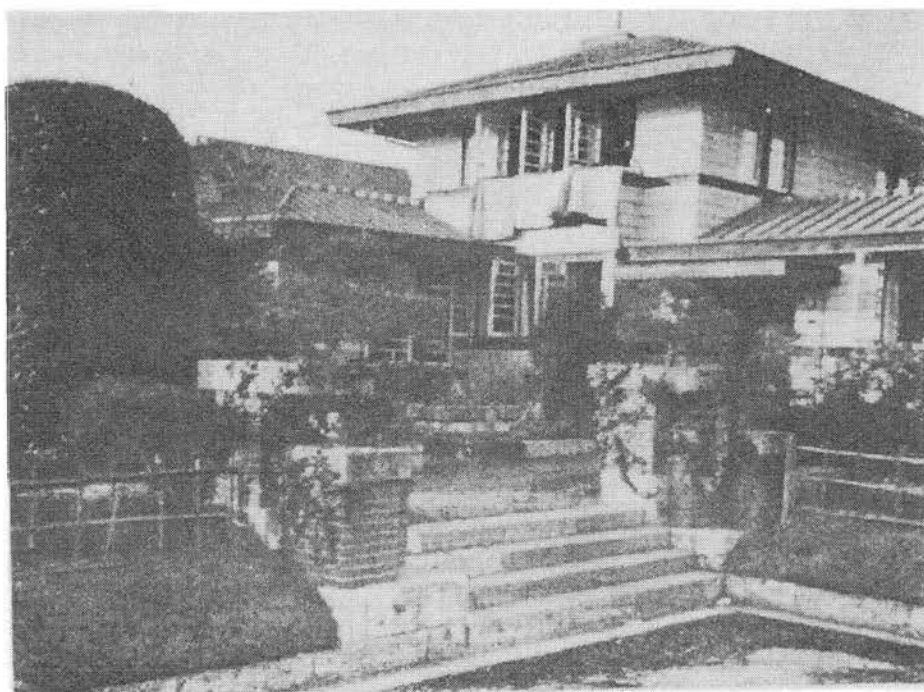


あめりか屋
工務
設計
昭和二十二年七月
目白近衛町
杉卯七郎

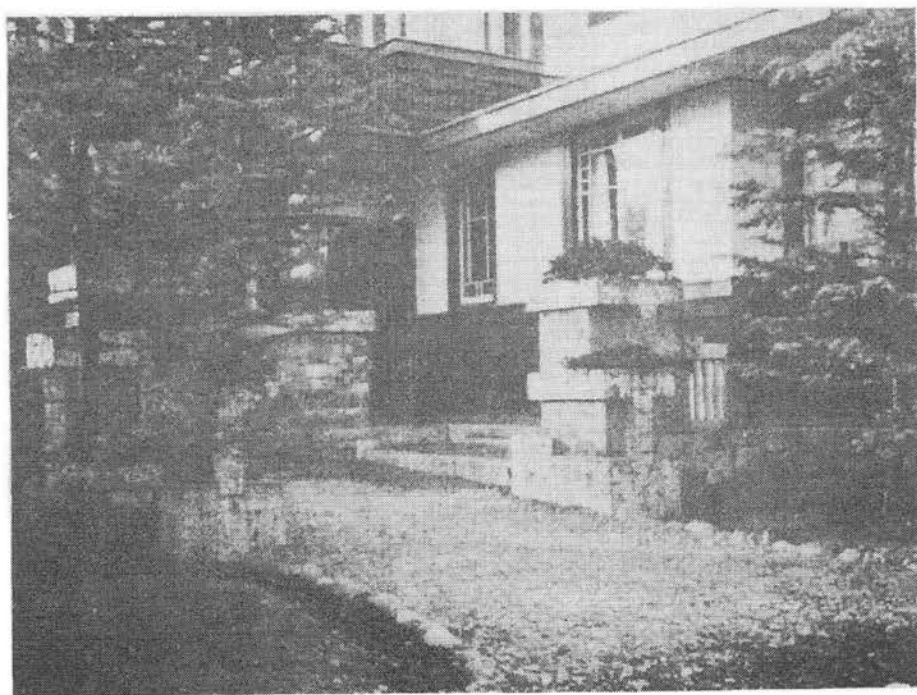
⑫杜の家 目白近衛町杉卯七郎



⑬神谷氏邸 S2.04

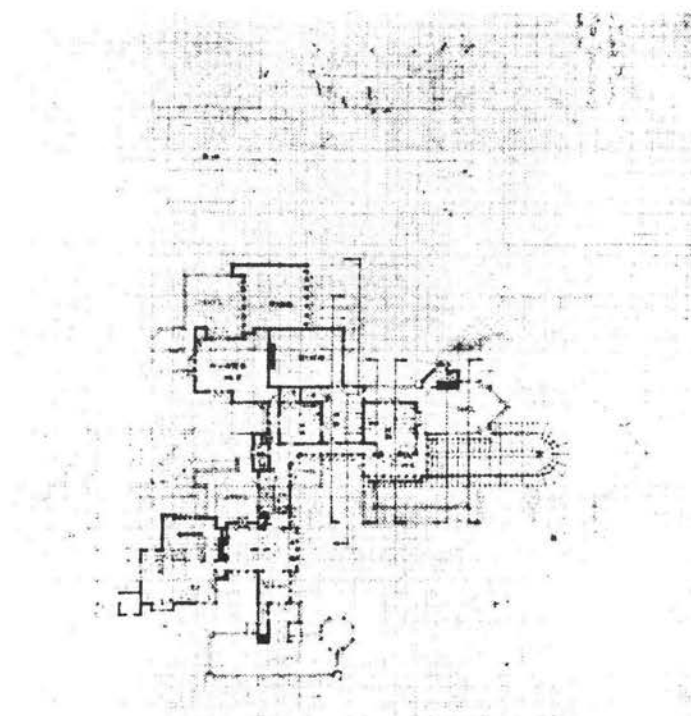
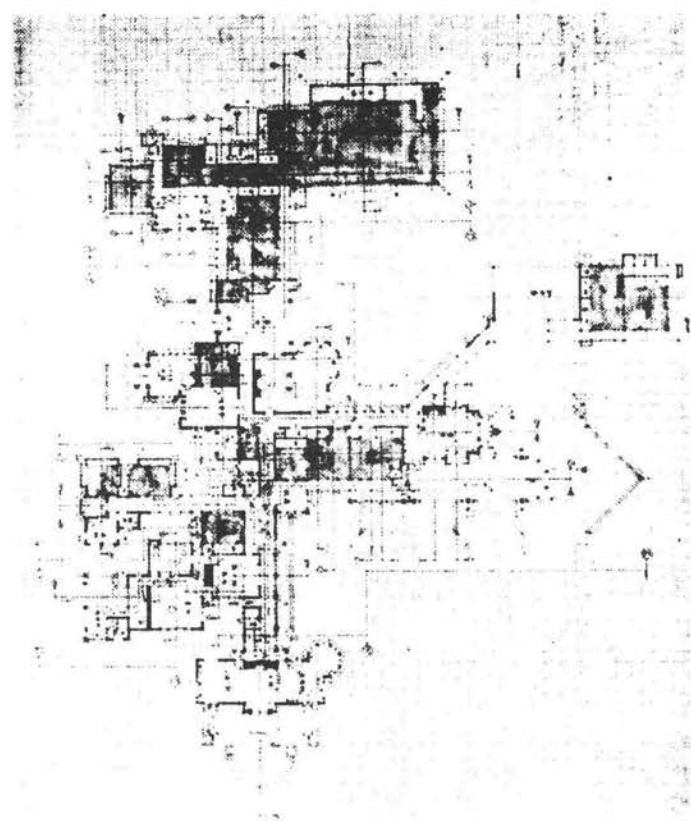


⑭白石氏邸 S2.04

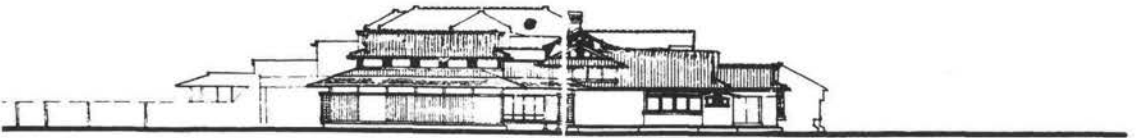


⑮讃州武田謙氏本邸 S2.10 高島司郎

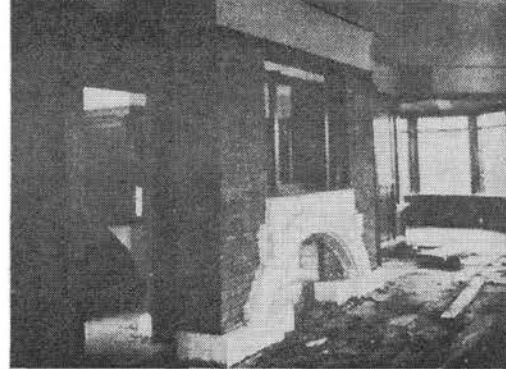
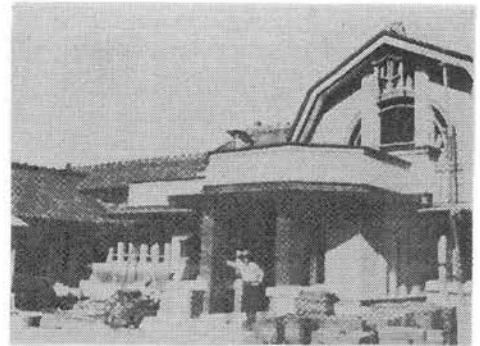
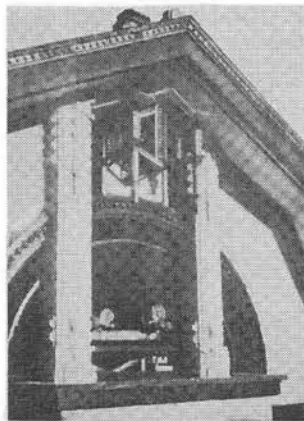
複合型平面



⑮讃州武田謙氏本邸

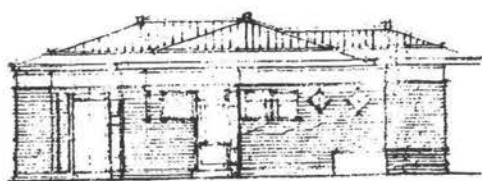
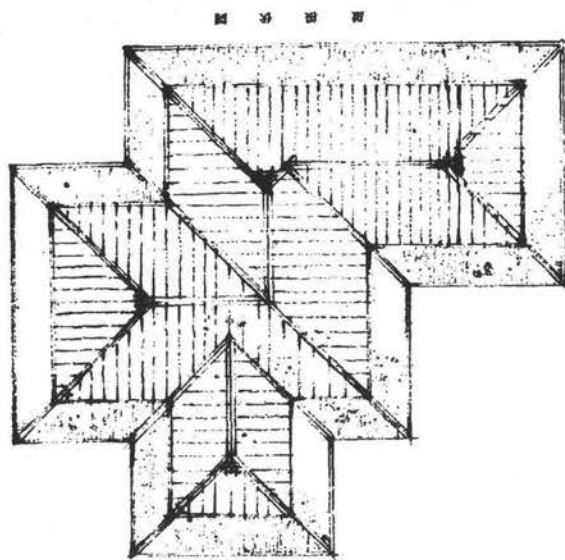
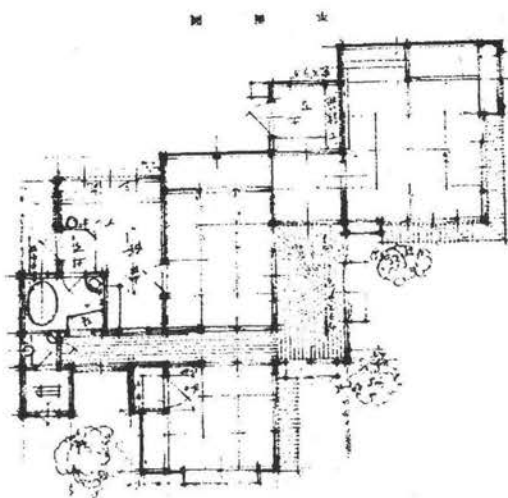


1/2 1/4 1/8

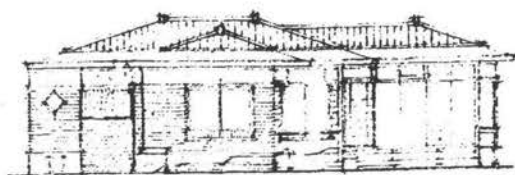


⑩郊外小住宅資料 S3.02 高島司郎

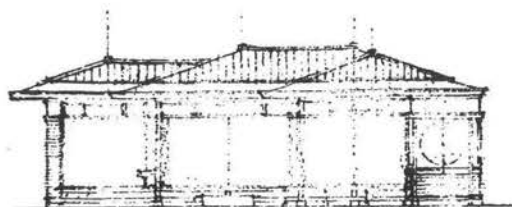
複合型平面



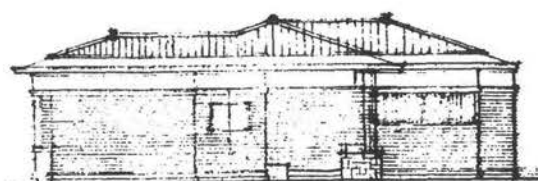
西 面 圖



南 面 圖



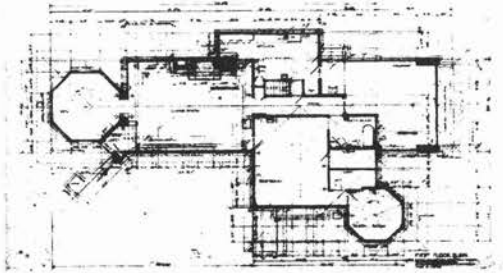
東 面 圖



北 面 圖



A black and white line drawing of a traditional Japanese building, possibly a temple or residence. The building features a thatched roof and a prominent chimney. It is surrounded by stylized trees and foliage. The drawing is done in a sketchy, expressive style with bold lines and cross-hatching for shading. The building has a long, low profile with a series of windows or doors along its side. A small, square chimney is visible on the right side of the roof. The surrounding landscape is depicted with simple, wavy lines representing trees and bushes. The overall composition is horizontal, with the building as the central focus.



164

終章

終 章

はじめに

フランク・ロイド・ライトのもとで帝国ホテルの建設に従事した日本人スタッフは、愛弟子である遠藤新をはじめ、南信、田上義也、河野傳、内山隈三、渡辺己午蔵、藤倉憲二郎、伊藤文四郎、伊藤清造、土浦亀城、あるいは支配人の林愛作が書き記したナガオ、ナガハマ、ヤマサキ、ウオタニ、ムイアイ、アリヤ、マキグチ、ミヤチ、フジタ、イシズカ、タカハシ、ツネマツ、マツモト、ケンモツ、ハヤノ、イイムラ、ドバシと多数に上った。

以上のライトのスタッフのうち、愛弟子である遠藤新と、大正期および昭和前期の後半に遠藤と共同で設計事務所を営んだ南信、また独立後の遠藤の所員であった柴田太郎と岡見健彦の作品について、各々について、時期は異なるものの、ライトあるいは遠藤の影響が強く及んだ作風から、独立した作風へと変化したことを明らかにした。このことから、既出の4人が設計に携わった年代と作品の主な特徴を見ることで、4人それぞれの作品の特徴あるいは4人に共通した特徴とその変化について本章で考察する。

次いで、帝国ホテルの建設に伴い、使用されるようになった「ライト式」「ライト風」「ライトまがい式」などの、ライトの建築あるいはライトの影響を受けた建物の呼称とされた用語について、使用年代および用語の示す意味の変化について明らかにした。

一方、流行語として一般化した「ライト式」などの用語に対して、橋口信助が会主である住宅改良会が発行していた住宅雑誌である『住宅』に多数のライトの影響を受けた住宅の掲載が見られた¹。『住宅』には、大正11年（1922）から昭和3年（1928）の間に、ライトの影響が色濃く反映され、解説文などに「ライト氏の流れを汲んだ建築」などの用語が使用された8軒の住宅と、これらと同様の特徴を持つ住宅9軒の合計17軒が確認でき、ライト式の住宅の流行を裏付けることができた。なかでも、高島司郎が直接のライトの弟子かどうかは明らかに出来なかったものの、彼の設計による実施案および計画案が9軒（4軒に「立体的有機体」などの用語が使用されている）あることが判明し、掲載作品の半数を超えていることが明らかになった。

1. 遠藤の住宅作品

遠藤の作品については、平面の構成の変化および個室と家族の空間、あるいは家具の扱いの変化を見ることで、遠藤の作風の変容を明らかにした。

遠藤の設計した24件の住宅について、生活空間の時代的变化を見たが、間取りの構成、個室と家族の空間の構成、および家具の扱いの3点に顕著な変化が見られた。

大正期の間取りは、居間および居間兼食堂を中央に据え、各室が軸線に沿って1列に並び、たとえばライトの設計になるロビー邸に見るように、一室の幅が建物の巾とされ、細長く凹凸の多い平面形状であった。また、たとえば、居間兼食堂と座敷の間の腰壁付の開

口部に見られるように、室同士の連絡は、間接的であった。

これに対して、昭和初期の間取りは、正方形および短長方形の平面形に居間と食堂等を納め、周囲に他室を付した形態をしており、隣り合う室は建具により短い距離での行き来できる各室の配置であることが明らかになった。つまり、居間と食堂等の主要室を四角い平面内にまとめることで、大正期の間取りに比較して、動線距離の短縮を図り、各室同士が床からの広い開口で直接繋がることにより、連続性と一体感を強めた日本の続き間のような生活空間の構成へと移行したことを明らかにできた。

2階建については、大正期は、主に設備関係室をまとめた1階の上部に、面積の広くない2階を載せていた。ところが、昭和初期には、1階の平面形の変化とともに、居間と食堂を含むほぼ正方形の1階上部に2階を載せた造りであることが判明した。また、1階および2階に家族の個室（寝室）が配置された大正期とは異なり、昭和初期には、2階のみに個室のある住宅が見られるようになったことが明らかになった。

個室と家族空間については、平家の建物では、大正期には、たとえばライト設計のロビー邸のように細長い平面形で、建物中央に居間および食堂を置き、個室が、細長い建物の末端部に配置されることでプライバシーの確保をしたと考えられることが明らかになった。

引き続き昭和期に入った後にも発展型と見られるものの、日本の空間構成のように、広縁が座敷と食堂（または茶の間）に接した平面が現れた。これらは、個室と居間兼食堂などが、引き戸や引き込み戸で仕切られた形式をもち、各室同士の連続性を高めて1室空間として使用できる平面形に発展したものと考えられることを明らかにした。2階建では、大正期は、2階および1階部分にも寝室あるいは寝室に使用すると考えられる座敷が設けられており、パブリックスペースとプライベートスペースを1階と2階とで明確に分離してはいない。これに対して昭和初期には、個室（寝室）が2階に配置された平面の建物が4軒あり、個室の1階から2階への分離が進んでいったことが明かになった。

ライトの影響を受けたと考えられる造り付け家具については、長椅子は、大正期に10例見られた。ところが、昭和期に入ると長椅子は2例しか見られなかった。また、置き家具については、長椅子は、大正期には1例しか見られず、昭和期に増加している。そして、長椅子の、暖炉との配置関係は、大正期は、相対する外壁側に配置された対面型が多数であるのに対して、昭和初期には、直角型へ移行している。このことは、大正期における、造り付けの長椅子および机による固定された位置関係の生活空間を、昭和初期に入り、置き家具の使用に切りかえることにより、自由に家具配置ができる生活空間へと変化させていった遠藤新の生活空間に対する作法の移行がうかがえるものと考えている。

2. 南信の住宅作品

南信は、大正11年から大正13年まで遠藤南建築創作所の共同設計者として、ライトのスケッチによる山邑邸の現場を担当したが、大正14年に大阪で独立し、昭和9年に渡満するまで南建築事務所を営んだ。渡満後は、再び遠藤と共同の事務所を設け、昭和18年に結核のため療養するまでの間、共同で設計を続けたことが明らかになった。

南の設計によることが明らかな、南建築事務所の前半の時代である大正15年の菅野邸から昭和3年の亀高邸までの住宅作品にみられる特徴には、外観では、緩勾配屋根、深い軒、屋根のケラバおよび鼻隠しの転び、塔状の煙突、太柱、均等割りでない格子の建具、

水平線を強調したデザイン、平面では、軸線が通り、室の凹凸が多く、部屋の3面に開口部がある設計で、太柱、開き窓の使用、暖炉がみられた。これらの点については、水平線を強調したデザインや3面開口の部屋、あるいはケラバの転びなどのようにライトや遠藤新の設計による住宅と共通した特徴がみられることが明らかになった。

このことは、雑誌の評論で「本物のライト式」と評されたようにライトの強い影響が住宅設計に表出したものと考えられる。

その後、南信の住宅作品は、昭和4年から昭和7年の間に作風に変化が生じ始めたものと考えられる。特に昭和7年に竣工した自邸は、それ以前にはみられない乾式工法の陸屋根で、凹凸のほとんど無い長方形の平面形をしている。建具は大きいガラスの入った格子の無いもので、窓はすべて引き違いとなっている。自邸と同様に昭和9年（『住宅』掲載）の高田邸も乾式工法で、平面および外観についても自邸とほぼ同様にできている。このように、この時代の建築には、モダニズムの影響がはっきりと見られ、作風に大きな変化が生じたことが明らかになった。

3. 柴田太郎の住宅作品

遠藤新建築創作所の所員を経て独立した柴田の作品は、住宅、物販店、飲食店、療養所、事務所ビルなど多岐にわたるが、設計競技への応募作品を除いて、郷里の上諏訪あるいは岡谷出身者を施主としていた。

資料が確認できた3軒の住宅のうち、昭和5年竣工の正木邸は、瓦葺きの大屋根で、下見板と押し縁羽目板の外壁の外観で、室内は、座敷を除いて、腰壁が板張り、壁と天井が漆喰の塗りまわしであることが判明した。居間は、複数の天井高で構成されており、たとえば、遠藤の設計による白井邸の天井の構成に類似していることが分かり、遠藤の影響が明らかになった。（〔表1〕昭和8年参照）

昭和10年竣工の藤原邸は、屋根が鉄板瓦葺きで、外壁が1階と2階とも内法高まで羽目板張りで、その上部が左官仕上の外観であった。室内は、囲炉裏のある台所を除いて、2間の和室がある、和風の住宅である。また、同年竣工の五味邸は、鉄板屋根で、外壁が、1階・2階とも内法高まで押し縁下見板張りで、その上部は左官仕上となっており、室内は、座敷を中心とした室構成で、和風のたたずまいの住宅であることが明らかになった。

昭和5年竣工の正木邸は、遠藤の影響が強く現れた作風の住宅であるのに対して、昭和10年竣工の藤原邸および五味邸は、和風の住宅である。これらのことから判断すれば、昭和5年から昭和10年の間に柴田太郎の住宅の作風に変化が生じたものと考えられることを明らかにした。

4. 岡見健彦の住宅作品

昭和前期における岡見健彦設計の住宅については、昭和8年から昭和17年までの間に設計された17軒の存在が、設計図（原図）により確認できた。

岡見の独立当初である昭和8年に設計された間邸は、ライトおよび遠藤の影響を受けた作風で、屋根は寄せ棟、外壁は1階内法高までがタイル張りで、その上部と2階は左官仕上であり、大きく設けられた開口部とモダニズムの影響が現れた丸窓が見られた。設計が昭和11年の藤田邸は、平面は凹凸の多い形態をしているが、屋根は陸屋根で、外壁の仕

上材は不明だが、単一材料で仕上げてあり、大きい開口部が設けられている。また、外観全体は四角い箱を組み合わせた形態をしており、モダニズムの影響が顕著であった。

次に、昭和12年の林（リン）邸は、凹凸の多い平面で、外壁は単一材料が使用されており、素材の確認はできていないが、写真からは左官仕上と推測される。開口部については大きく設けられており、屋根は寄せ棟となっているが、敷地が道路からは高い位置にあるため、道路からは陸屋根のようにも見える。このように林邸についてもモダニズムの影響が現れている。そして、昭和15年の小川邸は、凹凸の多い平面で、切妻屋根と単一材料で仕上げた外壁で構成されており、平面には、ライトおよび遠藤の影響が見られるものの、外観には強い影響はほとんど見られなかった。

岡見の設計になる住宅の外観および平面の特徴は、緩勾配屋根、瓦葺、水平線の強調、外壁の左官仕上あるいは下見板（タイル）と左官仕上の併用、建物と統一された門塀デザイン、凹凸の多い平面形、造り付家具、暖炉、テラス、バルコニー、室3面の開口部、など多くの点で、フランク・ロイド・ライトや遠藤新の住宅の特徴と共通していることが明らかになった。殊に、凹凸の多い平面形は、小規模住宅を除き全期に亘ってみられ、ライトおよび遠藤の強い影響が現れていた。一方、陸屋根で四角い箱を組み合わせた外観デザインの⑧藤田邸にはモダニズムの影響が顕著であった。

つまり、岡見健彦はライトや遠藤から受けた影響を計画の基底に持ちながら、モダニズムの影響を受けた独自の住宅デザインへと変容したと考えられることを明らかにした。

5. 遠藤新・南信・柴田太郎・岡見健彦設計の住宅の特徴

以上述べてきた遠藤、南、柴田、岡見の4人が、設計に従事した期間と作品の主な特徴について、改めてみてみたい。なお、4人の設計業務期間に伴う作品の概要を、図版によりまとめたものが、[表1]である。

1) 遠藤新は大正11年に南と共に遠藤南建築創作所を設立した。その後、大正14年に単独で事務所を運営するようになったが、昭和8年に渡満し、昭和10年には再び南と共同で事務所を開設した。

発表作品には南との連名は無く、遠藤の名前だけが記載され、大正12年から昭和12年までの期間に、図面などが雑誌に掲載された24軒が、確認できた。

平面図に見るように、ライトの影響が強く現れた大正期の、主要室が一直線に連なった凹凸の多い細長い平面形が、昭和初期には正方形に近い平面形に変化し、室内の連続性も、大正期から昭和初期にかけて、腰壁付の開口部の間接的な連続から、床から繋がる直接的な連続へと変化していった。

また、全期に亘り、板の間と座敷の床高には高さに差があり、座敷は板の間より高くなっている（約300mm）。

このように遠藤は、日本独特の座敷の生活と、新しい生活形式である椅子の生活を融合するという、新時代に相応しい日本の生活空間の創造を、住宅設計に対する重要なテーマと考えていたのではなかろうか。大正期に見られる、間接的な連絡による居間兼食堂と座敷の関係から、昭和初期の、床からの広い開口により連続し一体化した居間兼食堂等と座敷の関係への移行は、続き間という日本の空間の構成方法による、新しい生活様式の考案を示したものとも考えられた。このことは、遠藤新が恩師ライトの影響下から、独自の作

風へと変容したことを物語るものと考えることができた。

2) 南信は、大正11年から大正13年までと、昭和10年から昭和18年にかけて、遠藤と共に設計事務所を運営した。大正14年から昭和9年にかけては、独立して、南建築事務所を経営し、各種の建築を設計した。この期間に設計されて雑誌に掲載された、10軒の住宅が確認できた。

大正15年から昭和3年までの7軒には、図面によれば屋根は初め、スレートまたは柿、あるいは瓦葺きが使用されていると考えられたが、やがて瓦葺きへと変化した。外壁については、左官仕上げが多用され、1軒のみが下見板張りであった。外観では、深い軒の出と水平線の強調が特徴で、窓の建具は、不均等割りの棧が使用されていた。平面は1軒を除き凹凸の多い平面形であった。また、室3面の開口部も特徴の一つと考えることができ、これらのことからライトの影響が強く反映した作風であることが明らかになった。

しかし、雑誌掲載年が昭和7年の新荘邸は和風の住宅であり、昭和7年竣工の自邸は乾式工法の陸屋根で、外壁は板に白色ペンキの塗装が施され、2階の一部が板にクレオソート塗装されていた。窓の建具には棧が無く、大きいガラスがはめ込まれている。平面は、長方形でほとんど凹凸が無い形状であった。また、昭和9年の高田邸も同様に乾式工法で施工されたもので、仕様や平面計画についても自邸と大きな違いがなかった。

以上のことから、南の設計した住宅の特徴は、大正期にライトの強い影響が見られることが分かり、昭和4年から昭和7年にかけて、作風に変化が生じたものと考えられることが明らかになった。昭和7年に竣工した自邸では、建物全体にモダニズムの影響が認められるが、板の間と座敷の床高には差があり、座敷は板の間よりも約300mm高くなっている。この床高の差のある板の間と座敷の関係は、遠藤の住宅に多数みられる作風であり、南が遠藤から影響を受けたものと考えることができた。

3) 柴田太郎は、帝国ホテルの現場でアルバイトをしていたことがわかり、このときに遠藤新と知り合ったものと考えることができた。大正12年4月から大正14年3月まで、函館工業学校の教諭として勤務した後、大正14年4月から昭和3年にかけて遠藤新建築創作所の所員として設計に従事した。

その後、昭和3年に独立して、戦後に至るまで柴田太郎建築事務所を主宰し、寄宿舍、店舗ビル、療養所など多様な建築を設計した。住宅については、3軒の資料が確認できた。

昭和5年に竣工した正木邸と昭和10年に竣工した藤原邸および五味邸である。正木邸は、長野県に建てられたが、設計図には信州によく見られる屋根のすずめ踊りを使用している。このことは、柴田が伝統的な意匠を取り入れていたことを示しているが、実際に建設された建物には、すずめ踊りは無く、瓦屋根となっている。外壁には、腰に下見板、壁に押し縁羽目板が使用されており、東側の妻壁には4連の縦長窓があり、ライト設計の自由学園（現自由学園明日館：西池袋）や遠藤設計の自由学園女子部講堂（東久留米）にある縦長窓の意匠が影響したものとも考えられる。外観は、深い軒の出と水平線の強調された意匠となっている。なお、平面は、凹凸の多い平面形であり、外観写真に見るように南・東・北の外壁3面に設けられた連続した窓が特徴となっている。

室内については、大谷石の暖炉がある居間が、たとえば遠藤の白井邸の室内の構成に類似していた。室内の中央は天井高が高く、暖炉前の部分は低い天井高になっている。

以上のことからわかるように、正木邸は、ライトと遠藤の影響を受けた建物であり、特

に遠藤の影響が強いものと考えることができた。

昭和10年竣工の藤原邸は、屋根は鉄板瓦棒葺きで、外壁が羽目板と左官仕上げとなっている。居室は和室で構成されており、平面はほとんど凹凸の無い長方形である。また、五味邸は、和風の住宅で、屋根が鉄板葺きの入母屋で、外壁は押し縁下見板と漆喰が使用されている。窓建具には、遠藤設計の建具によくみられる、建具最上部の棧割が下部よりも小さい意匠が使用されていた。

このように、柴田の住宅については、昭和5年の正木邸では、遠藤の影響が指摘できた。一方、昭和10年の2軒の住宅は、和風であり、細部に遠藤の影響が見られるものの、作風の特徴は大きく変化したことが明らかになった。

4) 岡見健彦は、大正14年の東京美術学校卒業後から昭和3年7月31日まで、遠藤新建築創作所の所員として設計業務に従事した。同年12月に渡米し、昭和4年8月から1年間、タリアセンでライトの薫陶を受けた。帰国後の昭和7年に岡見健彦設計事務所を開設し、縁戚関係の建物の設計を中心にして、戦後に至るまで事務所を主宰した。

昭和7年から昭和19年までの昭和前期の、昭和8年から昭和17年の間に17軒の住宅設計原図が確認できた。

昭和10年の由良邸の片流れ屋根と昭和11年の藤田邸の陸屋根を除く15軒は、切妻屋根あるいは寄せ棟屋根の使用を主としている。外壁は、仕上が不明の1軒を除き、全期を通じて左官仕上げが最も多く10件で、他は、下見板(3軒)あるいはタイル(2軒)と左官の併用で仕上てあった。また、外観は、水平線を強調した意匠が13軒に見られたが、深い軒の出は、半数以下の7軒にしか見られなかった。

昭和8年の間邸には、大きいガラス窓や丸窓が見られ、昭和10年の由良邸には片流れ屋根が、昭和11年の藤田邸では、陸屋根と四角い形態を組み合わせた外観が建物の特徴として現れていた。また、昭和12年の林(リン)邸は寄せ棟屋根ではあるものの、大きいガラス窓や四角い形態を組み合わせた外観が、建物を特徴付けていた。

平面は、全期を通じて凹凸の多い平面形が多数(13軒)見られた。また、門扉については、9軒に建物と統一した意匠が施されており、遠藤の影響が設計に反映されたものと考えることができた。

以上のことから、岡見の設計には部分的あるいは全面的にモダニズムの影響が現れていることが分かった。しかし、たとえば平面にみるように、遠藤の影響が大きいと考えられる凹凸の多い平面形が全期に亘り多数見られることから、設計の基盤には遠藤あるいはライトの影響が反映しているものの、モダニズムの影響も初期から見られ、昭和11年の藤田邸で顕著となった。しかし、徐々にモダニズムの強い影響は見られなくなり、岡見自身の意匠が出来上がったものと考えることができた。

以上から、4人の建築家に共通している特徴は、平面については、初期には、凹凸の多い平面形と室3面あるいは建物3面の連続した開口部が主な特徴と考えられ、後に、凹凸の少ない四角い平面形に移行していった。また、本論では、遠藤の作品の外観については触れていないものの、外観の特徴としては、初期には、深い軒の出、水平線を強調した意匠、および瓦棒葺き屋根、あるいは均等割りで無い建具棧、などであることが明らかになった。しかし、後期には、水平線の強調や瓦棒葺き屋根は見られなかった。

〔表1〕からも分かるように、遠藤、南、柴田、岡見が、単独で設計に携わった時期は異なるものの、作風の特徴の変化がそれぞれに見られた。

遠藤は、昭和2年（1927）以降には、大正期のライトの影響の強く見られる凹凸が多く、軸線上に主要室が並んだ細長い平面の構成とは異なった作風に変化していった。たとえば、千葉邸（1931）や遠藤自邸（1931）の平面は、ほぼ正方形で、主要室に水廻りなどが付加された平面形になっている。これらは、大正期には見られなかった。

南は、昭和7年に、大正期・昭和初頭に見られるライトの影響の強い作風から、モダニズムの影響の見られる作風へと変化した。

柴田については、資料件数が3と少ないが、昭和5年の正木邸には遠藤の影響が見られ、昭和10年の和風住宅には、部分的な影響は見られるものの全体的にはほとんど影響は見られなかった。つまり、昭和5年から昭和10年の間に作風に変化が生じたものと考えられた。

岡見は、全期を通じて遠藤の影響が設計基盤に見られるものの、初期に当たる昭和8年の間邸に部分的ではあるがモダニズムの影響が見られ、昭和11年の藤田邸で大きく変化した結果が現れた。しかし、その後の再び遠藤の影響が作品に表れ、更に単純化された意匠へと変化した、岡見自身の作風へと変化したものと考えることができた。

4人の弟子あるいは孫弟子に見るフランク・ライド・ライトの影響は、初期には平面・外観・意匠など全体に見られた。しかし、4人それぞれに時期は異なるものの、昭和2年から昭和10年にかけて作風に変化が生じ、各自の新たな作風に収束していったことが明らかにになった。

この変化は、時代の変化の時期と関連していると考えられ、モダニズムの台頭の影響が及んだものと考えることができた。また、和風の影響も見られた。

そして、ライトの影響である凹凸の多い平面形や不均等割りの窓の棧は減少してゆくが、たとえば遠藤の自邸（昭和6年）や南の自邸（昭和7年）に見るように、室同士の連続性を造ることや、板の間よりも座敷の床を高くすることなどの方法は、大正・昭和前期を通して使用されていた。つまり、室同士の連続性の直接化や形状の単純化は進められたが、弟子あるいは孫弟子の設計基盤にライトあるいは遠藤の影響が形を変えて現れたものとも考えられる。

また、板の間と座敷の関係は、椅子と座敷の新しい形式の生活を考慮したものと考えられ、ライトが日本の影響を反映して設計した建築により、ライトの弟子たちが改めて日本の建築について気付かされた結果の現われと考えることもできる。このように考えると、弟子たちは、ライトから学んだ、設計の根底にある考え方を保持しながらも、新しい要素を取り入れて、建築全体にわたるライトの強い影響下から脱却し、日本の生活および新時代に相応しい住宅へと作風を変化させることで、建築家各自の作風が構築されたものと考えられる。

6. 「ライト式」の用語

ライトの設計になる、帝国ホテルの建設にともない、「ライト式」という用語が大正8年に現れたのをはじめに、「立体建築」「ライト風」など、ライトの建築の特徴や、ライ

トの影響を受けた建物を表す32の用語が用いられたことが判明した。はじめは、ライトの建築を示すものであったが、同時にライトの弟子の作風にも用いられた。

大正11年には「ライト張り」「ライト屋」など、ライトの作風を模倣した建物や模倣する設計者に対しても使用され始め、関東大震災後には、「ライトまがい式」や「ライト式の板張り」のように材料などの表面的な模倣に対しても使用されたことが明らかになった。大正15年には「ライト式の板張り」のように材料の使用方法に対して用いられる一方で、「ライトと多少異なった味」での「本物」である、ライトの弟子にあたる遠藤新や南信の作風にも、「正真のライト式」の用語が冠せられた。

以上のように、大正後期から昭和初期にかけて、ライト風の建物が幅広く流行し、「ライト式」などの用語は、徐々に、ライトの弟子の作品に対する「正真のライト式」、あるいは表層的な模倣に対する「ライト式の板張り」のように広範な意味で使用された。また、たとえば『新建築』（大正15年7月号 pp.23）の設計相談に「ライト式の様式を望む」という読者の希望が現れていることや、「ライト式建築は其後に住宅に盛んに応用されてきました。」²と評論にあることから、一つの様式を示す言葉として認識され、建築関係者以外にも使用される用語となったことを明らかにできた。

「ライト式」「立体建築」など、32種類見られた用語は、大正15年から昭和初期にかけて、「ライト式」と「ライト風」という2つの言葉に収束していくが、この現象は、わが国の建築の世界では、ライトの作風の特徴を見ることが、もはや一般化したことを示すものと考えられることを明らかにした。

7. 雑誌『住宅』に掲載のライト風住宅

「ライト式」「立体建築」などの用語の流行と共に、ライト式の住宅が流行したことは知られている。一般化したライト式の住宅について、住宅改良会（会主：橋口信助）が発行した住宅専門誌の『住宅』についてみると、大正11年5月号から昭和3年6月号までの間に17軒の建物が確認できた。これらは、作品の解説などに「ライトの流れを汲んだ建築」などの用語の使用が見られる8軒および、この8軒と同様の凹凸の多い平面形や室3面の開口部などの特徴をもつ9軒であった。17軒のうちの9軒が「あめりか屋」（主宰：橋口信助）の建築技師である高島司郎の設計によるものであった。ちなみに、「あめりか屋」の設計は3軒、「S生（あめりか屋）」の設計が1軒ある。

また、「ライトの流れを汲んだ建築」などの用語が使用された8軒のうち半数の4軒が高島の作品であることや、あめりか屋の設計になるライト式の住宅に高島以外の設計者名が確認できないことから、あめりか屋のライト式の住宅は高島が手掛けたものとも考えることができた。

17軒の住宅は、水平線を強調した意匠や、軒の出の深い緩勾配屋根、鼻隠しおよびケラバの転び、寄せ棟屋根、太柱、均等割りでない建具棧などを外観の特徴とし、仕上材は、屋根の金属板およびスレート、壁の大貫（下見板）とスタッコが多用されていた。そして、壁面を押し縁で装飾したバックハンド・トリムの使用も一つの大きな特徴として確認できた。また、平面については、殆どの建物が凹凸の多い平面形をしており、複雑な複合型および丁字型、あるいはL字型平面で、室の三面開口、開き窓と引き違い窓の多用と併用、造り付ソファと収納家具、暖炉の設置、太柱を特徴としていることが明らかになった。な

お、〔表1〕に概要を図版で示した。

また、一方で、高島の「西洋式とも日本式ともつかないような家」という記述から、遠藤や南が設計した住宅にみるように、住宅設計に対して、椅子と座敷の併用に考慮したとも伺え、ライトの設計した、日本の影響を受けた建築をみることで、高島が改めて日本の建築に気付かされた結果の表れとも考えることができる。

まとめ

フランク・ロイド・ライト設計の帝国ホテルは、入欧脱亜のもとに建設された明治期の洋風建築とは異なり、大正デモクラシーの時代に新しい様式の建築として現れた。

帝国ホテルの建設には、多数の日本人スタッフが従事した。中でも遠藤新は、日本人スタッフのまとめ役としてライトのチーフアシスタントを務めた。遠藤は、大正11年に南信と共に設計事務所を設立し、ライトに学んだ建築を実践した。遠藤が一人立ちした大正14年に、あめりか屋で設計に携わっていた山本拙郎は、遠藤の建築に対して「世間ではライト式と呼んでいるが、今日ではもう遠藤氏の様式といってもいい」³と述べている。

この遠藤の下で同時期に薫陶を受けたのが、柴田太郎と岡見健彦である。ちなみに、南は大正14年に独立しているが、その後、昭和10年に遠藤と共同の設計事務所を再開した。

ライトの弟子、あるいは孫弟子に当たる4人は、時期は異なるもののライトの影響あるいは遠藤の影響を強く受けた。ところが、時代の変化に伴い、モダニズムの影響が見られるなど作風の特徴に変化が生じる。しかし、平面の構成や床高の扱いなどにライトあるいは遠藤の影響が見られることから、ライトの建築に対する考え方の影響を設計の基幹に留めながら時代の要求に相応しい住宅を考案したものと考えることができた。

このように、ライトの弟子あるいは孫弟子については、ライトの建築に対する考え方や作法の影響を強く受けたが、このことを裏付ける表現が雑誌の評論に現れていた。たとえば、南の作品には、「正真のライト式」という用語が使用され、建物の内容・意匠共に「本物」であると、当時の建築家が考え、設計した作品を評している。これに対して、「ライトまがい式」のように、偽物（あるいは贋物）を表す用語が多数出現したことは、弟子たち以外の設計者に、ライトの作風を模倣した「ライト式」が流行していたことを示すものであった。

また、建築の専門家だけではなく、一般にも広く「ライト式」の用語が認識されていたことは、建築家のみならず一般社会にも、ライトの影響が大きいものであったことを示していた。

フランク・ロイド・ライトが設計し大正12年に竣工した帝国ホテルの出現に伴い、当時のわが国の建築界に及んだライトの影響は、直接あるいは間接を問わず大きなものであった。

しかし、流行語として一般化した「ライト式」の用語は、昭和5年を最後に雑誌から見られなくなった。この時期と相前後して、本論で採り上げた建築家たちについて、作風に変化が生じたことは、すでに述べた。


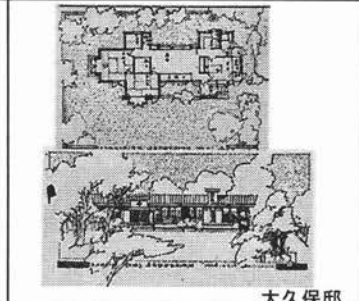
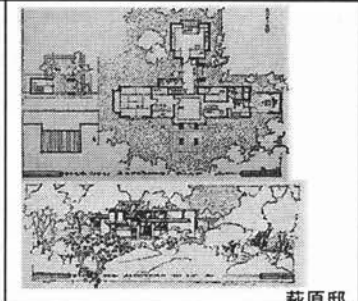






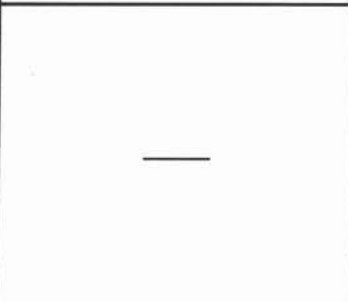


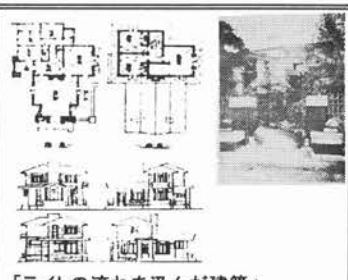
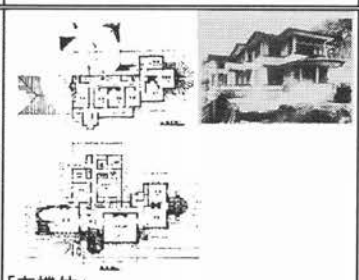
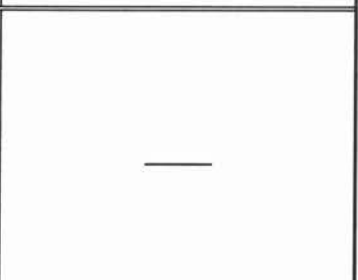
また、雑誌『住宅』にみるように、いわゆる「ライト式」という用語と共に多数の計画案および実施案の掲載が見られたことは、ライト式が住宅デザインの流行として取り上げられていたことを示している。掲載作品の半数は、あめりか屋の設計技師であった高島司郎の設計であるが、昭和3年を最後に「ライト式」の住宅は雑誌『住宅』から姿を消す。

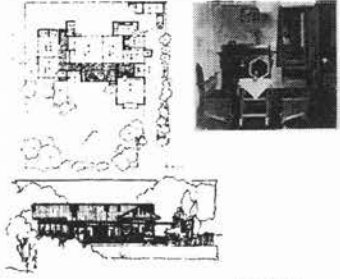
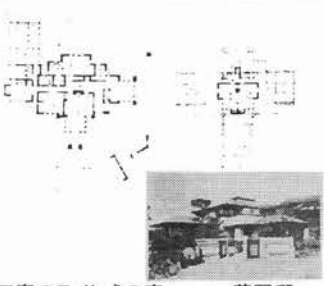
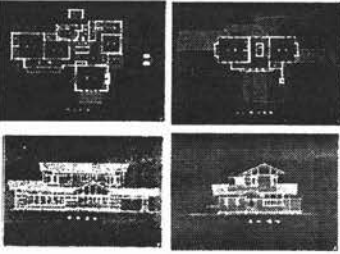
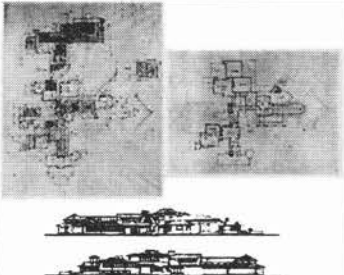

ライトの影響は、大正デモクラシーという新しい気風の時代に、新しい様式として住宅の設計に採り入れられ、「ライト式」の用語とともに一般化した。このことは、明治以降の洋風建築からの脱却の時代という背景に裏打ちされていたことも見逃せない。そして、日本の影響を受けたライトの建築により、日本人弟子たちが日本の建築を再認識したとも考えられる。

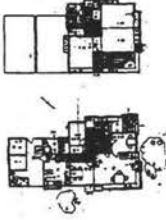
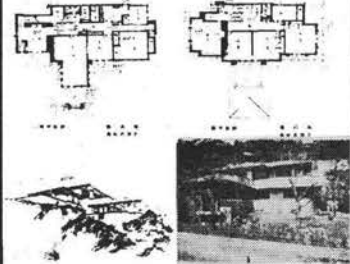
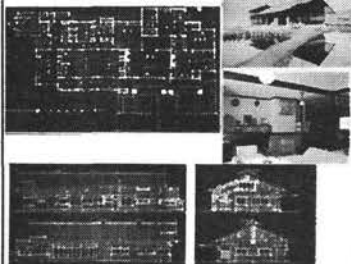
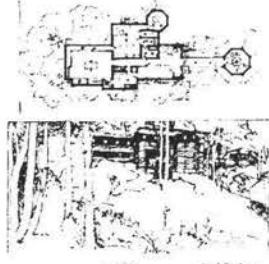
本研究では、以下に示す1)から8)について明らかにした。

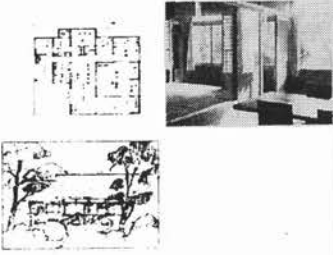
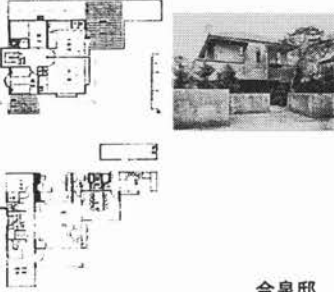
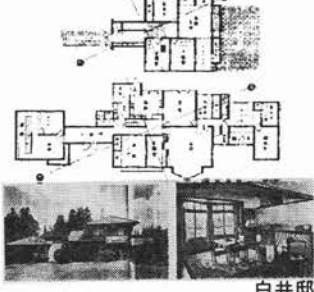
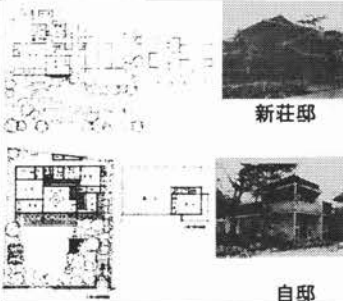
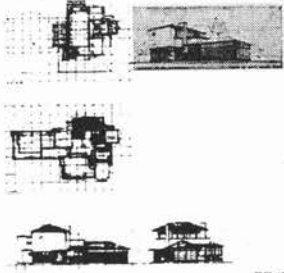
- 1) 平面および家具の用法などの分析により、遠藤の設計した住宅は、ライトの影響を強く受けた大正期の作風が、昭和2年に変化し、ライトから独立した作風に変容したことを明らかにした。
- 2) 平面および外観の特徴の分析により、南信の設計した住宅は、ライトの影響を強く受けた大正期・昭和初期はじめの作風が、昭和7年にモダニズムの影響を受けた作風に変化したことを明らかにした。
- 3) 外観および室構成の分析により、柴田太郎の設計した住宅は、昭和5年に見られた遠藤の影響を受けた作風が、昭和10年に和風の作風に変化したことを明らかにした。
- 4) 平面および外観の分析により、岡見健彦の設計した住宅は、当初（昭和8年）にライトおよび遠藤の影響を受けた作風であったが、部分的にモダニズムの影響がみられた。モダニズムの影響を最も強く受けた住宅は、昭和11年に設計され、この時点で作風が大きく変化したことが明らかになった。その後、これと同様のデザインは見られなかった。
- 5) 上記1)から4)の分析結果より、遠藤・南・柴田・岡見について、各々が独立し、事務所を開設した当初に見られた、ライトあるいは遠藤の影響を受けた作風が、ライトあるいは遠藤から独立した各々の作風に変化したことを明らかにした。
- 6) ライト・遠藤・南をはじめ多数の建物に使用された「立体建築」「正真のライト式」などの用語を当時の建築雑誌である『建築雑誌』『建築画報』『新建築』などからの抽出・分析により、大正8年から昭和5年までの間に、32例の用語が多様な意味で使用されたことが判明した。32例の用語は、大正15年から昭和初期にかけて「ライト式」「ライト風」の2つに収束したことが分かり、ライトの影響が専門家のみならず社会一般に広まったことを明らかにした。
- 7) 「ライトの流れを汲んだ建築」「立体建築」などの用語と共に、住宅改良会発行の雑誌である『住宅』に掲載された住宅、および同誌に掲載された既出の用語等が使用された住宅の特徴と同様の特徴を有する住宅の分析により、大正11年から昭和3年の間にライトの影響を受けた住宅が、一般住宅化したことを明らかにした。
- 8) ライトの弟子たちにみられた日本建築の影響は、弟子たちがライトの建築を通して日本を再認識したものと考えられる点を指摘した。



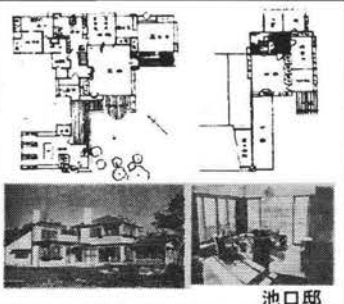
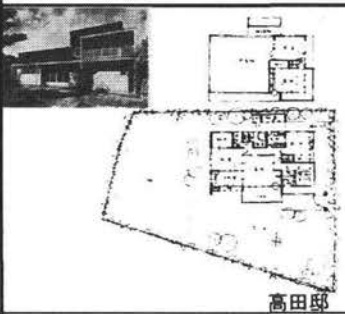
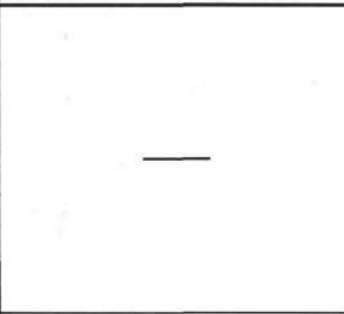
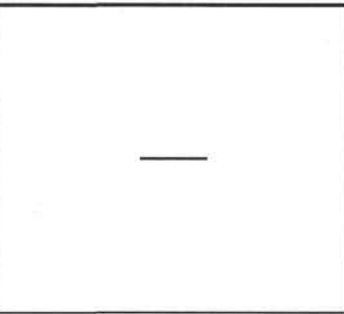

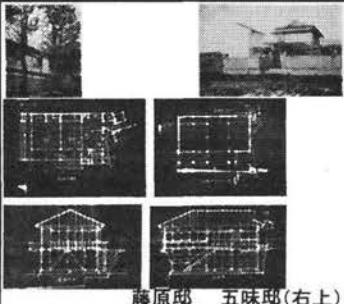
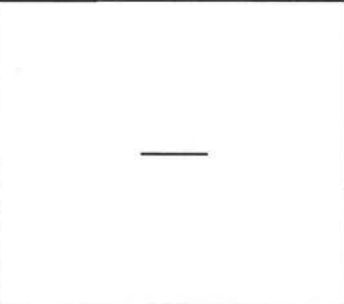
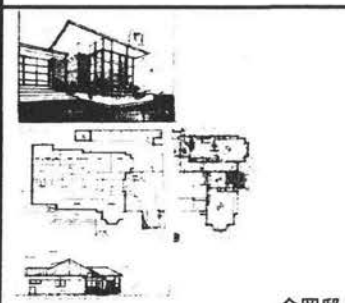
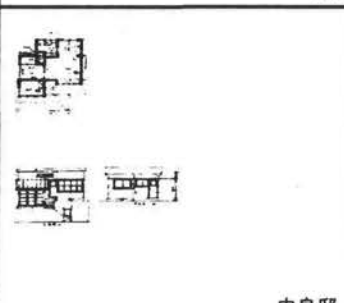
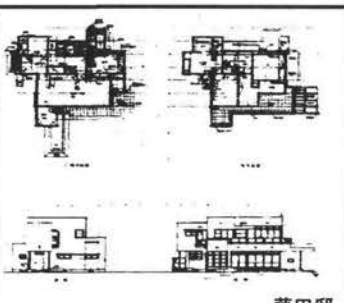
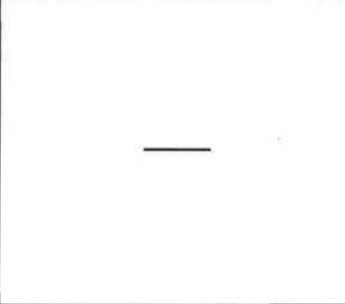

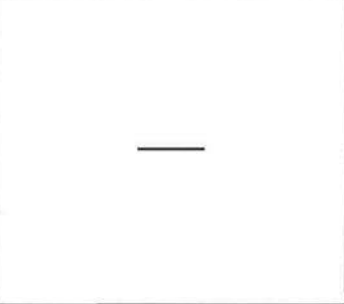
[表1]大正・昭和前期における実例に見る住宅平面と外観

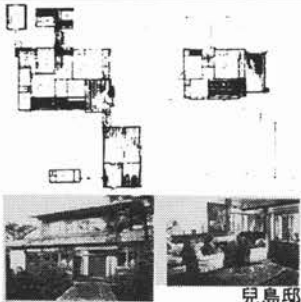



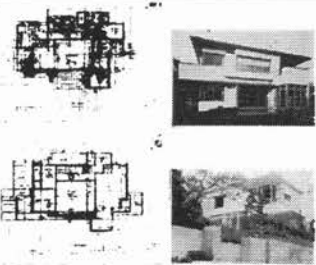



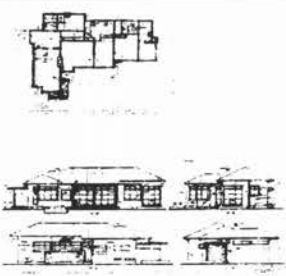



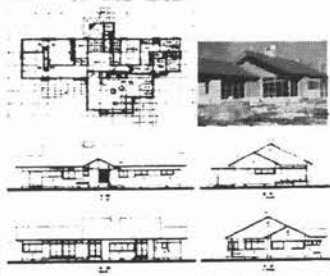



	大正11年(1922)	大正12年(1923)	大正13年(1924)
遠藤新		 大久保邸	 萩原邸
備考	遠藤南建築創作所 設立	4凹	7凹 1凹F
南信			
備考	遠藤南建築創作所 設立		
柴田太郎			
備考			
岡見健彦			
備考			
『住宅』	 「ライトの流れを吸んだ建築」 「立体派の手法」 多邸	 「有機体」 S生(あめりか屋) 小塚邸	
備考	11凹	5凹	

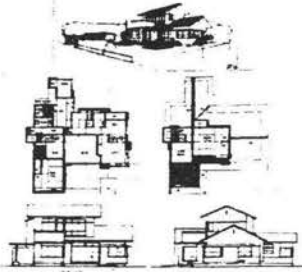
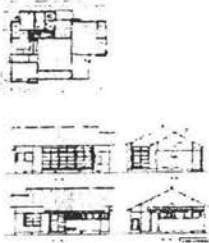
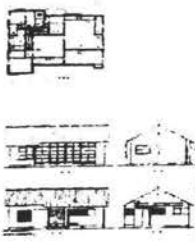
	大正14年(1925)	大正15年(1926)	昭和2年(1927)
遠藤	—	—	 高橋邸
備考	遠藤新建築創作所に改組		3凹
南	—	 「正真のライト式の家」 菅野邸	 某氏邸
備考	南建築事務所 設立	3凹1口	2凹
柴田	—	—	—
備考	遠藤新建築創作所 所員	遠藤新建築創作所 所員	遠藤新建築創作所 所員
岡見	—	—	—
備考	遠藤新建築創作所 所員	遠藤新建築創作所 所員	遠藤新建築創作所 所員
『住宅』	 武田邸 高島司郎	—	 神谷邸
備考	1凹		2?

	昭和3年(1928)	昭和4年(1929)	昭和5年(1930)
遠藤	—		—
備考		羽仁邸 1凹	
南	 「ライト式」 住宅=亀高邸	—	—
備考	1凹		
柴田	—	—	 正木邸
備考	柴田太郎建築事務所 設立		1凹
岡見	—	—	—
備考	遠藤新建築創作所 所員	8/6～タリアセンに滞在	～8/6タリアセンに滞在
『住宅』	 別荘 木檜一	—	—
備考	2凹		

	昭和6年(1931)	昭和7年(1932)	昭和8年(1933)
遠藤			
備考	千葉邸 1凹 2□	今泉邸 1凹 1□	白井邸 1凹
南	—		—
備考		新荘邸 自邸 1凹 1□	
柴田	—	—	—
備考			
岡見	—	—	
備考		岡見健彦建築事務所設立	間邸 3凹
『住宅』	—	—	—
備考			

	昭和9年(1934)	昭和10年(1935)	昭和11年(1936)
遠藤			 池口邸
備考		遠藤南建築創作所 再開(満州)	1□
南	 高田邸		
備考	1□F	遠藤南建築創作所 再開(満州)	
柴田		 藤原邸 五味邸(右上)	
備考		2□	
岡見	 今岡邸	 由良邸	 藤田邸
備考	1凹	2□	1凹 1凹F
『住宅』			
備考			

	昭和12年(1937)	昭和13年(1938)	昭和14年(1939)
遠藤	   	—	—
備考	1□		
南	—	—	—
備考			
柴田	—	—	—
備考			
岡見	   	   	   
備考	4凹	1凹	1凹
『住宅』	—	—	—
備考			

	昭和15年(1940)	昭和16年(1941)	昭和17年(1942)
遠藤	—	—	—
備考			
南	—	—	—
備考			
柴田	—	—	—
備考			
岡見			
	小川邸	大森氏貸家	由良邸
備考	1凹	1□	1□
『住宅』	—	—	—
備考			

	昭和18年(1943)	昭和19年(1944)
遠藤	—	—
備考		
南	—	—
備考	以後 結核のため療養	
柴田	—	—
備考		
岡見	—	—
備考		
『住宅』	—	—
備考		

凡例
凹:凹凸の多い平面形
□:凹凸のほとんど無い
平面形
F:陸屋根
?:平面形不明
数字:軒数
—:該当しない

注 記

第1章 [注記]

- 1 『建築家遠藤新作品集』1991年の年表を資料としたが、遠藤新の次男にあたる楽氏によれば、戦災で事務所が焼失するまで、「遠藤新・南信建築創作所」と書かれた看板がかけられていたという。
- 2 吉野作造邸書斎増築については、『建築家遠藤新作品集』1991年の年表に記載されているが、年代の特定はされていない。1991年に発行された『吉野作造選集』（14巻240頁）により大正9年に竣工した事が明らかになった。
- 3 旧満州（現中国東北部）において、満州中央銀行倶楽部（1935年）を初め同銀行総裁邸（1934年）および副総裁邸（同年）ならびに杜宅群（戸建および集合住宅、1934年～1935年）等の作品がある。
- 4 遠藤新の作品および著述については、雑誌および新聞等に掲載されたものが多く、資料として纏まったものは無かったが、1991年に精緻な資料として『建築家遠藤新作品集』が発行された。『建築家遠藤新作品集』の年表に寄れば、増改築および計画案を含めて、住宅設計は99軒が確認できる。91年以降に調査を行ったが、その結果110件、120棟を超える住宅（社宅を含む）を確認できた。
- 5 たとえば、図面記載「四帖」を解説文の「茶の間」とする。また、本文中の床座（畳敷きあるいはコルク敷き）の室については、総称として「座敷」としている。
- 6 帝国ホテル『帝国ホテル百年史』1990pp.200
- 7 アントニン・レーモンド『自伝アントニン・レーモンド』1970pp.62
- 8 帝国ホテル『帝国ホテル百年史』1990pp.180 掲載写真には「提供：林七郎氏」との記載がある。
- 9 藤倉憲二郎（1889～1959）：1917年コーネル大学卒業（卒業証書による）。遠藤新と同時期にタリアセンに滞在。1999年8月22日に長男の憲明氏から井上が聞き取り調査をしたもの。
- 10 『建築界紳士録』1962pp.67-68「伊藤文四郎（中略）【業暦】フランク・ロイド・ライト氏補佐、（帝国ホテル建築設計）（後略）」とある。『日本建築協会雑誌』第2輯第11号（大正8年）「会員消息 住所移転（特別賛）伊藤清造 東京市麹町区帝国ホテル新築事務所」とある。
- 11 『アルス建築大講座合本第一巻』1930pp.155-156「南信は1916年東大建築科出身、初めトラスコン会社に勤め、帝国ホテルへは、トラスコンから派遣されました。」とある。
- 12 上野陽一（1883～1957）：産業能率、科学管理法の研究者で、1950年産業能率短期大学を設立した。
- 13 『建築画報』第5巻第6号1924（大正13年6月号）口絵pp.5 平面図、第一図・第二図・第三図（外観写真）、第三図（パーラー内部写真）が掲載されている。また、斎藤毅憲『上野陽一——人と業績（生誕百年記念）』pp.252「上野陽一年譜 大正12年（1923年）40歳」に「麻布富士見町に新居建築移住」とある。なお、【写真3】【写真4】【写真5】は上野陽一の長男に当たる産業能率大学理事長上野一郎氏提供による。
- 14 遠藤新設計の山陽高等女学校校舎の壁よりも太い柱について『山陽新報』大正14年4月3日に、「太柱」との表記がある。本論ではこの「太柱」の呼称を採用した。
- 15 遠藤新が使用した「一文字の家」「一文字に家の変形」（『住宅小品十五種』『婦人之友』1924.5月号）を本論では「一文字型」「一文字変形型」とした。
- 16 藤倉憲二郎の長男の憲明氏所蔵の卒業証書による
- 17 遠藤新の記した滞米日誌1918.10.24～11.17による
- 18 藤倉憲二郎（1889～1959）：1917年コーネル大学卒業（卒業証書による）。遠藤新と同時期にタリアセンに滞在。1999年8月22日に長男の憲明氏から井上が聞き取り調査をしたもの。
- 19 「はしがき」に「いかに生活が許されるか そしていかに生活が展びられるか・・・建築を対自然の、そして対人間の厳粛なる事実として・・・」とある。『婦人之友』大正13年5月。
- 20 田原邸 大正13年。
- 21 『住宅小品十五種』の「はしがき」に「まづ地所をみる 地所が建築を教えて呉れる いかに建築が許されるか いかに生活が許されるか」とあり、遠藤が、敷地条件を基本にして、建築および生活空間の

あり方を思索していることがうかがえる。また、『婦人之友』昭和10年1月号に掲載の「南沢に自由学園新築なる」という著述に、校舎建設に関する二つの大事なことのうちの一つとして、校舎全体を「地勢地形に合わせて発見すること」とあることから、昭和初期にも設計の基本的な考え方については、変わっていないことが分かる。

22 後に、露台上部には遠藤により、二階が増築されている。

23 設備を含むこれらの室を「住宅の五臓六腑」と称している。

24 解説文中の「住居」は寝室、子ども室およびサンルームを、また『勝手』は台所、茶の間、浴室、洗面、便所および女中室等を示すものと考えられる。

25 『婦人之友』昭和2年4月掲載。

26 『婦人之友』昭和2年4月掲載。

27 『婦人之友』昭和2年9月掲載。

28 『婦人之友』昭和7年1月掲載。

29 『婦人之友』昭和13年1月および『建築知識』昭和13年3月掲載。

30 『国際建築』昭和8年9月掲載。

31 『国際建築』昭和8年9月掲載。

32 『建築世界』昭和8年3月掲載。

33 『建築知識』昭和12年3月掲載。

34 注21に同じ

第2章 [注記]

- 1 作品に上野陽一郎（大正12年）がある：『建築画報』第5巻第6号（大正13年6月）口絵，pp.5。上野陽一（1883～1957）：産業能率，科学管理法の研究者で，1950年産業能率短期大学を設立した。
- 2 後にレーモンドの下で後藤新平邸（大正11年），リード博士邸（大正13年）を担当している。『アントニン・レーモンド作品集1920～1935』昭和10年 また『自伝アントニン・レーモンド』昭和45年に「ライトの周辺にいた若い建築家の中で最も親密だったのは内山隼三であった。」とある。
- 3 1889～1959 1917年コーネル大学卒業（卒業証書による）。遠藤新と同時期にタリアセンに滞在。1999年8月22日長男憲二郎氏からの聞き取り調査による。
- 4 『日本建築協会雑誌』第2輯第11号（大正8年）「会員消息 住所移転（特別賛）伊藤清蔵 東京市麹町区帝国ホテル新築事務所」とある。
- 5 ライトを囲む和室で撮影の写真（遠藤楽氏所蔵）の裏に遠藤新夫人みやこのメモで「ライト氏、林さん、ミュラ氏、ばい、レーモンド氏、ヤングミュラさん、南さん、渡辺さん、河野さん、高橋さん、剣持さん、藤さん（東さん？）」の記入がある。「藤さん」とあるのは藤倉憲二郎である（憲二郎長男憲明氏所蔵の写真で同一人物であることを確認した）。
- 6 東京大学「木葉会名簿2000」により大正6年37回卒業を確認。
- 7 「南信は1916年の東大建築科出身、初めトラスコン会社に勤め、帝国ホテルへは、トラスコンから派遣されました。」とある。『アルス建築大講座』合本第一巻（昭和5年）pp.155～156
- 8 追悼集『伊東和雄小照』（昭和8年11月）：伊東の「略歴」に「大正11年10月遠藤南建築創作所二入所」とある。また、『アルス建築大講座』合本第一巻（昭和5年）pp.156に「ホテル完成後、遠藤新と共同で建築事務所を持ち、後独立して、大阪に事務所を持って居ます。」とある。
- 9 所在地：東京市神田区表猿楽町10番地同盟会館
- 10 過去何度も聞き取り調査による。
- 11 この移転先については大正12年5月の『建築雑誌』に掲載されたものであることから、実際の移転は5月以前であると考えるのが妥当であろう。
- 12 1994年4月4日の聞き取り調査による。
- 13 『アルス建築大講座（合本）第一巻』昭和5年によれば「芦屋1925ライトと共作」とあり、山邑別邸は、ライトと南信の共作で、大正14年に竣工したということになる。
- 14 『建築と社会』第8輯第7号 pp.35
- 15 南の義弟で所員でもあった伊東和雄の追悼集『伊東和雄小照』（昭和8年11月）の「略歴」による。「同（大正）十四年九月大阪に移り南建築事務所二入所、芦屋南方二寄寓」とある。
- 16 『建築と社会』第9輯第12号 pp.42
- 17 南の義弟で所員でもあった伊東和雄の追悼集『伊東和雄小照』（昭和8年11月）の「略歴」による。「同（大正十一年）同（十月）遠藤南建築創作所二入所 同十四年九月大阪に移り南建築事務所二入所、芦屋南方二寄寓」とある。
- 18 『新建築』第3巻第3号 広告「南建築設計事務所 工学士南信 兵庫県武庫郡（阪急沿線）芦屋山坂1537 電話芦屋168」
- 19 『建築雑誌』第42輯508号 pp.440「会員動静●転居転勤其他 正 南信君 事務所新設、大阪市中ノ島大阪ビル5階（土、6622）」とある。
- 20 『建築と社会』第13輯第4号12頁「会報 第5部（住宅）委員会 南信氏（大阪ビル南建築事務所 電土6622）、『建築と社会』第15輯第10号広告 pp.10に『大阪・北・宗是町、大ビル五階』とある。
- 21 「ダイビル株式会社」（株式会社大阪ビルヂングが、昭和20年10月に大阪建物株式会社に、平成4年1月にダイビル株式会社に社名を変更）の会社沿革によれば、「大阪ビル」あるいは「ダイビル」は、大正12年10月に設立の株式会社大阪ビルヂングの所有で、大正14年9月に大阪市北区中之島に竣工した、「ダイビル本館」と考えられる。後に、「新館」が「ダイビル本館」に隣接して建てられている。その年代が昭和12年7月であることから、『建築と社会』昭和7年10月号にある「大ビル」は「大阪ビル」は、同一ビルと考えられる。また、高橋洋二編集『城下町古地図散歩4大阪・近畿[1]の城下町』（平凡社、1996）pp.30に「中之島古町名には、（中略）宗是町、（中略）など明らかに江戸初期以来中之島開発に携わったと思われる人々の名が冠されていた。」とある。これらのことから、『建築と社会』昭和3年4月号にある「中ノ島大阪ビル」と『建築と社会』昭和7年10月号にある「北・宗是町、大ビル」は同一所在地の同一建物と考えられる。なお、ダイビルは、現存する建物。
- 22 南の義妹にあたる南範子氏からの聞き取り調査（1999年11月～2002年8月）による。

²³ 南の義妹にあたる南範子氏によれば、南信の自邸には、昭和9年4月に南の妻雪子の兄である伊東俊雄（南範子氏の父）一家が、入居している。

²⁴ 満州での、南信個人の設計業績については確認できていない。なお、針岡繁によれば、「遠藤新・南信建築設計事務所」の仕事は、満州中央銀行関係、奉天（現瀋陽）の大きなホテル、住宅、事務所ビル等多数であった。

²⁵ 南範子氏の証言による。

²⁶ 南信の戸籍謄本の写しによる。

²⁷ 第2巻第2号附録、第2巻第3号 pp.22～23、第2巻第6号 pp.2～9、第2巻第7号 pp.23～26、第2巻第9号写真版、第2巻第10号 pp.34～36、第3巻第5号付録、第3巻第8号写真挿絵、第3巻第11号 pp.16～19・pp.20～21、第4巻第8号挿絵・pp.22～23、第4巻第10号 pp.1、第5巻第4号挿絵・pp.18～27・pp.28～29

²⁸ 第13輯第1号 pp.6

²⁹ 第17巻第6号 pp.345～346、第18巻第10号 pp.606～609、第19巻第9号 pp.144～148

³⁰ 第1巻 pp.154～156、第3巻口絵

³¹ pp.224

³² B.H.ブラッドレー邸（1900）、S.L.ダナ邸他、プレーリーハウスに多く見られる。殊にF.C.ロービー邸（1906年）は、水平線の強調された住宅として知られている。

³³ 南の設計と同様の太い柱が、遠藤新設計の山陽高等女学校校舎にある。『山陽新報』（大正14年4月3日）に、その太い柱についての記事があり、「太柱」と書かれている。この「太柱」の呼称を採用した。

³⁴ 亀高邸の竣工年は『アルス建築大講座（合本）第一巻』昭和5年 pp.156の1928年を採用した。

第3章 [注記]

1 岡見健彦のノート（長男・岡見純氏所蔵）に、「遠藤さんは 当時 日比谷の交差点近くに office をたてて（barrack）仕事をやっておられた（1925） 山村伍一郎、柴田太郎、阿部 川喜田練七郎（ママ） 土浦君（稲城）は病氣療養中（茅ヶ崎南湖院） 岡見、其他」pp.10とある。また、同ノート pp.8～pp.9に「（前略）1925－大正14 美校卒、遠藤新建築創作所入（中略）1928－昭和3 7月－31. 辞任。12－23 渡米（後略）」とあり、岡見が遠藤の事務所にて在籍した期間が分かっている。；井上祐一と斉藤優子（当時東京大学工学研究科修士課程）が調査（2002/5/26,6/4,8/21・24,9/5,10/26,11/16,12/11,2003/1/18）したものの一部。『建築界紳士録』1962 pp.515「【略歴】大12卒後、函館工業学校教諭、大14 遠藤建築創作品（ママ）入社、昭3 建築設計事務所自営至今日。」とある。なお、2001年までの井上の調査で、山村は戦後に和泉工務所を設立するまで、遠藤建築創作所に在籍したこと、阿部（春勝）・土浦稲城は甲子園ホテルの設計補助を担当したことが分かっている。

2 熊沢猛氏（1933～）：熊沢直治（？～1988）の次男で大工。大工の父直治は、柴田太郎設計の正木邸、藤原別宅などの施工請負者であった。猛氏は昭和25年から昭和27年にわたり、冬期に吉祥寺の柴田の事務所で建築の指導を受けた。2002年9月18日に井上が聞き取りしたもの。

3 小野ミスズ氏（1928～）：2003年8月11日に井上が聞き取りしたもの。

4 関之『長善館物語』1981財団法人諏訪郷友会

5 柴田太郎の長男（末子）岩根氏による。

6 『高島学校百年史』1973 pp.615 「大正2年度卒業」とある。

7 諏訪清陵高等学校同窓会『会員名簿創立九十周年記念』1986 pp.55「大正3年入学（長野県立諏訪中学校）」とある。

8 冬夏会『会員名簿』2002 pp.66, 函館工業高校人事記録簿による。

9 『長善館物語』pp.379「長善館在館生名簿 大正十年度在館生」

10 注3に同じ

11 函館工業高校人事記録簿による。

12 注1に同じ。柴田の長女小野ミスズ氏によれば、柴田夫人（母親）からの聞き伝えとして、遠藤は柴田に対し「子供が生まれて生活が大変だからずっと事務所にいたらどうか」との話があったという。また、柴田は構造設計が得意であったようだが、意匠設計をしたいとのことで独立したという。なお、岡見健彦は、美術学校出身で意匠設計担当であったという。

13 『建築雑誌』第43輯第520号1929年4月号 pp.395

14 『建築界紳士録』1962 pp.515「【略歴】大12卒後、函館工業学校教諭、大14 遠藤建築創作品（ママ）入社、昭3 建築設計事務所自営至今日。」とある。

15 柴田太郎の長女小野ミスズ氏および長男（末子）岩根氏による。

16 『建築雑誌』第43輯第521号1929年5月号巻末附図

17 『長善館物語』「諏訪青年会・諏訪郷友会・長善館主要年表」 pp.337, pp.347, pp.351

18 川口屋林銃砲火薬店は、岡谷で製糸業を営んでいた林国蔵が明治24年（1891）に川口屋銃砲火薬店を引き継いだもの。

19 株式会社川口屋 管理部・林雅一氏による。2003年9月22日付の書面による。

20 注19に同じ。

21 牛山清人（1899～1991）：1914年に長野県立諏訪中学校に入学、柴田太郎と同期である。ハリウッド社長

22 山下潤子『潤子の一生』1992 pp.13, pp.18 私家版

23 五味蔵の夫人邦氏の証言による（2003年11月6日）。昭和10年9月15日付けの工事請負契約書は、「請負者寺平幸豊・熊沢直治」とある。

24 富士見高原病院資料室および熊沢猛氏の証言による。

25 細谷一郎『今朝百年』1980株式会社今朝 pp.16・17・18, pp.52・53

26 熊沢猛氏の証言による。

27 富士見高原病院資料室による。

28 熊沢猛氏の証言による。

29 『住宅建築』1983.2月号 pp.20・24

30 井上の調査により、2001年11月30日に羽仁家に所蔵の写真により南・西側外観が明らかになった。

第4章 [注記]

- 1 1925年7月遠藤新建築創作所入所 1928年7月31日同事務所辞任：岡見健彦のノート pp.10注) 13に同じ
- 2 井上祐一と斉藤優子（当時東京大学工学研究科修士課程）が調査（2002/5/26,6/4,8/21・24,9/5,10/26,11/16,12/11,2003/1/18）したもの。
- 3 岡見健彦のノートによる
- 4 八木橋西造：大正14年2月に早稲田工手学校を卒業『稲門建築会名簿』1994pp.312-313
同期卒業生に大河原才吉の名が見られる。
- 5 注) 3に同じ 岡見の長男にあたる純氏からの聞き取りによる
- 6 谷川正己・増田彰久『日本の建築9 ライトの遺産』三省堂（1980）岡見健彦年譜 pp.177
- 7 武田五一 イリノイ州カンカヒー市にあるワーレンヒツコック氏邸「萊都氏案」『新建築』第1巻第1号 pp.3（1925.8）武田はヒコック邸について、ライトの作風を次のように述べている。「常用手段として其考案されたる住宅は寝室浴室便所台所以外の室は開け放されて居て通路の邪魔になり且つ開閉の邪魔臭い扉を付けずしかも何れも見透しが出来ないで至る所一寸隠れる場を取ってある手法の巧みさには関心される。／居間「アルコーブ」「取り付け椅子」「南方の大いなる窓を明け窓の外には露台」「直線模様のステンド硝子」「居間の北は凹壁」／食堂「本棚と置棚が作り付け」「取り付け長椅子」「取り付け本箱」／「窓の大なること軒の出て居ること屋根勾配の緩いことは全く日本建築と似ている」
- 8 平面の型は、ライトあるいは遠藤新の平面でいられている型に雁行型、複合型を加えた。
- 9 一文字型：安成邸（1924）、一文字変形型：大久保邸（1923）剣持邸（1923）、長方形型：黒崎邸（1927）高橋邸（1927）、正方形型：千葉邸（1931）自邸（1931）田中邸（1932）
井上祐一 内田青蔵「遠藤新設計による大正・昭和初期の住宅平面からみた生活空間の変容」『生活文化史 No.41』 pp.56~pp.69 日本生活文化史学会（2002.3）

第5章 [注記]

¹ 谷川正己編著『図面で見えるF.L.ライト 日本での全業績』pp.5「ライトの日本での設計業績12件」とある。なお、Department Store (B.B.Pfeiffer-List of Projects by Assigned Number, Anthoney Alofsin(edited)-Frank Lloyd Wright, An Index to the Taliesin Correspondence, Garland Publishing, Inc., vol.1, 1988) については、ライトの設計かどうか確定されていないが、これを含めれば13件になる。また『東京朝日新聞』大正11年8月20日の5面に「日比谷三角地帯に新理想郷を描く…設計はライト氏が独創の置きみやげ」という記事があり平面および立面スケッチの掲載がある。平面スケッチにはFLWと見られるサインがある。そして、「日比谷三角地帯設計想像図」『建築の日本』第1巻第2号(1924年6月)に「フランク・ロイド・ライト」の記述、「日比谷三角ビルディング計画図」『建築世界』第20巻第11号(1926年11月)には「フランク・ロイド・ライト・遠藤新建築創作所」の記述がある。

² 武田五一 イリノイ州カンカヒー市にあるワーレンヒツコック氏の住宅「萊都氏案」『新建築』第1巻第1号大正14年8月 pp.3 武田はヒコック邸について、ライトの作風を次のように述べている。「常用手段として其考案されたる住宅は寢室浴室便所台所以外の室は開放されて居て通路の邪魔になり且つ開閉の邪魔臭い扉を付けずしかも何れも見透しが出来ないで至る所一寸隠れる場を取ってある手法の巧みさには関心される。」/居間「アルコーブ」「取り付け椅子」「南方の大いなる窓を明け窓の外には露台」「直線模様のステンド硝子」「居間の北は凹壁」/食堂「本棚と置棚が作り付け」「取り付け長椅子」「取り付け本箱」/「窓の大なること軒の出で居ること屋根勾配の緩いことは全く日本建築と似ている」

³ 『建築雑誌』第330号大正3年6月 pp.329

⁴ 『建築雑誌』第331号大正3年7月 pp.334

⁵ 1866~1931 近江栄『光と影 蘇る近代建築史の先駆者たち』相模書房 1998 pp.108~114

⁶ 帝国ホテル『帝国ホテル百年史 1890-1990』pp.957

大正8年(1919)9.- 新ホテル建設工事起工(動力室から着工)

⁷ 「帰朝所感」『建築新報』第1巻第8号大正8年8月 pp.34~35

⁸ サリバンがフィラデルフィアで勤めた事務所 Furness & Hewitt の Hewitt と考えられる。Hans Frei “Louis Henry Sullivan” 1992 Artemis Verlags-AG pp.13

⁹ 1890~1944 山本拙郎(内田青蔵編)『拙先生絵日記』住まいの図書館出版局 1993、早稲田大学理工科建築学科本科卒業大正6年3月(1917)『稲門建築会名簿』1994 早苗会部会 pp.21

¹⁰ 帝国ホテル『帝国ホテル百年史 1890-1990』pp.957 pp.959

大正8年(1919)9.- 新ホテル建設工事起工(動力室から着工)

大正12年(1923)8.末 新ホテル(ライト館)全館落成

9.1 新館落成披露準備中に関東大震災発生(新館は被害をまぬがれるも、別館は復旧困難となり取り壊し)

¹¹ 『建築新報』第1巻第8号大正8年8月 pp.34~35

¹² 『建築評論』第2年第3号大正9年4月 pp.15

¹³ 『建築評論』第2年第6号大正9年7月 pp.29~30

¹⁴ 『建築世界』第15巻第3号大正10年3月 pp.59

¹⁵ 『建築世界』第15巻第12号大正10年12月 pp.57

¹⁶ 『家庭週報』大正10年6月10日

¹⁷ 早稲田大学第8回卒業生(大正9年3月 23名)『稲門会建築会名簿』1994 稲苗会 pp.22、『住宅』第7巻第5号大正11年5月をはじめ、『住宅』に設計作品が掲載されている。

¹⁸ 『住宅』大正11年8月号 pp.8

¹⁹ 野村治輔 設計者は自然の創作だといふ「変わった家」の印象【犬養木堂氏の新邸を観て】『サンデー毎日』第1年第3号大正11年4月16日 pp.6

²⁰ 目白千登作『住宅』第7巻第10号大正11年10月 pp.2

²¹ 目白千登作『住宅』第7巻第10号大正11年10月 pp.4

²² 『建築世界』第16巻第10号大正11年10月 pp.1~2

²³ 『住宅』第7巻第6号大正11年6月 pp.6~7

²⁴ 『住宅』第7巻第8号大正11年8月 pp.8

²⁵ 森口多里『建築画報』第13巻9号大正11年9月 pp.12

²⁶ 『住宅』第7巻第10号大正11年10月 pp.40

²⁷ 名畑良造『建築世界』第17巻第9号大正12年11月 pp.21

²⁸ 『住宅』第8巻第4号大正12年4月 pp.27・29・30

²⁹ 『住宅』第8巻第6号大正12年6月 口絵笹塚中村邸

³⁰ 『住宅』第8巻第6号大正12年6月 pp.2~4 笹塚中村邸

³¹ 『住宅』第8巻第7号大正12年7月 pp.2 中野八田邸

³² 峯尾春陽(印画家)『建築画報』第15巻第10号大正13年10月 pp.40

³³ 『建築世界』第18巻第8号大正13年8月 pp.6

-
- 34 三浦元秀（建築家）『建築画報』第15巻第10号大正13年10月 pp.39
35 『建築画報』第15巻第10号大正13年10月 pp.41~42
36 吉井俊太郎（建築家）『建築画報』第15巻第10号大正13年10月 pp.42
37 住宅建築の宿命 遠藤新氏の個展をみて『東京朝日新聞』大正14年1月17日
38 林 敏明 ライト式建築に対する雑感『建築画報』第16巻第2号大正14年2月 pp.7~8
39 菅野真湛氏の住宅『新建築』第2巻第6号大正15年6月 pp.9 南 信設計
40 設計相談『新建築』第2巻第7号大正15年7月 pp.23
41 設計相談『新建築』第2巻第10号大正15年10月 pp.34・35
42 菅野真湛氏の住宅『新建築』第2巻第6号大正15年6月 pp.8・9 南 信設計 評者は、元良、岡田、
吉岡3人で、この部分は、元良が述べている。
43 夕顔『新建築』第2巻第7号大正15年7月 pp.32
44 『建築画報』第18巻4号昭和2年4月広告（後の三）
45 岸本 登『新建築』第3巻第8号昭和2年8月 pp.38
46 『新建築』第3巻第11号昭和2年11月3
47 『新建築』第3巻第12号昭和2年12月 pp.16
48 『新建築』第4巻第8号昭和3年8月 pp.54
49 『新建築』第4巻第8号昭和3年8月 pp.55
50 南信『新建築』第5巻第4号昭和4年4月 pp.28
51 貞永直義 フランク・ロイド・ライト氏の作品に於ける享樂的思想の展開『新建築』第5巻第4号昭和4年4月 pp.51
52 『建築雑誌』第44輯第537号昭和5年9月 pp.118
53 帝国ホテル『帝国ホテル百年史 1890-1990』pp.958
大正11年（1922）7.1 新ホテル（ライト館）一部開業

第6章 [注記]

¹ 『住宅』は住宅改良会を発行所とし、会主である橋口信助が編輯兼発行人となり、大正5年（1916）8月から発行を開始した。橋口は昭和3年（1928）5月号まで編輯兼発行人を務めた。昭和3年6月号から昭和6年4月号までは、山本節郎が編輯兼発行人を務めた。『住宅』該当年月号奥付による。橋口信助および住宅改良会については、内田青蔵『日本の近代住宅』1992pp.58-87 鹿島出版会 参照。

² pp.4～5

³ pp.6～7

⁴ 口絵1枚、pp.8

⁵ pp.2～4

⁶ pp.37～40

⁷ pp.8～12

⁸ pp.16～17

⁹ pp.22～25

¹⁰ 口絵5枚、pp.2～7、62

¹¹ 口絵4枚、pp.2～6

¹² 口絵4枚、pp.2～6

¹³ 口絵1枚、pp.2～7

¹⁴ pp.6

¹⁵ pp.7

¹⁶ pp.3～12

¹⁷ pp.10～15

¹⁸ pp.2～3

¹⁹ 『早稲田大学理工科卒業記念 大正九年七月』アルバムの名簿による

²⁰ 稲門建築会『稲門会建築名簿』1994 早苗会部会 pp.22

²¹ 高島司郎『住宅』大正11年5月号 pp.4「ご隠居向きの新しい別荘」

終章〔注記〕

¹ 『住宅』は住宅改良会を発行所とし、会主である橋口信助が編輯兼発行人となり、大正5年（1916）8月から発行を開始した。橋口は昭和3年（1928）5月号まで編輯発行人を務めたが、昭和3年6月号から昭和6年4月号までは、山本節郎が編輯兼発行人を務めた。

² 林敏明 ライト式建築に対する雑感『建築画報』第16巻第2号 1925 pp.7-8 大正14年2月号

³ 『東京朝日新聞』1925（大正14年1月17日）

関 連 既 発 表 論 文

第1章

- 1) 遠藤新の研究 (3)
大陸 (満州) に展開した建築
井上祐一 南迫哲也
日本建築学会大会学術講演梗概集 1993年9月
- 2) 遠藤新の研究 (16)
満州の建築に与えた影響
井上祐一 南迫哲也
日本建築学会大会学術講演梗概集 1994年9月
- 3) 日比谷三角ビルディング計画案について
…ライトの設計の可能性について…
井上祐一 内田青蔵
日本建築学会大会学術講演梗概集 1995年8月
- 4) 昭和6年の家庭生活合理化展覧会の実物出品住宅 (旧千葉邸) について
その2 旧千葉邸の遠藤新の設計の可能性について
井上祐一 内田青蔵 柳葉悦子
日本建築学会大会学術講演梗概集 1999年9月
- 5) 遠藤新設計による大正・昭和初期の住宅平面からみた生活空間の変容*
井上祐一 内田青蔵
日本生活文化史学会『生活文化史No.41』 2000年3月
- 6) 大正14年竣工「山陽女子高等女学校校舎」について
…遠藤新のデザインについて
井上祐一 加藤知章
日本建築学会大会学術講演梗概集 2001年9月

第2章

- 1) 建築家南信の作品について
…戦前期におけるわが国のライトの影響についてその2
井上祐一
日本建築学会大会学術講演梗概集 2002年8月
- 2) 建築家・南信の経歴と住宅作品にみられる特徴について*
井上祐一 初田 亨
日本建築学会計画系論文集第571号 2003年9月

第3章

1) 建築家柴田太郎の作品について

…戦前期におけるわが国のライトの影響についてその3

井上祐一 内田青蔵 初田 亨

日本建築学会大会学術講演梗概集

2003年9月

第5章

1) いわゆる「ライト式」の言葉の使われ方について

…戦前期におけるわが国のライトの影響についてその1…

井上祐一 内田青蔵

日本建築学会大会学術講演梗概集

1998年9月

2) 大正・昭和初期における、いわゆる「ライト式」の用語の使用について*

井上祐一 初田 亨 内田青蔵

日本建築学会計画系論文集第571号

2003年9月

(注) 共著については、筆頭論文のみを記載

*は審査を経て掲載した論文

あ と が き

本研究の発端は1979年の秋に解体が決まった遠藤新設計の近藤賢二別邸の実測調査への参加であった。何度かの解体の延期により、翌1980年に本格的な実測調査が行われた。この調査の傍ら、建物の保存運動にも関わった。ここでは、当時東京大学教授であった樋口清先生が始められた調査に、誘ってくださった建築家の深沢俊一氏をはじめ、かつて天野（太郎）吉原（正）設計事務所の所員であった中村寛一氏の手ほどきを受けた。また、その後、多方面に亘ってご教示を戴いた遠藤新の次男である故遠藤楽氏との出会いもあった。

その後、加地利夫別邸の暖炉の実測からはじまった建物調査では、現在は東京藝術大学名誉教授である奥村昭雄先生、同じく前野まさる先生の仕事振りから、多くを学ばせていただいた。

その後の、遠藤新の設計した建物の調査では、現在、工学院大学名誉教授である南迫哲也先生をはじめ、遠藤新の三男陶氏、あるいは小笠原稔氏、加藤知章氏、近藤高史氏、鈴木久子氏、宮井昭隆氏、吉塚幸雄氏の建築家諸氏の協力を得た。また、各建物の当時の所有者である、故加地信氏、矢田部耕吉氏、萩原道彦氏、星島平之助氏、町田さとみ氏、故恩地邦郎氏、故天野公義氏、ほか多数の方々のご好意を得た。

南信については、ご遺族をはじめ多数の方々のご助力を得た。ことに南信の義妹にあたる南範子氏には、長期間に亘って貴重な証言および資料提供をして頂いた。また、満州時代に関しては南の甥にあたる針岡繁氏に詳細な証言を頂いた。そして淀川製鋼所迎賓館館長柴田直義氏からは、伊東俊雄氏（南の義兄）から貴迎賓館に寄贈された『伊東和雄小照』を譲り受けた。

柴田太郎に関しては、南迫先生に戴いた正木邸のコピー図面がきっかけとなり調査が始まったが、柴田太郎の長女の小野ミスズ氏、長男の柴田岩根氏をはじめ、建築家の両角和重氏、熊沢猛氏、平井充氏、藤原喜男・さよ子夫妻、正木敏子氏、五味邦氏、牛山精一氏、藤森紫朗氏、林雅一氏、川喜田煉七郎の孫にあたる川喜田知子氏のご協力を得た。

岡見健彦については、岡見の長男にあたる岡見純氏の時を惜しまぬご協力の賜物である。なお、調査には斎藤優子氏の協力を得た。

また、河野傳および藤倉憲二郎については、それぞれに、産能大学理事長の上野一郎氏、ならびに藤倉憲明氏から有益なご助言と貴重な資料の提供を頂いた。

大正・昭和前期から時代は下り、21世紀の現代において地球温暖化の問題をはじめ、自然との共存が叫ばれている今日、再びライトの建築の影響と考えられる意匠が施された商品化住宅を多数種、目にするようになった。商品化住宅へのライトの建築の影響については、今後の研究課題の一つとして考えている。

ライトが知り、見、影響を受けた19世紀末から20世紀初頭の日本の良さ（善さ）を、ライトの建築が、私たちに再確認させてくれていることに、私たち自身が気づくことが重

要である。本研究がその一助になれば最良である。

本研究を続けるきっかけとなった、雑誌『住宅建築』1981年10月号への掲載に、ご尽力くださった平良敬一氏、故立松久昌氏、その後も共に企画を進めてくださった植久哲男氏ほか、スタッフの皆様の多大なるお力添えを得たことに感謝したい。

なお、本論を纏めるにあたっては、工学院大学教授の初田亨先生のご指導に寄るところが多大であった。また、文化女子大学教授の内田青蔵先生の言葉に励まされたことを改めて記しておきたい。

以上の方々をはじめ、ご協力くださった大勢の皆様に心から感謝申し上げます。

2004年3月